

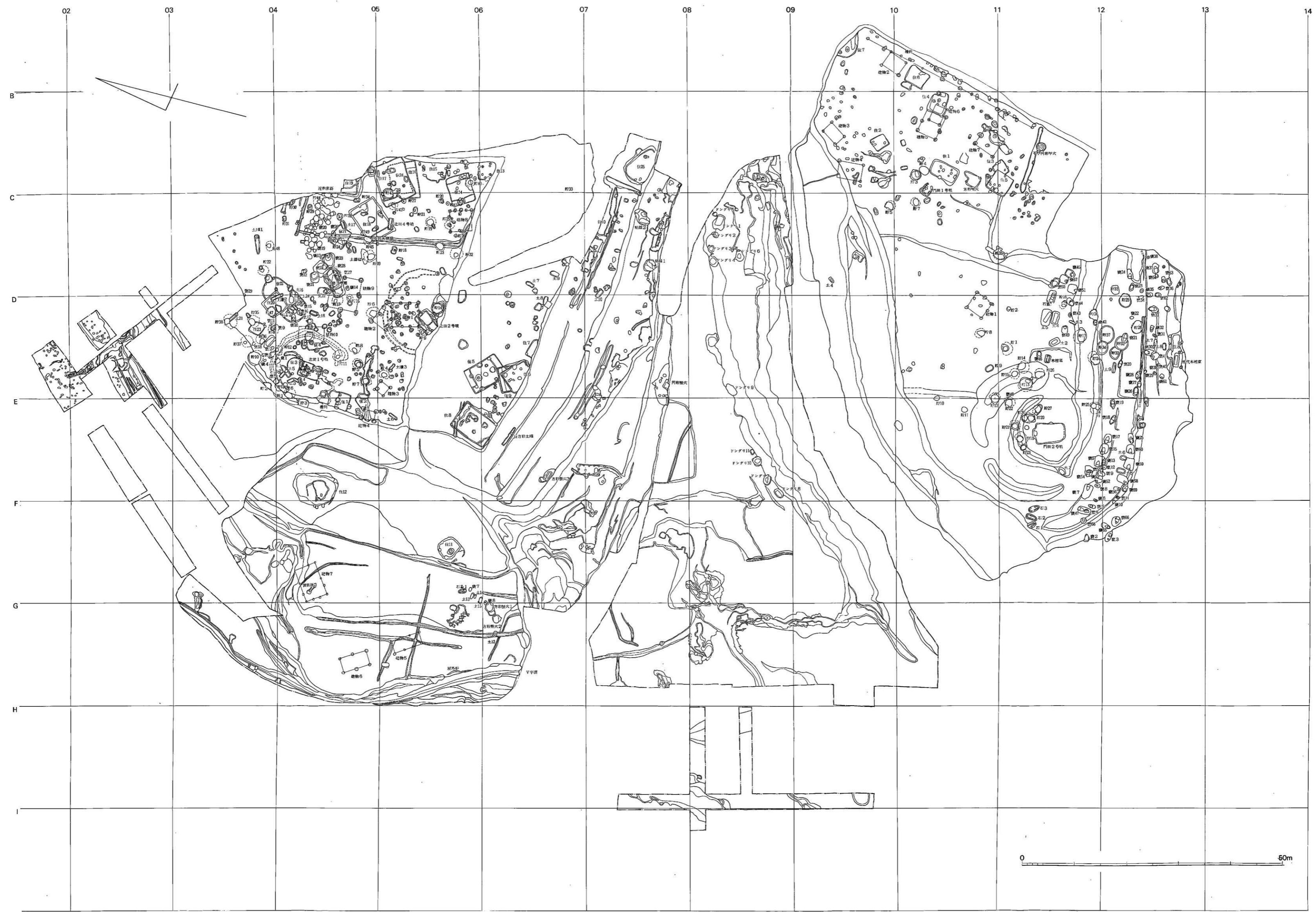
山陽新幹線関係 埋蔵文化財調査報告

春日市・門田遺跡門田地区櫛柄塚群の調査

第 6 集

1976

福岡県教育委員会

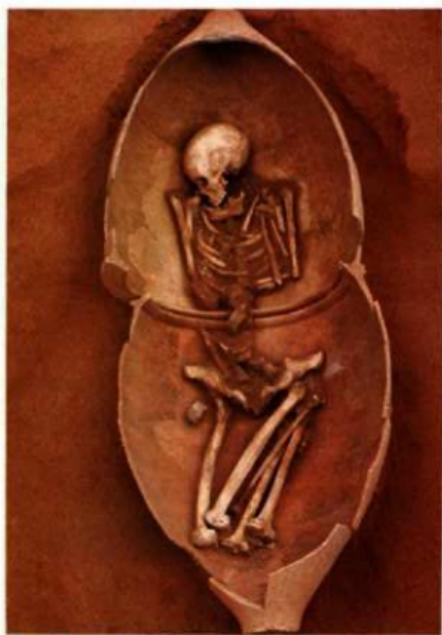


付図 2 門田遺跡造構配置図(1/

山陽新幹線関係 埋蔵文化財調査報告

春日市・門田遺跡甕棺墓群の調査

第 6 集



7号石棺墓出土人骨

序

この報告書は、福岡県教育委員会が日本国有鉄道の委託を受けて、昭和46年度から実施している山陽新幹線建設路線内および博多総合車両基地内の埋蔵文化財発掘調査の記録の一部であります。

今回の報告は、春日市大字上白水字門田の遺跡群についてのもので「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第5集に続くものであります。

発掘調査の記録としては決して満足のゆくものではありませんが、本報告書を通して文化財に対する関心を深める方が一人でも増えれば、望外の喜びとするものであります。

なお、調査に対してご協力いただいた地元の方々をはじめ、関係各位のご援助とご配慮により本書を刊行するはこびとなりましたので、心からの感謝を申し上げます。

昭和53年3月31日

福岡県教育委員会

教育長　浦　　山　　太　　郎

例　　言

1. 本書は、昭和49年6月14日から昭和49年11月8日までに福岡県教育委員会が、日本国有鉄道下関工事局から委託されて、山陽新幹線建設のため破壊される埋蔵文化財を発掘調査した6冊目の報告書である。
2. 本書の執筆分担は次のとおりである。

I	柳田康雄
II-1	佐々木 隆彦
II-2	佐々木 隆彦
II-3	柳田康雄・木下修 佐々木 隆彦・丸山 康晴
II-4	木下修
II-5	柳田康雄・木下修 佐々木 隆彦
II-6	佐々木 隆彦
II-7	柳田康雄
III	永井昌文・木村幾多郎
IV	佐々木 隆彦

3. 門田追跡甕棺墓出土の人骨鑑定及び執筆には九州大学医学部永井昌文教授、木村幾多郎助手の協力を得た。
4. 掲載の写真撮影は、九州歴史資料館の石丸洋・岡紀久夫両氏にお願いした。実測図の作成および製図は、文化課職員・補助員および整理作業員がこれにあたった。
5. 本書の編集は、佐々木隆彦が担当した。

本文目次

	頁
I 序文	1
II 門田地区の調査	3
1. 調査の経過	3
2. 遺跡の概要	5
3. 瓢 棺 墓	6
4. 木 棺 墓	85
5. 土 墓（墓）	86
6. 石 墓 土 墓	89
7. 箱式石棺墓	89
III 出土人骨と貝輪について	97
1. 人 骨	97
2. 貝 輪	97
IV 結 語	105

図版目次

図版 1	(1) 伐採後の門田遺跡航空写真（西から）1973年9月 (2) 伐採後の門田遺跡航空写真（北西から）1973年9月
図版 2	門田遺跡調査地区全景航空写真（南から）
図版 3	(1) 昭和47年度門田地区予備調査航空写真（東から） (2) 昭和47年度門田地区墓地群予備調査
図版 4	(1) 昭和49年度門田遺跡全景航空写真（西から） (2) 昭和49年度門田遺跡全景航空写真（南から）
図版 5	(1) 門田地区航空写真（東から） (2) 門田地区航空写真（南から）
図版 6	(1) 門田地区航空写真（西から） (2) 門田地区航空写真（北から）

- 図版 7 (1) 銀棺墓群全景（東から）
(2) 銀棺墓群西側近景（東から）
- 図版 8 (1) 銀棺墓群西側近景（西から）
(2) 銀棺墓群東側近景（南から）
- 図版 9 (1) 銀棺墓・箱式石棺墓遠景（南から）
(2) 銀棺墓群東側（南から）
- 図版 10 (1) 銀棺墓群・箱式石棺墓・石蓋土塚墓群近景（東から）
(2) 12号・13号・55号・7号銀棺墓の切り合ひ状態（北から）
- 図版 11 (1) 2号銀棺墓
(2) 3号銀棺墓
- 図版 12 (1) 47号銀棺墓塚内の4号小兒銀棺墓
(2) 4号銀棺墓
- 図版 13 (1) 5号銀棺墓
(2) 6号銀棺墓
- 図版 14 (1) 7号銀棺墓
(2) 7号銀棺墓
- 図版 15 7号銀棺墓人骨出土状態
- 図版 16 (1) 8号銀棺墓
(2) 9号銀棺墓
- 図版 17 (1) 10号銀棺墓
(2) 11号銀棺墓
- 図版 18 (1) 12号銀棺墓
(2) 13号銀棺墓
- 図版 19 (1) 15号銀棺墓
(2) 17号銀棺墓
- 図版 20 (1) 18号銀棺墓人骨出土状態
(2) 19号銀棺墓人骨出土状態
- 図版 21 (1) 20号銀棺墓
(2) 21号銀棺墓
- 図版 22 (1) 24号銀棺墓
(2) 24号銀棺墓人骨出土状態
- 図版 23 (1) 25号銀棺墓
(2) 26号銀棺墓

- 図版 24 (1) 27号壺棺墓
(2) 28号壺棺墓
- 図版 25 (1) 30号・41号壺棺墓
(2) 30号壺棺墓
- 図版 26 (1) 31号壺棺墓
(2) 32号壺棺墓
- 図版 27 (1) 33号壺棺墓人骨出土状態
(2) 34号壺棺墓
- 図版 28 (1) 37号壺棺墓
(2) 39号壺棺墓
- 図版 29 (1) 40号壺棺墓
(2) 40号壺棺墓壺棺挿入状態
- 図版 30 (1) 41号壺棺墓
(2) 41号壺棺墓壺棺挿入状態
- 図版 31 (1) 41号壺棺墓人骨出土状態
(2) 近世墓と切り合った45号壺棺墓
- 図版 32 (1) 46号壺棺墓
(2) 47号壺棺墓
- 図版 33 (1) 47号壺棺墓
(2) 47号壺棺墓人骨出土状態
- 図版 34 (1) 22号袋状堅穴内の48号壺棺墓
(2) 48号壺棺墓
- 図版 35 (1) 49号壺棺墓
(2) 50号壺棺墓
- 図版 36 (1) 52号壺棺墓
(2) 52号壺棺墓人骨出土状態
- 図版 37 (1) 53号壺棺墓
(2) 53号壺棺墓人骨出土状態
- 図版 38 (1) 54号壺棺墓
(2) 54号壺棺墓人骨出土状態
- 図版 39 (1) 54号・55号(小兒棺)壺棺墓
(2) 55号壺棺墓
- 図版 40 (1) 56号壺棺墓

- (2) 56号壺棺墓
図版 41 (1) 57号壺棺墓
(2) 57号壺棺墓壺棺挿入状態
図版 42 (1) 58号壺棺墓
(2) 58号壺棺墓人骨出土状態
図版 43 (1) 59号壺棺墓
(2) 59号壺棺墓人骨出土状態
図版 44 (1) 59号壺棺墓貝輪出土状態
(2) 59号壺棺墓貝輪出土状態
図版 45 (1) 60号壺棺墓
(2) 60号壺棺墓目貼り粘土除去後
図版 46 (1) 60号壺棺墓
(2) 60号壺棺墓人骨出土状態
図版 47 (1) 61号壺棺墓
(2) 61号壺棺墓壺棺挿入状態
図版 48 (1) 63号壺棺墓
(2) 63号壺棺墓
図版 49 (1) 63号壺棺墓の接合部
(2) 37号(成人棺)・64号壺棺墓
図版 50 (1) 65号壺棺墓
(2) 65号壺棺墓内人骨・貝輪出土状態
図版 51 (1) 65号壺棺墓壺棺外貝輪出土状態
(2) 65号壺棺墓壺棺外貝輪出土状態
図版 52 (1) 66号壺棺墓
(2) 66号壺棺墓人骨出土状態
図版 53 (1) 67号壺棺墓
(2) 68号壺棺墓
図版 54 (1) 69号壺棺墓
(2) 69号壺棺墓人骨出土状態
図版 55 (1) 2号土塙墓・4号・5号石棺墓(抜き跡)・石蓋土塙墓群
(2) 木棺墓
図版 56 (1) 1号土塙
(2) 3号土塙

- 圖 版 57 (1) 4号土塚
(2) 7号土塚
- 圖 版 58 (1) 8号土塚
(2) 9号土塚
- 圖 版 59 (1) 石蓋土塚墓
(2) 石蓋土塚墓天井石除去後
- 圖 版 60 (1) 1号・2号・3号箱式石棺墓
(2) 1号箱式石棺墓
- 圖 版 61 (1) 2号箱式石棺墓
(2) 2号箱式石棺墓棺外刀子出土狀態
- 圖 版 62 (1) 2号甕棺上甕
(2) 2号甕棺下甕
(3) 4号甕棺上甕
(4) 4号甕棺下甕
- 圖 版 63 (1) 3号甕棺上甕
(2) 5号甕棺下甕
(3) 7号甕棺上甕
(4) 7号甕棺下甕
- 圖 版 64 (1) 12号甕棺上甕
(2) 12号甕棺下甕
(3) 13号甕棺上甕
(4) 13号甕棺下甕
- 圖 版 65 (1) 15号甕棺下甕
(2) 20号甕棺下甕
(3) 17号甕棺上甕
(4) 17号甕棺下甕
- 圖 版 66 (1) 21号甕棺上甕
(2) 21号甕棺下甕
(3) 24号甕棺上甕
(4) 24号甕棺下甕
- 圖 版 67 (1) 25号甕棺下甕
(2) 30号甕棺下甕
(3) 33号甕棺上甕

- (4) 33号靈棺下蠶
- 圖 版 68 (1) 34号靈棺下蠶
(2) 35号靈棺下蠶
(3) 36号靈棺下蠶
(4) 39号靈棺下蠶
- 圖 版 69 (1) 37号靈棺上蠶
(2) 37号靈棺下蠶
(3) 40号靈棺上蠶
(4) 46号靈棺(單蠶)
- 圖 版 70 (1) 41号靈棺上蠶
(2) 41号靈棺下蠶
(3) 47号靈棺上蠶
(4) 47号靈棺下蠶
- 圖 版 71 (1) 49号靈棺上蠶
(2) 49号靈棺下蠶
(3) 50号靈棺下蠶
(4) 51号靈棺下蠶
- 圖 版 72 (1) 52号靈棺上蠶
(2) 52号靈棺下蠶
(3) 53号靈棺上蠶
(4) 53号靈棺下蠶
- 圖 版 73 (1) 54号靈棺上蠶
(2) 54号靈棺下蠶
(3) 56号靈棺上蠶
(4) 56号靈棺下蠶
- 圖 版 74 (1) 57号靈棺上蠶
(2) 57号靈棺下蠶
(3) 58号靈棺上蠶
(4) 58号靈棺下蠶
- 圖 版 75 (1) 59号靈棺上蠶
(2) 59号靈棺下蠶
(3) 60号靈棺上蠶
(4) 60号靈棺下蠶

- 図版 76 (1) 61号棗棺上蠶
 (2) 61号棗棺下蠶
 (3) 62号棗棺上蠶
 (4) 62号棗棺下蠶

図版 77 (1) 63号棗棺上蠶・下蠶
 (2) 63号棗棺下蠶
 (3) 65号棗棺上蠶
 (4) 65号棗棺下蠶

図版 78 (1) 66号棗棺上蠶
 (2) 66号棗棺下蠶
 (3) 67号棗棺上蠶
 (4) 67号棗棺下蠶

図版 79 (1) 68号棗棺上蠶
 (2) 68号棗棺下蠶
 (3) 69号棗棺上蠶
 (4) 69号棗棺下蠶

図版 80 (1) 48号棗棺上蠶
 (2) 48号棗棺下蠶

挿図目次

- 第 1 図 山陽新幹線の路線と博多車輌基地の位置図
 第 2 図 山陽新幹線関係主要施設分布図 (1/25,000) 一折込み
 第 3 図 山陽新幹線博多総合車輌基地付近地形図及び施設分布図 (日本国有鉄道原図1/5,000)
 一折込み
 第 4 図 露棺墓実測風景
 第 5 図 7号露棺墓埋葬状態
 第 6 図 露棺墓実測風景
 第 7 図 門田遺跡・門田地区墓地群調査地区全図, (1/1,500) 一折込み
 第 8 図 門田地区透構配置図 (1/200) 一折込み
 第 9 図 48号露棺墓実測図 (1/6)

- 第 10 図 62号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 11 図 2号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 12 図 3号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 13 図 4・5・6・8号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 14 図 9・10・11・14号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 15 図 7号櫻棺墓実測図 (1/20) 一折込み
第 16 図 12・13・16号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 17 図 15号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 18 図 17号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 19 図 18・19号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 20 図 20・21号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 21 図 22・23・25号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 22 図 24号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 23 図 26・27・29・31号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 24 図 28・30号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 25 図 32・34・35・36号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 26 図 33号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 27 図 37・46号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 28 図 38・39・40・42号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 29 図 41号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 30 国 43・53・55・56号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 31 国 44・52号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 32 国 45号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 33 国 47号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 34 国 49・61号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 35 国 50号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 36 国 48号櫻棺墓実測図 (1/20) 一折込み
第 37 国 51号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 38 国 54号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 39 国 57号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 40 国 58号櫻棺墓実測図 (1/20)
第 41 国 59号櫻棺墓実測図 (1/20) 一折込み
第 42 国 60号櫻棺墓実測図 (1/20)

- 第 43 図 62・63号壺棺墓実測図 (1/20)
第 44 図 64・65号壺棺墓実測図 (1/20)
第 45 図 66号壺棺墓実測図 (1/20)
第 46 図 67号壺棺墓実測図 (1/20)
第 47 図 68号壺棺墓実測図 (1/20)
第 48 図 69号壺棺墓実測図 (1/20)
第 49 図 4・5・9号壺棺実測図 (1/6)
第 50 図 1(下壺)・2・3号(下甕)壺棺実測図 (1/8)一折込み
第 51 図 7・15・17号壺棺実測図 (1/8) 一折込み
第 52 図 12・13号壺棺実測図 (1/6)
第 53 図 31・34(下塗)・35(下甕)号壺棺実測図 (1/6)
第 54 図 18・19・20号壺棺実測図 (1/8) 一折込み
第 55 図 21・24・25号壺棺実測図 (1/8) 一折込み
第 56 図 26・27・30号壺棺実測図 (1/8) 一折込み
第 57 図 33・37・41号壺棺実測図 (1/8) 一折込み
第 58 図 36・39(上甕)・40・46(单棺)号壺棺実測図 (1/6)
第 59 図 52・53・56(上塗)号壺棺実測図 (1/6)
第 60 図 47・49・50号(下甕)壺棺実測図 (1/8) 一折込み
第 61 図 51(下甕)・54・57号壺棺実測図 (1/8) 一折込み
第 62 図 58(小兒棺)・59・60号壺棺実測図 (1/8) 一折込み
第 63 図 63・66・67号壺棺実測図 (1/8) 一折込み
第 64 図 61・64(下甕)・65号壺棺実測図 (1/6)
第 65 図 68・69号壺棺実測図 (1/8)
第 66 図 7号壺棺墓人骨実測図 (1/10)
第 67 図 24号壺棺墓人骨実測図 (1/10)
第 68 図 41号壺棺墓人骨実測図 (1/10) 一折込み
第 69 図 47号壺棺墓人骨実測図 (1/10)
第 70 図 59号壺棺墓人骨実測図 (1/10)
第 71 図 60号壺棺墓人骨実測図 (1/10)
第 72 図 69号壺棺墓人骨実測図 (1/10)
第 73 図 木棺墓実測図 (1/30)
第 74 図 1号土塙実測図 (1/30)
第 75 図 2号土塙墓実測図 (1/30)

- 第 76 図 3号土塙実測図 (1/30)
 第 77 図 4号土塙実測図 (1/30)
 第 78 図 7号土塙実測図 (1/30)
 第 79 図 8号土塙実測図 (1/30)
 第 80 図 9号土塙実測図 (1/30)
 第 81 図 石蓋土塙墓実測図 (1/30)
 第 82 図 1号箱式石棺墓実測図 (1/30)
 第 83 図 2号箱式石棺墓実測図 (1/30)
 第 84 図 2号・3号箱式石棺墓出土鉄器実測図 (1/2)
 第 85 図 3号箱式石棺墓実測図 (1/30)
 第 86 図 4号箱式石棺墓実測図 (1/30)
 第 87 図 5号箱式石棺墓実測図 (1/30)
 第 88 図 門田K59号人骨着装貝輪 (1/2)
 第 89 図 7号甕棺墓出土の頭骨
 第 90 図 69号甕棺墓出土の左側面前腕骨骨幹部骨扭 (a 前面図 b 内側図)
 第 91 図 59号甕棺墓出土の貝輪 (a 肘側観 b 手首側観)
 第 92 図 65号甕棺墓出土の貝輪片

表 目 次

- 第 1 表 山陽新幹線関係追跡一覧表
 第 2 表 門田地区甕棺墓一覧表
 第 3 表 出土人骨一覧表
 第 4 表 弥生時代の甕棺墓における成人棺・小児棺の出土比率一覧表
 第 5 表 甕棺墓における成人棺・小児棺の出土比率表

付 図 目 次

- 付 図 1 門田追跡C～F, 12～13地区遺構配置図 (1/100)
 付 図 2 門田追跡遺構記載図 (1/300)

I 序 文

はじめに

本書は、門田遺跡（第22～27地点及びその周辺）の発掘調査報告書である。

門田遺跡は、事前の遺跡分布調査で登録されていた第19地点から第27地点におよぶもので、北と南の2つの舌状台地とその間の谷と周辺の低地から構成されている。本報告書に掲載するのは、第22～27地点とその周辺部にあたる南台地の遺跡のうち、弥生時代墳墓群のみである。南台地の弥生時代墳墓群以外の全遺跡の報告は、「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第3集（1977）に収録してある。また、本遺跡群の重要性や国鉄側との協議過程及びこれに関連した予備調査から本調査にいたる経過は上記報告書を参照されたい。

門田南遺跡の調査関係者は、次のとおりである。

福岡県教育委員会

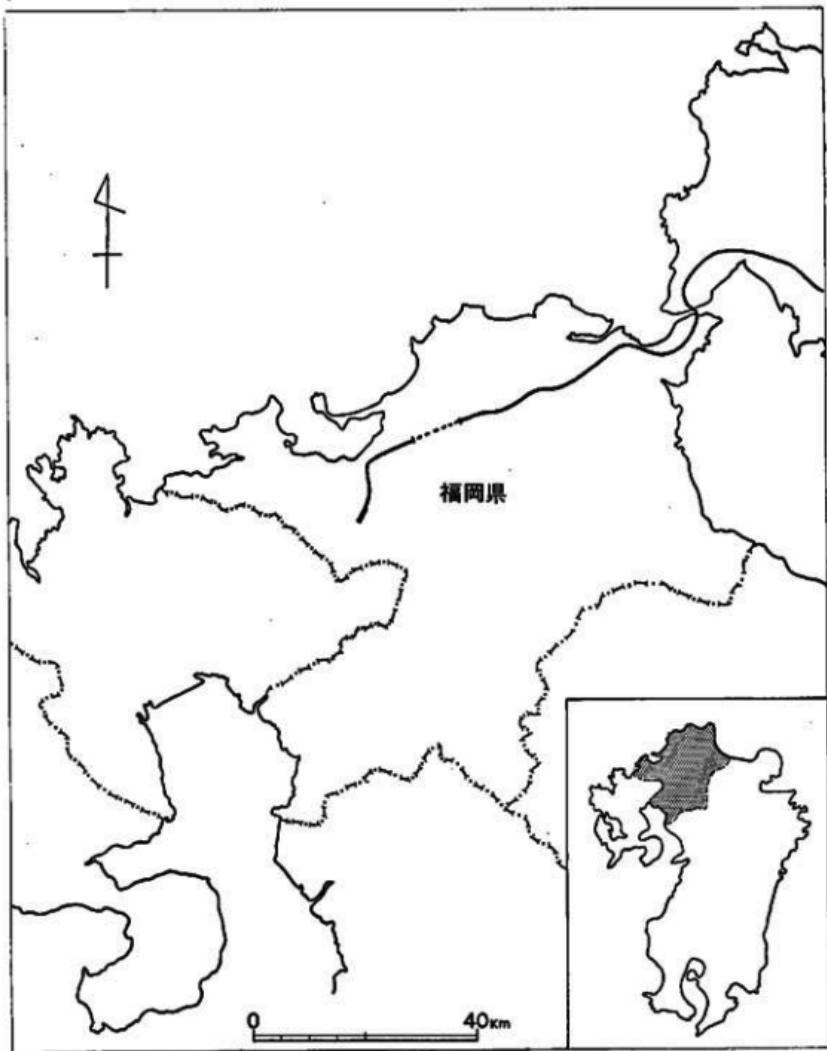
総 括	教 育 長	森 田 實
	管 理 部 長	西 村 太 郎
	文 化 課 課 長	藤 井 功
	同 課 長補佐	平 井 元 治
	同 參 事補佐	川 崎 隆 夫
庶 務	庶 務 係 長	前 田 栄 一
	主 事	加 藤 俊 一
	嘱 托	吉 村 源 七
発 掘 調 査	調 査 係 長	松 田 史
	技 師	柳 田 康 雄
	同	井 上 裕 弘
	同	木 下 修 修
	同	佐々木 隆 彦
	嘱 托	小 池 史 哲
九 州 大 学 医 学 部 教 授		宮 崎 貴 夫
	同 助 手	永 井 昌 文
	写 真 家	木 村 繁 多 郎
調 査 补 助 員		北 沢 広
		三 津 井 知 広

義晴博孝英一夫一博作一司子豊洋信信
和康真美裕像政淳隆一宏祐和道弘正
田山井林田村田口原尾口蘿桜川原田瀬
桑丸新小行野小湖桑横閼齊高長石高岩

同同同同同同同同同同同同同

四

遺物整理



第1図 山陽新幹線の路線と博多車両基地の位置図 (1 / 1,000,000)

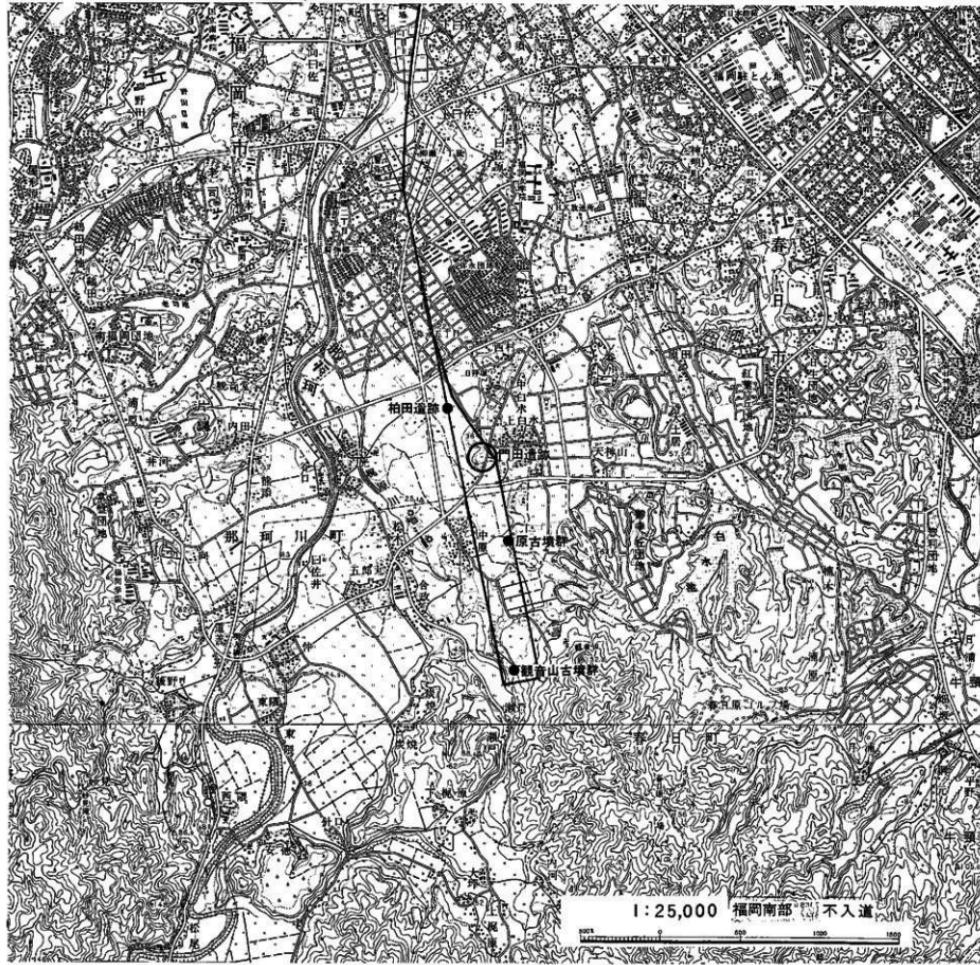
第1表 山陽新幹線関係遺跡一覧表

地点番号	遺跡名	所在地	内 容	国 调 終 了 年 度						備 考	報告書
				45年度	47年度	48年度	49年度	50年度	51年度		
3	小田山墓地	鞍手郡鞍手町中山	近世墓地	—	—	—	—	—	—		1集
4	下松尾墓地	〃	近世墓地		—						〃
5	京尾遺跡	〃	塗木 中世紀石造構		—						〃
6	若宮条里	〃	若宮町 条里遺跡		229						〃
6-0	〃	金丸	近世墓地		—					調査前に工事のため改葬。	〃
6-1	田尻遺跡	〃	金丸・水原 古墳、歴史時代：住居跡	2,035		3,000					〃
6-2	別当塚	〃	竹原 古墳	146						追跡・遺物なし。	〃
6-3	八幡塚	〃	古墳	16		300					〃
7	杉田遺跡	〃	稻光 土師：散布地	—						遺構なし。	1集
8		柏原郡久山町山田	条里遺跡	100						調査の結果条里ではなかった。	〃
18	柏田遺跡	春日市上白水	先土器～繩文時代：住居跡、軒型連 跡、溝状造構	—	790					昭和40年度は、別府大学に一部調査委嘱。	4集
18-1					2,100	1,000					〃
18-2											
19~27 及び周辺	門田遺跡	〃	先土器～歴史時代：住居跡、貯蔵穴、墓 複数、石柱廻、土坑墓、古墳8基	予測調査 (4,500)	7,170	9,700	4,570			昭和48年度に門田2号墳の調査を平安博 物館に委嘱。	3+6集
28~31	下原遺跡	〃	古墳時代：住居跡	2,784							3集
32	油田遺跡	筑紫郡河川町中原	古墳時代：散布地	690							2集
32-1	〃		古墳時代：墓棺蓋		300						〃
32-2	久保遺跡	〃	縄文、歴史時代：溝状造構				700				
33		春日市上白水	古墳時代：散布地	—	187						2集
33-1	原古墳群 原遺跡	〃	円墳3基、周溝墓6基、土坑墓4基 縄文時代早期、系生時代墓群	1,725		800	1,510			一部保存。	〃
34		筑紫郡河川町中原	弥生時代：散布地	135						追跡・遺物なし。	
34-1	鳥ノ巣遺跡	〃	先土器、縄文時代：散布地	—	287					別府大学に調査委嘱。	
34-2					288						
35			中世：散布地	—	290						
36			近世：遺構（かんのん道）	—							5集
37, 39 50, 55	井手ノ原遺跡	〃	中世：方形区画遺構、溝状造構	1,814	1,515	1,500					2集
38, 40~43 45~49 49-1, 51	鶴音山古墳群 中原本古墳群	〃	古墳91基	707	6,400	220					5集
43-1	深原遺跡	〃	縄文時代：石組伊弉32基、円形凹穴遺構	—	1,840	2,540				昭和47年度は別府大学に一部調査委嘱。	
43-2					104						
44			中世：散布地	—	271						
46-1	深原遺跡	〃	縄文、古墳：散布地					1,021			
52			中世：散布地	—	452						
53			古墳時代：散布地	—	123					追跡なし。	
54			弥生、古墳時代：散布地	—	150						
54-1			古墳時代：散布地	—	95						
	合		計	5,305	14,369	14,829	15,900	7,386	1,721		

註 1. 地点番号1, 2は北九州市教育委員会、9～17は福岡市教育委員会が調査を担当した。

2. 面積以外の付帯施設にかかる調査地点は上表に含めてある。

3. 面積欄に(ー)で示したもののは調査面積としてはあがないが該年度に調査したことを示す。



第2図 山陽新幹線関係主要道路分布図 (1/25,000)



第3図 山陽新幹線高多総合車両基地付近地形図及び地盤分布図(1/5,000)

(■は本報告書掲載地點を表わす)

II 門田地区の調査

1. 調査の経過

門田地区南台地の甕棺墓群及び箱式石棺墓、土塚墓、木棺墓、石蓋土塚墓は、昭和47年度の予備調査で確認されていた。発掘調査は、昭和49年6月14日から夏期休暇の学生の援助を受け、南台地の袋状堅穴群と平行しながら調査を遂行した。

8月下旬には袋状堅穴群の調査を終了し、甕棺墓群の造構検出もほぼ終了した。この時点では甕棺墓の調査に集中し、個々の発掘を開始した。調査は、村余曲折の後昭和49年11月8日に完了した。

以下日誌で若干経過を追ってみたい。

6月14日（金）D-12区を中心に表土剥ぎにかかる。予備調査時に確認した甕棺墓を検出。当地区は南側に急傾斜しており、竹根の多いのと相俟って遺構検出が困難なため、重機を導入する。

6月19日（水）表土剥ぎを続行する。C-12区内には、近世墓が多く甕棺墓を切っている。近世墓塚内に甕棺の破片を検出した。

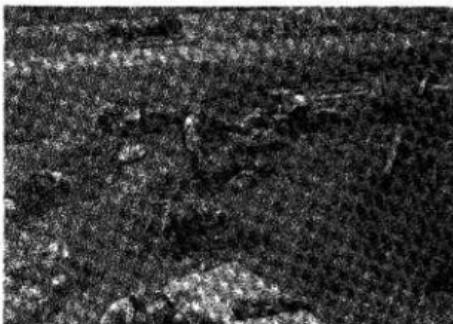
6月25日（火）表土剥ぎの結果、47年度調査の箱式石棺墓2基、土塚1基、石蓋土塚墓1基を検出。今日迄には半分の表土剥ぎを終了。

6月28日（金）F-10-12区の表土の排除。F-12区で新たに甕棺墓3基を確認する。その内の2基は小児用甕棺墓である。

7月1日（月）D-13区の表土剥ぎの結果、予備調査時に確認した甕棺墓1基を検出。さらに新たに甕棺墓1基を検出する。午後3時頃雨天になり作業を中止する。

7月5日（金）F-12区の造構検出。新たに甕棺墓1基、土塚1基、箱式石棺墓2基を確認する。今日迄に確認した甕棺墓の総数は37基となる。

7月31日（水）22号袋状堅穴を調査中に床面直上から弥生時代前期の甕棺墓1基を検出す。袋状堅穴の再利用である。



第4図 甕棺墓発掘風景

さらに2号箱式石棺墓の発掘を実施する。棺内から弥生時代終末の土器片が出土。

8月3日（土）1号箱式石棺墓の発掘。棺内より鉄片が出土。棺内は竹根で擾乱が著しい。

8月5日（月）51号甕棺墓の発掘。近世墓により擾乱を受けている。写真撮影も行なう。

8月6日（火）3号箱式石棺の発掘終了

実測を行なう。51号甕棺墓の実測を開始する。51号の東側に位置する52号甕棺墓の発掘。近世墓により擾乱を受け、下蓋のみ遺存する。午前11時、テレビ西日本が収材のため来現。

8月7日（水）3号箱式石棺墓の清掃と写真撮影。

8月9日（金）1号土塚の実測と43号甕棺墓の清掃。43号は耕作による削平を受けしており遺存状態は不良。

8月10日（月）甕棺墓全体の造構検出が終了し今迄数基を発掘したが、個々の本格的な発掘を開始する。59号甕棺墓から前腕に着装した貝輪を検出。

8月20日（火）昨日から19基の甕棺墓を検出した。47年度の試掘で確認されていた甕棺下から新たな甕棺を検出。

8月22日（木）1号甕棺墓と13号甕棺墓の発掘。1号は台地削平の折斜面に転倒したものと思われる。13号は削平を受けており甕棺の遺存状態は不良。棺内から頭骨と大腿骨を検出。

8月23日（金）14号・16号甕棺墓の写真撮影。25号甕棺の発掘。頭骨と歯を検出。

8月28日（水）7号土塚と39号甕棺墓の発掘を行ない。7号土塚のみ実測を終了する。

8月30日（金）40号甕棺の清掃及び写真撮影。23号・33号・37号甕棺墓、8号土塚の発掘。



第5図 7号甕棺墓内部状態



第6図 甕棺墓実測風景



第7図 門田造林・門山地区森林資源調査地区全図(1/1,500)



第8図 門田地区遺構配置図 (1/200)

第2表 門田地区墓・棺墓一覧表

名	主軸方位	傾斜角度	合口形式	上蓋+下蓋	墓形態	備考
1				蓋	?	板落一括
2	N88°E	ほぼ水平	接 口	鉢 + 蓋	?	
3	N64°W	"	"	蓋 + 蓋	不整円形	人骨
4	N11°E	- 2°	"	蓋 + 蓋	"	小児棺・目貼り粘土・47号より新しい
5	N 0°	+25°	覆 口	蓋 + 蓋	楕円形	" "
6	N13°E	ほぼ水平	接 口	蓋 + 蓋	"	" "
7	N81°W	- 4°	"	蓋 + 蓋	隅丸長方形	人骨
8	N 8°E	"	"	蓋 + 蓋	楕円形	小児棺・目貼り粘土
9	N88°E	ほぼ水平	接 口	蓋 + 蓋	"	" 12号・53号より新しい
10	N 5°E	"	"	蓋 + 蓋	"	"
11	N81°E	"	"	蓋 + 蓋	"	"
12	N 1°E	- 1°	"	蓋 + 蓋	隅丸長方形	" 目貼り粘土・57号より古い
13	N74°W	+ 5°	"	蓋 + 蓋	楕円形	" 12号より新しい
14	N 5°E	ほぼ水平	"	蓋 + 蓋	"	15号の墓壙内
15	N81°W	- 3°	"	蓋 + 蓋	隅丸方形	人骨 14号・16号より古い
16	N17°E	ほぼ水平	"	蓋 + 蓋	"	小児棺 15号の墓壙内
17	N78°W	- 5°	接 口	蓋 + 蓋	不整円形	
18	N70°W	0°	"	蓋 + 蓋	"	人骨 目貼り粘土
19	N80°E	"	"	蓋 + 蓋	隅丸長方形	" "
20	N78°W	ほぼ水平	"	蓋 + 蓋	楕円形	人骨 上・下蓋打ち欠き
21	N85°W	+ 1°	"	蓋 + 蓋	長方形	人骨 32号袋状堅穴より新しい
22	N27°W	"	"	蓋	"	小児棺?
23	N73°W	"	接 口	鉢 + 蓋	不整円形	
24	N87°E	0°	"	蓋 + 蓋	楕円形	人骨 上蓋口縁打ち欠き
25	N77°E	- 3°	"	蓋 + 蓋	"	目貼り粘土
26	N90°E	+12°	單 棺	蓋	不整円形	
27	N87°W	"	"	"	"	口縁部打ち欠き
28	N83°W	"	接 口	蓋 + 蓋	"	上縁口縁打ち欠き
29	N69°W	ほぼ水平	"	蓋 + 蓋	"	小児棺
30	N 3°W	+22°	覆 口	蓋 + 蓋	"	上・下縁打ち欠き
31	N 6°E	ほぼ水平	接 口	蓋 + 蓋	楕円形	小児棺
32	N89°E	+24°	單 棺	蓋	不整円形	"
33	N 2°E	-10°	接 口	鉢 + 蓋	不整形	人骨 目貼り粘土
34	N15°W	+ 7°	"	蓋 + 蓋	不整円形	小児棺
35	N26°W	+30°	"	"	楕円形	"
36	N19°W	+ 1°	"	蓋 + 蓋	"	"
37	N73°E	0°	"	鉢 + 蓋	"	64号より古い
38	"	"	"	蓋	"	小児棺
39	S42°W	+35°	接 口	蓋 + 蓋	隅丸方形	"
40	N40°W	+25°	"	蓋 + 蓋	不整円形	"
41	N36°W	"	"	鉢 + 蓋	不整円形	人骨
42	S76°W	+42°	單 棺	?	蓋	
43	N81°E	"	?	蓋	楕円形	小児棺
44	N30°E	+34°	接 口	鉢 + 蓋	不整円形	
45	"	"	"	"	"	近世墓により擾乱。下蓋の底のみ
46	S83°E	+50°	單 棺	?	蓋	小児棺 後期初頭
47	N15°W	- 2°	接 口	蓋 + 蓋	隅丸長方形	人骨 4号より古い
48	N19°E	+20°	覆 口	蓋 + 蓋	楕円形	22号袋状堅穴内。前期末
49	S82°W	+18°	接 口	鉢 + 蓋	隅丸長方形?	
50	S83°E	+34°	"	"	楕円形	
51	N 3°E	+35°	"	蓋	"	中・近世の擾乱
52	S45°E	-11°	接 口	鉢 + 蓋	不整形	小児棺。人骨 53号より新しい
53	S88°E	- 7°	"	蓋 + 蓋	"	合口部蓋をつぎたす。9号より古い
54	N84°E	- 3°	"	蓋 + 蓋	不整長方形	人骨 55号より古い
55	N 5°E	"	"	蓋 + 蓋	"	小児棺 54号の墓壙内
56	N10°E	+ 2°	"	蓋 + 蓋	不整円形	目貼り粘土
57	N88°E	0°	"	蓋 + 蓋	隅丸長方形	
58	N49°E	+ 3°	"	蓋 + 蓋	"	小児棺。人骨 69号より新しい
59	S78°E	- 1°	"	蓋 + 蓋	"	ゴホウラ貝鏡1。人骨
60	S83°E	- 5°	接 口	蓋 + 蓋	"	人骨 目貼り粘土
61	S80°E	+28°	"	高杯+蓋	不整形	小児棺 高杯脚部欠く
62	S 3°W	+20°	"	蓋 + 蓋	楕円形	人骨
63	N74°E	- 2°	"	蓋+蓋+蓋	不整長方形	人骨 下蓋の底を塗で覆う
64	S77°W	+51°	單 棺	?	蓋	小児棺 37号より新しい
65	N 2°W	0°	接 口	蓋 + 蓋	不整円形	ゴホウラ貝鏡2。人骨
66	N82°W	"	"	蓋 + 蓋	"	人骨
67	N17°E	+29°	搏 入	蓋 + 蓋	不整長方形	目貼り粘土
68	N88°W	- 8°	接 口	蓋 + 蓋	不整円形	人骨
69	N87°E	- 3°	"	蓋 + 蓋	不整方形	" 58号より古い

9月に入ると夏期休暇の学生が帰り始め作業の遂行に困難をきわめたが9月中旬には発掘の発掘をほぼ終了し、9月17日には航空写真撮影を行ない、以後壇棺の実測及び取上げに専念する。実測作業は、人骨に手間取り11月7日迄の期間を要した。11月8日には、壇棺の取上げも終了し、発掘調査は完了した。

2. 遺跡の概要

門田遺跡は弥生時代の遺跡が密集する春日丘陵南部の一支丘にあり、当該地は、谷部を境に南側に位置する台地上の遺跡である。

昭和47年度に予備調査が実施され、台地の南斜面、D-12, D-13, E-13区から壇棺墓20基・土塚墓1基・箱式石棺墓2基・石蓋土塚墓1基等が確認されていた。

今回の調査では、前回の予備調査の数を加えて、壇棺墓69基・土塚9基（その内、墓として認識し得るものは3基で、2基は中世土塚墓で報告済み、他の1基は弥生時代の所産）である。

壇棺墓は弥生時代前期・中期・後期とすべての時期にわたって遺存するが、主体を占めるのは中期に當された壇棺墓である。総数は69基を数えるが、その内訳は成人用壇棺墓34基、小児用壇棺墓35基（内1基は前期末）である。小児壇棺墓の中には、22号袋状竖穴（報告済み）内の床面近くに墓底を掘り込んで壇棺を埋葬しており、袋状竖穴の再利用としては興味深い事例である。

周辺の弥生遺跡を観察すると春日丘陵は弥生銀座と云われる程であって近くには数多くの弥生時代の遺跡が密接している。その中で壇棺墓のみを捉えて見ると南台地の北側の谷を挟んだ北台地には、弥生時代前期末、中期後半にわたる壇棺墓群が断続的に當っていた。門田遺跡の南約600mには弥生時代中期中頃から後期初頭にかけての壇棺墓群が約200基程確認されており、大規模な集団墓地を形成している。門田壇棺墓群とは同時期の壇棺墓群としては、那珂川町今光に存在する櫛原川の河岸段丘上に形成された弥生時代中期前葉の壇棺墓群の一部が調査されている。墓地は北側に延びることが判明しており、門田遺跡南台地の壇棺墓群と同時期の集団墓地が門田遺跡の西側約600mの所に形成されていたことが明らかになっている。規模は未報告のため明らかでない。

門田遺跡南台地の墓地群は、周辺の壇棺墓地群が散在するなかで、主に弥生時代中期前葉から墓地形成が開始され、後期初頭に終焉を見る。なかでも中期前葉から始まった墓地形成は、一般に見受けられる墓地形成の在り方と意を異にしており、台地の南斜面を墓地形成の場として選定され、広い台地平坦面に設定していないことは、墓地形成の規制のうえで見のがせない事象であろう。

壇棺墓は、台地斜面に沿って二列に平行して埋葬されており、遺跡全体の時期的な流れから

台地の西側から東側へ移行したことは明らかである。さらに一部中期中葉から中期後葉、後期初頭の甕棺墓群は台地平坦面に移行しており、弥生時代後期になると石蓋土塙墓・箱式石棺墓土塙墓群からなる墓地を形成し、台地西側の弥生時代終末の箱式石棺墓群で墓地形成の終焉を見る。

次に個別甕棺墓については、全体的に耕作による削平、近世墓による搅乱が著しい。又59号の成人用甕棺墓と、65号小児用甕棺墓からゴホウラ製貝輪が出土しており、その他の甕棺墓からは副葬品は出土していない。人骨についても7号甕棺墓出土の人骨の遺存状態はすこぶる良好であった。

甕棺墓以外の墓地では、わずかに西側に遺存する2号・3号箱式石棺墓から刀子が棺外から出土したのみである。

註1 福岡県教育委員会「山陽新幹線関係埋文化財調査報告」昭和50年度-1976

2 註1と同じ。

3 「京石遺跡」昭和51年12月～52年2月まで福岡県教育委員会が調査を実施し、担当者の新原正典・木下修二氏の教示を得た。

3. 甕 棺 墓

1号甕棺墓

造 構

現存する墓域の最西端の甕棺墓である。発掘調査の時点では西側斜面に転倒しており、後世台地が削平を受けた際に転倒したものと思われる。墓塙も明らかでなく、成人墓であるが単棺か複棺かも不明である。

遺 物 (第50図)

内側に突出する口縁部を有し、頭部は若干内傾する。最大径は胸部にある。腹部には一条の断面山形凸帯を貼り付けている。底部は欠損している。胎土は長石・石英粒子を含む。焼成は良好で、色調は淡い赤褐色を呈する。

2号甕棺墓

造 構 (第11図、図版11-(1))

F-12区に検出され、墓域の西端に位置する。台地の西端に横穴を穿いた墓塙内に納められた成人用接口式甕棺墓で、墓塙上面と上蓋側は削平され凹状をとどめていない。ほぼ水平に甕棺は置かれ、主軸方位は略東西を示す。目貼り粘土は認められず、人骨等も遺存していない。

遺 物 (第50図、図版62-(1), (2))

上蓋は台地下に大部分が転落していたが、復原するとほぼ完形の鉢形土器になった。内側に張りだした口縁は、下がりぎみの「L」字状をなし、比較的薄手。口縁直下に貼り付けの三角

凸帶を有し、胸部はほとんど張らない。最大径62cm、器高36cm。

下壺は内・外とも等分に突出した「T」字形の口縁部をもつ壺形土器で、口縁部は内反りしている。長嗣で口縁直下に一条、嗣下半に二条の台形状貼り付け凸帶を有す。底部近くで片側のみがすぼまる。最大径70.2cm、器高110.6cm。やや暗い黄褐色を呈す。

3号壺棺墓

造 構（第12図、図版11-②）

2号壺棺墓の南側に位置し、台地の西端の一群を構成する。台地の斜面を利用し、横穴を穿ち、下壺を挿入したものと思われるが、削平が著しく辛じて転落を免がれている。壺と壺を合せた接口式成人用壺棺で、掘方底面は下壺の方に若干高い。頭を東に向かう主軸方位は、2号より南に寄っているが東西方向下壺に頭骨が残存し、蒸年の女性を埋葬したもの。

造 物（第50図、図版63-①）

下壺は半欠品で底部も欠損する。復原すると口徑約65cmを測る。口縁は内側に強く張り出しには水平である。胸部のやや下ったところに1条の貼り付け凸帶が巡り、その上部は、胸張りである。底部近くですぼまる。ハケ目調整が底部近くで観察され、その他は横ナデ仕上げ。赤褐色を呈し、胎土に石英粒を含むが焼成良好。

4号壺棺墓

造 構（第13図、図版12-①・②）

47号成人用壺棺墓の墓塙内埋土に墓塙を穿いて埋葬した小兒用壺棺墓である。不整長円形の墓塙は上部が削平されているが、壺棺の上辺は47号壺棺墓の墓塙より低い。主軸方位は47号とはほぼ同じで、南北方向。壺+壺の接口式で目貼り粘土を施す。人骨は残存しなかったが、頭位は北側の可能性が強い。

造 物（第49図、図版62-③・④）

上壺は口徑31.6cm、器高37.5cmを測る壺形土器。「L」字形の口縁部は平坦で若干下がり、口縁部から7cmほど下で胸部が最も張り、徐々にすぼまり、あげ底の底部へ移行する。

下壺もほぼ同じ器形の土器である。胸部下半から底部にかけて、縦方向のハケ目調整を施す。黄褐色を呈し、胎土に石英・長石粒を含む。人骨はまったく発見されず、その他の遺物もない。時期は弥生中期頃と思われる。

5号壺棺墓

造 構（第13図、図版13-①）

47号壺棺墓の東側に位置する小兒用壺棺墓で、主軸を南北位に置く。墓塙は長さ1.4m、幅0.6m内外の長円形を呈す。壺棺の上壺は口縁部を打ち欠き、下壺を覆う複口式で、目貼り粘土を施す。約25°の傾きをもたせて下壺は置かれている。

造 物（第49図、図版63-②）

上壺は胸上半部以上を打ち欠き、胸下半以下を欠損する壺形土器。下壺は逆「L」字形口縁をもつ壺形土器で最大径44cm、器高56cmを測る。口縁直下に三角凸帯が巡る。凸帯下に肩部最大径をもち、底部はあげ底。器壁は縱方向に、8本を単位とするハケ目調査を施す。色調は明るい褐色。

6号壺棺墓

遺構（第13図、図版13-（2））

F-12区の交点の北側でFの線上で発見された小児壺棺墓である。著しく破壊されていたが、鉢形らしい上壺の口縁部が残っていたので接口形式であることがわかった。主軸の方向はS13°Wで上壺は南側にあり丘陵の傾斜面に下壺を突き込むかたちをとっている。墓壇は削平されているので当初形態は知りがたいが、現状の墓壇からは下壺が横穴に挿入されていたとは思われない。接口の位置と墓壇の関係からしても上壺が鉢形であったことがきっせられる。壺棺は、墓壇内にほぼ水平に置かれ、合せ口付近には青色新土が残っているところから、壺棺の下側まで粘土貼りがしてあったことがわかる。人骨はまったく発見されず、その他の遺物もない。時期は弥生中期中頃と思われる。

遺物

上壺は鉢形土器で、逆「L」字形の口縁部片を残すのみである。

下壺は壺形土器で、逆「L」字形口縁部の下に1本の三角形凸帯をめぐらす。

7号壺棺墓

遺構（第15・66図、14-（1）・（2）、15-（1）・（2））

E-12区に位置する本遺跡では最大の墓壇を有す接口式の成人用壺棺墓である。墓壇は台地斜面に沿って掘っている。墓壇形態は、長方形を呈し、二段掘りである。墓壇の東側には壺棺を挿入するための横穴を掘り込んでいる。規模は、長辺で3.0m、短辺で1.7mを測る。主軸方位はN81°Wを示す。埋葬傾斜角度は-4°で、下壺を高位にして埋葬している。接口部の目貼りは見られない。人骨の遺存状態は当遺跡の中で最も良好であり、下壺を頭位としている。被葬者は成年男性であった。他の壺棺とは頭位を逆にする。

遺物（第51図、図版63-（3）・（4））

上壺は、内側に突出する口縁部を有す。口縁部平坦面は若干外側に傾斜する。頭部は内傾し肩中央部には山形の断面三角凸帯を貼り付けている。最大径は胸中央部にあり、底部は上げ底を呈す。全体的に丸味のある壺棺である。調整はすべて撫で仕上げである。胎土は良く精製されており、焼成も非常に良い。色調は赤褐色を呈す。

下壺は内側に突出する口縁部に平坦面を若干外側に傾斜させている。頭部は若干内傾し、肩部には山形三角凸帯を貼り付けている。最大径は、胸部上半にある。底部は浅い上げ底を呈す。胎土・焼成とも良好で、色調は黄褐色を呈す。

8号壺棺墓

造 構 (第13図、図版16-(1))

E-12区の南西側で発見された残りの悪い小児壺棺墓である。破壊が著しいために合せ口形式は不明なところがあるが、下壺に小形の壺を使用し、上壺に大形壺の底部付近の破片を覆口形式に合わせていたと思われる。合せ口付近には粘土塊が少量残っているが、下壺の口縁部がないのは埋葬の時に打ち欠いたものであるかどうかは不明。主軸の方向は S 8°W で、上壺が南側である。壺棺の傾斜はほぼ水平であるが、上壺の方が少し低いようである。時期は弥生中期中頃と思われる。

造 物

上壺は大形壺形土器の底部のみで形態は不明。

下壺は小形壺形土器であるが、口縁部は残っていないが、口縁下に1本の三角形凸帯をめぐらす。

9号壺棺墓

造 構 (第14図、図版16-(2))

E-12区の南西側で12の線上で発見された小児壺棺墓である。12号・53号壺棺の墓塙を一部切って埋葬されており、これらより新しい。墓塙は、現状で南北径 1.47m、東西径 0.9m の南北に長い楕円形の堅穴で、長辺の東側の壁に横穴を掘り、下壺を完全に横穴に挿入して上壺を接口式に合せて青色粘土で目貼りをしている。壺棺はほぼ水平に埋設されているが、多少上壺の方が低いようだ。主軸の方向は N88°E で西側の少し大きな方が上壺である。壺棺は上半分以上が削り取られていたために両方とも底部を欠いており、人骨も残っていないかった。時期は弥生中期後半である。

造 物 (第49図)

上壺は壺形土器で、口径38cm、高さ約50cmの大きさである。口縁は補強された逆「L」字形で、端部に浅い刻目を付けている。口縁下には相接した2本の三角凸帯がめぐり、凸帯から上はヨコナデ仕上げされている。凸帯から下には腹中央部で方向の違うハケ目が残っている。上部は上から下にハケ目を付け、下部は底部からナデ上げている。胎土には石英・長石・角閃石粒を若干含み、茶褐色の普通の焼成であるが、腹部上半には煤が付着しているので、転用されたものであろう。

下壺は上壺とほぼ同大の壺形土器で、逆「L」字形口縁の下に1本の三角凸帯をめぐらす。

10号壺棺墓

造 構 (第14図、図版17-(1))

F-13区の北東側にある破壊された小児壺棺墓。浅いため耕作により削平され、上壺が3分の1、下壺は口縁部のみしか残っていない。墓塙の形態は楕円形と推定され、横穴は不明である。

る。表辺は、接口式に合わされ目貼り粘土があつたらしい。主軸の方向は N 85°E で、ほぼ尾根線に平行している。角度は多少上縁が高いが水平に近いものであろう。

造 物

上縁は逆「L」字形口縁の口径42.6cm、器高28.3cm、底径13.4cmの鉢形土器。口縁は上部の平坦面がわずかにくぼみ、先端に角を作つて下面を丸く仕上げている。内側先端も三角形状に角を付けわずかに内窪する。口縁下に三角形凸帯1本をめぐらし、ヨコナデ仕上げている。胴外面には粗いハケ目が残る。

下縁は逆「L」字形口縁の變形土器と思われる。

11号壺棺墓

造 構 (第14図、図版17-(2))

E-13区の北面側にある破壊された小児壺棺墓。削平され、上縁の3分の1と下縁の口縁部付近が残っているだけである。墓底は現状では椭円形であるが、上部が削平されているので横穴とともに不明。壺棺は接口式に合せ、主軸の方向は S 9°W で斜面に向つて下縁を入れていることになり、上縁が高い。これは11号が中央の墓道から下位の南側の群にあたるから当然であろう。

造 物

上縁は高さ約43cmの逆「L」字形口縁の變形土器。口縁下に三角形凸帯1本をめぐらす。

下縁は口縁下に三角形凸帯1本をめぐらす、逆「L」字形口縁の變形土器。

12号壺棺墓

造 構 (第16図、図版18-(1))

E-12区の南北側で、12の線上で発見された小児壺棺墓、9号・13号・57号壺棺墓と重複し、9号・13号より古く、57号より新しい壺棺墓である。墓底は、長径約0.95m、短径0.82mの、隅丸長方形の溝穴の短辺の北側の壁に横穴を掘つて、下縁を挿入していたと思われるが、現地表から浅かったために調査中に壺がつぶれて横穴としては残せず、現状の墓底としては横穴の部分を含んだ長さ1.5mのものとなっている。壺棺は上縁が1°低く接口式に合わされ、青色粘土で合せ口付近のみ目貼りしている。主軸の方向は N 1°E で南側の小形が上縁である。時期は弥生中期中頃である。

造 物 (第52図、図版64-(1)・(2))

上縁は口径39cm、高さ50.4cmの變形土器。逆「L」字口縁の先端は丸く、平坦部がわずかにくぼんでいる。口縁下には貼り付けの三角凸帯が1本めぐらし、ヨコナデ仕上げされている。底部は少しふくらみ、器面が荒れているが、粗いハケ目が残っている。底径8.3cmで割合小さな底部は多少上げ底となっている。胎土は石英・長石・金雲母粒を若干含み、やや砂っぽい感があるが、黄褐色の良好な焼成に仕上がっている。

下壺は口径 40.7cm、高さ 54.3cm、胴最大径 40.9cm、底径 8.5cm の壺形土器。先端の丸い逆「L」字口縁で、上部の平坦部は多少くぼみ、内側にわずかに三角形に突出する。口縁下には貼り付けの三角凸帯が 1 本めぐらし、ヨコナデ仕上げされている。胴部は中央より上でふくらみ、細くなつて底部に跳き、器面は荒れているが底部付近にハケ目が残っている。胎土は長石・石英・金雲母を含み、やや黒っぽい茶褐色で、良好な焼成となっている。

13号壺棺墓

遺 構（第16図、図版18-②）

E-13区の北端で発見された小兒壺棺墓。12号・57号壺棺墓と一部重複し、これらより新しい。墓壇は、現状で長径 1.47m、短径 0.9m の長辺円形であるが、もとは長さ約 0.9m、幅 0.9m の胴張り方形の墳穴に横穴を掘って下壺を挿入したものと思われる。壺棺は、下壺を 5° 低く接口式に合わせ、上壺の口縁部付近に目貼りの青色粘土があるが壺の下側には及んでいない。主軸の方向は N74°W で東側が上壺となっている。壺棺自体は削平されていなかったが、浅かったため著しく破碎しつぶれていた。したがって人骨も残っていない。時期は弥生中期後半である。

遺 物（第52図、図版64-③・④）

上壺は口径 41.0cm、高さ 51.5cm、胴最大径 39.7cm、底径 8.7cm の壺形土器。平坦部がわずかにくぼむ逆「L」字形口縁で、下に貼り付け三角形凸帯 1 本をめぐらし、凸帯から上はヨコナデ仕上げされている。胴部はあまりくらまないで底部に跳き、器壁は全体に薄く作られている。胎土に長石・石英を含み、わずかに角閃石も含まれ、淡い赤褐色の焼成となっている。

下壺は口径 43.7cm、高さ 55.3cm、胴最大径 42.6cm、底径 8.8cm の壺形土器。上部の平坦な逆「L」字形口縁で、内側に三角形のわずかな突出がある。口縁の下に貼り付け三角形凸帯 1 本をめぐらし、凸帯から上をヨコナデ仕上げしている。器面は荒れて調整法は不明。底部はわずかに上げ底の滑いものとなっている。胎土にやや粗い石英と非常に細かい長石・金雲母を含み淡い茶褐色の焼成となっている。

14号壺棺墓

遺 構（第14図）

E-13区の北端で15号壺棺墓の墓壇上部にあり、操作で破壊された小兒壺棺墓。壺棺は、上壺の口縁部と胴の一部、下壺は口縁部を残すだけ、墓壇の形態も不明。合わせ方は接口式で、目貼りは不明。傾斜はほぼ水平であるが、上壺が鉢形土器で多少低くなるようだ。主軸の方向は S 5°W で、斜面に向って下壺を挿入していたものであろう。

遺 物

上壺は逆「L」字形口縁の下に三角形凸帯を 1 本めぐらす鉢形土器。

下壺は逆「L」字形口縁の下に三角形凸帯を 1 本めぐらす壺形土器。

15号壺棺墓

造 構（第17図、図版19-（1））

E-12・13区に位置し、16号小児用壺棺墓に切られた接口式成人用壺棺墓である。壺棺の遺存状態は不良である。墓塚は台地斜面に沿って掘り込んでいる。墓塚形態は、隅丸方形を呈し墓塚の西側には下窓を挿入するための横穴を掘り、下窓を若干高位にして埋葬している。墓塚の規模は、長軸で1.8m、短軸で1.6mを測る。主軸方位はN81°Wを示し、埋葬傾斜角度は-3°である。接口部には粘土で目貼りを施している。人骨の遺存状態は悪く、僅かに頭骨片が遺存するにすぎない。下窓を頭位としていたと思われる。

造 物（第51図、図版65-（1））

上窓は内側に突出する口縁部を有し、最大径を胸部上半に持つ変形土器である。胸部中央には、一条の断面三角凸帯を貼り付け、底部は若干上げ底を呈する。胎土は石英・長石紋子を若干含むが焼成とも良好である。色調は胸部上半が黄褐色、下半は赤褐色を呈する。

下窓は上窓と同形式であるが、若干丸味を持ち、胸部中央に二条の三角凸帯を貼り付け、底部は平底である。胎土は良好であるが、焼成はあまり。色調は黄褐色である。

16号壺棺墓

造 構（第16図）

15号壺棺墓に直交する形で埋葬した接口式小児用壺棺墓である。ほぼ15号墓塚内にある。墓塚形態は耕作による削平を受け不明瞭で、壺棺も大破している。上下とも日常什器の変形土器を使用している。その内の一個体は、口縁の打ち欠きが見られた。接口部には、灰白色粘土の目貼りを施している。

17号壺棺墓

造 構（第18図、図版19-（2））

E-13区にあり、15号壺棺墓の東側に位置する接口式成人用壺棺墓である。墓塚は斜面に平行に掘り込んでいる。墓塚形態は、梢円形を呈し二段掘りである。墓塚の西側には下窓を挿入するための横穴を掘り、あたかも15号壺棺墓を意識したかの様な埋葬方法を採用している。現存での墓塚規模は、長軸で1.95m、短軸で1.45mを測る。主軸方位はN78°Wを示す。壺棺の埋葬状態は、下窓を若干高位に埋葬しており埋葬傾斜角度は-5°である。接口部には目貼りではなく、人骨の遺存状態は悪く、下窓を頭位としたと思われる。故葬者は成人女性である。

造 物（第51図、図版65-（3）・（4））

上窓は内側に大きく突出し、肥厚した口縁部平坦面は外側に傾斜する。最大径は胸部上半にあり、胸中央部には一条の断面三角凸帯を貼り付けている。底部は上げ底を呈する。胎土・焼成とも良好で、色調は赤褐色を呈する。

下窓は、肥厚した口縁部は内側に突出し、平坦面は水平である。最大径は胸部上半にあり、

中央部には一条の三角凸帯を貼り付けている。脇部下半は上脛よりも丸味を持つ。底部は平底である。胎土は石英・長石粒子を多く含む。焼成は良好である。色調は黄褐色。

18号壺棺墓

遺構（第19図、図版20—(1)）

E—13区で検出された成人用接口式壺棺墓で上部は削平されている。墓塗は長円形で、床面はほぼ水平。脛は上脛の方に若干高くなっている。主軸方位はほぼ東西で下脛に頭骨等が残存するが、保存状態は良くない。人骨は男女不明であるが若年に属す。目貼り粘土は接口部全体をまいていたと思われる。墓塗の南側にある落ち込みは墓塗より古い。

遺物（第54図）

上脛は、外側よりも内に強く突出する口縁部をもち、胴中央部を巡る一条の三角凸帯との間に脇部最大径を有す。脇下半から底部を欠損する。

19号壺棺

遺構（第19図、図版20—(2)）

18号壺棺墓の東側E—13区に位置する接口式の成人用壺棺墓である。墓塗は斜面に対して平行に掘り込んでいる。墓塗・壺棺とも耕作による削平が著しい。墓塗形態は、隅丸長方形を有し、下脛直下には径60cm、深さ25cmのピットが見受けられる。同様の遺構が当遺跡の54号壺棺墓、筑紫野市の永岡壺棺遺跡の12号壺棺墓等に見受けられるが、用途は明らかでない。墓塗の規模は長軸で1.7m、短軸で0.8mを測る。主軸方位はN80°Eを示し、壺棺は水平に埋葬している。壺棺の接口上部には、粘土で目貼りを施しているが、下部には見受けられない。人骨の遺存状態は悪く、頭部のみ追存していた。下脛が頭位である。被葬者は成年女性である。

遺物（第54図）

上脛の口縁部は肥厚し平坦面をなす。脛の最大径は頭部下にあり、頭部には一条の断面三角凸帯を貼り付けている。底部は欠損している。胎土は砂粒子を含み、色調は赤褐色を呈する。焼成は良好。

20号壺棺墓

遺構（第20図、図版21—(1)）

D—13区土塗9の南側に並列して検出された壺棺墓で、上部は大部分削平されている。主軸をほぼ東西方向に取る成人用接口式壺棺で、上・下脛とも口縁を打ち欠くものである。墓塗は下端のみであるが長円形を呈し、東側は擾乱されている。壺棺は水平位に置かれ、西脛に頭骨の残片が検出されたことから、他にならない西脛を下脛とした。接口部上部に目貼り粘土がみられる。

遺物（第54図、図版65—(2)）

上蓋は頭部上半部を打ち欠く、最大径を胸上半部にもち、その下を二条の三角凸帯を貼り付けている。底部は欠損している。

下蓋もやはり口頭部以上を打ち欠いた壺形土器で最大径は胸中央部の三角凸帯と口縁部との間にある。底部は薄手で上蓋底。胎土は砂粒を含み、かなり精製された土を用い；色調は黄褐色と赤褐色を合せたものである。

21号壺棺墓

造 構（第20図、図版21-（2））

D-13区、20号壺棺墓の東側3mに位置し、前期末に構築された32号袋状塗穴の埋土中に半分かかって検出された。二列に並列する一群の東端壺棺墓。墓坑は2.4mの長方形を呈し、上部は削平されている。主軸は東西方位を呈す。壺十塗の成人用接口式ではほぼ水平である。目貼り粘土は両端のみでドには認められない。下蓋に遺存状態の悪い頭骨が検出されたが、男女は不明で成人に属す。

造 物（第55図、図版66-（1）・（2））

上蓋は「T」字状を呈す口縁部で、内側に厚く、外より突出する。胸上半部はほとんど張らず、胸中央部の二条の貼り付け三角凸帯からすぼまり、平底の底部へ移行する。最大径60cm、器高93cmを測る。淡い黄褐色を呈し、部分的に黒斑がみられる。

下蓋も上蓋と同様な口縁部形態だが、平坦部が若干もりあがる。頭部最大径の位置が胸中央部の二条の三角凸帯のすぐ上に来、また、凸帯から底部まで上蓋が48cm、下蓋が47cmと大差ないが、下蓋はあまりすぼまらずに底部へ移行しているので全体的に丸みをもち、安定感がある。底部は上蓋底で、色調は赤褐色を呈す。

22号壺棺墓

造 構（第21図）

D-13区で検出した壺棺墓である。耕作による削平が著しく、僅かに残存するにすぎない。單棺・複棺の判別はおろか小児か成人用壺棺墓であるかも明らかでない。壺の頭部には一条の山形凸帯を貼り付けている。

23号壺棺墓

造 構（第21図）

C-13区に位置する鉢形土器と壺形土器の接口式成人用壺棺墓である。墓坑は台地斜面と平行する形で掘り込んでおり、現状は不整橈円形を呈するが、削平が著しく遺存状態はよくない。壺棺は主軸を N73°W にもち、ほぼ水平に埋置されている。目貼り粘土は見受けられず、人骨の遺存もない。

24号壺棺墓

造 構（第22・67図、図版22-（1）・（2））

C-13区に位置し、上蓋に上半部を打ち欠いた窓を使用する接口式成人用壺棺墓である。墓塙は、台地斜面に平行する形で掘り込んでいる。形態は楕円形で、下窓を挿入するための横穴は窓に合せた傾斜をもち、接口部で最も深くなる。墓塙の規模は、長軸で2.2m、短軸で1.05mを測る。窓棺の主軸方位はN87°Eを示し、挿入傾斜角度は0°である。目貼り粘土は施しておらず、上蓋を頭位として埋葬している。被葬者は老年の女性であるが、人骨の遺存状態は良くない。

遺物（第55図、図版66-（3）・（4））

上蓋は、上半部を打ち欠いている。副部に二条の断面三角形の凸帯を貼り付けている。胎土は石英・長石を含み焼成とも良好。色調は赤褐色を呈する。

下窓は、内外に突出した口縁部を有し、上面は外にわずかに傾斜する平坦面を有す。頭部よりやや下った胴上部で最大径をもち、胴部に二条の断面三角形の凸帯を貼り付けている。墓塙は全体にはほぼ同じ厚さを保ち、底部でわずかに肥厚する。胎土は上窓と同様石英・長石・雲母を含み、焼成とも良好である。色調は淡い赤褐色を呈する。

25号壺棺墓

追構（第21図、図版23-（1））

D-13区に位置する接口式成人用壺棺墓である。墓塙は、台地斜面に平行する形で掘り込んでいる。耕作等に依る削平が著しく、横穴部は僅かに残っているが、遺存状態は良くない。墓塙形態は楕円形で西側に横穴部を持つ。長軸で2.0m、短軸で1.0mを測る。窓棺の主軸方位はN77°Eを示し、挿入傾斜角度は-3°である。接口部に青灰色粘土で目貼りを施しており、人骨は頭骨・脚骨の一部が遺存していた。

遺物（第55図、図版67-（1））

上窓は「L」字状の口縁部を有し、口縁直下には一条の山形三角凸帯を貼り付けている。内面には部分的に黒斑が見受けられる。胎土は石英・長石・雲母を含み、焼成とも良好。色調は赤褐色を呈する。

下窓は内外に突出した「T」字状口縁部を有し、上面はわずかに傾斜する平坦面をもつ。胴中央部には一条の断面三角形の凸帯を貼りめぐらし、底部は上げ底状を呈する。胎土は上窓と同様石英・長石・雲母を含み、焼成とも良好である。色調は褐色を呈する。

26号壺棺墓

追構（第23図、図版23-（2））

D-13区、27号窓棺墓のすぐ西側に位置する。並列する窓棺墓の南側、東端を構成する一つ。墓塙は上部の大半を削平され、南側は墓塙の範囲さえ不明である。水平に置かれた成人用単棺で、木蓋の痕跡は確認出来なかった。主軸は東西にとる。目貼り粘土はなく、人骨等は残存しなかった。

遺物（第56図）

壺形土器で最大径67cm、器高106cmを測る。内側に2cmと肥厚して突出する口縁部は下がり薄くなりながら外方へ出る。口縁直下に台形状の貼り付け凸帯が一条巡り、すばまりながら胴中央部へ移行し、中央部から若干上で反転して膨らみ、最大径を有す。胴下半上部に二条の貼り付け三角凸帯を持つ。底部は上げ底。淡い赤褐色を呈し、施成良好。

27号壺棺墓

遺構（第23図、図版24-（1））

26号壺棺墓の東側に位置する単棺で口縁の方向は26号と反対側を向く。墓塙は削平されているが、下部は長円形を呈す。ほぼ東西方向、水平に置かれており、木蓋をしていたか否かは不明。口縁部内側を打ち欠いた壺形土器を用いる。人骨は遺存しなかった。

遺物（第56図）

底部は削平により欠損する。口縁部内側は意識的に打ち欠いている。非常に胴の膨る器形で胴中央部の最大径74cmを測りその部分に二条の貼り付け三角凸帯が巡る。色調は外面黄褐色、内面は赤褐色を呈す。

28号壺棺墓

遺構（第24図、図版24-（2））

27号壺棺墓の東側D-13区で検出された接口式成人用壺棺墓である。耕作による削平で遺存度は不良である。墓塙は台地斜面に平行して掘り込まれている。現存の墓塙形態は、楕円形である。下窓の脇部は搅乱を受け破壊されており、直下には搅乱によるピットがある。

上窓は、殆んど遺存しておらず、胸部上半を打ち欠いている。墓塙の規模は、長軸で1.6m、短軸で1.0mを測る。接口部には若干の粘土による目貼りを施している。人骨は遺存しない。

29号壺棺墓

遺構（第23図）

D-13区に位置する接口式小児用壺棺墓である。墓塙は、台地斜面に直交する形で掘り込んでいる。削平が著しく、墓塙・墓樁ともに遺存度は不良である。主軸方位はN69°Wを示し、埋置はほぼ水平である。目貼り粘土は施しておらず、人骨の遺存もみられない。

30号壺棺墓

遺構（第24図、図版25-（2））

D-13区で検出された覆口式成人用壺棺墓である。台地斜面に直交して墓塙を掘り込んでおり、41号壺棺墓を切っている。墓塙形態は、不整楕円形を呈する。現存の規模は、長軸で1.7m、短軸で1.2mを測る。墓塙の北側には傾斜した横穴を掘り込み壺棺を挿入している。挿入傾斜角度は+22°で、主軸方位はN30°Wを示す。上窓は脇部から打ち欠き、下窓は口縁内外を打ち欠いている。耕作による削平を受け遺存状態は不良である。粘土の目貼りもなく、人骨

も遺存しない。

遺物（第56図、図版67—(2)）

上壺は壺形土器の肩部上半部を打ち欠いており、肩部には「コ」字状の凸帯を貼り付けている。底部は平底をなす。調査は全てナデ仕上げである。胎土は精製されている。焼成も良く、色調は赤褐色を呈する。

下壺は、口唇部打ち欠きの為明瞭でないが、肥厚した口縁部の平坦面はほぼ水平をなすと思われる。頸部は内窪し、断面三角凸帯を貼り付けている。最大径は調査部中央にあり、そこには二条の三角凸帯を貼り付けている。器体は全体に丸味を有し、底部は上げ底である。胎土は石英・長石粒子を含み、色調は淡い茶褐色を呈する。焼成は良好。

31号壺棺墓

遺構（第23図、図版26—(1)）

D—13区に位置する接口式小兒用壺棺墓である。台地斜面に対して直交した形で墓塚を掘り込んでいる。墓塚形態は、楕円形を呈するが、北側は新たな柱穴で擾乱を受け、耕作による削平と相俟って遺存状態は不良である。墓塚の規模は長軸で0.8m、短軸で0.5mを測る。主軸方位はN6°Eを示し、壺棺は墓塚に対してほぼ水平に埋葬している。目貼り粘土、人骨は遺存しない。

遺物（第53図）

上壺は内傾する口縁部を有し、頸部も内窪する、最大径は肩上半部にある。底部は平底である。調査は、内面はハケを施した後、ナデによる仕上げをしている。外面は風化が著しく明瞭でないがハケ仕上げである。胎土・焼成とも良好で色調は赤褐色を呈する。

下壺も、上壺とはほぼ同形式の壺を使用しているが、底部を欠損している。

32号壺棺墓

遺構（第25図、図版26—(2)）

28号袋状型穴の南側、D13—6区に位置する。上部の大部分を削平された墓塚内に肩下部から底部のみが残存していた。墓塚ならびに壺棺の状態から成人用单棺と考えられる。主軸は東西方向で口縁部は東側になる。

33号壺棺墓

遺構（第26図、図版27—(1)）

D—13区の中で東側に位置する鉢形土器と壺形土器の接口式成人用壺棺である。墓塚は斜面に直行して掘り込み墓塚形態は、不整形である。規模は、耕作により壺棺を挿入する横穴まで削平されており、現存での長軸は1.95mを測るが、本来は1.3m程であろう。短軸は1.25mを測る。主軸方位はN2°Eを示す。埋葬傾斜角度は-10°で、下壺を高位にして埋葬している。接口部には若干の目貼り粘土を施している。人骨の遺存状態は頭部と脚部のみ遺存し、下壺を頭位とする。被葬者は熟年女性である。

遺物（第57図、図版67-（3）・（4））

上縁の鉢形土器は、口縁部が肥厚して内側に突出し、口縁部平坦面は若干外側に傾斜する。口縁直下には、断面三角凸帯を貼り付けている。底部は若干の上げ底を呈する。調整は全てナデ仕上げで、胎土は石英・長石・雲母等を含むが、焼成とも良好である。色調は黄褐色を呈する。

下縁は「T」字状に内外に突出した口縁部を持ち、口縁平坦面は大きく外側に傾斜する。最大径は胴部上半部にあり、胴下部には、下り気味の断面「コ」字状の貼り付け凸帯を二条付している。底部は上げ底を呈し、均整のとれた壺形土器である。胎土は精製されており、焼成とも良好である。色調は黄褐色を呈する。

34号壺棺墓

遺構（第25図、図版27-（2））

35号壺棺墓の北、D13-2区に位置する。墓塗は不整長円形を呈すが、削平が著しく木米的なものではない。甕+甌の接口式の小児用壺棺で墓塗の北側に寄って水平に近く置かれている。当遺跡の例からして北側の甌が下縁となろう。主軸は西に寄るが南北方向である。目貼り粘土、人骨は認められない。

遺物（第53図、図版68-（1））

下縁は口径30cm、器高34.6cmを測る。逆「L」字状の平坦な口縁部を有し、内側へは細く尖るように突き出る。口縁下、約6cmで胴部最大径を有し、胴下半ですばまり、平底の底部へ移行する。全面は縱方向のハケ目調整を施す。灰褐色を呈し、胎土に若干の石英粒を含む。

35号壺棺

遺構（第25図）

62号壺棺墓の北側で検出された接口式の小児用壺棺墓である。上部は削平され、上縁の大部分を欠損するが、墓塗が深いため下縁は残存している。埋葬傾角度は30°を示す。墓塗には、横穴を掘り込み下縁を挿入している。目貼り粘土は認められず、人骨も遺存しない。

遺物（第53図、図版68-（2））

下縁は胴部最大径が上半にある壺形土器で、大きく内弯して頸部にいたり、反転して「く」字形口縁部を有す。口縁部の内側はへこみ、外側に肥厚する。頸部直下に三角凸帯が一条巡る。胴部はあまりすばまらずに底部へ移行する。口径36.4cm、器高62.6cmを測る。外面は、燃が付着しており、日常什器を転用したことが判る。

36号壺棺墓

遺構（第25図）

C-13区で検出された接口式小児用壺棺である。墓塗形態は、橢円形を呈し、合地斜面に直交する墓塗を掘り込んでいる。墓塗の北側には、壺棺を挿入するための横穴を掘り込んでい

る。現存での墓塚規模は、長軸で1.15m、短軸で0.65mを測る。主軸方位はN19°Wを示す。塚頂の埋葬傾斜角度は+1°であり、ほぼ水平に埋葬している。接口部の目貼りは施しておらず、人骨も遺存しない。

遺物（第58図、図版68—(3)）

上壺は内傾する口縁部を有し、頸部も内傾する。ほぼ半分欠損しているが、胴部上半に最大径がある。底部は平底を呈する。調査は、内外面とも横ナデで仕上げをし、外面下部は風化が著しく不明瞭であるが、細いハケを施している。胎土・焼成とも良好で、色調は黄褐色を呈する。

下壺は若干内傾する口縁部を持つ。断面三角凸帯を貼り付けた頸部は内傾し、最大径を胴部上半に持つ。底部は若干の上底を呈す。調査は、器体外側に粗いハケを施し、内面は細いハケとナデにより仕上げている。胎土・焼成は良く、黄褐色を呈する。上・下壺とも日常什器の転用である。

37号壺棺墓

遺構（第27図、図版28—(1)）

C-13区に位置する壺形土器と鉢形土器の接口式成人用壺棺である。台地斜面に平行して墓塚を掘り込み、64号の小児棺墓に若干切られている。墓塚形態は梢円形を呈す。耕作による削平が著しく、墓塚の横穴を西側に若干残し、甕棺をほぼ水平に埋葬している。主軸方位は、N13°Eを示し、墓塚の規模は長軸で1.9m、短軸で1.10mである。接口部には目貼りを施しておらず、人骨も遺存していない。

遺物（第57図、図版69—(1)・(2)）

上壺の鉢形土器は、肥厚した口縁部を有し、口縁直下には断面三角凸帯を貼り付けている。底部は平底を呈する。調査は内外面ともナデで仕上げをし、胎土は石英・長石を多く含む。焼成は良好で色調は黄褐色を呈す。全体的に器壁が厚い。

下壺は、肥厚した口縁部は「T」字状を呈するが顯著でない。口縁部平坦面は若干外に傾斜し、頸部には一条の三角凸帯を貼付け、胴下半部には二条の三角凸帯を貼り付けている。調査は内外面ともハケを施した後ナデ仕上げをしている。胎土・焼成とも良好で色調は赤褐色を呈す。

38号壺棺墓

遺構（第28図）

C-13区に位置する小児用壺棺墓であるが、耕作等に依る削平が著しく、遺存状態はきわめて悪い。単棺か複棺であるかの判別も困難であり、墓塚形態も明らかでない。人骨の遺存はない。

39号壺棺墓

遺構（第28図、図版28—(2)）

D-13区に位置する小児用接口式壺棺墓である。墓塚は削平を受けてはいるが、台地斜面に

斜交し、29号壺棺とは軸線方位が直交する形で掘り込んでいる。墓塚の形態は隅丸方形で、下蓋を挿入するための横穴は傾斜をもち器高程の深さを掘り込んでいる。規模は長軸で0.65m、短軸で0.5mを測る。壺棺の主軸方位はS 42°W、挿入傾斜角度は+35°である。目貼り粘土は施しておらず、人骨は遺存していない。

遺物（第58図、図版68-（4））

上蓋は著しく削平のため実測不可能である。下蓋はほぼ直角に外反しているが、「く」の字に近接した口縁をもち、調上半にふくらみをもち最大径を測る。底部は僅かに上げ底を呈する。内面から外面頭部にかけては横ナデ、外面調部には荒いハケによる調整痕がみられる。胎土は石英・長石・雲母を含み、焼成とも良好。色調は赤褐色を呈する。

40号壺棺墓

遺構（第28図、図版29-（1）・（2））

D-12地区の中央付近で発見された小児壺棺墓。墓塚の上蓋は不整円形であるが底辺は長方形をしている。大きさは長径0.72m、短径0.5m、深さ0.5mの豊穴に奥行き0.37mの横穴を掘って下蓋のほぼ全部を挿入している。同大の蓋を上蓋として接口式に25°の傾斜をつけて埋設し粘土目貼りをしていない。壺棺の主軸はN 40°Wで、台地の斜面に下蓋を突き込む形をとり上蓋は南側となっている。人骨は残らず、時期は中期後半である。

遺物（第58図、図版69-（3））

上蓋は口径30.3cm、器高31.7cm、胴最大径23.7cm、底径8.5cmの変形土器。口縁は逆「L」字形から「く」字形に変化する過程のもので、上面が丸味をもっているが、内面の角は三角形状に残っている。しかし、この内面の角に刻み目を施しているのは異例である。胴部は歪んでいるが丸味をもち、薄い底部に続いている。胎土には細かい石英・長石を含み、赤褐色の焼成に仕上げている。

下蓋は器高37.2cm、口径32.5cm、胴最大径32.1cm、底径8.7cmの変形土器。口縁部は「く」字形で、先端はわずかに上げぎみとなっている。胴は上部にふくらみをもち、下半を細くして底部に続いている。口縁部はヨコナデ仕上げであるが、胴部はやや細かいハケ仕上げとなっている。胎土にはやや粗い石英・長石を含み、赤褐色の良好な焼成で仕上げている。

41号壺棺墓

遺構（第29・68図、図版30-（1）・（2）、31-（1））

D-13区に位置する鉢形土器と壺形土器の接口式成人用壺棺墓で、30号壺棺墓の墓塚に若干切られている。墓塚は、台地斜面にはほぼ直交する形で掘り込んでいる。形態は不整円形で下蓋を埋設するため二段掘りを呈する。墓塚の比例には若干傾斜した横穴を下蓋の器高程掘り込み壺棺を挿入している。墓塚の規模は、長軸で1.55m、短軸で1.20mを測り、主軸方位はN 36°Wを示す。壺棺の挿入傾斜角度は+9°である。目貼り粘土は施しておらず、上蓋を頭位とし

埋葬している。被葬者は老年男性である。

遺物（第57図、図版70-①・②）

上窓の鉢形土器は、「T」字状の口縁部を有し、口唇部は若干下り気味である。口縁直下には断面三角形の凸帯を貼付けている。底部は若干上げ底を呈する。胎土は石英・長石・雲母等を含み、焼成とも良好。色調は赤褐色を呈す。

下窓は、内外に突出した口縁部を有し、上面は平坦面である。頸部には断面「コ」字状の貼付け凸帯を有し、最大径は胴中部に在る。胴下部には二条の断面「コ」字状の凸帯を貼り付している。底部は上げ底状を呈する。胎土は上窓と同様石英・長石・雲母を含み、焼成ともに良好である。色調は赤褐色を呈す。本遺跡最大の壺棺である。

42号壺棺墓

遺構（第28図）

D-12区に位置する壺棺墓であるが、耕作による削平が著しく墓塙の遺存状態は良くない。単棺か複棺であるかの判断も困難である。また墓塙形態も明らかでない。壺棺も僅かにしか遺存していない。壺棺の埋葬傾斜角度は+42°を測る。人骨は遺存していない。

43号壺棺墓

遺構（第30図）

D-12区に位置する、小児用の單棺である。耕作による削平が著しく、遺存度は不良である。墓塙形態は橢円形を呈し、規模は、長軸で0.6m、短軸で0.35mを測る。主軸方位はN81°Eを示す。遺物は実測可能であるが、弥生時代中期後半のグループに属しており同時期の所産と考えられる。人骨は遺存していない。

44号壺棺墓

遺構（第31図）

合地平坦面D-12区にある鉢形土器と壺形土器の接口式成人用壺棺である。墓塙形態は不整円形を呈し、二段掘りである。墓塙は削平されており明らかでないが、壺棺を挿入するために墓塙の南側に傾斜した横穴を掘り込んでおり、壺棺の傾斜角度は+34°である。現存での墓塙の規模は、長軸1.7m、短軸1.0mを測る。主軸方位はN30°Eを示す。接口部の目貼りは施しておらず、人骨も遺存していない。壺棺は未実測。

45号壺棺墓

遺構（第32図、図版31-②）

C-12地区の西側で発見された成人用壺棺墓。3基の近世墓で完全に破壊され、下窓の底部のみ残っていた。近世墓の掘方内から壺棺の破片が多数発見され、破片から合口壺棺墓であったことがわかる。

墓塙の形態は不明であるが、下窓を挿入した横穴は一部残っていた。現地山面から深さ1.0

mまで掘られている。甕棺の主軸はほぼ S70°E で台地の尾根線に平行し、上甕を東側に向いている。傾斜も 45° ぐらいあったと思われる。時期は中期後半である。

46号甕棺墓

遺構 (第27図、図版32-1)

D-12地区の中央付近にある小児甕棺墓。近世墓で一部破壊されていたが、接口式に合わせた上甕の口縁部が一部残っていた。粘土目貼りはない。

墓塙は、長径 1.2m、短径 0.9m の椭円形で 2段掘りにして西側壁に多少横穴状に掘って下甕を 50° に傾斜させて挿入している。墓塙の 1段目は現状で深さ 10cm、2段目は 38cm、3段目は 57cm である。主軸は S83°E で台地の尾根線に平行、上甕は東側である。時期は弥生後期初頭である。

遺物 (第58図、図版69-4)

上甕は口縁部の小破片。「く」字形口縁の下に一本の三角形凸帯をめぐらしている。下甕は器高 46.3cm、口径 41.2cm、脚最大径 42.1cm、底径 11.3cm の甕形土器。口縁部は「く」字形で直下に三角形凸帯一本をめぐらす。口縁の内面は直線的にのび、先端がわずかにくぼむ。脚部は上半で口径よりわずかにふくらんで、下半で細くなつて底部にいたる。口縁と外面の凸帯はヨコナデ、内面はナデ仕上げである。脚部外面上半には煤が付着している。胎土にはやや粗い石英・長石を含む、赤褐色の焼成に仕上げられている。

47号甕棺墓

遺構 (第33・69図、図版32-2)・33-1)・(2)

68号甕棺墓の東側、F12-5 区に検出された。墓塙は南北 2.55m、東西 1.3m 内外の隅丸長方形を呈す。墓塙北側に横穴を穿ち、下甕を挿入している。成人用の接口式甕棺で、下甕の方が若干高く納められている。接口部は全体を粘土で覆っている。甕棺内の人骨は頭部が下甕に、脚部が上甕に残存し、埋葬方法が判る。被葬者は老年に属する女性である。なお、この墓塙内には、主軸方向位がほぼ同一の小児甕棺墓があり、47号の上甕と小児の下甕 (?) が重なるところから両者の関係が推察される。同一墓塙内の成人棺+小児棺の例は 15・16 号、54・55 号甕棺墓に認められる。新幹線関係の遺跡では春日市原遺跡に同一墓塙内に成人の女性用甕棺 2 基が並列し、その上に 4 基の小児棺の例がある。

遺物 (第60図、図版70-3)・(4)

上・下とも甕形土器で上甕は、内に強く突出した平坦面をもつ「T」字形口縁部は、内に肥厚する。口縁下からやや強く脚部が張り、脚中央部の二条の三角凸帯下で最大径を有す。器面は風化し、砂粒が浮き出ている。色調は暗赤褐色。

下甕も「T」字形の口縁で、内に肥厚するが、外側へ傾斜し、上部はややへこむ。脚上半部と口縁とがほぼ同一で最大径をもつ。脚中央部に二条の貼り付け三角凸帯を有すが、部分的に

山形になる。色調は赤褐色で黒漆部もみられる。

48号墓槨

逃 槽 (第36図、図版34-(1)・(2))

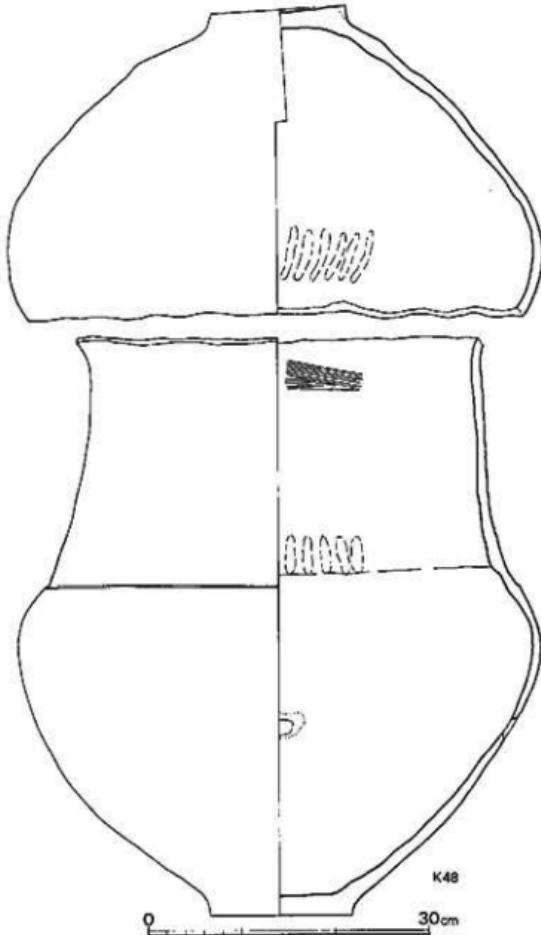
E-12区の弥生時代前期の貯蔵穴内で発見された壺形土器を利用した横口式小児用槨である。槨は22号貯蔵穴を再利用したもので東側壁沿いの床面直下で検出した。墓塚形態は不明瞭であるが、梢円形を呈している。墓塚規模は長軸で1.2m、短軸で0.7mを測る。主軸方位はN19°Eである。槨の傾斜角度は+20°であり、上蓋は、頭部上半を打ち欠き、下蓋は口縁部を打ち欠いている。人骨は遺存していない。

遺 物 (第9図、

図版80-(1)

・(2))

上蓋は壺形土器の肩部から打ち欠いている。張りのある胴部に若干上げ底部を有する。調整は器体外面をヘラ磨き、内面をナデで及び指頭圧痕で仕上げている。外面の剥落が著しい。胎土は粗い石英粒が多く不良。焼成は良好で、黄褐色を



第8図 48号墓槨墓実測図 (1/6)

呈する。

下壺は上壺と同形式の壺形土器を口縁部から打ち欠いている。器体内面は、ハケの後ナデ仕上げをし、頸部内側には指頭正痕がみられる。胸部には内側から穿孔しており、胎土・焼成とも、上壺より良好である。色調は灰褐色を呈する。

49号壺棺墓

遺構（第34図、図版35-（1））

D-12区に位置する鉢形土器と壺形土器の接口式成人用壺棺墓である。近世墓に切られてい る。墓底形状は隅丸長方形を呈し、墓底の東側には傾斜した横穴を掘り込み壺棺を挿入して いる。墓底の規模は長軸で1.45m、短1.軸で10mを測る。主軸方位はS 82°Wを示し、壺棺の埋葬傾斜角度は+18°である。接口部の目貼りはなく、人骨も遺存しない。

遺物（第60図、図版71-（1）・（2））

上壺の鉢形土器は大きく外反する口縁部を有し、底部は上げ底を呈する。側壁は外面ナデ内面ハケの後ナデで仕上げをし、口縁部はハケで仕上げている。胎土は長石・雲母を含む。焼成は良好。色調は黄褐色を呈する。また内面には煤の付着を見る。

下壺は内外に突出する口縁部を有し、頸部には断面「コ」字状の貼り付け凸帯を有す。最大径は胸中央部に在り、胸部には二条の断面「コ」字状の貼り付け凸帯を持つ。底部は平底を呈する。焼成・胎土とも良好で、色調は赤褐色を呈する。

50号壺棺墓

遺構（第35図、図版35-（2））

C-12区に位置する成人用壺棺墓である。合口形式は近世墓により擾乱を受けており明らかではないが、接口式であろう。上壺は不明である。墓底形状は楕円形である。墓底の西側には壺棺を挿入するための傾斜した横穴を掘り込んでいる。現存での墓底規模は、長軸1.75m、短軸1.33mを測る。主軸方位は、S 83°Eを示し、壺棺の傾斜角度は、+34°である。人骨は遺存しない。

遺物（第60図、図版71-（3））

上壺は不明である。下壺は、最大径を胸部に有し、肥厚した口縁部平坦面は若干外側に傾斜する。頸部には断面三角形の凸帯を貼り付け、胸部には二条の「コ」字状凸帯を貼り付けて いる。底部は若干上げ底を呈する。全てナデで仕上げである。胎土は石英・長石・雲母を含み焼成とも良好である。色調は淡い赤褐色を呈する。

51号壺棺墓

遺構（第37図）

C-12区に位置する成人用壺棺墓である。中・近世の擾乱を受け、遺存状態は良くない。墓底は台地の平坦面に掘り込まれ、形態は長方形で、下壺を挿入するため二段掘りを呈する。墓

埴の南側に傾斜した横穴を掘り込み、壺棺を挿入している。墓埴の規模は長軸で2.35m、短軸で約1.2mを測り、主軸方位はN3°Eを示す。壺棺の挿入傾斜角度は+35°である。目貼り粘土は不明、人骨の遺存はなかった。

遺物(第61図、図版71-(4))

中・近世の擾乱のため上窓は不明である。下窓は「T」字状口縁を有し、口縁直下に一条の断面三角形の凸帯を貼りめぐらす。胴中央で最大径を示し、二条の断面三角形の貼り付け凸帯をもつ。底部はわずかに上げ底状を呈する。胎土は、石英・長石を含み、焼成は良好である。色調は暗黄褐色を呈し、部分的に黒斑がみられる。

52号壺棺墓

遺構(第31図、図版36-(1)・(2))

E-12区の南西側で発見された小児壺棺墓。53号壺棺墓と一部重複し、これより新しく壺棺を一部破壊している。墓埴は、長径1.3m、短径0.8mの不整長方形の豎穴で、そのコーナ付近に横穴を掘って下窓全体を挿入している。横穴は奥の方が高いため-11°の傾斜となっている。墓埴の深さは50cmで、上窓の部分はさらに13cm深くなっている。窓棺は上窓が鉢形土器で、接口式に合わせ、主軸をS45°Eに向いている。合わせ口付近には青色粘土で目貼りをしている。合地の尾根線には斜行して埋葬され、他の壺棺とは違っている。壺棺は保存がよく、棺内には下窓に脚骨、上窓に頭蓋骨が残り、2才程度の幼児が頭部を奥にして埋葬されていたことがわかる。時期は弥生中期後半である。

遺物(第59図、図版72-(1)・(2))

上窓は器高27.3cm、口径44.6cm、胴最大径40.8cm、底径11.9cmの鉢形土器。口縁部は逆「L」字形で内側に三角形に張り出し、内側が補強されている。胴部は、口縁直下に最大径があり丸味をもって底部にいたる。厚い底部はわずかに上げ底状である。胎土には石英・長石を含み、黄褐色の良好な焼成。

下窓は器高52.4cm、口径44.0cm、胴最大径42.4cm、底径11.3cmの鶯形土器。口縁部は逆「L」字形で上面にはふくらみがある、内側は三角形状に角を有する。口縁下の外側は補強され三角形凸帯を有する。胴部は上半でふくらみ、下半は細くなって底部にいたる。底部はわずかに上げ底状で角を有する。口縁部と凸帯はヨコナデ、肩部は下から上にやや細かいハケ目仕上げである。胎土には石英・長石を含み、赤褐色の良好な焼成で仕上げている。

53号壺棺墓

遺構(第30図、図版37-(1)・(2))

E-12区の南西側で発見された小児壺棺墓。52号壺棺墓の墓埴で下窓の一部を破壊され、さらに9号の墓埴も重複しているが、9号・52号より古いものである。墓埴は、長さ0.97m、幅0.7m、深さ0.3mの円丸長方形で、西側の短辺に奥行約0.5mの横穴を掘り、下窓の大半を挿

入している。壺棺の主軸は S 88° E の方向で、台地の尾根線に平行している。合わせ方は、同形同大の壺形土器の上部を接口式に合わせるが、下方になる部分は口縁と口縁の間を12cm離して空間のある側面には三個目の壺の口縁部付近の破片で補充している。これらの合わせ目には粘土目貼りがある。上壺と下壺の傾斜は完全に逆向きとなるが、下壺は -11° の傾斜をもたせている。時期は中期中頃である。

遺物（第59図、図版72-（3）・（4））

上壺は器高 48.3cm、口径 37.5cm、胴最大径 36.6cm、底部 8.4cm の壺形土器。口縁部は逆「し」字形であるが、外部に突出する部分は厚味があって短かく、上部の平坦部はわずかにくぼんで内面は三角形に突出する。口縁下には底辺の割合広い三角形凸帯が一本めぐる。胴部は上半でわずかにふくらみ、下半は細くなって小さく厚味のある半底に続く。粘土幅は 4cm 前後であるが、縫目の詳細は不明。凸帯から口縁部の内外面はヨコナデ仕上げ、胴部は上半が上から下に、下半は下から上にやや粗いハケ目仕上げである。胎土には石英・長石を含み、上半は赤褐色、下半は黄褐色の良好な焼成で仕上げている。

中壺は口径 28.0cm、胴最大径 26.5cm の壺形土器の破片。口縁は逆「し」字形で、内側はつまみ出したような三角形に突出する。口縁下には凸帯がなく、胴部も上半でわずかにふくらむ。口縁部内外面はヨコナデ仕上げ、胴部外面は細かいハケ目仕上げで上半に煤が付着している。胎土に石英粒を若干含み、黄褐色の良好な焼成に仕上げている。

下壺は器高 50.6cm、口径 39.0cm、胴最大径 37.2cm、底径 8.3cm の壺形土器。口縁部は逆「し」字形で、上面の平坦部がわずかにくぼんで内側に三角形に突出している。口縁下には三角形凸帯一本をめぐらしている。胴部は中央よりやや上でふくらみ、中央付近から細くなっている。粘土は 3cm から 5cm 幅のものが積み上げられ、底部付近には継にハケ目が残っている。胴部外面の上半には煤が付着している。胎土に石英・長石を含む、褐色の良好な焼成である。

54号壺棺墓

遺構（第38図、図版38-（1）・（2）、39-（1））

E-12区に位置する接口式成人用壺棺である。主軸に直交して小児用壺棺が墓塚内にあり、54号を切っている。墓塚は台地斜面に沿って平行に掘り込まれている。墓塚形態は、不整長方形を呈し、墓塚の西側には壺棺挿入のための横穴を掘り込み、埋葬傾斜角度は -30° を示し、下壺を若干高位にして埋葬している。墓塚は若干二段掘りを呈し、下壺下部には、径 30cm、深さ 10cm 程度のピットを掘っている。墓塚の規模は、長軸で 2.0m、短軸で 1.5m を測る。主軸方位は N 84° E を示し、人骨の脚部の遺存状態から下壺を頭位としていたと考えられる。接口部には若干粘土で目貼りを施し、人骨は脚部の一部のみ遺存していた。被葬者は成人男性である。

遺物（第61図、図版73-（1）・（2））

上部は、内外に平均して突出したいわゆる「T」字状の口縁部を有し、口唇部は平坦面をなす。頸部は内傾せず胸部上半には断面三角凸帯を貼り付けている。胸下半は張りを持たず、底部は上げ底である。胸最大径は胸部上半にある。胎土・焼成とも良好である。色調は赤褐色を呈する。

下部は、内外に突出する「T」字状の口縁部に平坦な口唇部を有す。頸部はほぼ直立し、胸中央部には三角凸帯を貼り付け、底部は若干上げ底を呈する。胸最大径は胸上半部にある。胎土は石英・長石・雲母を含み良好。焼成は不良で色調は淡い赤褐色を呈する。

55号壺棺墓

造 構（第30図、図版39-（2））

E-12区に位置する接口式小児用壺棺墓である。54号壺棺墓の墓域内上部に存在する。耕作等による削平が著しく、墓塚、壺棺の遺存状態は良くない。主軸方位はN5°Eを示し、壺棺の埋設角度はほぼ水平である。日貼り粘土・人骨の遺存はみられない。

56号壺棺墓

造 構（第30図、図版40-（1）・（2））

E-13区で検出された臺形土器と甕形土器の接口式小児用壺棺である。墓塚は台地傾斜面にほぼ直交する形で掘られ、南側の墓塚の一部が耕作溝により削平を受けている。墓塚形態は、不整規円形を呈し、二段掘りである。規模は、長軸で1.35m、短軸で0.7mを測る。主軸方位はN10°Eを示し、壺棺の埋葬傾斜角度は+2°である。接口部には黄褐色の粘土で目貼りを施している。人骨は遺存しない。

造 物（第59図、図版73-（3）・（4））

上部は甕形土器を使用しており、外反する口縁部をなし、口縁部には浅い沈線を施している。口縁直下には下り気味の貼り付け三角凸帯を付し頸部には二条の断面三角凸帯を貼り付けている。側壁は内面を研磨し、外面はナデと研磨で仕上げている。胎土・焼成とも良く、色調は茶褐色を呈する。

57号壺棺墓

造 構（第39図、図版41-（1）・（2））

E-12区の南端で発見された成人用壺棺墓。本壺棺が埋葬された後に、墓塚の一部を切って、12号・13号壺棺が埋葬されている。12号は横穴を掘った際に下部の底部が直接57号の下部の胸部に当たらしく下部の底部が接触し破損している。墓塚は隅丸長方形で、長さ2.36m、幅1.9mの大きなもので、壺棺の周囲をさらに1段掘り下げている。塚辺の西側には奥行54cmの横穴を掘って下部を半分挿入している。墓塚の深さは一段目が40cm、最も深い下部付近で85cmとなっている。墓塚は門田2号墳の周溝で削平されると同時に上部も部分的に破壊されている。壺棺の主軸はN88°Eで、台地の尾根線に平行し、接口式には同形同大の大形甕を合わ

せて水平に置かれているが粘土の目貼りはされていない。時期は弥生中期前半である。

遺物 (第61図、図版74-(1)・(2))

上壺は、器高 83.6cm、口径 61.8cm、胴最大径 60.8cm、底径 10.0cm の大形壺形土器。口縁部は内側が大きく張り出して高くなる「T」字形で、両先端は内側が丸く、外側を角形に作っている。肩部は口縁上端から 15cm のところでわずかにふくらみ、中央よりやや下に断面三角形の細い凸帯一本をめぐらす。凸帯から下は急激に細くなり小さな底部に続く。粘土は 5cm から 9cm 幅のものを積み上げているが縫目部の詳細は不明。胎土に石英・長石・金雲母を含み、褐色の良好な焼成に仕上げている。

下壺は、器高 83.8cm、口径 63.8cm、胴最大径 62.6cm、底径 10.8cm の大形壺形土器。口縁部は内側補強されて大きく張り出し高くなる「T」字形で、両先端は内側が太く丸く、外側は小さく角張った作りになっている。肩部はほとんどふくらまず、最大径はほぼ最上位にある。肩部の中央には断面三角形の張り付け凸帯が一本めぐり、このあたりから急に胴が細くなつて小さな平底に続く。粘土の幅は 10cm から 12cm のものを積み上げているようだが、縫目の詳細は不明。胎土に石英粒を含み、黄褐色の良好な焼成で仕上げている。

58号壺形土器

遺構 (第40図、図版42-(1)・(2))

E-13区の北西側にある小児壺棺墓。58号の墓坑は壺に比較すると大きなもので、長さ 2.35m、幅 1.5m の隅丸長方形の三段式の壺穴である。壺棺は西側のコーナーに奥行 43cm の横穴を掘って、中形の下壺の半分を挿入し、上壺として小形壺を接口式に合わせている。合わせ目には多くの青色粘土で目貼りされ保存が割合によかった。墓坑の深さは一段目が 0.68m、二段目が 1.0m、三段目になると現地山面から 1.34m となっている。壺棺の主軸は N49°E となり、低い方の斜面に向かって挿入されている。壺棺の傾斜は 3° となり水平に近く、下壺には 4 才ぐらいの幼年の頭蓋骨と脚部の骨が残っていたがこれによると頭部を奥に入れて屈葬したらしく小形の上壺は蓋の役目しかはたしていない。時期は中期前半である。

遺物 (第62図、図版74-(3)・(4))

上壺は、器高 44.8cm、口径 34.5cm、胴最大径 32.2cm、底径 8.3cm の壺形土器。口縁部は外側が少し高くなる逆「L」字形で、上面がわずかにくぼんで内側に三角形状に突出している。口縁下には断面三角形凸帯を一本めぐらし、これ以上をコヨナダ仕上げしている。肩部はほとんどふくらまないで、中央よりやや上で細くなり始めて底部よりやや上で細くなつてしまい、外観は上げ底が厚い底部という感がある。粘土の幅は 3cm から 6cm のものを積み上げているが縫目の詳細は不明。胎土にやや粗い石英と長石を含み、一部黄褐色や赤褐色の焼成である。

下壺は、器高 73.2cm、口径 44.0cm、胴最大径 56.4cm、底径 11.0cm の中形壺形土器。口縁部は外側が高くなる逆「L」字形であるが、上面の平坦部がわずかにくぼんで内側に大きく三

角形に突出するもので、逆「L」字形口縁でも古いタイプである。肩部は上半でふくらみ、中央よりやや上に断面三角形凸帯を一本めぐらし、これ以下は急に細くなつて上げ底ぎみの底部に続く。胎土に石英・長石を含み、外面は赤褐色、内面は黒色の焼成となつてゐる。

59号壺棺墓

造 構 (第41・70図、図版43-(1)・(2), 44-(1)・(2))

E-13区に位置する接口式成人用壺棺である。中世墓である6号土塙墓に北側の一部が切られていた。墓塙は台地斜面に沿つて掘られている。墓塙の形態は、隅丸長方形を呈し、三段掘りである。墓塙西側には横穴が掘り込まれている。規模は、長軸で2.35m、短軸で1.90mを測り、7号壺棺墓の次に大きな墓塙を持つ。主軸方位はS78°Eを示し、埋葬傾斜角度はほぼ水平で-1°である。粘土の目貼りは施していない。人骨は頭部が破損していたが、かなり遺存していた。また被葬者の右前腕にはゴホウラ製の貝輪を着装しており、被葬者は成年の男性であった。

造 物 (第62図、図版75-(1)・(2))

上蓋は、内側に突出する口縁部を有し、平坦面は外傾する。頸部は若干内傾する。肩部最大径は上半部にあり、中央部には断面三角形凸帯を貼り付けている。底部は上げ底を呈する。胎土・焼成とも良好で、色調は赤褐色を呈する。器盤は風化が著しい。調整は全てナデによる。

下蓋は、内側に突出する口縁部の平坦面がほぼ水平を呈し、頸部は直立する。最大径は頸部直下にあり、胴中央部には、三角突帯を貼り付けている。底部は若干上げ底を呈する。胎土は良好で、焼成は不良。色調は黄褐色を呈し、風化が著しい。

60号壺棺墓

造 構 (第42・71図、図版45-(1)・(2), 46-(1)・(2))

E-13区の中央付近にある成人用壺棺墓。墓塙は、長さ1.74m、最大幅1.54m、深さ1.0mの不整の長方形窪穴で、最大幅のある短辺に奥行き0.78mの横穴を掘っている。横穴には下蓋の大半が掉入され、同形同大の上蓋を接口式に合わせて、青色粘土で目貼りしている。

壺棺の主軸はS83°Eの方向で、尾根線に平行して、傾斜は-5°に埋置してある。壺棺の保存が良かったために、棺内には残りの良い老年男性の人骨があった。頭部を下蓋の央の位置にし手足を屈曲しているが、腰部から下は上蓋にある。屈曲の形態は両手を肘から曲げて、手首を肩の位置に持つていて、両足も膝から曲げて膝を立て両足を広げている。時期は中期前半である。

造 物 (第62図、図版75-(3)・(4))

上蓋は、器高87.6cm、口径64.5cm、胴最大径62.6cm、底径11.6cmの大形壺形土器。口縁部は内側が大きく張り出し高くなる「T」字形で、両先端は内側が丸味があり、外側は角ばっている。肩部はほとんどふくらまず、中位よりやや上に断面三角形の貼り付け凸帯一本をめぐらし

ている。腹部下半は底部近くでくびれるように平底に続く。器面は全面ヨコナデ調整で、胎土には石英粒と雲母を含み、黄褐色の良好な焼成となっている。

下窓は、器高85.8cm、口径61.0cm、胴最大径61.0cm、底径11.7cmの大形窓形土器。口縁部は上面が水平でわずかにくぼみ、内側は厚くて大きく張り出し、外側は小さく張り出す「T」字形をしている。腹部はほとんどふくらまず、中位に断面三角形の貼り付け凸帯一本をめぐらし上げ底の小さい底部となる。口縁部付近と凸帯はヨコナデ調整、他はナデ仕上げをしている。胎土には細かい石英・長石・雲母を若干含み、下半は茶褐色、上半は黄褐色を主体とする焼成で仕上がっている。

61号窓棺墓

造 構（第34図、図版47-（1）・（2））

D-13区で検出した高杯の脚部を打ち欠いて杯部の上窓と日常什器の窓形土器の接口式小児用窓棺である。合地斜面に沿ってほぼ平行に掘り込んでいる。窓棺形態は不整形で墓塗の西側には横穴を掘り下窓を挿入している。規模は、長軸で0.8m、短軸で0.8mを測る。主軸方位はS 80°Eを示し、窓棺埋葬傾斜角度は+28°である。粘土の目詰りおよび人骨はない。

造 物（第64図、図版76-（1）・（2））

上窓である高杯は脚部を打ち欠いたものである。鋸先口縁を有し、平坦面は若干下り気味である。口縁直下には断面三角凸帯を貼り付けている。器体内面及び口縁平坦面には丹塗り研磨、外面は研磨している。さらに口縁平坦面には暗文を施している。

下窓は逆「L」字状に外反するが内側に若干の傾斜を有す。頸部には三角凸帯を貼り付けており、最大径は頸部上半にある。胎土・焼成とも良く、色調は明るい褐色を呈す。なお頸部には煤の付着が見られ、日常什器の転用である。

62号窓棺墓

造 構（第43図）

C-13区の西端でDの線に接した位置にある成人用窓棺。墓塗は長径1.15m、短径0.85m、深さ0.42mの梢円形の堅穴に、床面の半分から北壁に横穴を掘ったものである。横穴は北壁から奥行75cmあり、下窓の全部が挿入されている。窓棺は、接口式窓棺で、主軸S 3°Wの方向にとり斜面に向って横穴を掘った様になり、傾斜角度+20°と上窓が高く埋置されている。合わせ口にはわずかに目詰り粘土が残っていた。棺内には上窓に頭蓋骨片と下窓脚部骨が残っており、これから成年男性が頭部を上窓の方にして屈葬されていたことがわかる。弥生中期後半のものである。

造 物（第10図、図版76-（3）・（4））

上窓は、器高66.4cm、口径44.5cm、胴最大径48.8cm、底径11.0cmの中形窓形土器。口縁部は上面に丸味がありて外側が少し上がる逆「L」字形で、先端に丸味があって、下面がわずかに

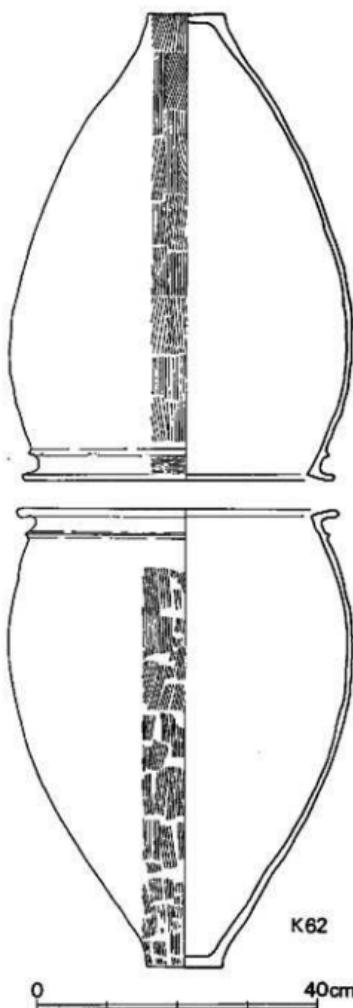
内湾している。口縁部の上面は横にハケ。他はヨコナデ仕上げである。口縁下には断面三角の凸帯一本がめぐり、ヨコナア仕上げされている。胴部は上半部で割合ふくらみ、中位から下半で細くなつて多少長脚となる。胴部は幅5cmから8cmの粘土が積み上げられているが跡目の詳細は不明で、器面は上半が上から下に、下半が下から上にハケでナデされている。胴部中位には一次的に火を受けたと思われる黒斑がある。胎土には石英・長石・雲母を含み、黄褐色の焼成で仕上がっている。

下図は、器高65.5cm、口径45.9cm、胴最大径49.0cm、底径10.5cmの中形甕形土器。口縁部は「く」字形に近く外反して上がるが、内側に三角形の突出があるので逆「L」字形といえるものである。口縁下には断面三角形凸帯一本がめぐり、ヨコナデ仕上げされている。胴部は中位よりやや上でふくらみ、中位から下半で細くなつて平底に続く。胴部は幅3cmから6cmの粘土が積み上げられ、器面は継にハケ仕上げされているが、中位付近には煤が付着している。胎土は長石・石英粒が含まれ、やや赤みがかつた褐色の焼成で仕上がっている。

63号甕形土器

追 構 (第43図、図版48-(1)・(2), 49-(1))

C-13区の西側で発見された小児用甕形土器。基盤は、現状では長さ1.15m、幅0.7m、深さ0.7mの不整長方形の竪穴となっているが、木柵は長さ1.04m、東幅0.6m、西幅0.7mの隅丸長方形のものが横穴の部分などが壊れて現状のものになったのであろう。横穴は西壁に馬蹄状で奥行30cmであるが、復原すると奥行



第10図 63号甕形土器基盤図 (1/8)

き40cm程になる。壺棺は上壺口縁部を打ち欠き、下壺底部を打ち欠く接口式で、下壺の底部には小形壺形土器が合わせてある。粘土目貼りはない。主軸の方向はN74°Eで台地の尾根線と平行である。傾斜角度は-2°と上壺がわずかに低く、頭蓋骨片が横穴に挿入されている下壺にあつた。時期は弥生中期後半である。

遺物(第63図、図版77-(1)・(2))

上壺は口縁部が打ち欠かれた現壺高33.8cm、胴最大径38.6cm、底径10.6cmの壺形土器。口縁部がないが、朝顔形に開く頭部に菱形口縁の壺であったろうと思われる。頭部は上半部でふくらみ肩部を形成し、下向きの断面梯形の凸帶二本をめぐらす。胴部は下の凸帶から急激に細くなつて底部にいたり壺形土器の特徴を出している。胎土には石英・長石を含み、淡い赤褐色の良好な焼成で仕上げている。

下壺は、器高54.0cm、口径28.0cm、胴最大径45.5cm、底径16.5cmの樽状壺形土器。口縁部は反りがなくいきなり口唇部となり、4cm下に錐状凸帯を有して口縁部を形成する。胴部は中位で最もふくらみ、上半に錐から等間隔に山形凸帯を二木めぐらして梯形をなす。外面全面が丹塗りであったと思われるが、口縁部と凸帯間に緩に5mm間隔の暗文があり、この部分のみ丹塗研磨として残っている。粘土は幅4cmから7cmのものを積み上げて胎土には細かい石英・長石が少量含まれ、赤褐色の良好な焼成で仕上げている。

蓋は器高5.5cm、口径20.1cm、上端径3.5cmの小形壺形土器。上端の天井部は平坦で、くびれずに少し内寄して口唇部の丸い裾部にいたる。内面は天井部が丸くぼみ、厚さを減じながら口唇部にいたる。口唇部から1.8cmのところに径4mmの外側から穿孔した円孔が2.4cm間隔で各2個対称にある。器面は内外面ともにナデ仕上げである。粘土の接合部は2.5cmから3cm間隔であり、胎土には細かい石英と細かい長石が含まれ、少量ながら玉子殻も含まれている。色調は赤褐色で、良好な焼成となっている。

64号壺棺墓

遺物(第44図、図版49-(2))

C-13区に位置する単槽の小児用壺棺である。37号の成人棺を切っており、37号壺棺に対し180°方向を異にする。墓塚は斜面に沿つて平行である。墓塚の形態は、不整円形を呈し、規模は、径0.6mを測る。主軸方位はS77°Wを示し、壺棺埋葬傾斜角度は+51°である。人骨は遠存しない。

遺物(第64図)

平坦面を持つ口縁部を有し、三角凸帯を有す頸部は内傾する。最大径は頸部上半にあり、底部は若干上げ底を呈する。胎土は石英・長石を含み、焼成は良好。色調は黄褐色を呈す。胴部には若干煤が付着しており、日常什器の転用である。

65号壺棺墓

遺構（第44図、図版50—(1)・(2), 51—(1)・(2)）

F-13区に位置し墓域の西端で検出された接口式小児用壺棺である。墓塙は台地斜面にはば直交して掘られており、耕作による削平が著しく壺棺がかなり破壊されている。墓拡形態は不整円形を呈し、二段掘りである。規模は、長軸で1.85m、短軸1.0mを測り、小児棺としては規模が大きい。主軸方位はN20°Wを示し、壺棺の埋葬傾斜角度は±0°である。接口部の一部に粘土の目貼りを確認した。人骨は遺存状態が悪く骨片と歯のみを検出。下窓を頭位としたと考えられる。被葬者は性別は不明であるが、幼年である。なお棺内からゴホウラ製貝輪片が出土し、さらに壺棺の接口下部に長辺20cm、幅7cm、深さ7cm程の長方形の掘り込みの中からゴホウラ製貝輪を棺外剥落していた。

遺物（第64図、図版77—(3)・(4)）

上窓は平坦な口縁部を有し、口縁直下には断面三角凸帯を貼り付けており、頸部は内傾する。最大径は胸部上半にあり、底部は若干上げ底である。調整は全面にハケが観察できるが風化が著しく不明瞭である。胎土は石英・長石・雲母を含み焼成とも良好である。色調は茶褐色を呈する。副部上半には煤が付着している。

下窓は最大径を胸部上半に持つ。内傾する口縁部を有し、内側にも若干突出する。頸部は内傾し、三角凸帯を貼り付けている。底部は上げ底を呈し、胎土・焼成とも上窓と同様である。色調は赤褐色を呈する。頸部から肩上半部にかけて煤の付着を見る。上・下窓とも口常什器の転用である。

66号壺棺墓

遺構（第45図、図版52—(1)・(2)）

台地の西端近く、65号壺棺墓の南東側のF13-1区に位置する。墓塙は2m内外の不整円形を呈すが、西側は削平されている。墓拡の東側に横穴を掘り、下窓を納める成人用の接口式壺棺で、接口部には目貼り粘土が覆う。主軸は東西にとる。墓塙内は孟宗竹による搅乱が著しく、壺棺の上半分は大部分が欠損していたが、かろうじて下窓に頭骨片が残存していた。被葬者は成年の男性である。

遺物（第63図、図版78—(1)・(2)）

上窓は外に下がる。平坦部を有す「T」字形口縁部で、副上半部は若干張る程度である。胸中央部に二条の三角凸帯がめぐり、肩下半は急に窄まり、あげ底の底部へ移行する。色調は赤褐色を呈す。

下窓も上窓と同様外下りの「T」字形口縁であるが、口縁直下に胸部最大径を有す。そこから徐々に窄まる。胸中央部に断面三角形の貼り付け凸帯がある。口縁部は横位のハケ調整が行なわれる。赤褐色を呈し、器面上半分に黒斑が目立つ。

67号墓

遺構(第46図、図版53-(1))

C-12区の西側にあり、墓塚が一部切り合った50号墓より古い成人用壺棺である。また近世墓の掘方が墓塚内にすっぽりはいり、墓塚はほど破壊されていないが、上蓋の半分以上を破壊している。墓塚は不整脚丸長方形の竪穴で、長さ1.73m、南幅1.27m、北幅1.45m、深さ0.9mの大きさである。南側の短辺に奥行き1.1mの下室全体が挿入される横穴が掘られ、竪穴の床面も直接横穴に続き、最も深いところは現地山面から1.3mに達している。壺棺は上蓋が下室に挿入され粘土目貼りされたもので、現状では上蓋の口縁部が打ち欠かれたようになっていたが、下室から上蓋の口縁部が発見されたことから、埋葬後か近世墓の搅乱によって欠けて下室内に転落したものと思われる。主軸の方向はN17°Eで、尾根線から斜面の下に向って挿入されている。傾斜角度は+29°と上蓋が高くなっているので、人骨は残っていないかったが、頭位は上窓の方にあったものと思われる。時期は弥生中期後半である。

遺物(第63図、図版78-(3)・(4))

上蓋は、器高59.7cm、口径36.4cm、胴最大径50.0cm、底径10.7cmの中形変形土器。口縁部は外反する「く」字形で、口唇部は角張っている。胴部はかなりふくらんで、最大径は中位よりやや上にあり、この部分に断面三角形の貼り付け凸帯一本をめぐらす。底部は少し上げ底の薄いものとなっている。口縁部と凸帯はヨコナデ仕上げ、胴部は継にハケ目調整されている。胎土には長石粒が含まれているが、粒子が細かく、黄褐色の良好な焼成で仕上げている。

下室は、器高92.7cm、口径57.3cm、胴最大径69.7cm、底径13.5cmの大形変形土器。口縁部は内側に著しく突出しているが、胴部との角度からいって逆「し」字形の範囲にはいるもので、多少補強具合が違うだけのものである。口縁下には三角形凸帯一本をめぐらす。これからヨコナデ調整されている。胴部は上半でかなりふくらみ、中位に相接した上向きの断面柳形凸帯二本をめぐらす。底部は薄い上げ底ぎみのものである。粘土は4cmから7cmの幅で接合部があるが接目の詳細は不明。胎土には細かい石英・長石とわずかに金雲母を含み、淡い黄褐色の焼成で仕上げている。

68号墓

遺構(第47図、図版53-(2))

F-12区の南東側で発見された小児用壺棺墓。墓塚は西側が破壊されているが、長方形の竪穴であったと思われる。現状では長さ1.8m、幅1.13m、深さ0.3mの竪穴で、さらに床面の半分を0.45m掘り下げ、東壁には奥行き0.4mの横穴を掘って下室を半分挿入している。壺棺は中形の下室に小型の上室を接口式に合わせて、上室を低く-8°に傾斜させて埋置している。下室から4才程度の歯と頭蓋骨片が発見されたので、頭部が高くなっている下室の位置に埋葬されたことがわかる。主軸の方向はN88°Wで台地の尾根線に平行しているが、舌状台地の先端部

になるので、斜面に向って挿入したかっこうになっている。時期は弥生中期前半である。

遺物（第65図、図版79-（1）・（2））

上壺は、器高55.6cm、口径41.5cm、胴最大径43.7cm、底径9.1cmの大形壺形土器。口縁部は口唇部が厚くて短かい逆「L」字形で、内側にも少し三角形の突出がある。口縁の下には貼り付け三角形凸帯が一本めぐらしている。胴部は中位から上半で少しふくらみ丸味のあるものとなっている。底部は厚味のある上げ底で古い様相を残している。脚部は幅2.5cmから4cmで粘土の接合部があるが縫目は不明。口縁部と凸帯はヨコナデ輪郭で、胴部は上半が上から下に、下半が下から上にハケ目調整されている。胎土にはやや粗い石英と細かい長石・金雲母を若干含み、外面を赤褐色、内面を黒褐色の焼成で仕上げている。

下壺は、器高72.4cm、口径44.6cm、胴最大径54.6cm、底径10.4cmの大形壺形土器。口縁部は内側に補強されて大きく突出し、外側の角張った張り出しが小さく、典型的な「T」字形を示す。胴部は中位よりやや上で最大径となってふくらみ、中位よりやや下に小さな三角形凸帯一本をめぐらしている。底部はわずかに上げ底ぎみの厚味のある小さなものである。脚部は幅3cmから5cmの間隔で粘土の接合部が確認されるが、縫目の詳細は不明。

69号壺棺墓

遺構（第48・72図、版図45-（1）・（2））

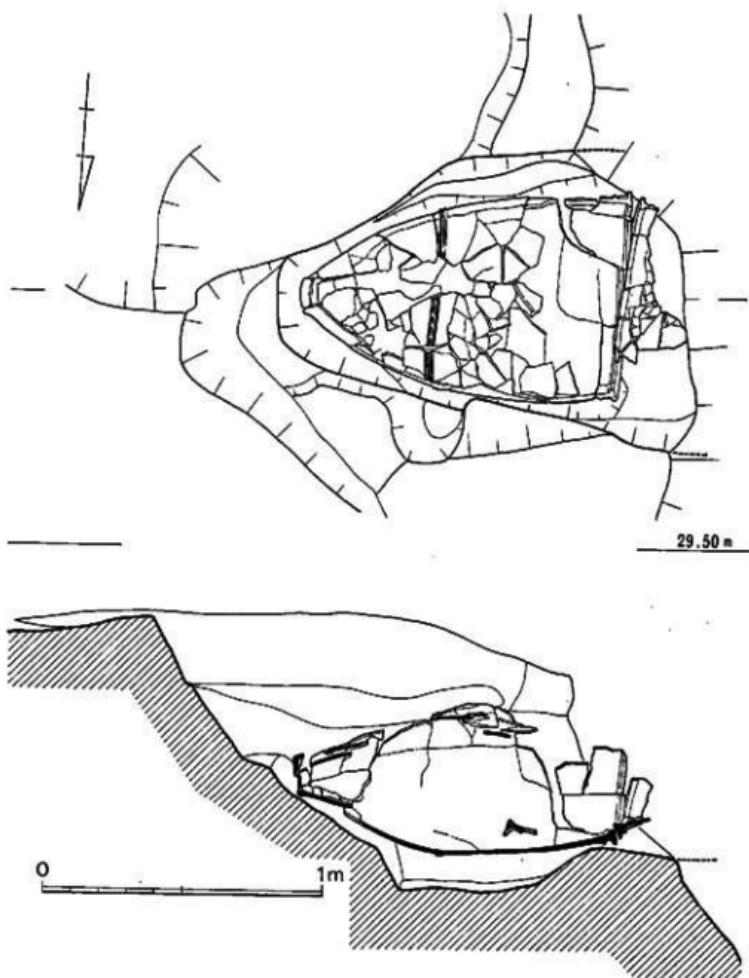
E-13区の北西側にあり、58号壺棺墓に墓塚の一部を切られた成人用壺棺墓。墓塚は、東側の一部を58号壺棺墓によって破壊されているが、復原すると隅丸方形の堅穴である。規模は長さ1.5m、西幅1.46m、東幅1.54m、深さ1.1mの深いもので、さらに壺棺の周囲は0.43mほど張り下げられているので、下層の白色粘土層まで達し、墓塚内の埋土には白色粘土が混入して他と違っていた。横穴は短辺の西藏で奥行き0.8mで、下壺全部が挿入されている。壺棺は、接口式で青色粘土で目貼りされ、傾斜角度は上壺がわずかに低い-3°に埋置されている。壺棺の保存がよかつたため、棺内には人骨がよく保存されていた。人骨は老年の女性で左側両前腕骨が骨折して、癒着していた。頭位は少し高い下壺の奥にあり、上壺には脚部のみがかかるにいた。人骨は尾葬で、右腕は手首が肩に、左前腕骨は腹部の上に置かれ、脚部は膝を合せて立ててあつたらしく、現状では両膝とも右側に倒れていた。壺棺の主軸の方向はN87°Eで、尾根線に平行している。時期は弥生中期前半である。

遺物（第65図、図版79-（3）・（4））

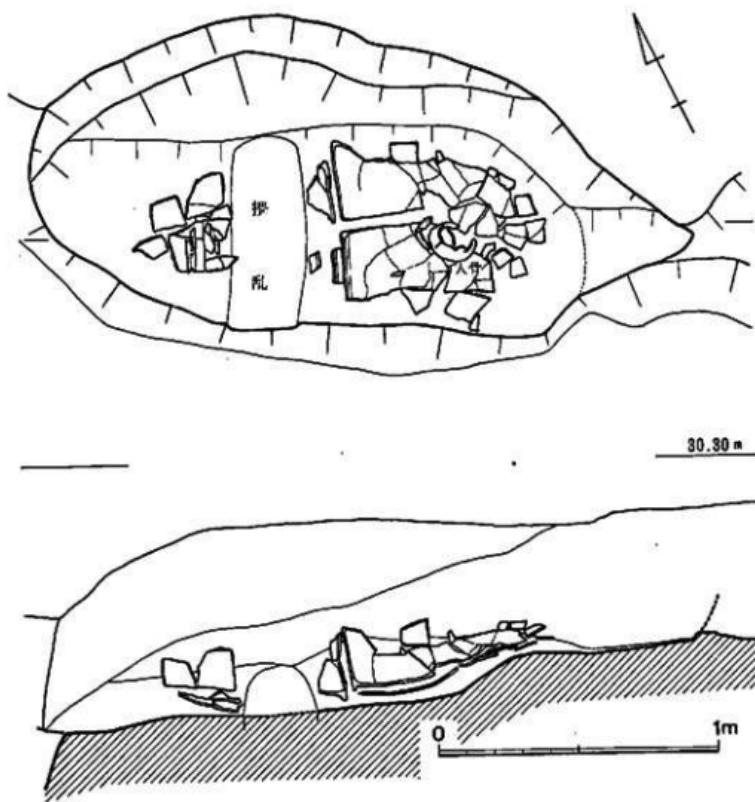
上壺は、器高77.0cm、口径55.4cm、胴最大径55.5cm、底径10.1cmの大形壺形土器。口縁部は内側が高くて長く突出する「T」字形で、上面の平坦部がわずかにくぼむ。胴部はほとんどふくらまず、中位よりやや下に小さな断面三角形の貼り付け凸帯を一本めぐらす。底部は上げ底ぎみの補強された部分がよくわかるものである。脚部は5cmから7cmの幅で粘土の接合部が確認されるが、縫目の詳細は不明。胎土には少ないが粗い石英粒と細かい長石を多く含み、赤褐色

色の良好な焼成で仕上がっている。

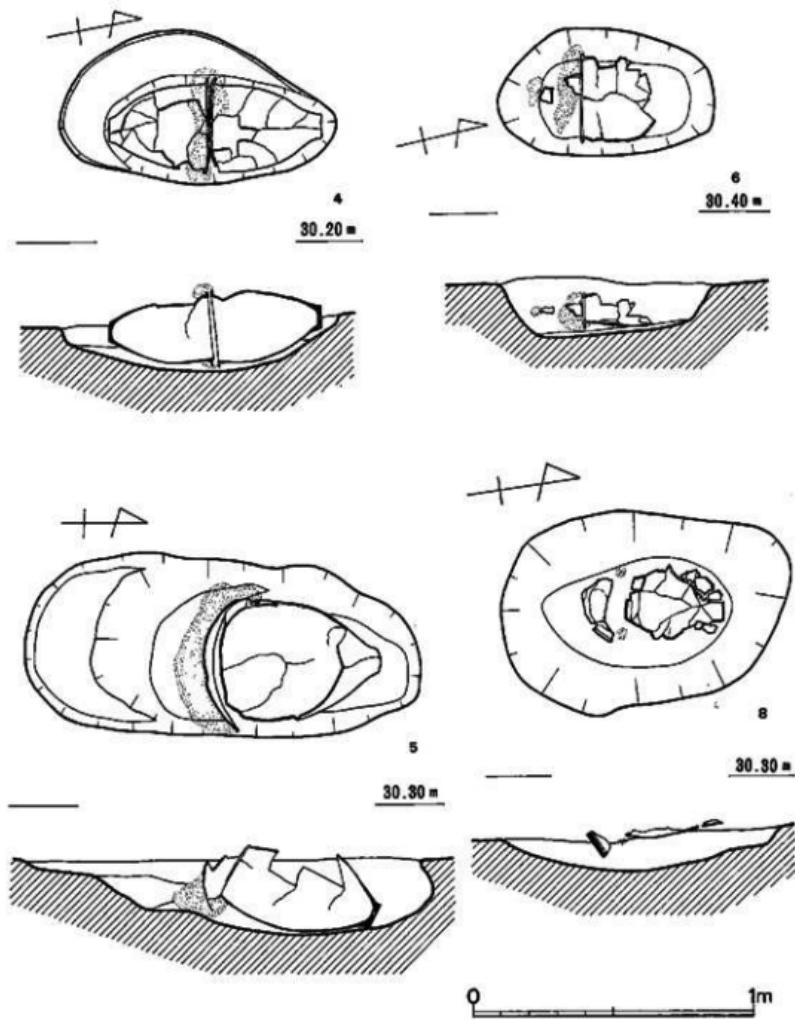
下壺は、器高74.8cm、口径48.3cm、胴最大径53.8cm、底径11.0cmの大形壺棺形土器。口縁部は内側が少し高くて長く突出する「T」字形で上面にふくらみがある。胴部は上半でわずかにふくらみ、中位より下に小さな三角凸帯一本をめぐらしている。底部は上げ底で厚味のあるものである。胴部は5cmから8cmの幅で粘土の接合部が確認され、胎土に比較的細かい石英・長石を含み、黄褐色と赤褐色の焼成に仕上げている。



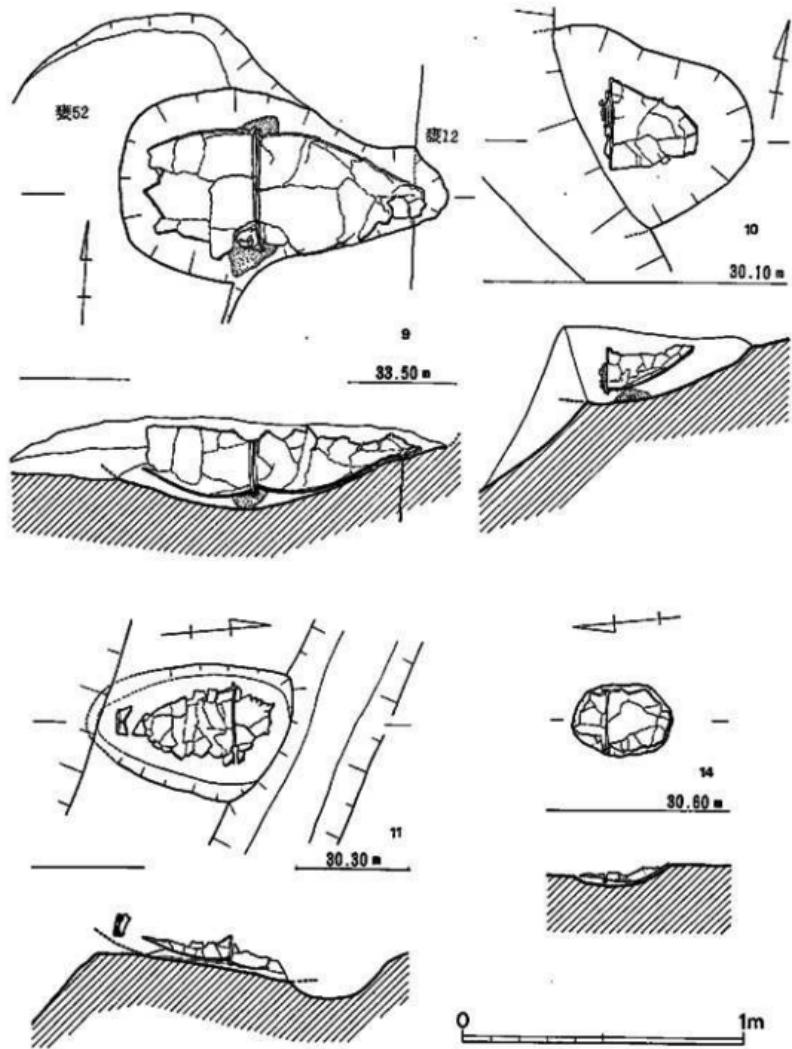
第 11 図 2 号 瓦格嘉實測圖 (1/20)



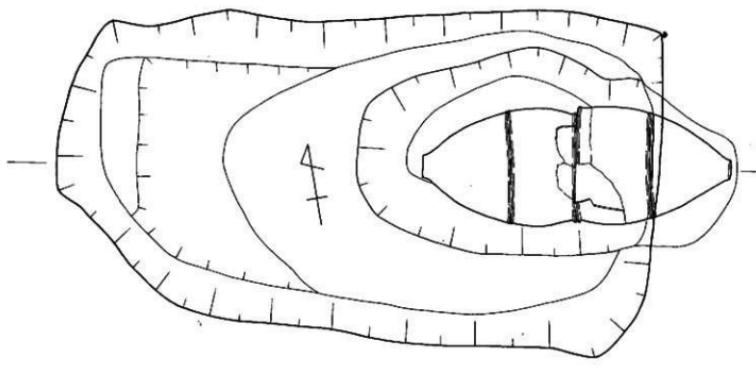
第12图 3号墓椁墓穴测图(1/20)



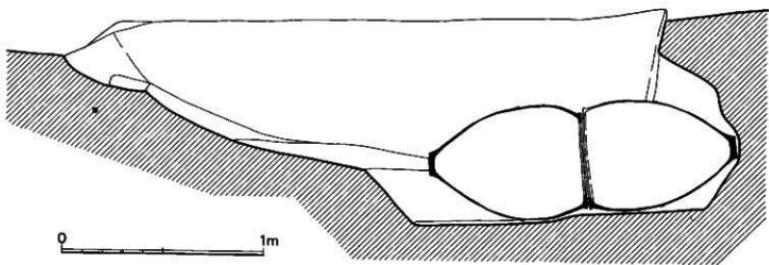
第13図 4・5・6・8号墓構造測図 (1/20)



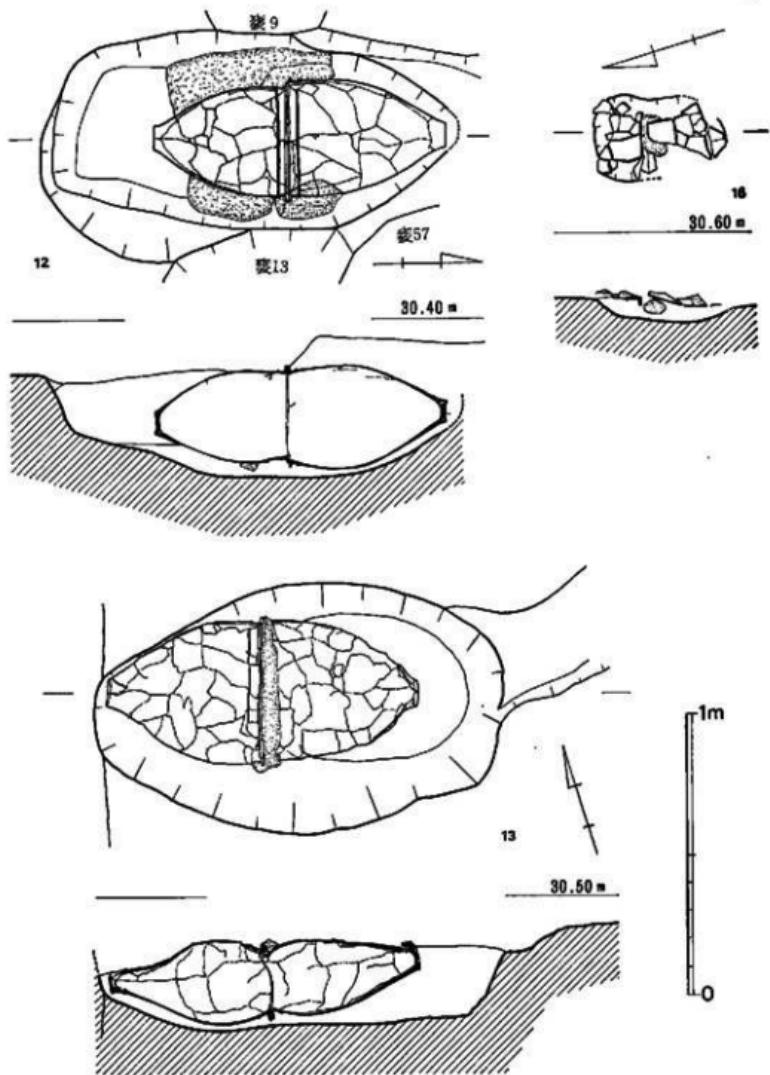
第14図 9・10・11・14号 斧格巖実測図 (1/20)



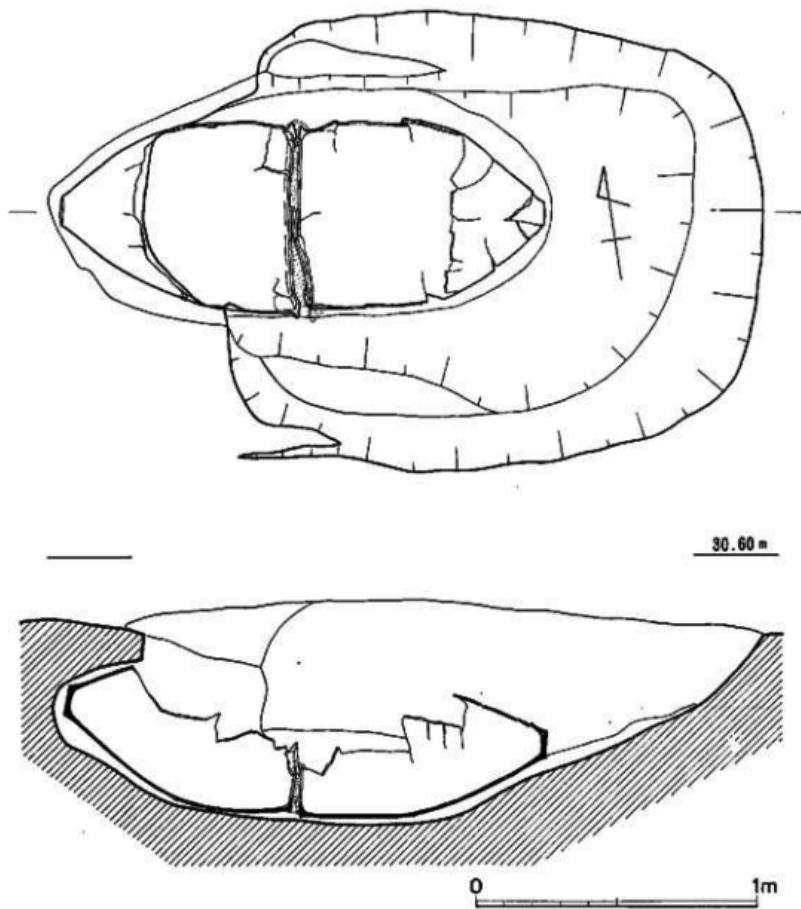
30.50 m



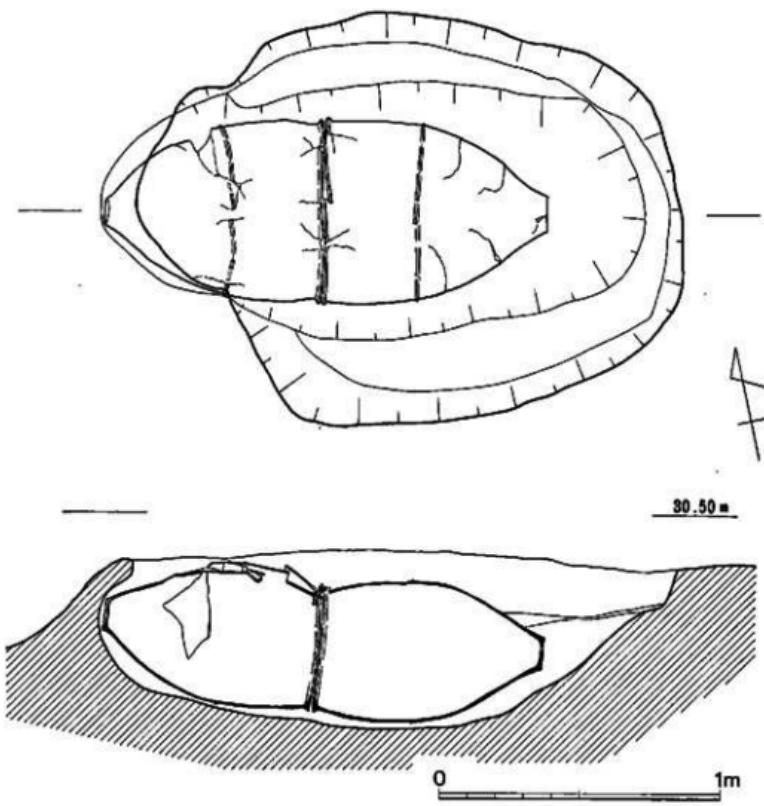
第15圖 7号型陪葬墓剖面図(1/20)



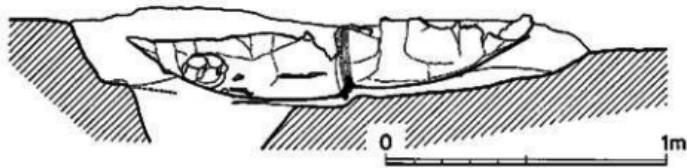
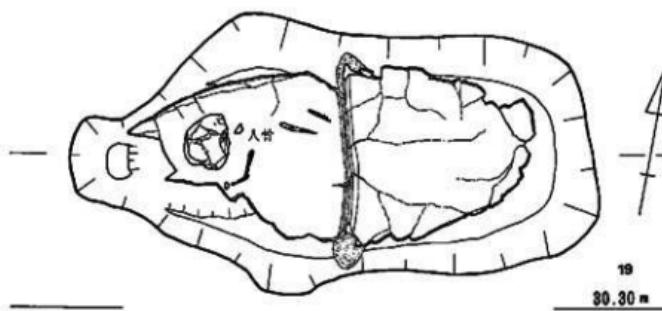
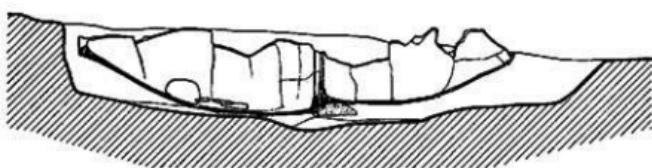
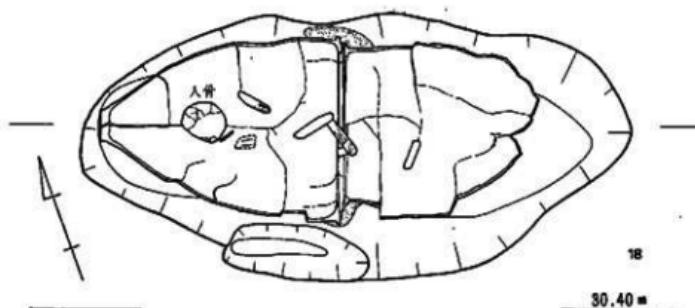
第 16 図 12・13・16 号 施設基実測図 (1/20)



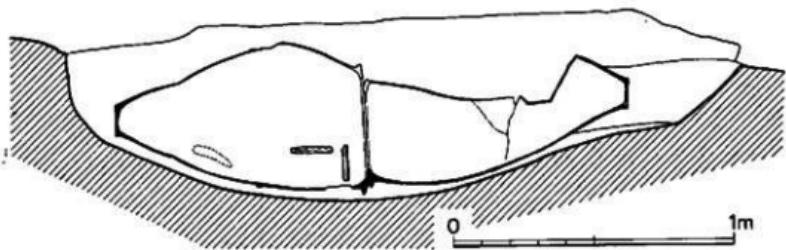
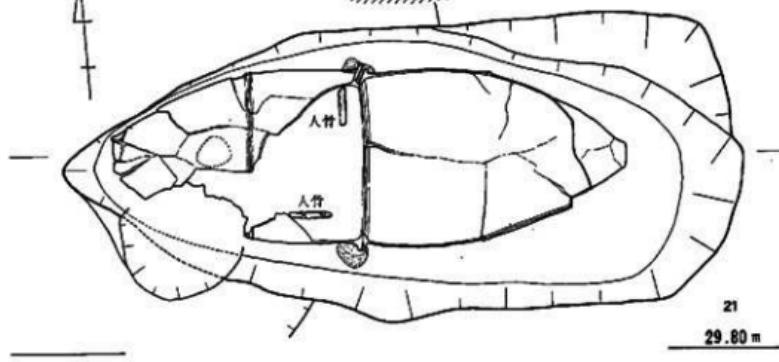
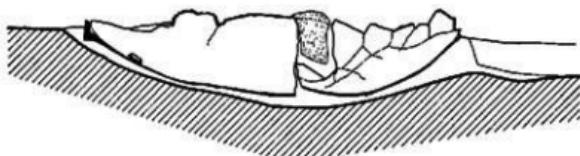
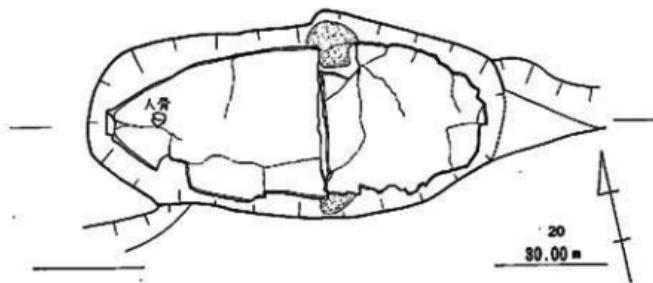
第17圖 15号鐵橋基座測圖 (1/20)



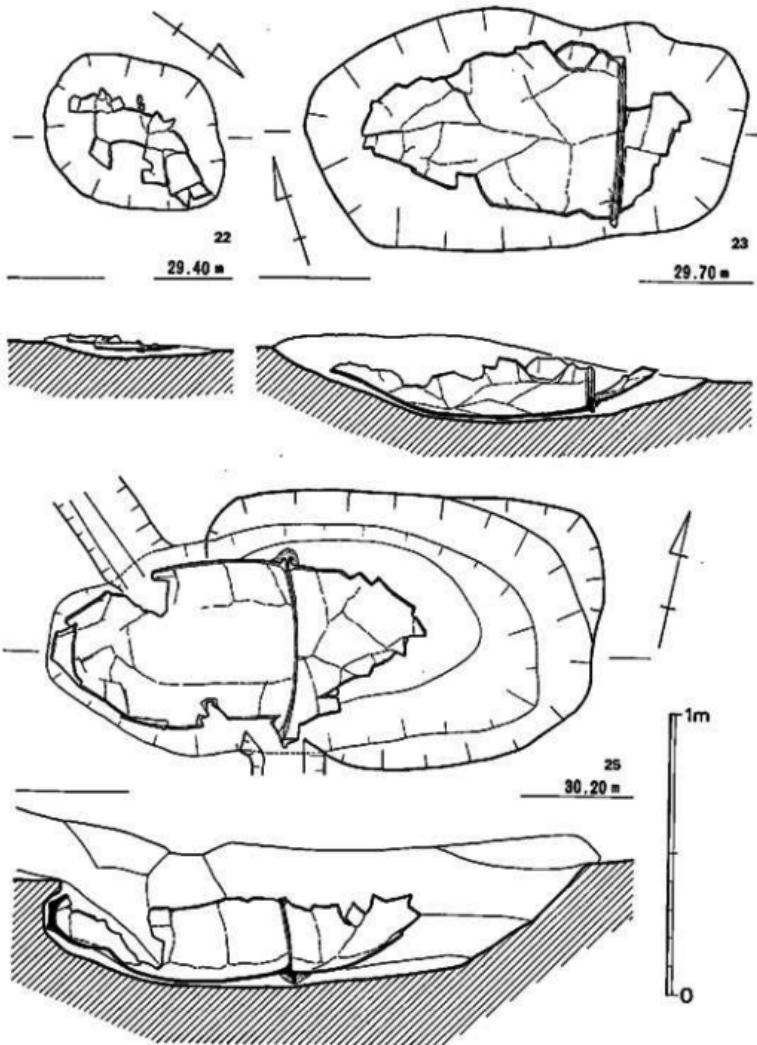
第18圖 17号麥格嘉實測圖 (1/20)



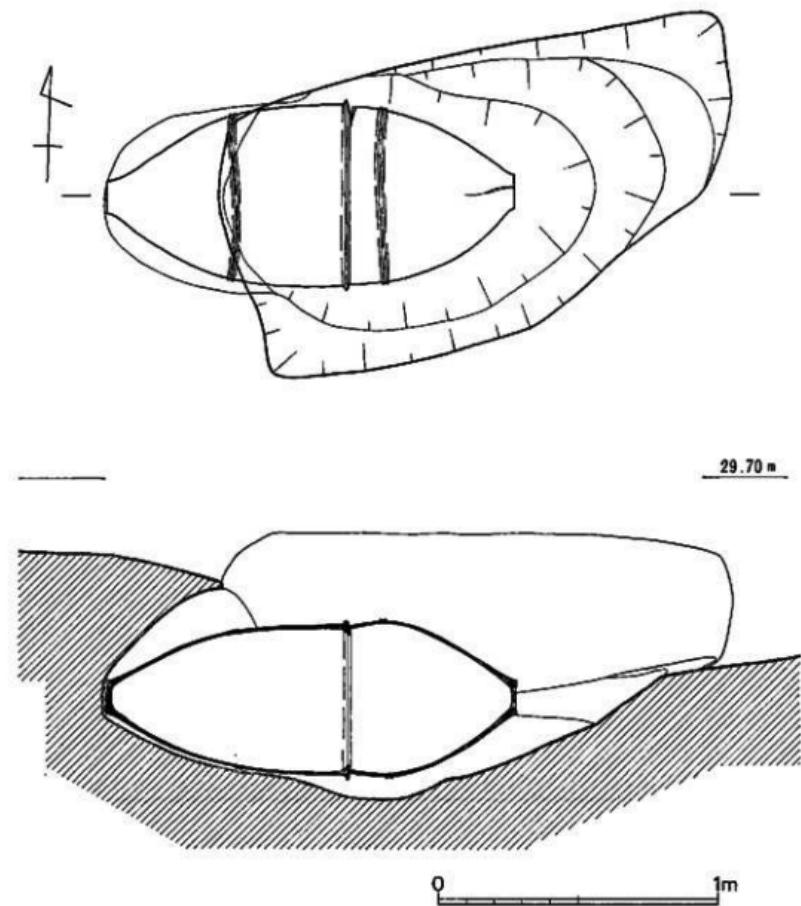
第18図 18・19号要格基実測図(1/20)



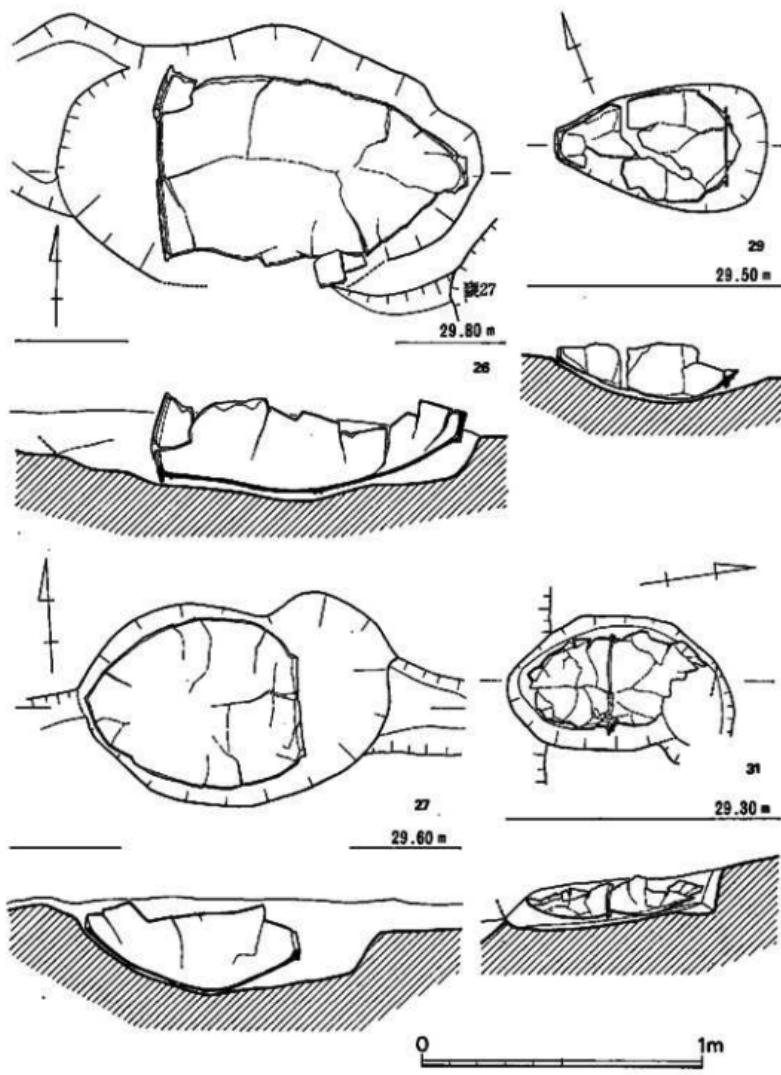
第20图 20·21号墓棺盖突洞图 (1/20)



第21圖 22・23・25號石樁基実測図 (1/20)

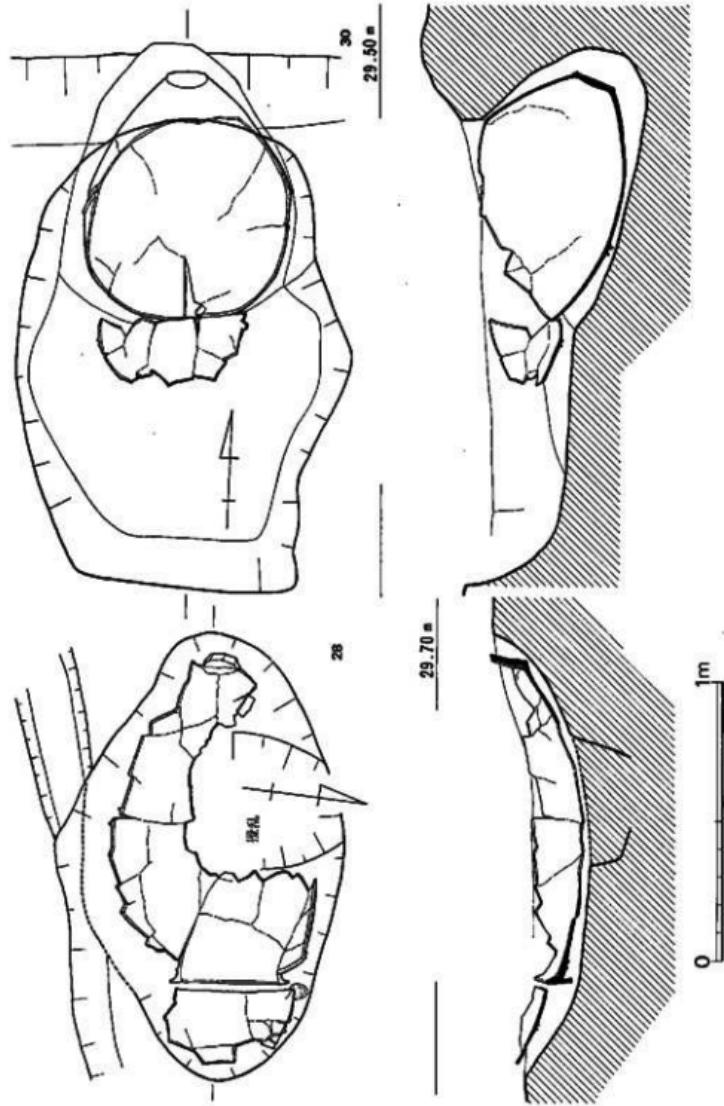


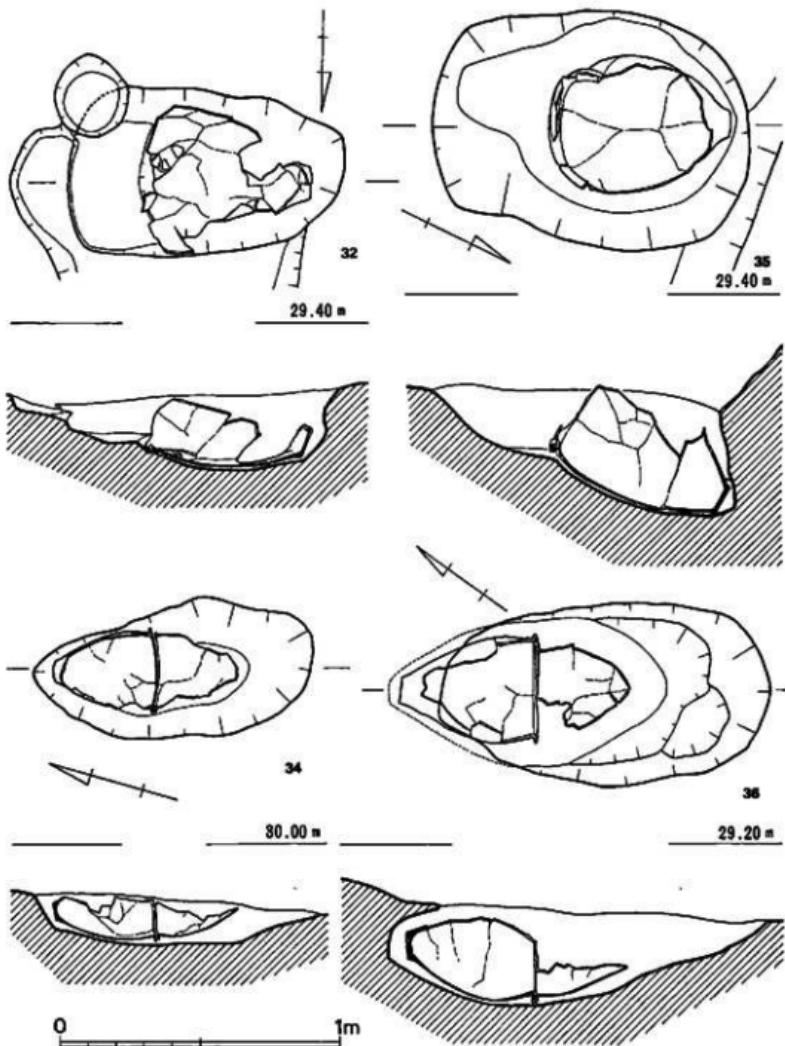
第 22 図 24 号 蔡裕基 施測圖 (1/20)



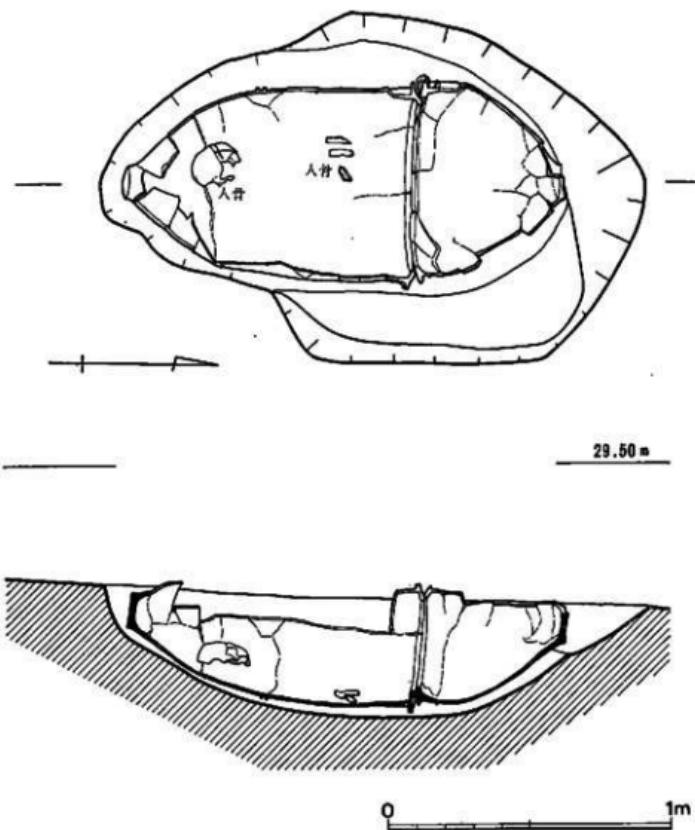
第23図 26・27・29・31号裂隙岩実測図 (1/20)

第24圖 28·30號藥箱蓋實測圖 (1/20)



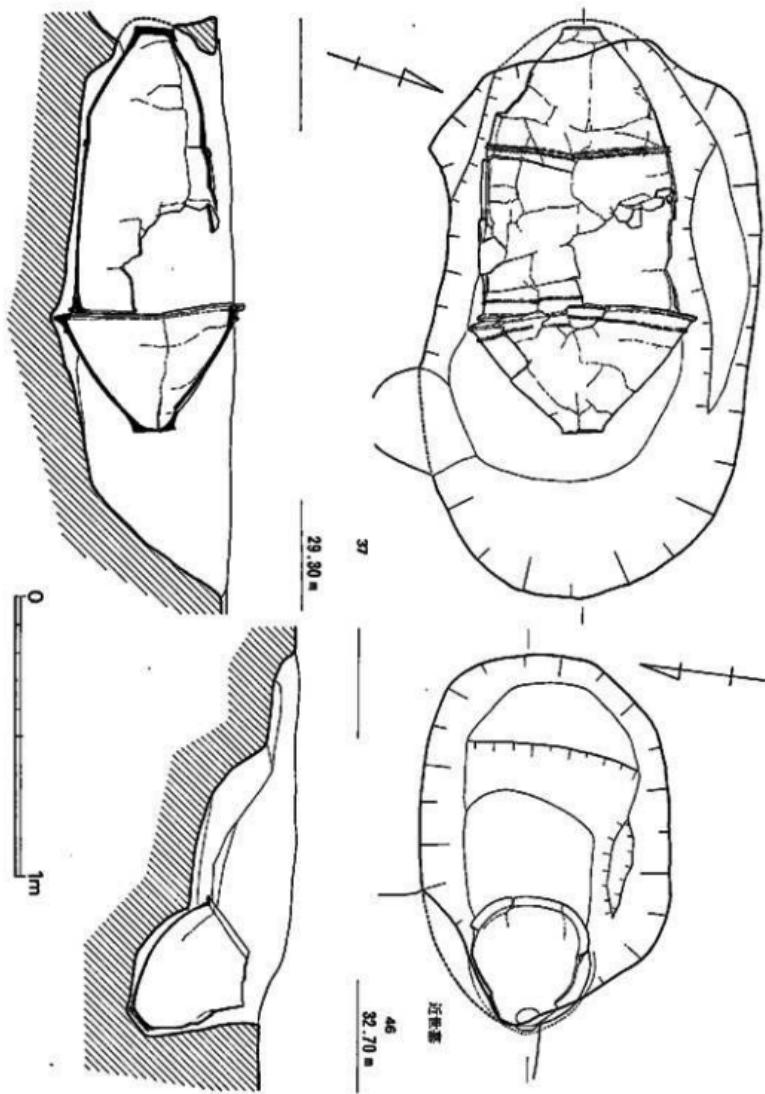


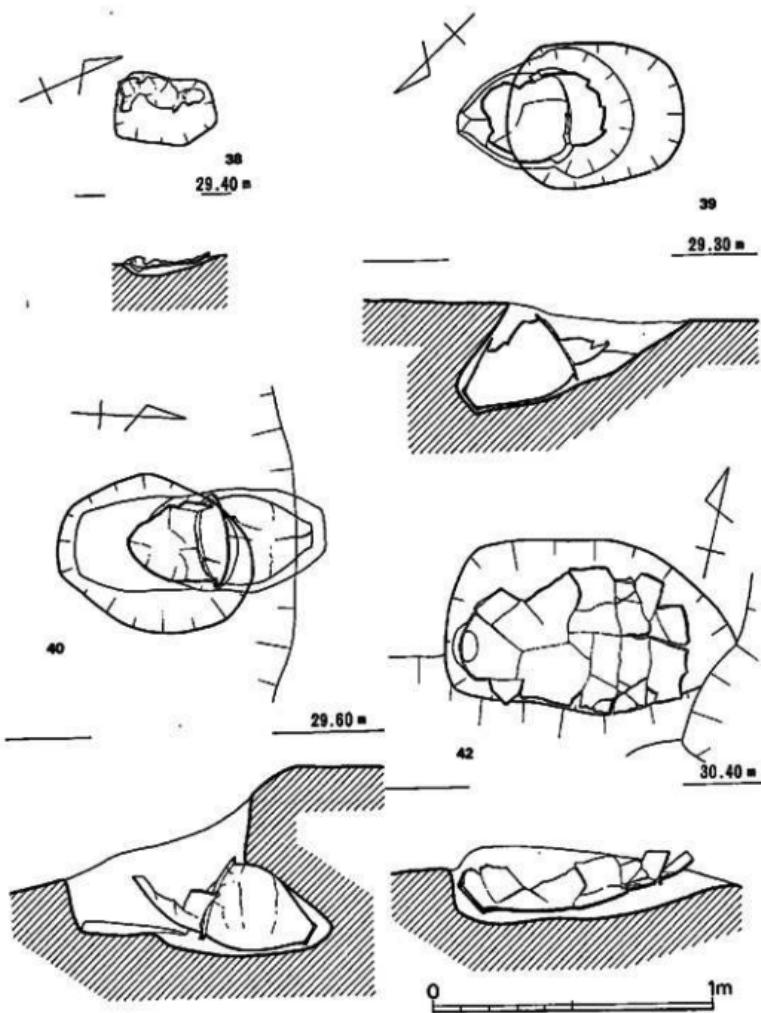
第 25 図 32・34・35・36 号 蛋殼基実測図 (1/20)



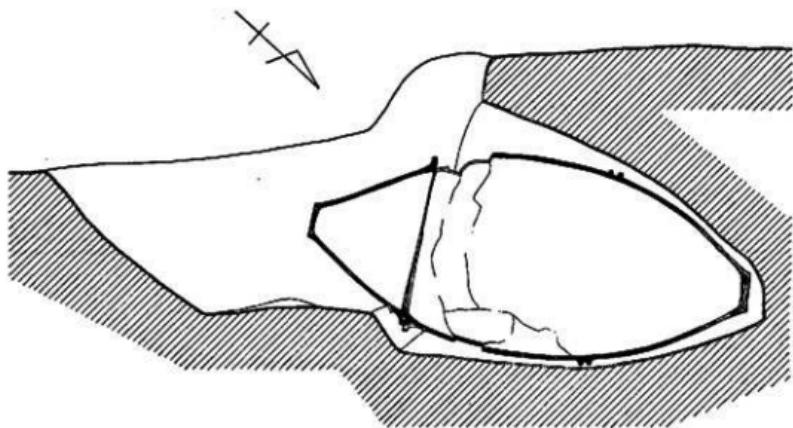
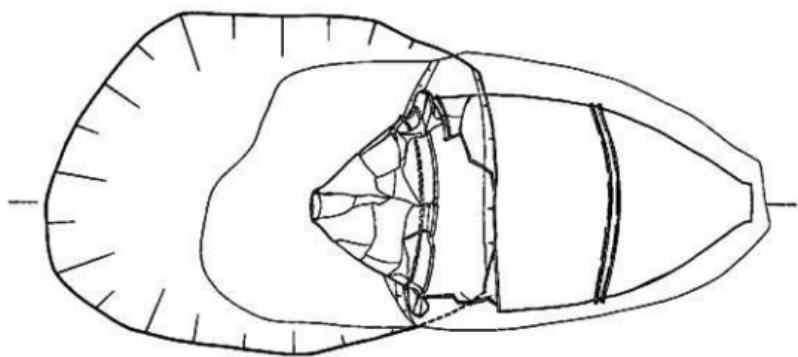
第26図 33号墓格室実測図 (1/20)

第27圖 37・46號連相蓋測圖 (1/20)

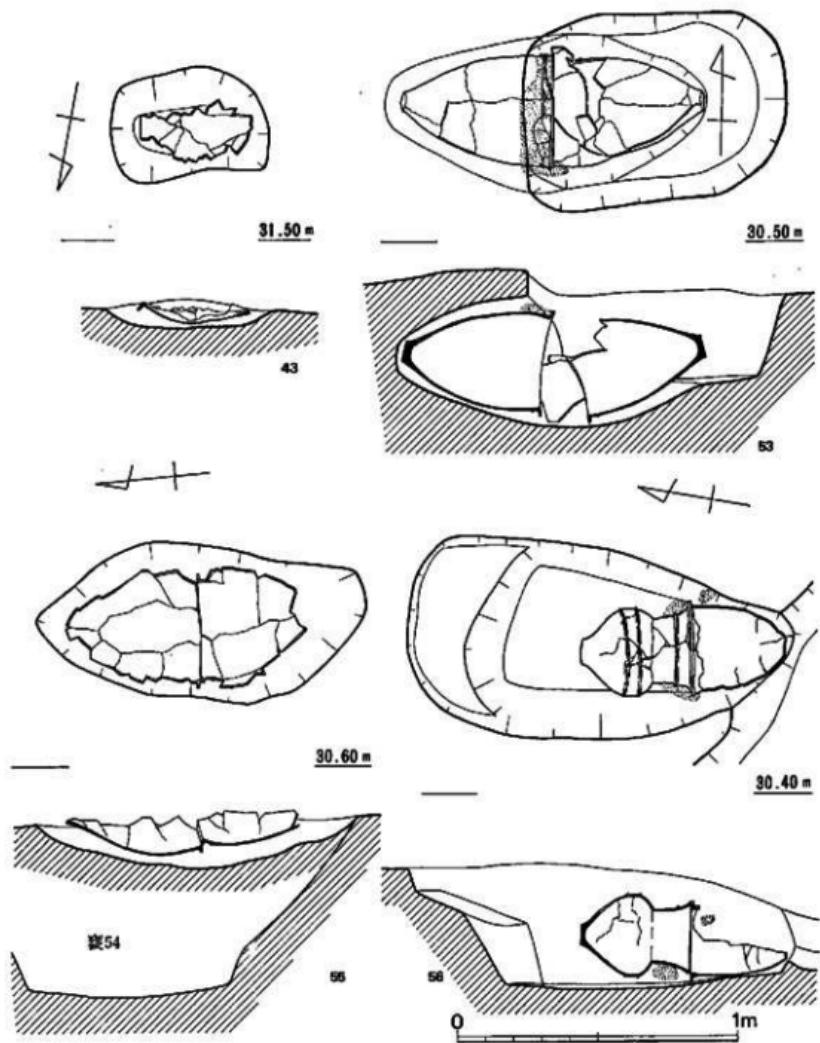




第28圖 38·39·40·42號亮格塞亮測圖 (1/20)

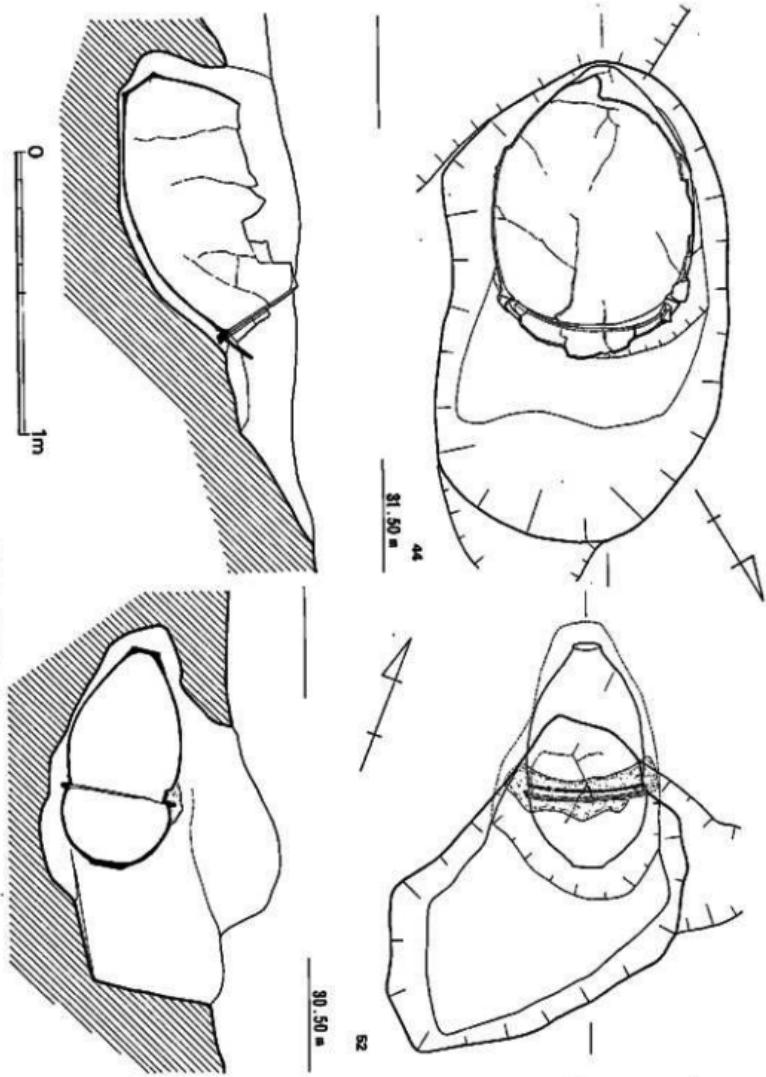


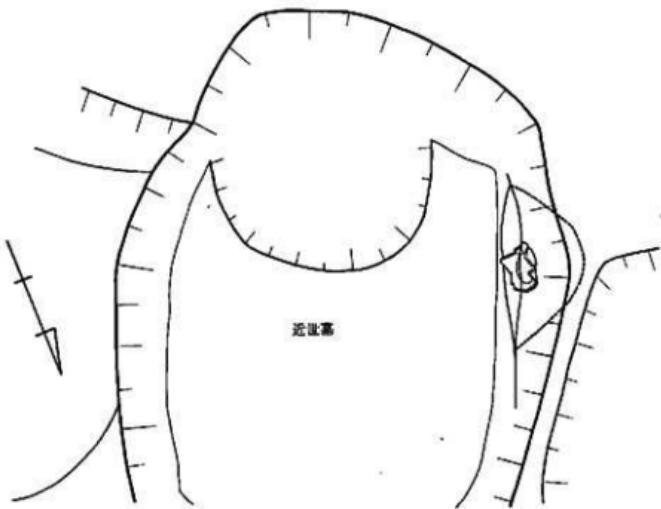
第29圖 41号臺北基尖剖面 (1/20)



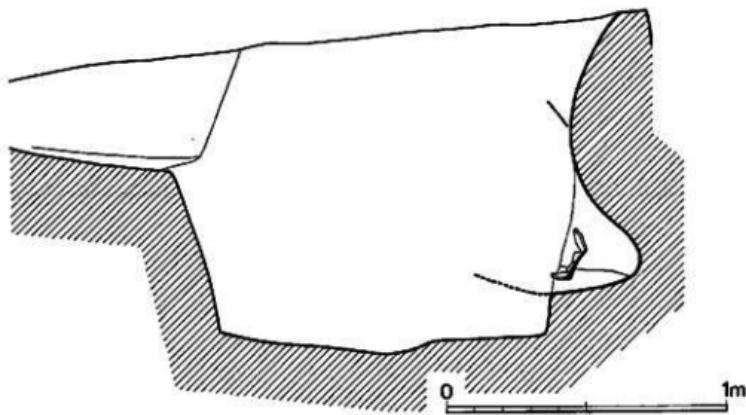
第30図 43・53・55・56号 壱岐基寒湖図(1/20)

图 31 四·三号盗贼墓剖面 (1/20)



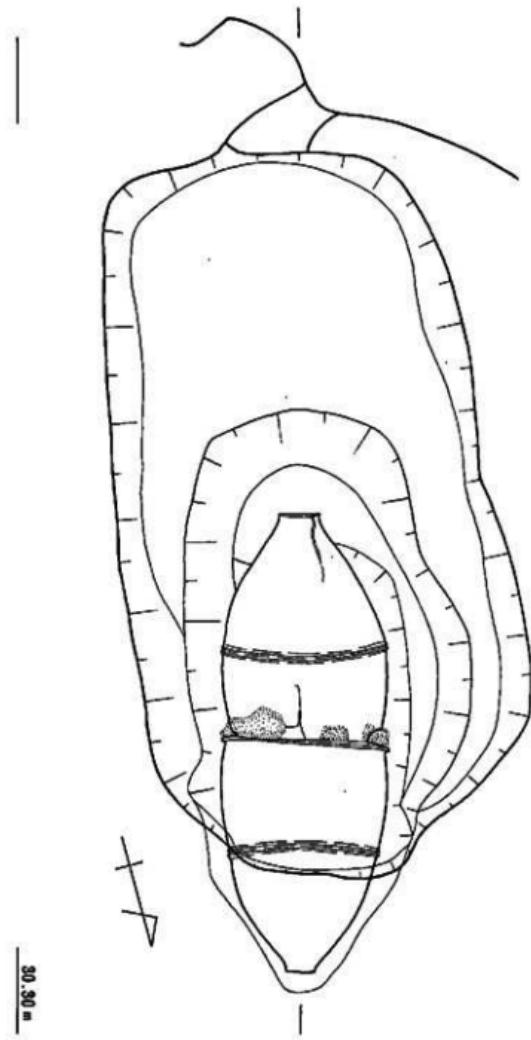
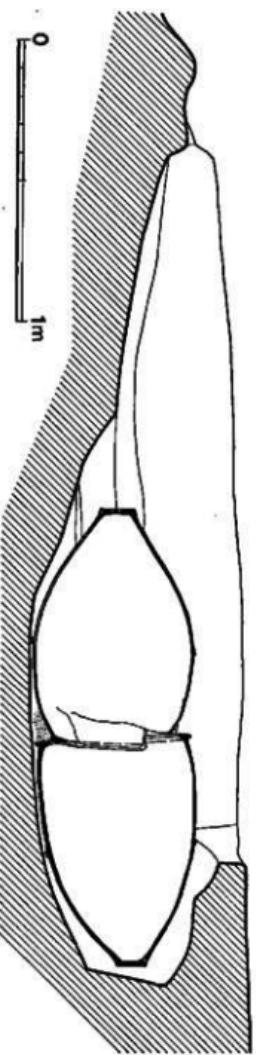


31.00 m

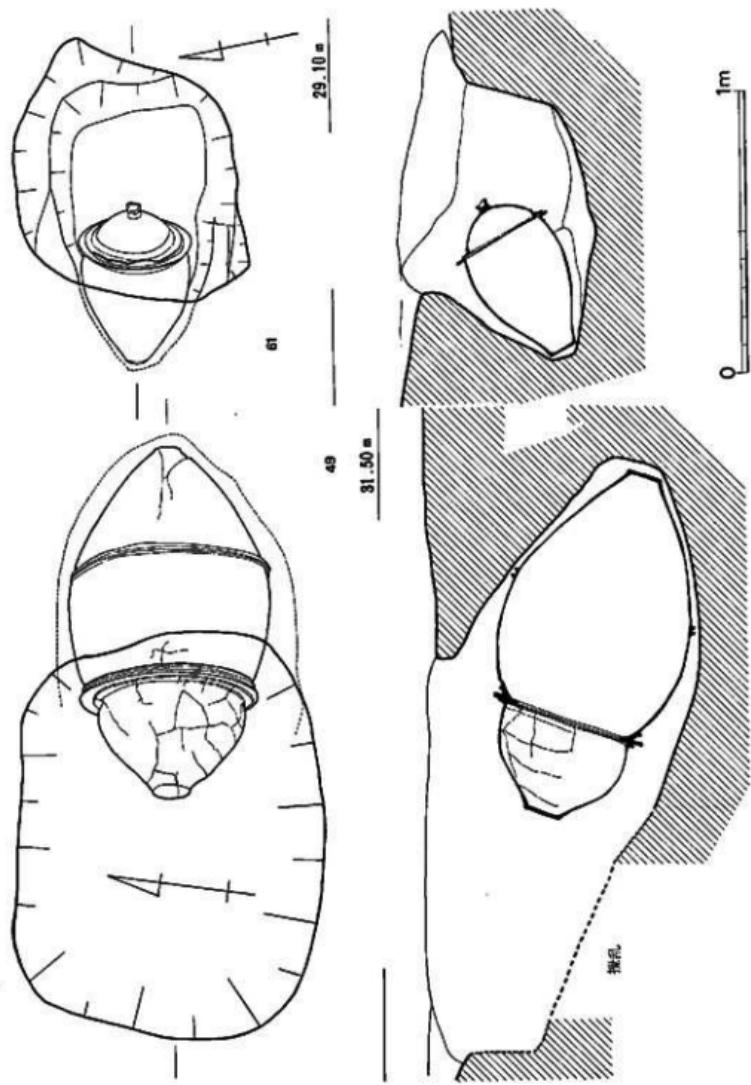


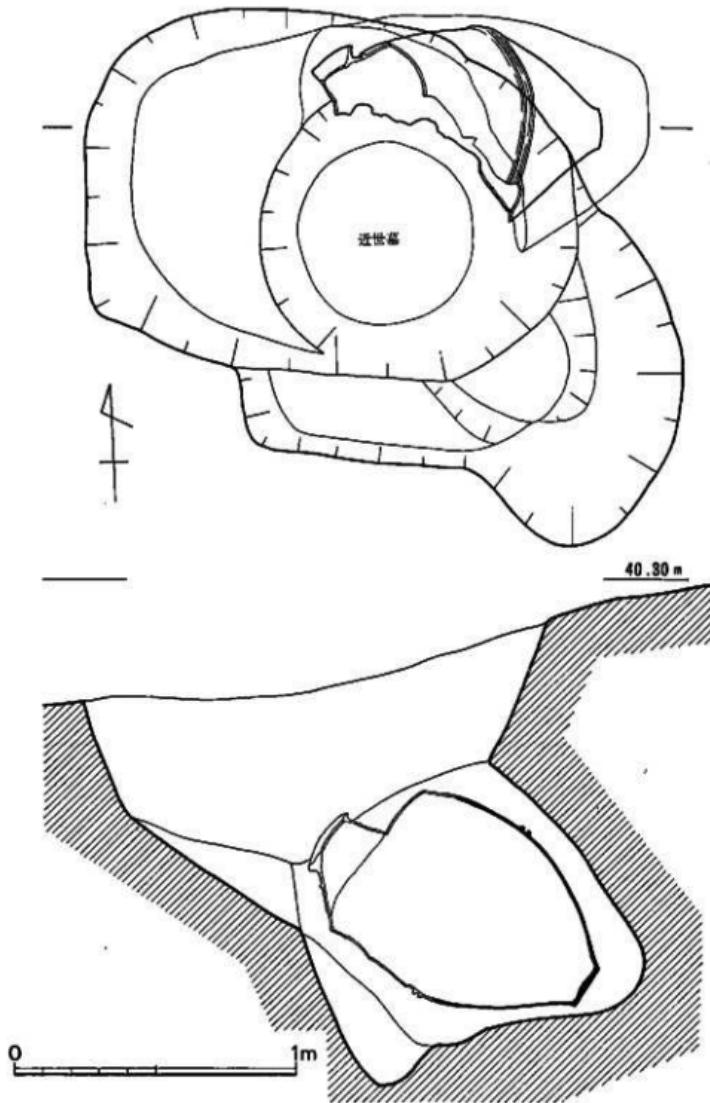
第32圖 45號窯格墓實測圖 (1/20)

新編圖 47 号測量剖面圖 (1 / 20)

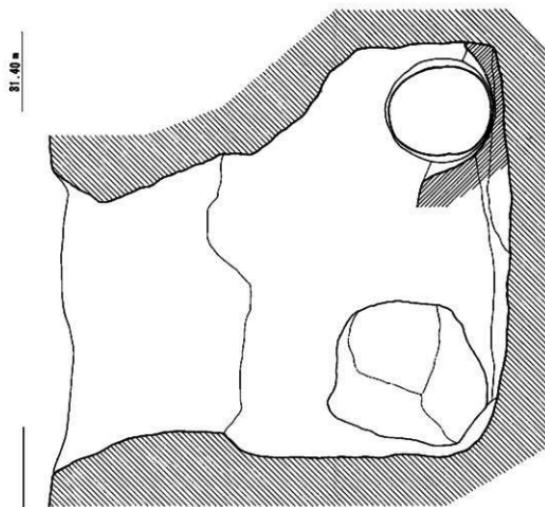
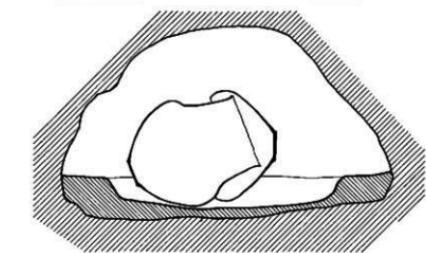
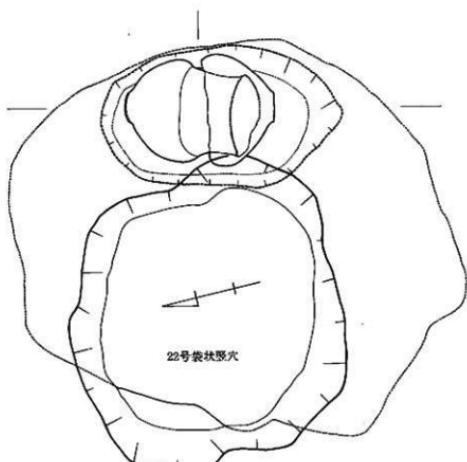


第34圖 49・61号遺物器物測圖(1/20)



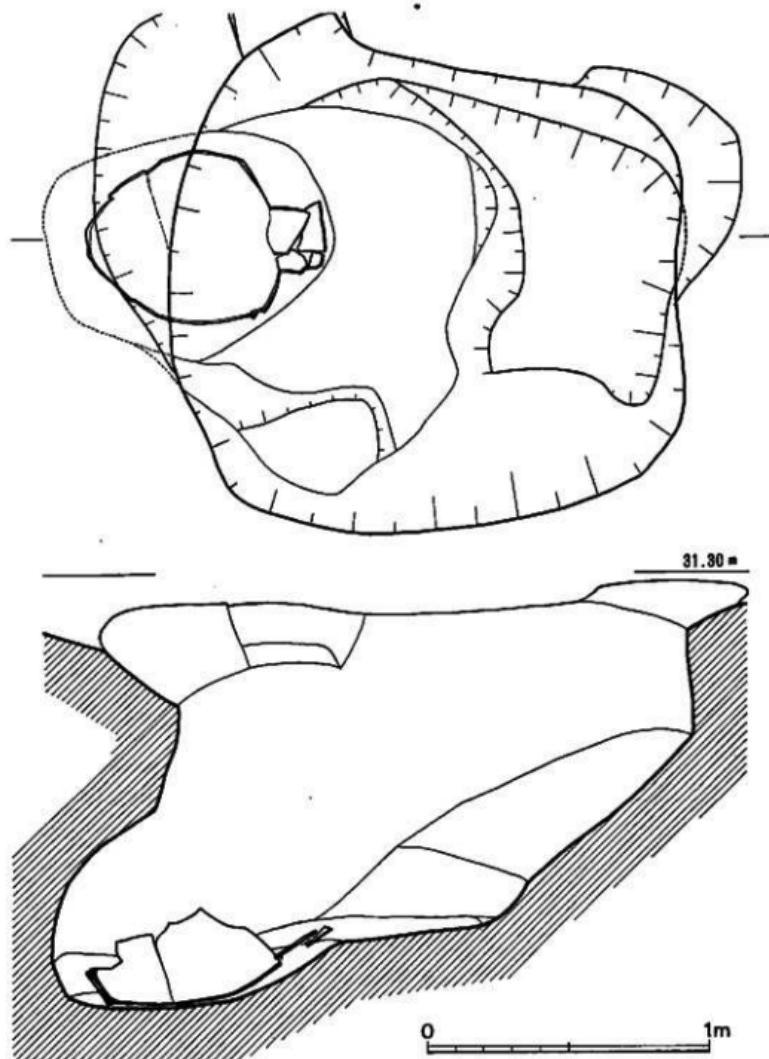


第50図 50号墓横断面図 (1/20)

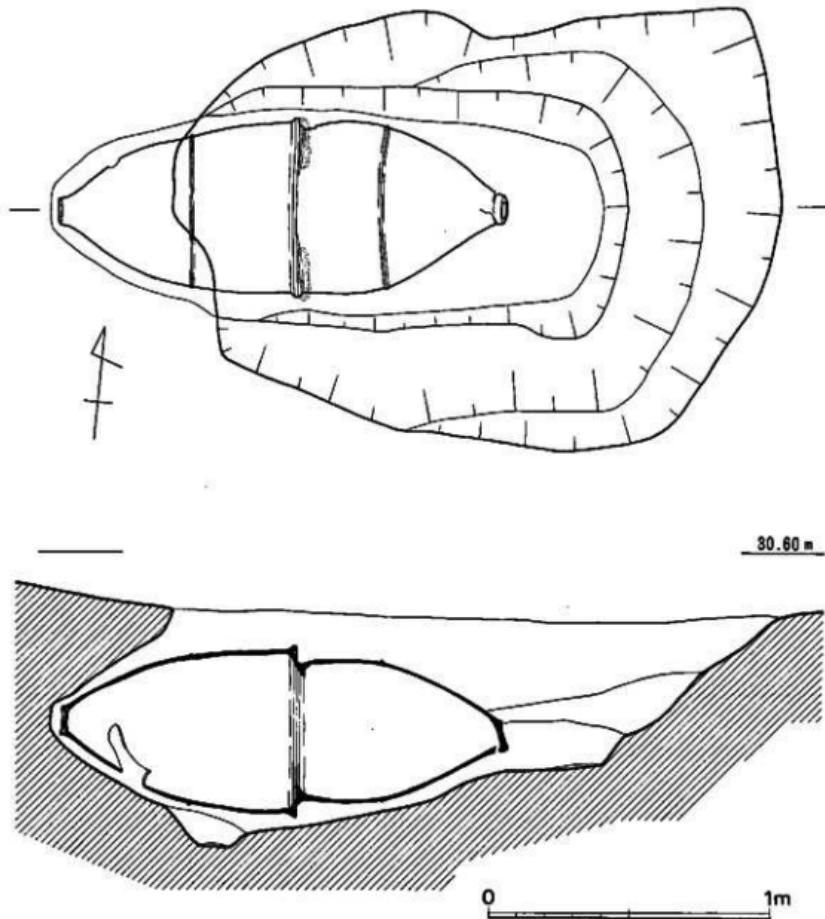


0 2m

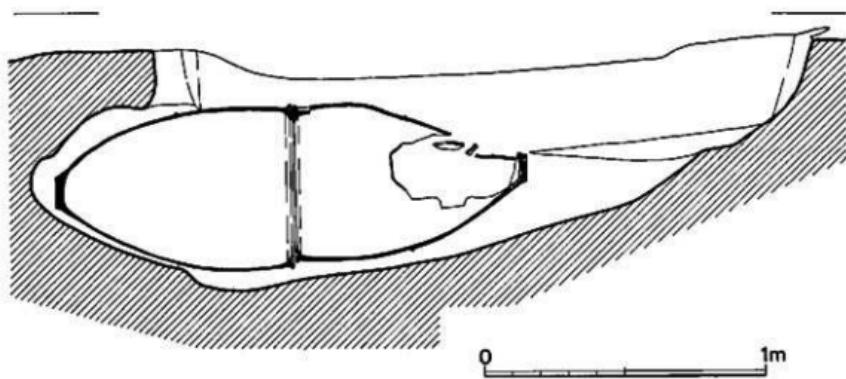
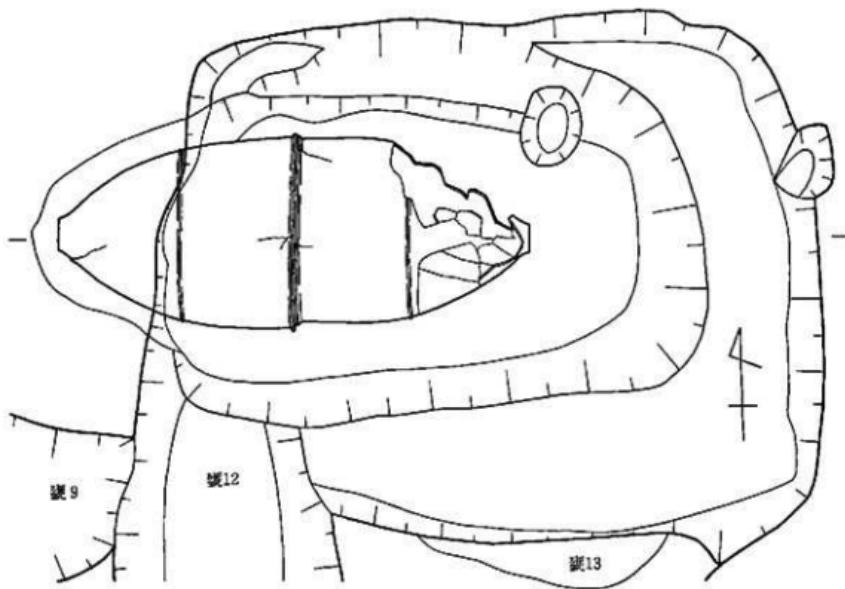
第四圖 48號壘坑基尖測圖 (1/20)



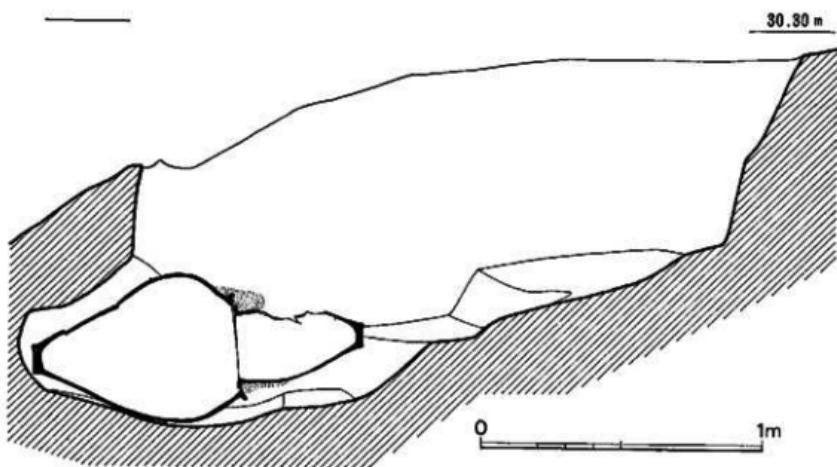
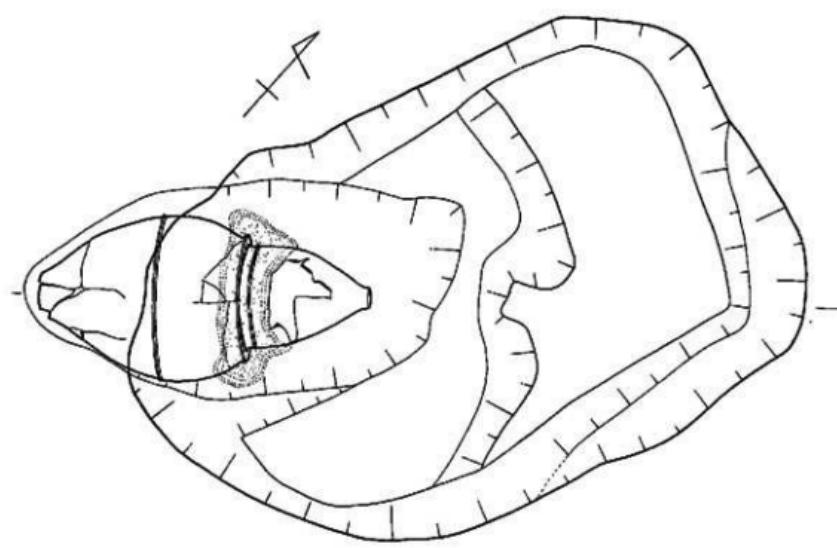
第37圖 51号 穹拱橋基実測図 (1/20)



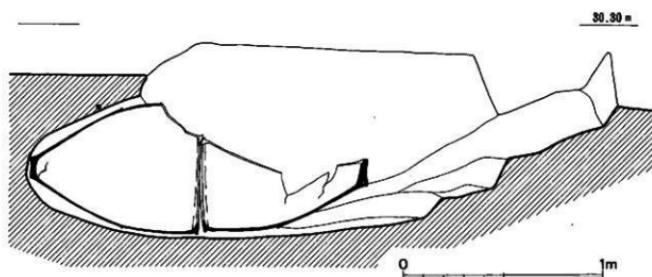
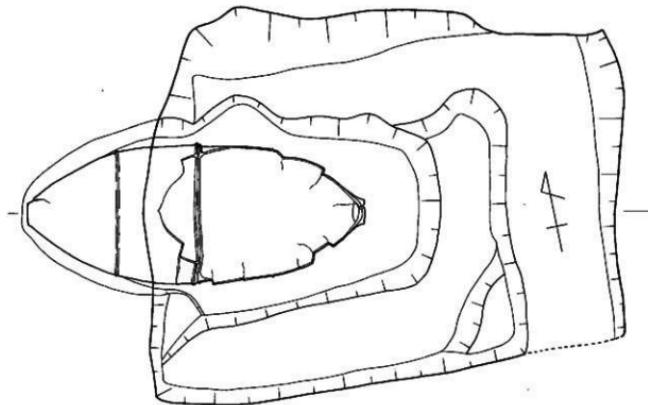
第38図 54号毫格嘉実測圖(1/20)



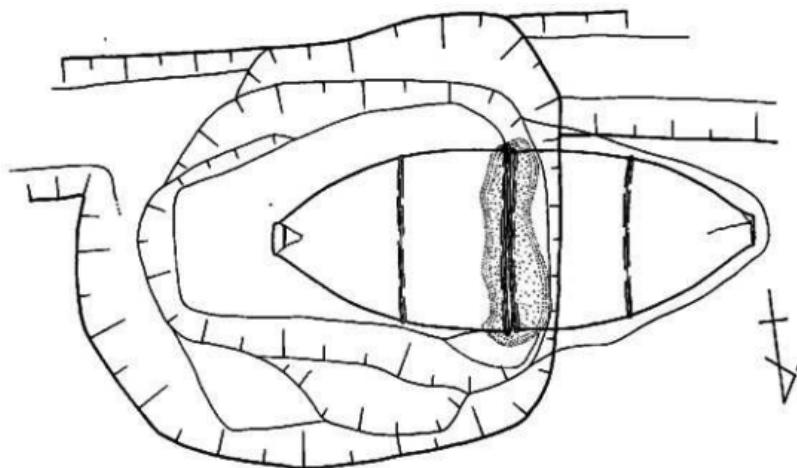
第38圖 57號麥格基實測圖 (1/20)



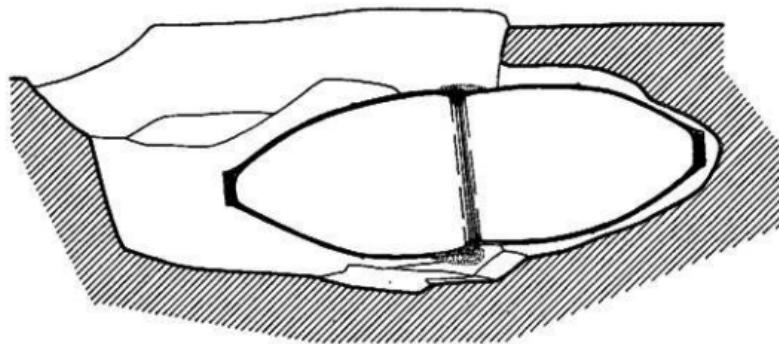
第40圖 58号墓構造圖 (1/20)



第 41 圖 59 號麥格羅魚圖 (1/20)



30.30m



0 1m

第42図 60号墳 棚墓 断面図 (1/20)

新43号 02・03号遺構藍灰剖面図(1/20)

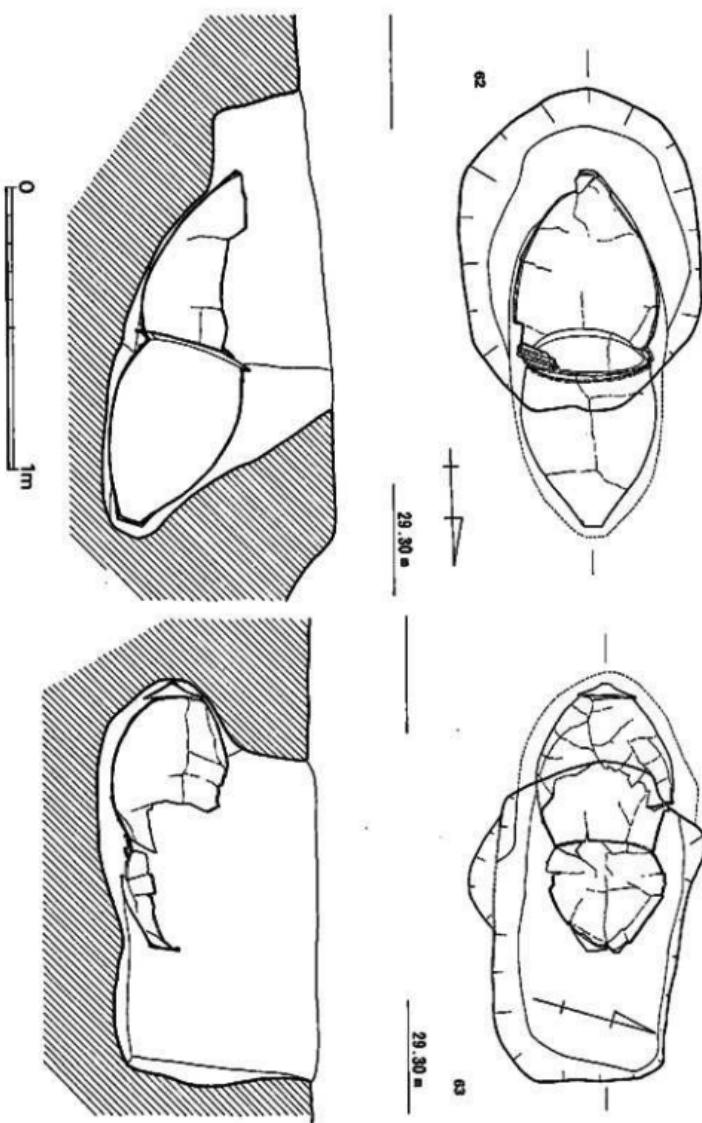
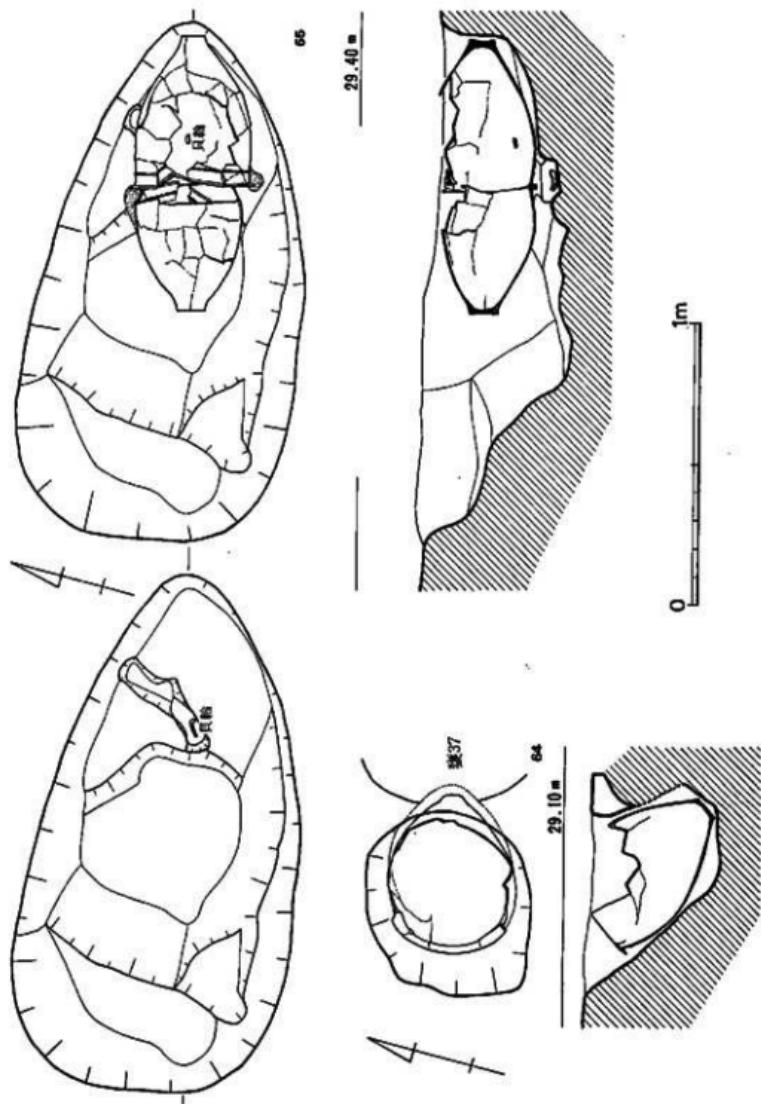
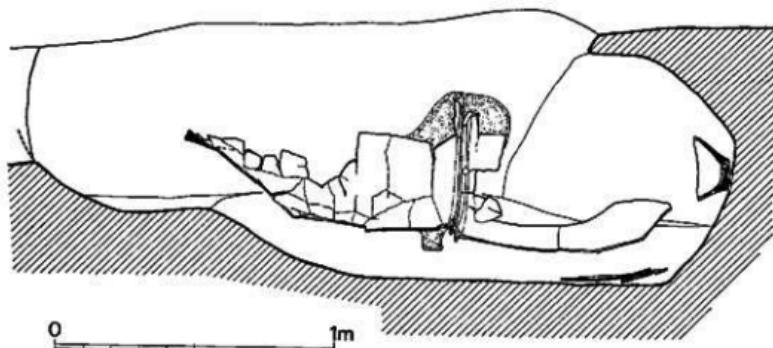
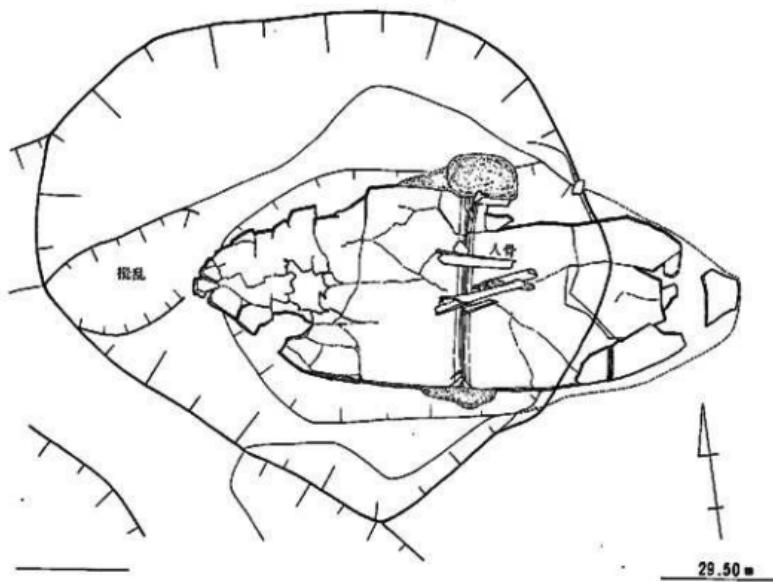
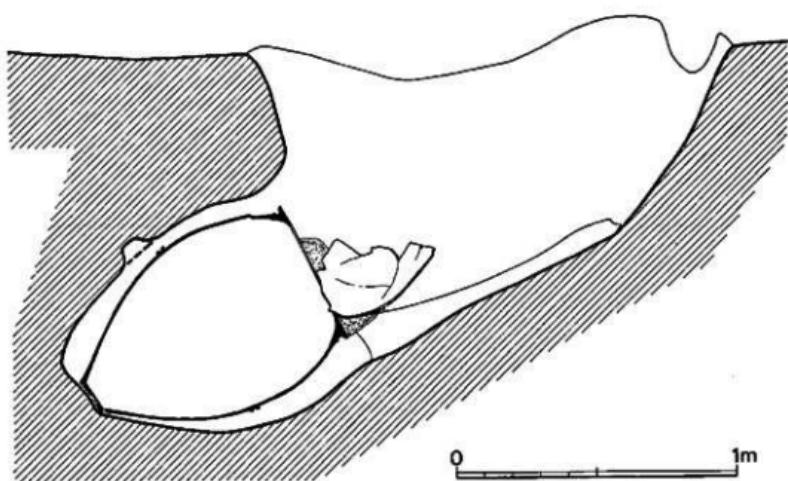
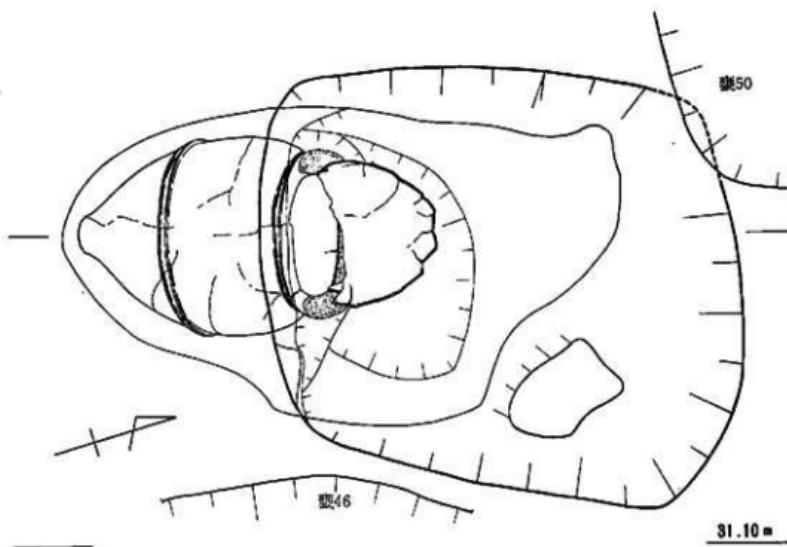


图 44 图 64·65 号盗相墓实物图 (1/20)

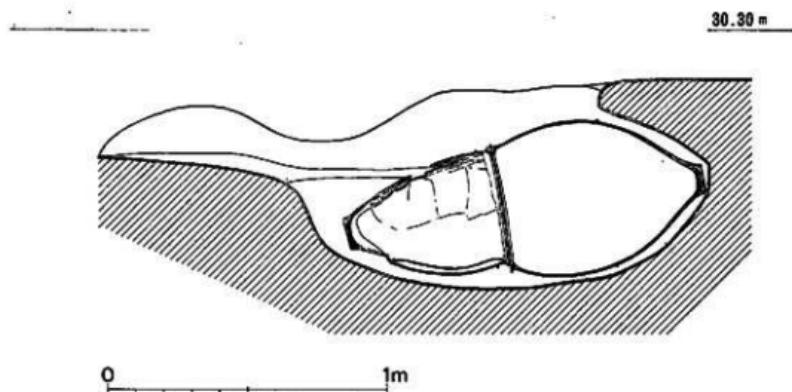
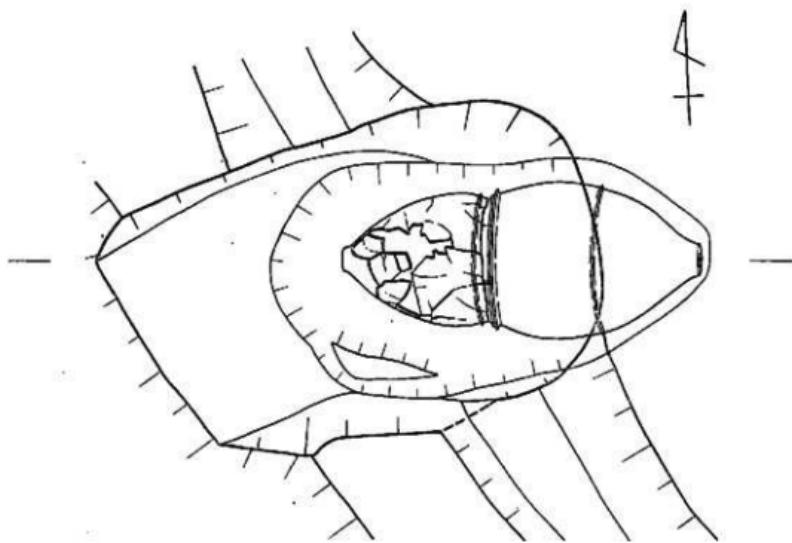




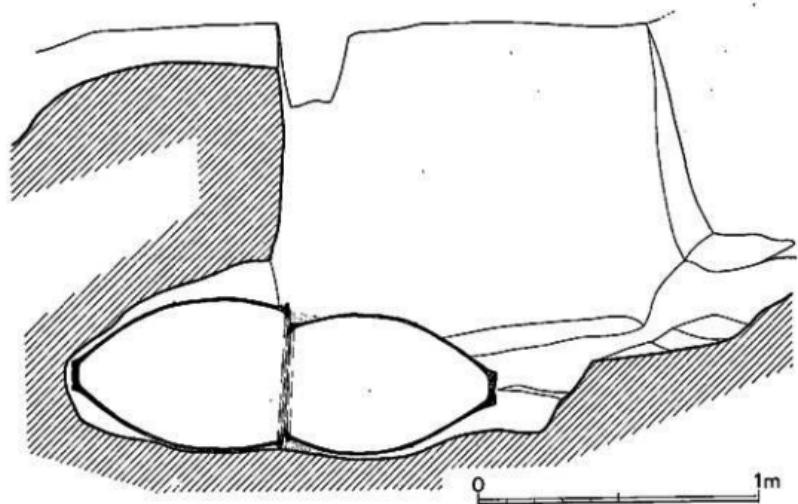
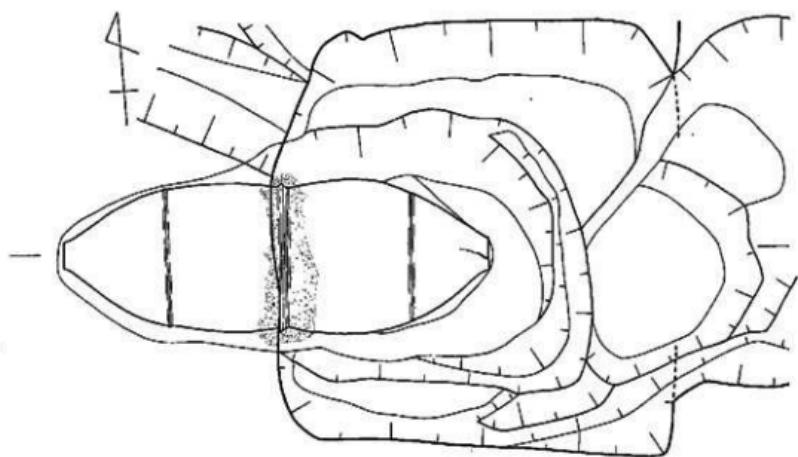
第45圖 66號直格墓測圖 (1/20)



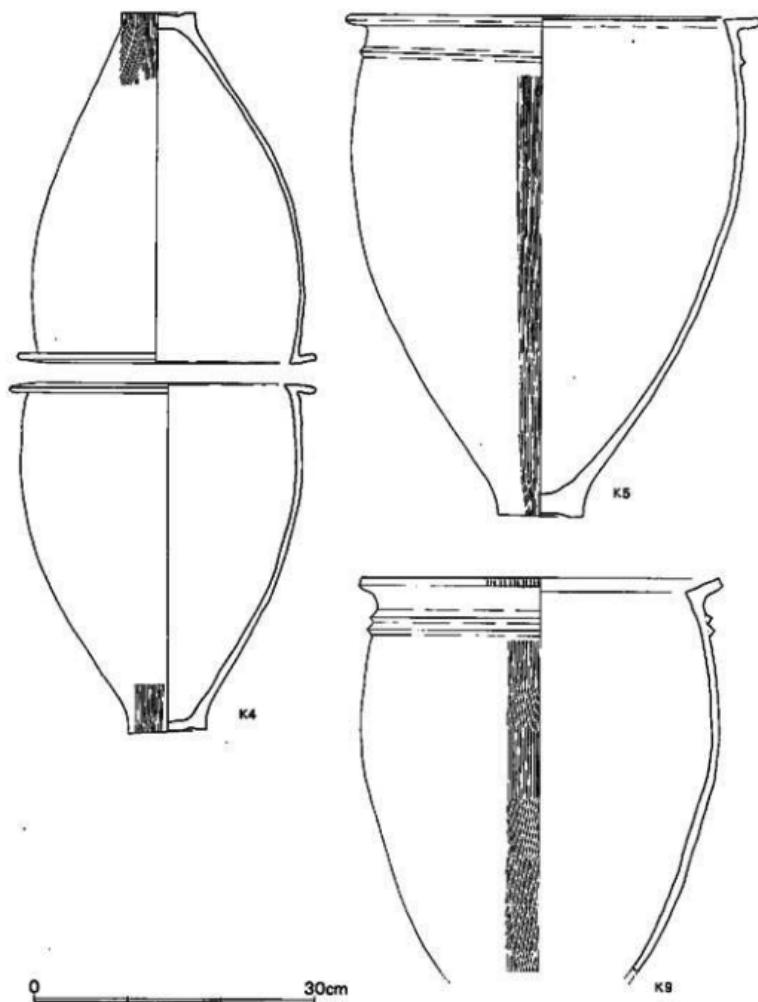
第46図 67号塩椿基堀測面 (1/20)



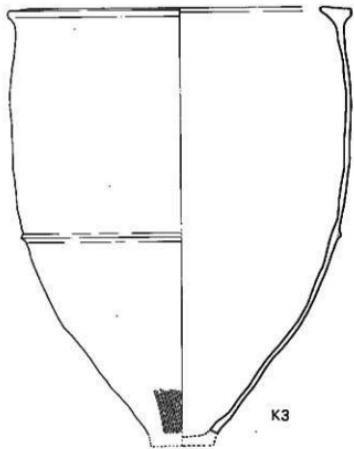
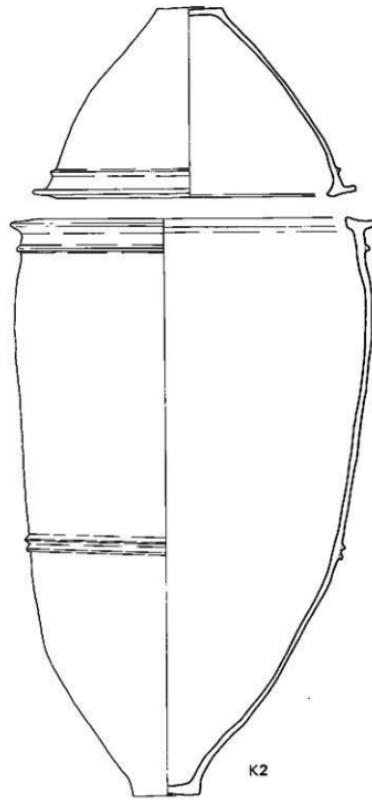
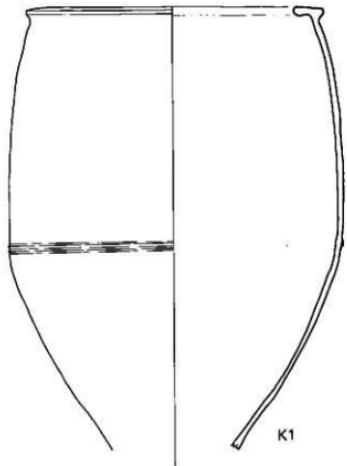
第47図 68号赤柱茎実測図 (1/20)



第48図 69号高精基突剥図(1/20)

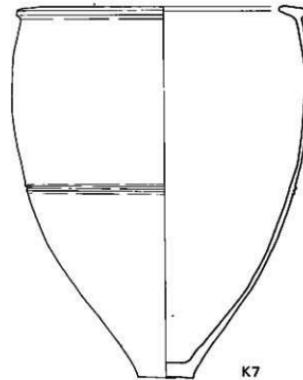
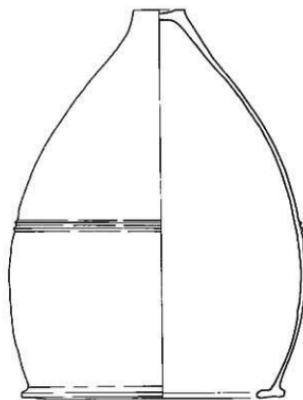


第49圖 4・5・9號商棺實測圖 (1/6)

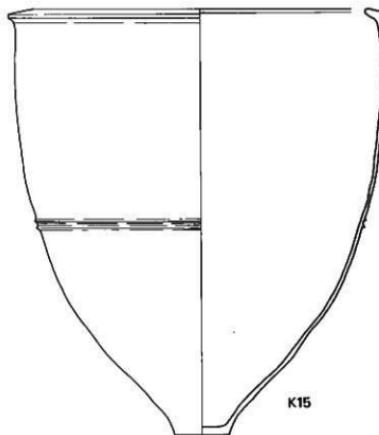
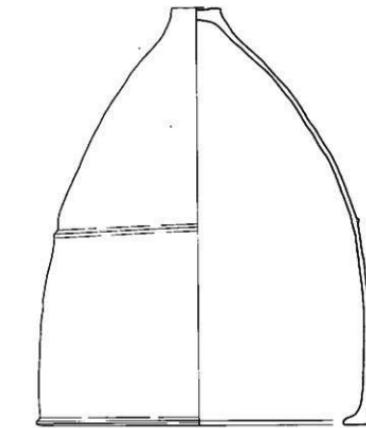


0 50cm

第50図 1(下盤)・2・3号(下盤) 青銅器測図(1/8)



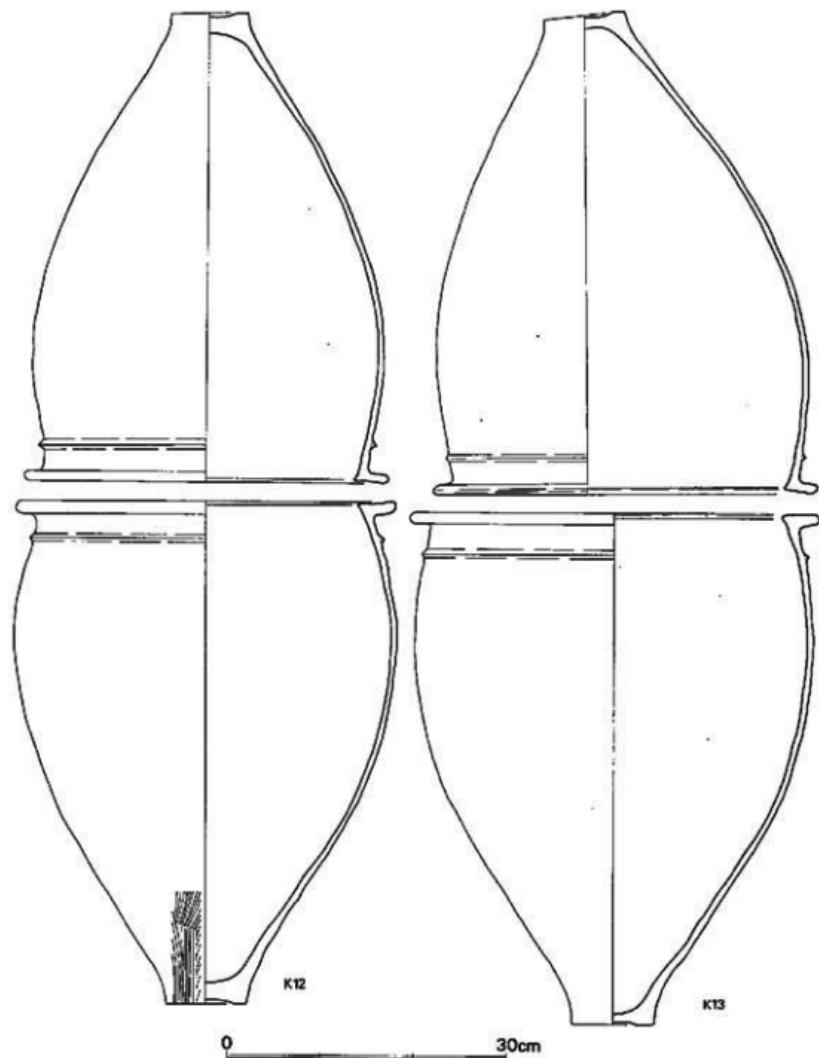
K7



K15

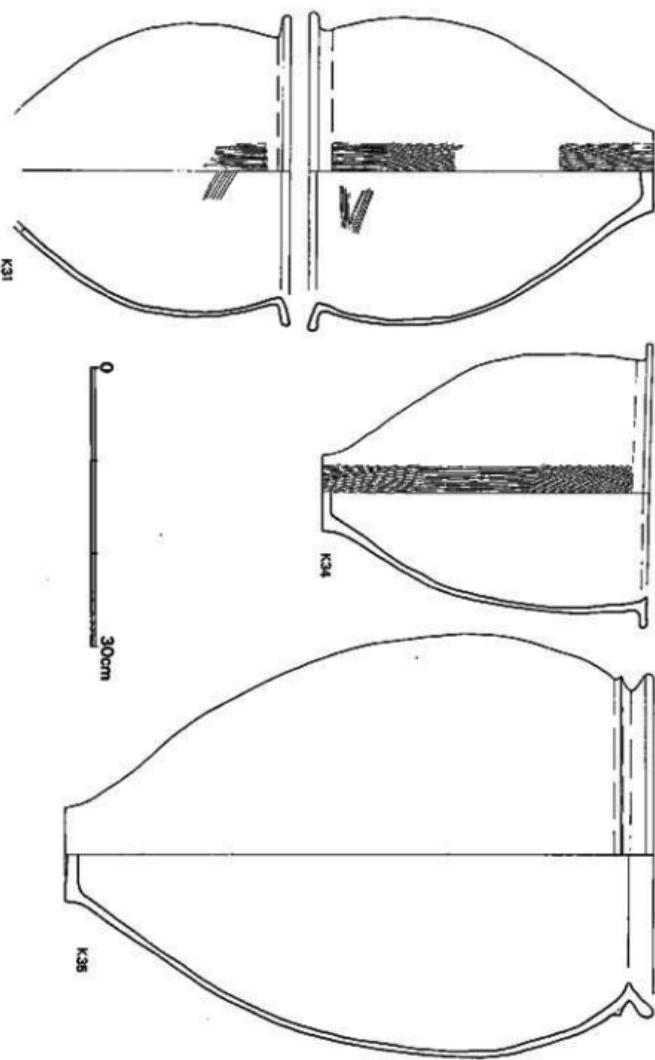
0 50cm

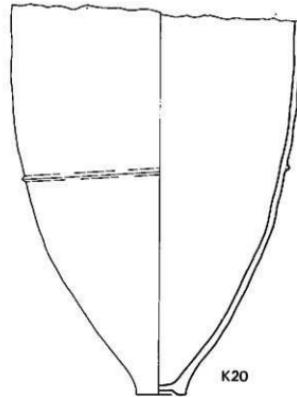
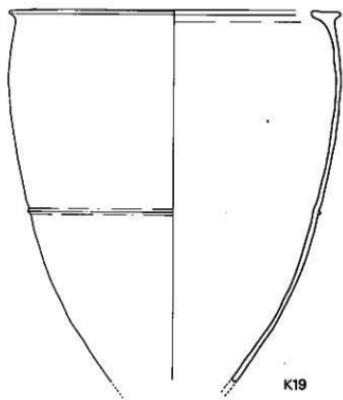
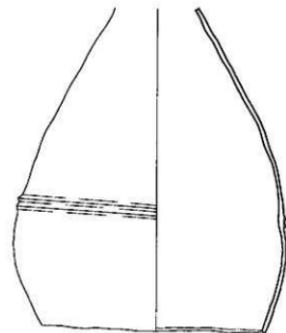
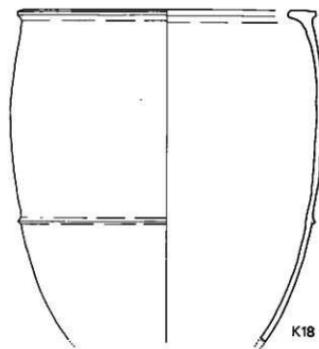
第 51 图 7·15·17 号墓棺内视图 (1/8)



第 52 図 12・13 号 瓷 棺 実測図 (1/6)

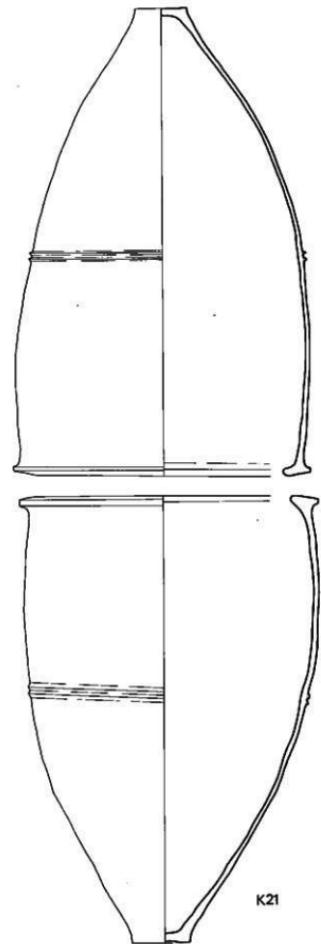
第33図 31・34号(下部)・35号(下部) 集荷実測図(1/6)



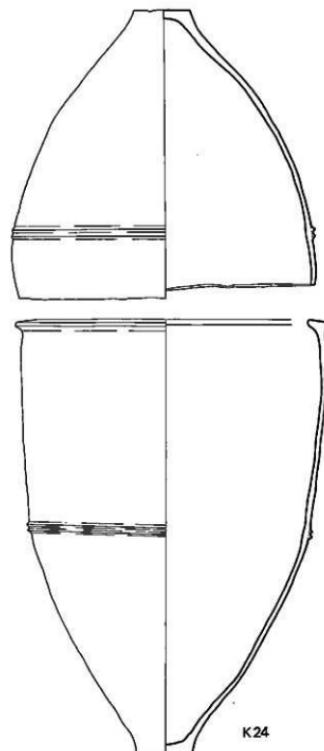


0 50cm

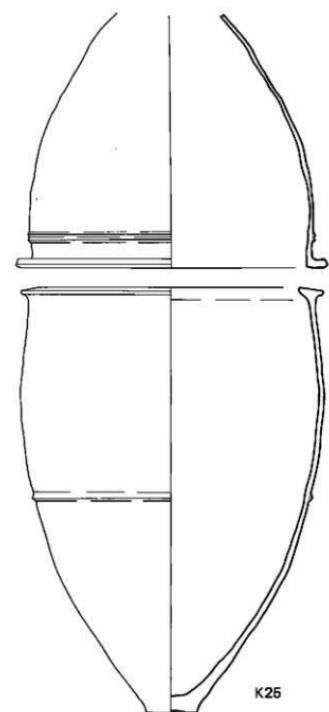
第 54 図 18・19・20 号 壺 柄尖測図 (1/8)



K21

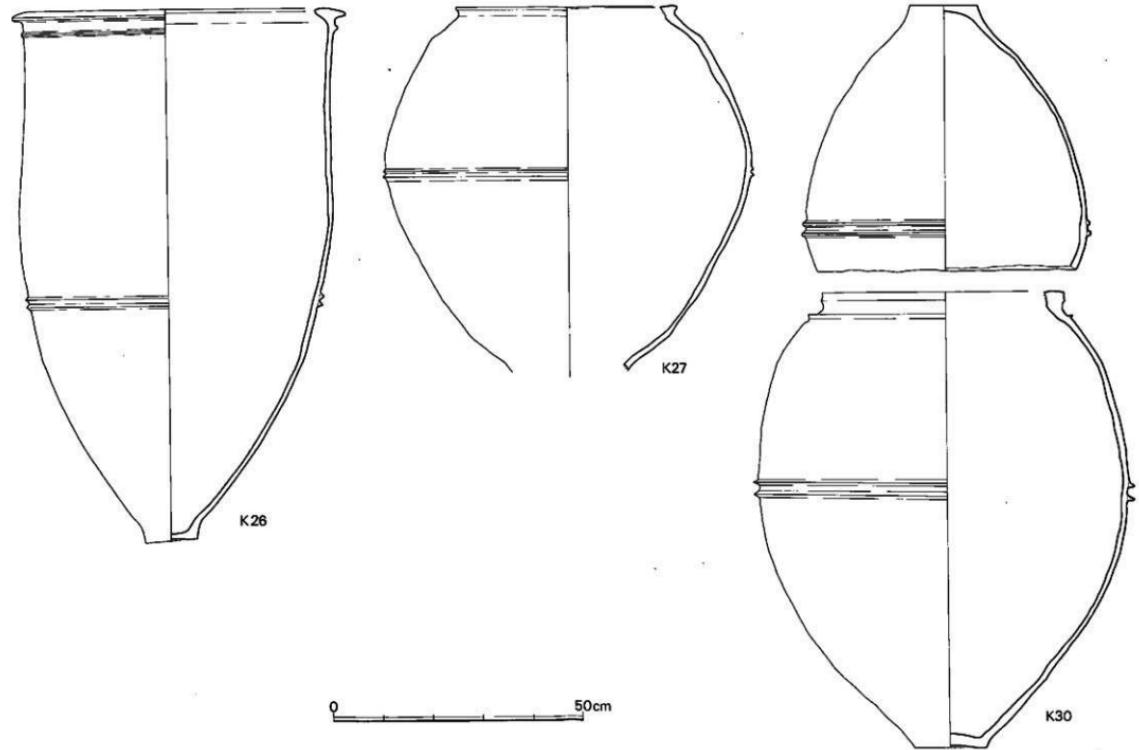


K24

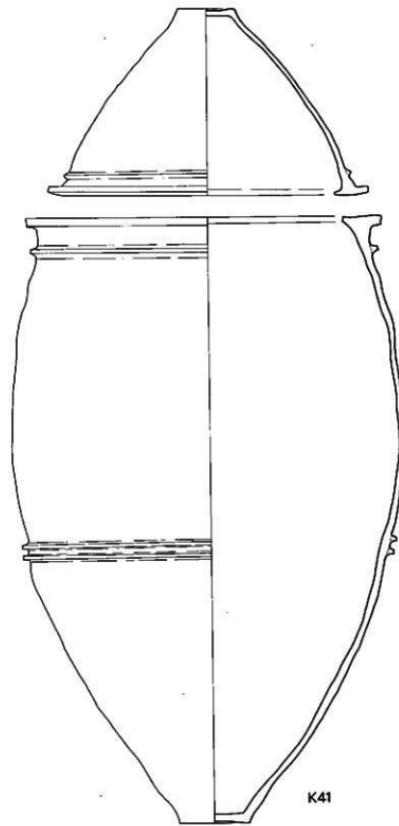
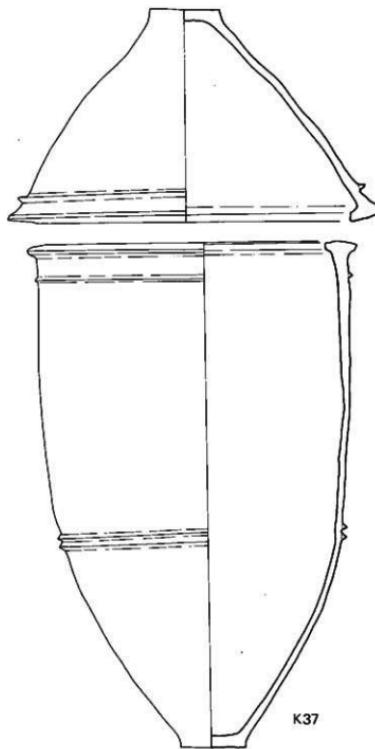
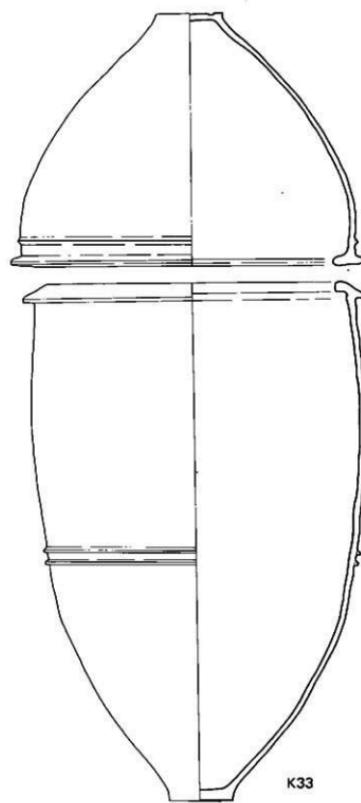


K25

0 50cm

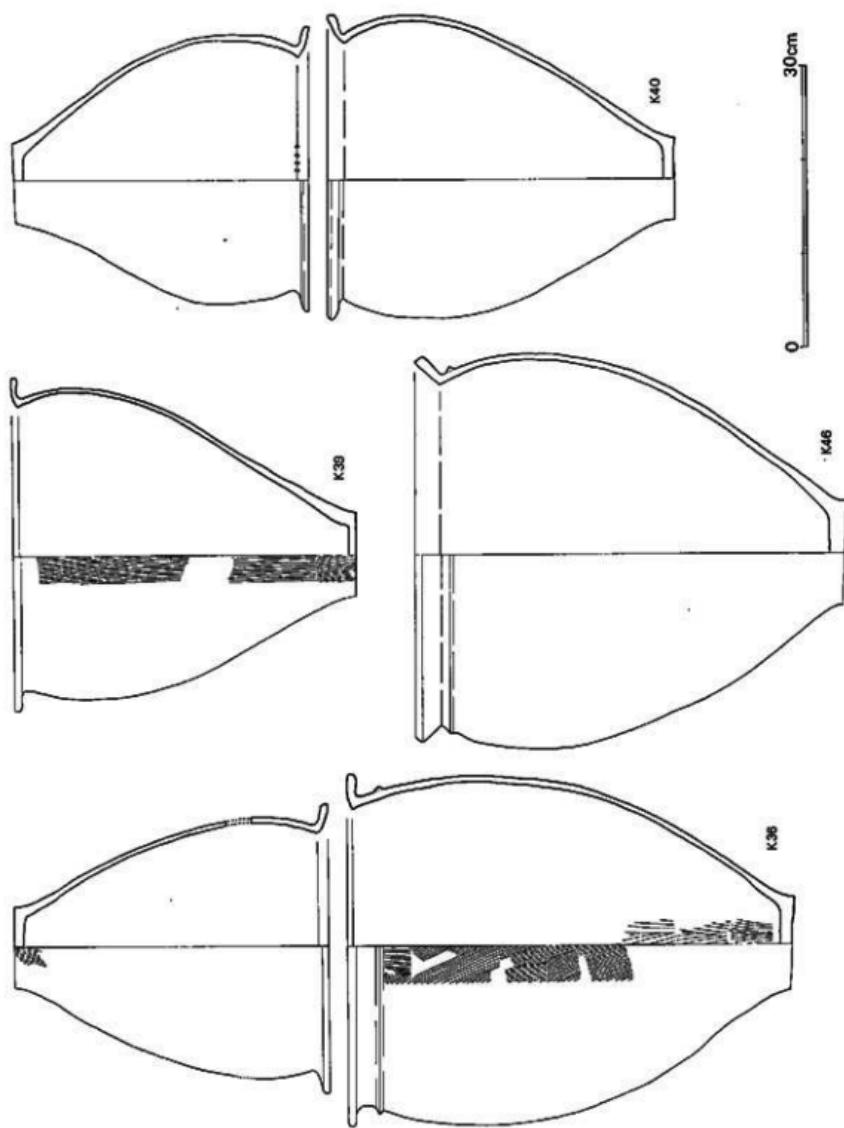


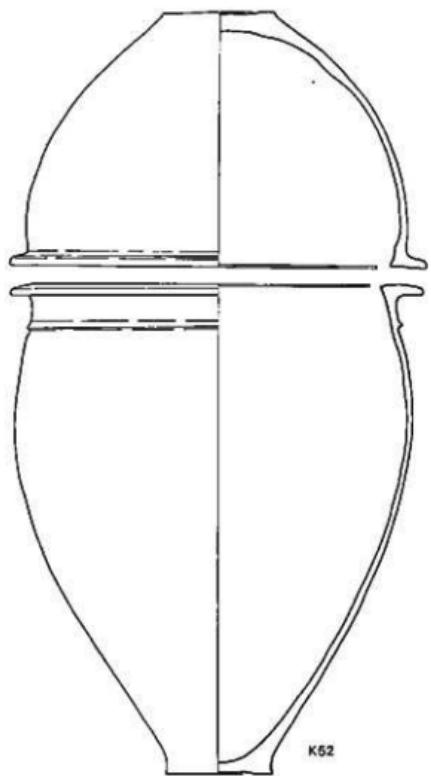
第 96 図 26・27・30 号 葵 桶 尖 测 図 (1 / 8)



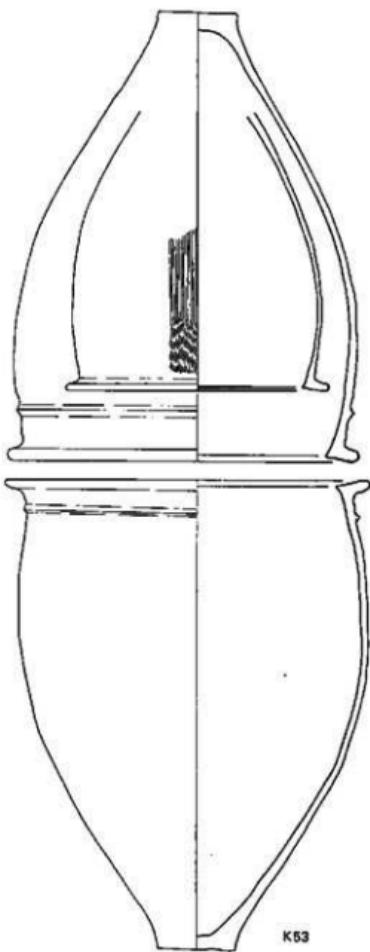
第 57 図 33・37・41 号 瓦棺実測図 (1/8)

第55圖 36・39(上端)・40・46(中段)鐵棺實測圖(1/6)

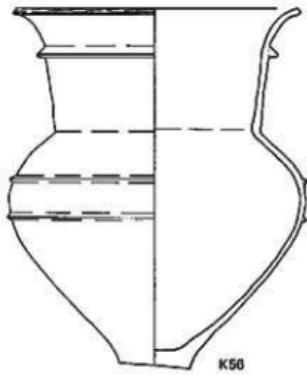




K52

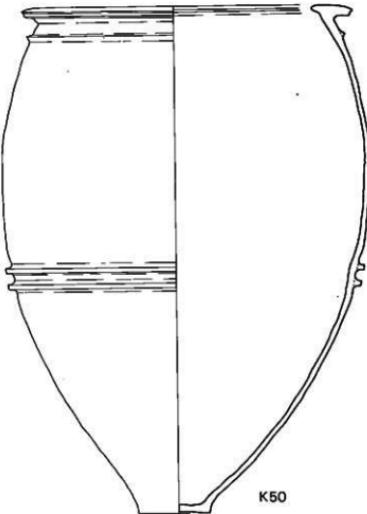
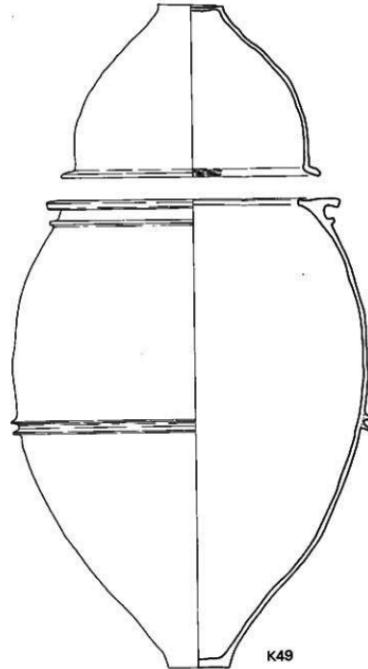
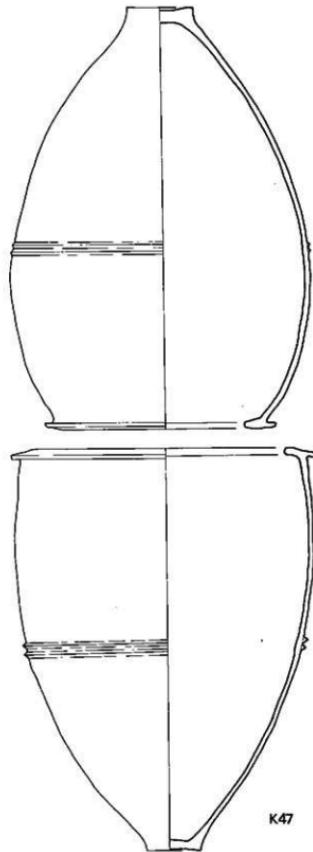


K53



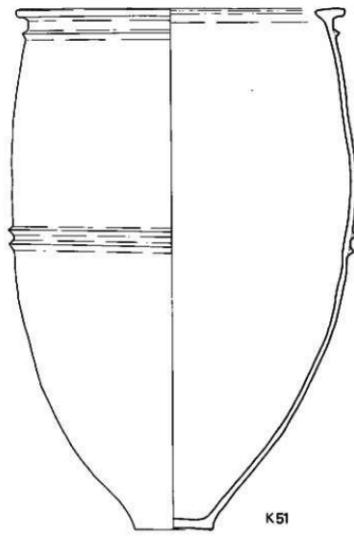
K56

0 30cm

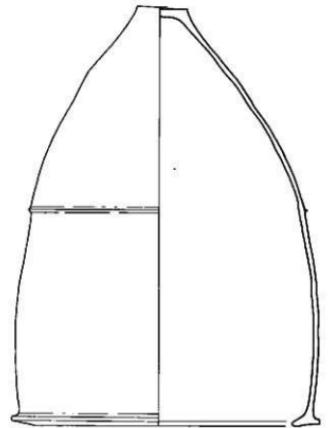
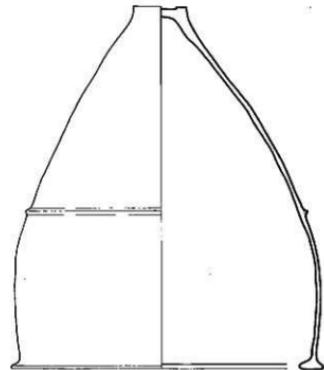


0 50cm

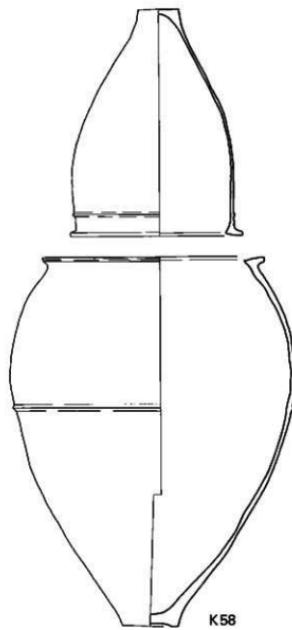
第80圖 47·49·50號(下圖)測量測量圖(1/8)



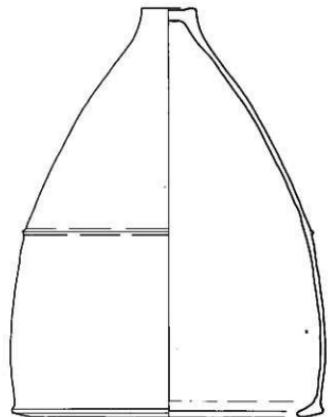
0 50cm



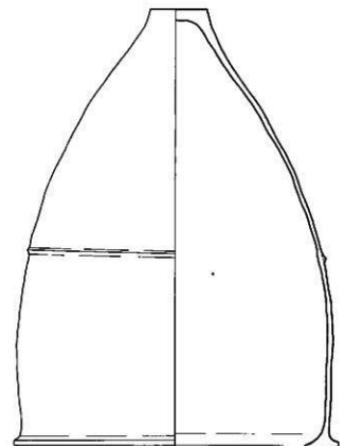
第57圖 51(下部)・54・57號器物夾測圖(1/8)



K58



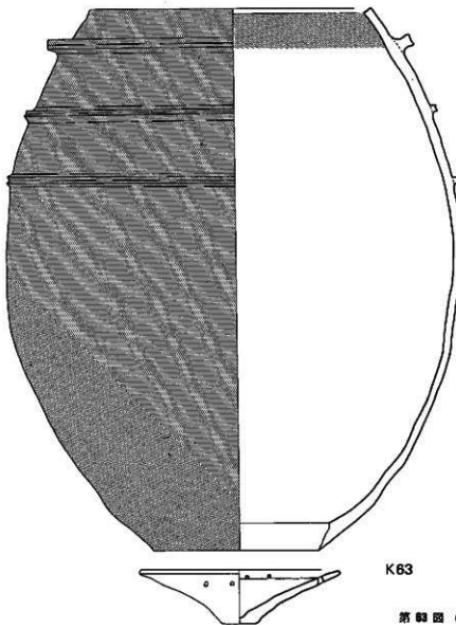
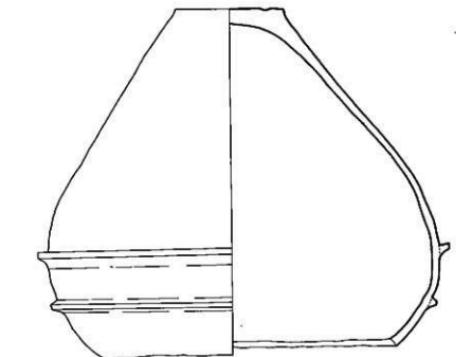
K59



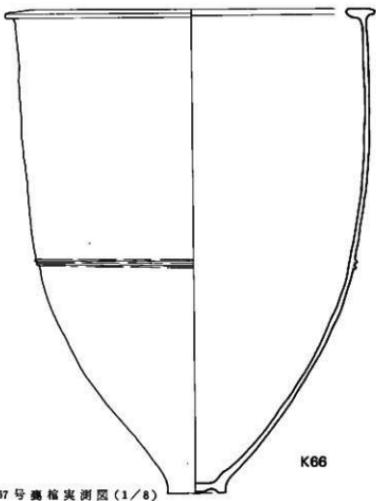
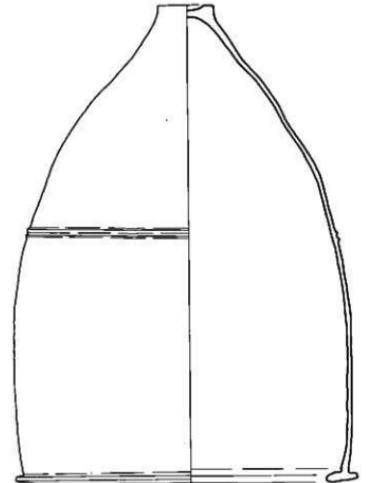
K60

0 50cm

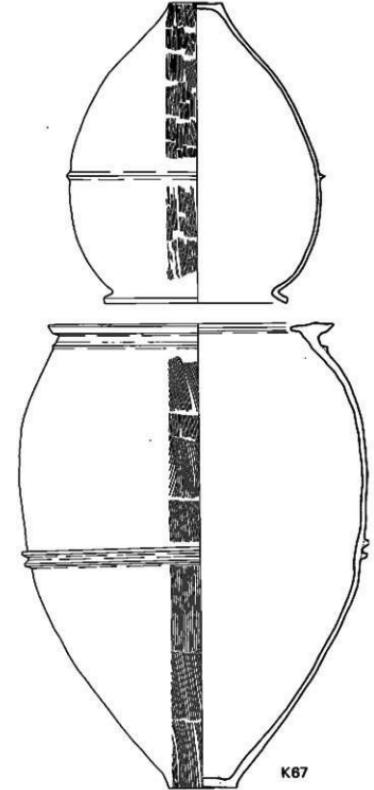
第58圖 58(小兒棺)・59・60号墓棺実測図(1/8)



K63



K66

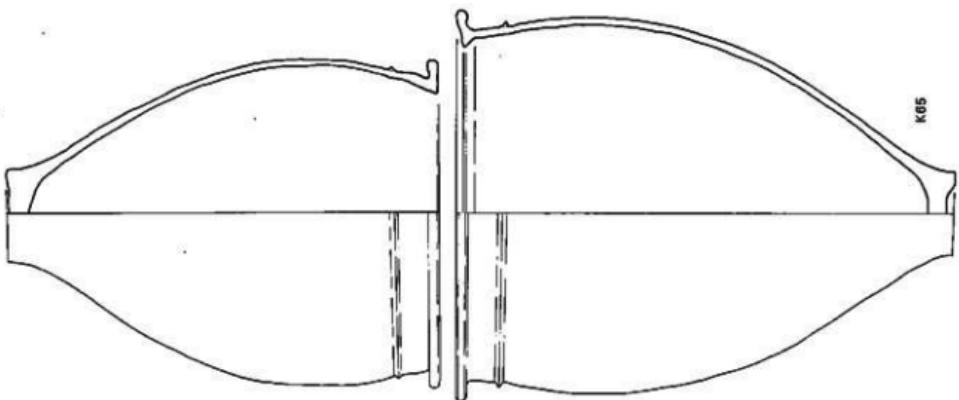


K67

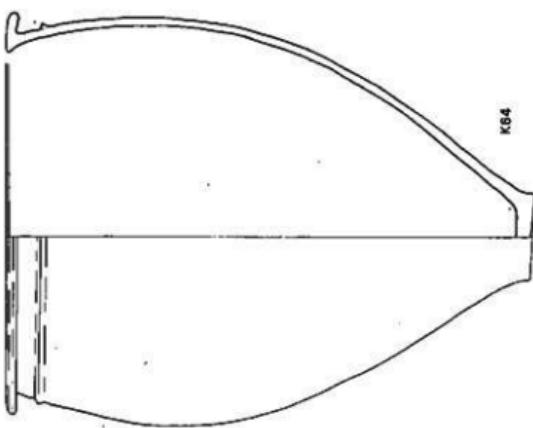
0 50cm

第63图 63·66·67号墓棺实物图 (1/8)

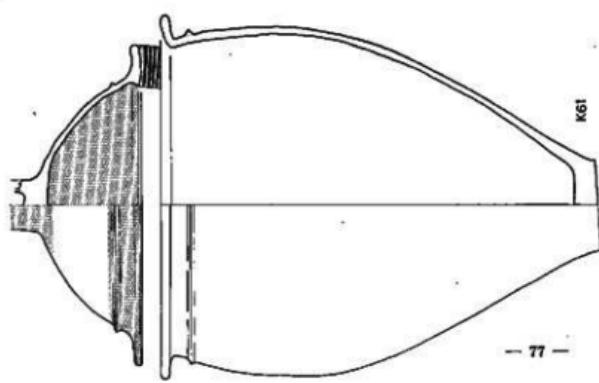
K65



K64

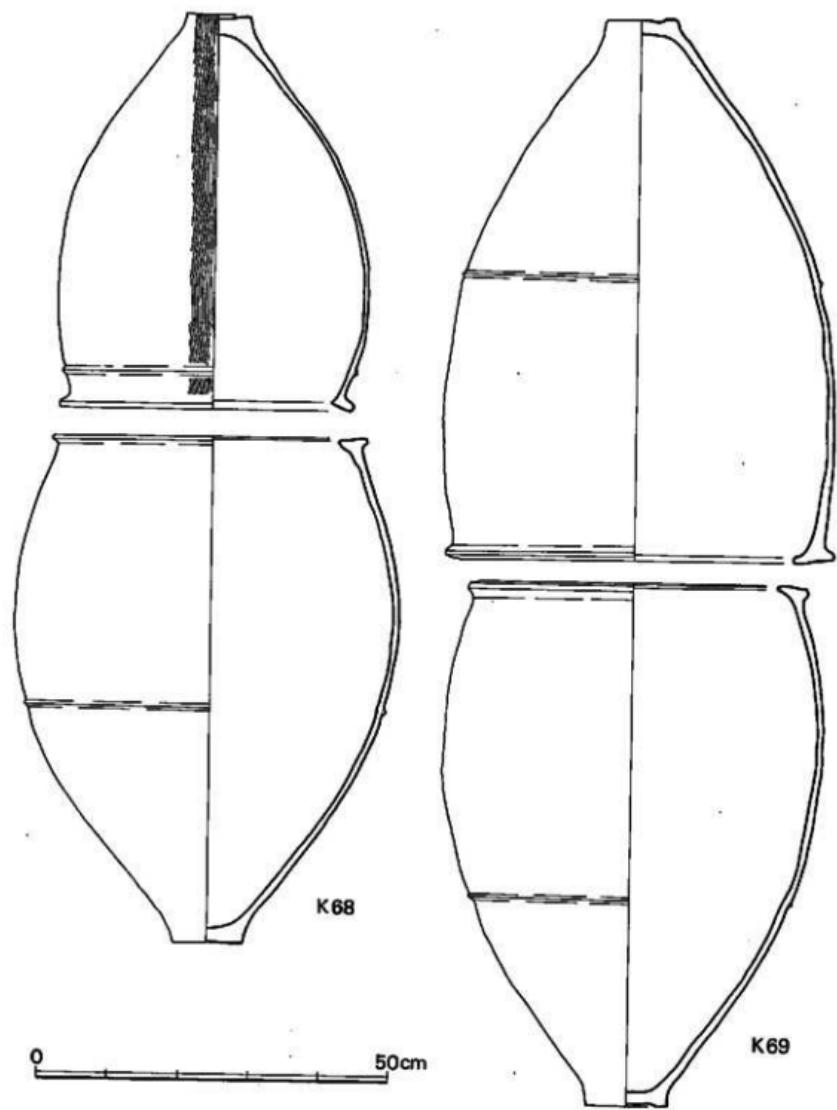


K61

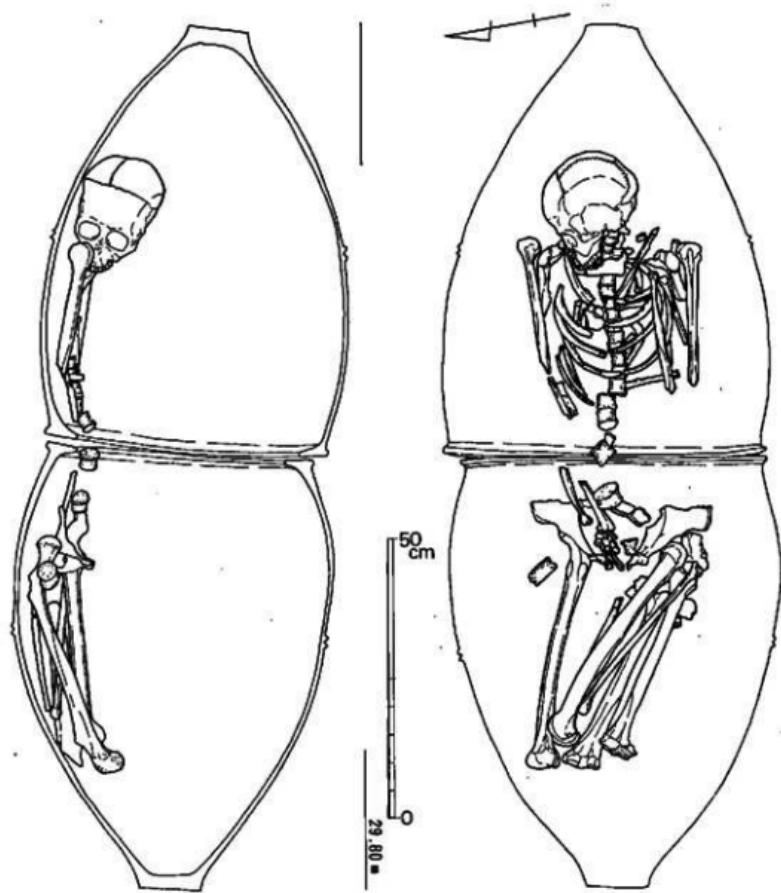


30cm
0

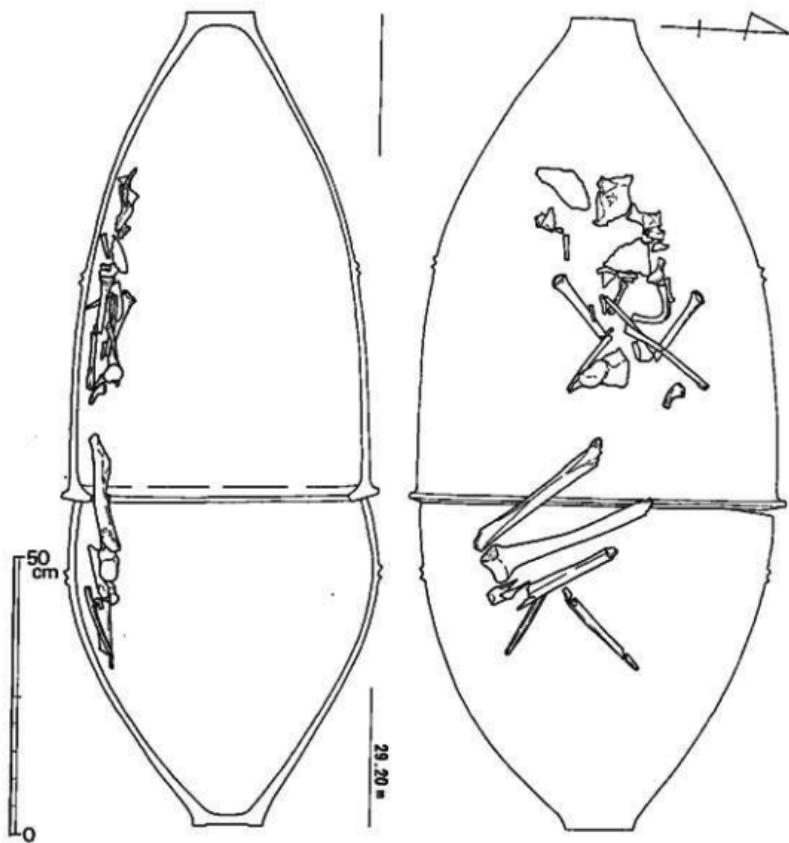
第64圖 61・64号(下地)・65号盜棺尖頭圖(1/6)



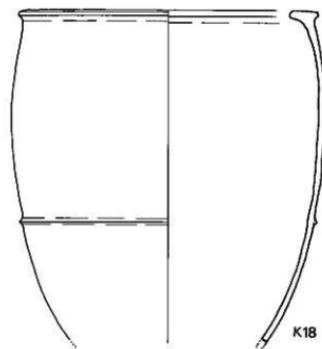
第 65 図 68・69 号 瓶 案 施 計 (1/8)



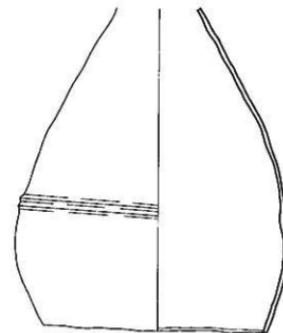
第8圖 7號塗格墓人骨實測圖 (1/10)



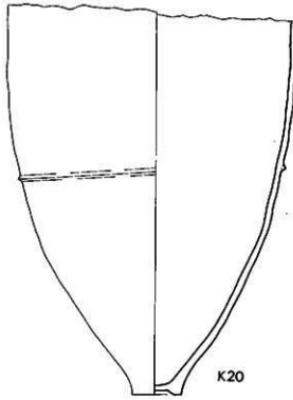
第67図 24号塚棺墓人骨実測図(1/10)



K18



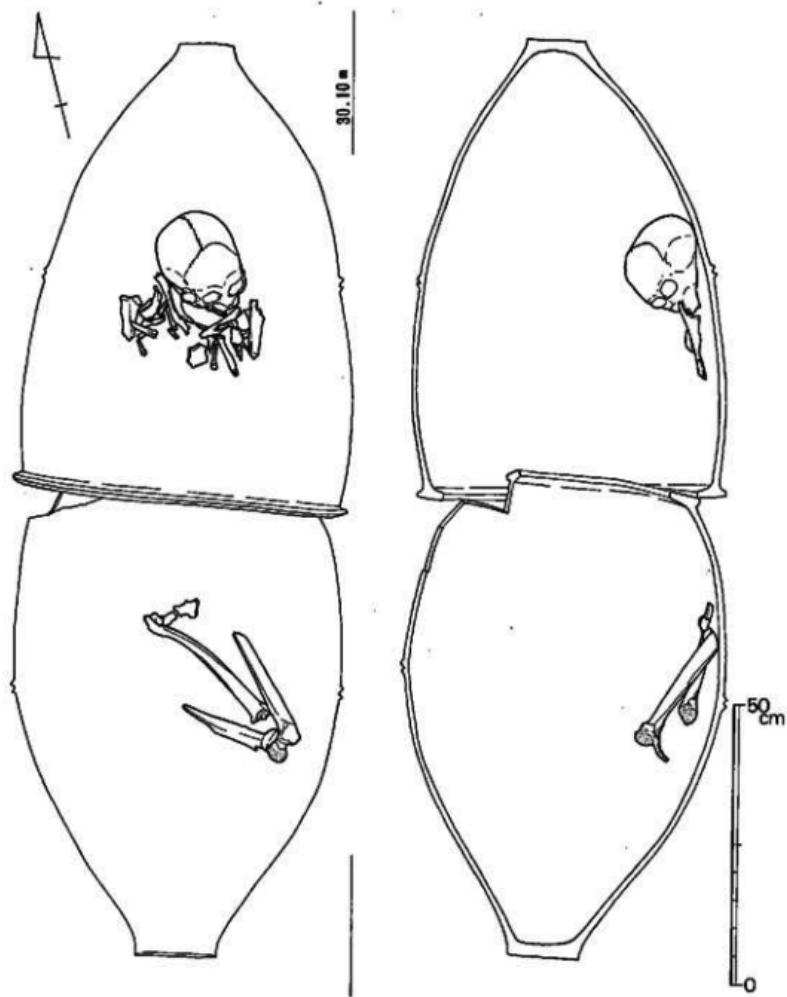
K19



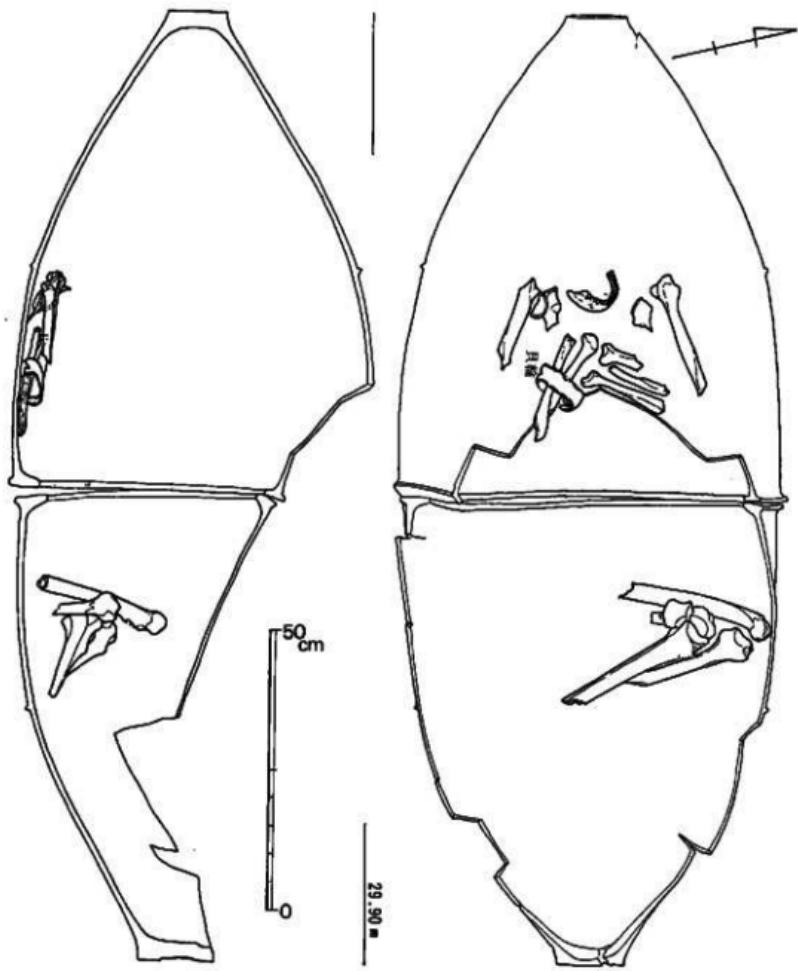
K20



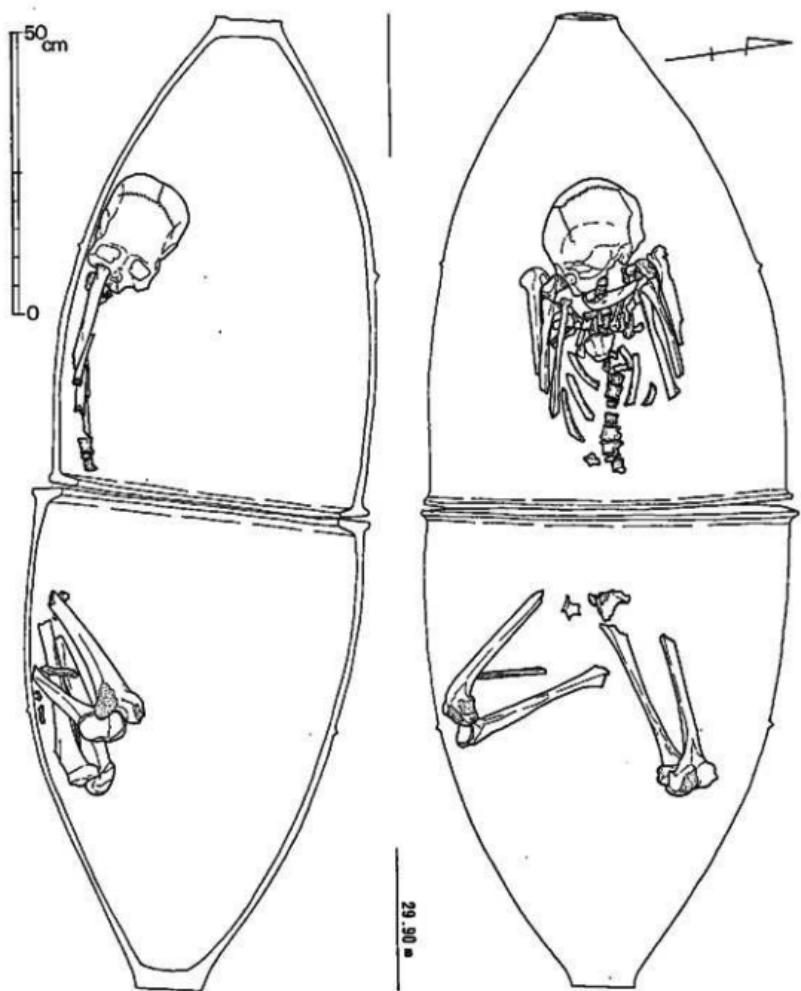
第14圖 18・19・20号 壺形実測図 (1/8)



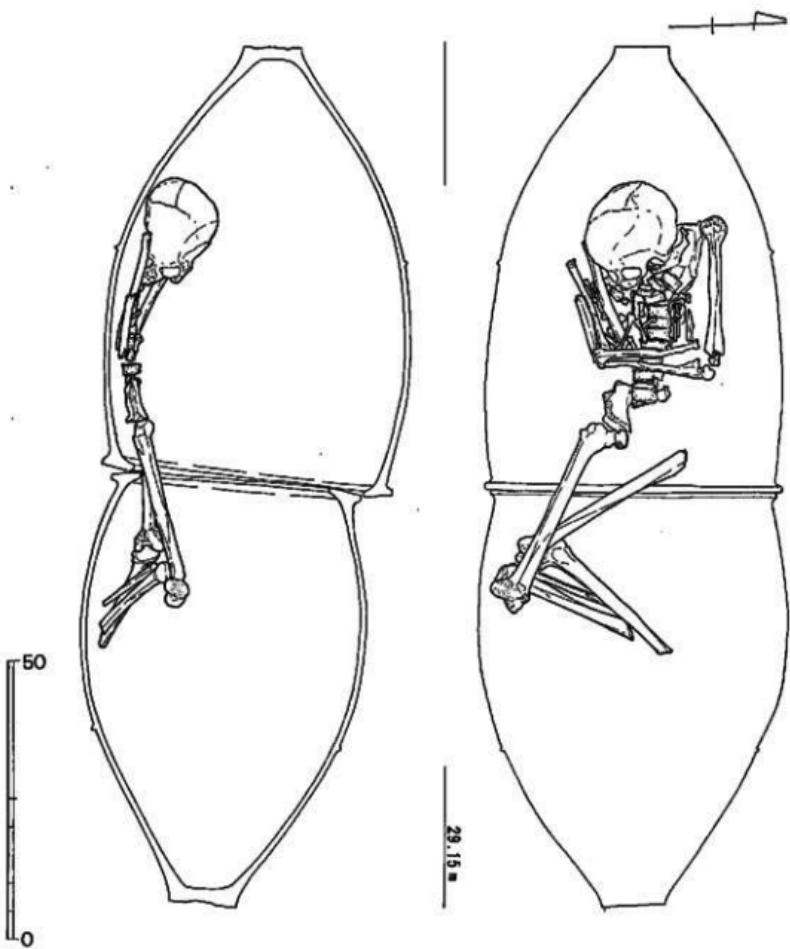
第47圖 47號墓人骨實測圖 (1/10)



第70圖 59號墓人骨實測圖(1/10)



第11图 60号墓棺墓人骨实测图 (1/20)



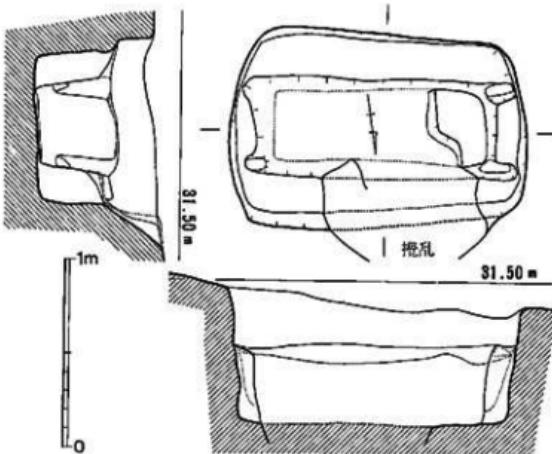
第72圖 69號喪葬墓人骨實測圖(1/10)

4. 木棺墓

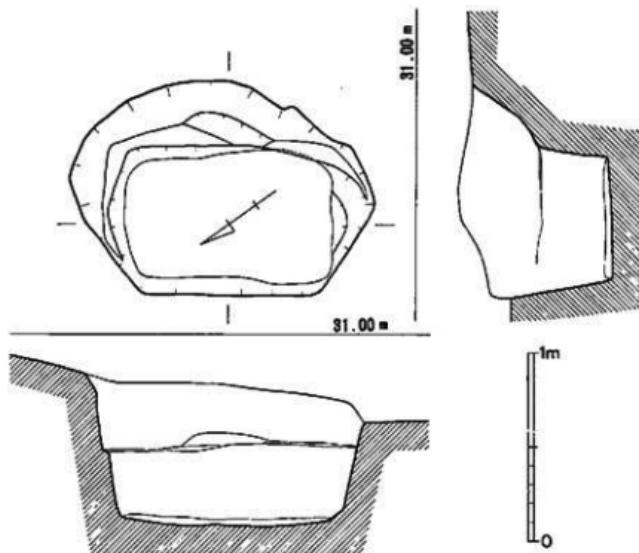
(第73図、図版55-(2))

D12-18区と13区にまたがっている。46号甕塚の南側に位置し、主軸方位を N82°W にとる。長辺1.58m、短辺1.07m、深さ0.7mの隅丸長方形の土塙内に木棺を納めたもので、棺材は遺存しないが、その痕跡が残る。この遺構は北側で近世墓によって、木棺床面まで切られ

ているが両端が残存するので内法が判る。いわゆる組合せ木棺で側板が小口板を読み込む形式に属す。長さ1.29m、幅0.54mを測る。この木棺の外側は若干ロームブロックを含む埋土で



第73図 木棺墓実測図 (1/30)



第74図 1号土塙実測図 (1/30)

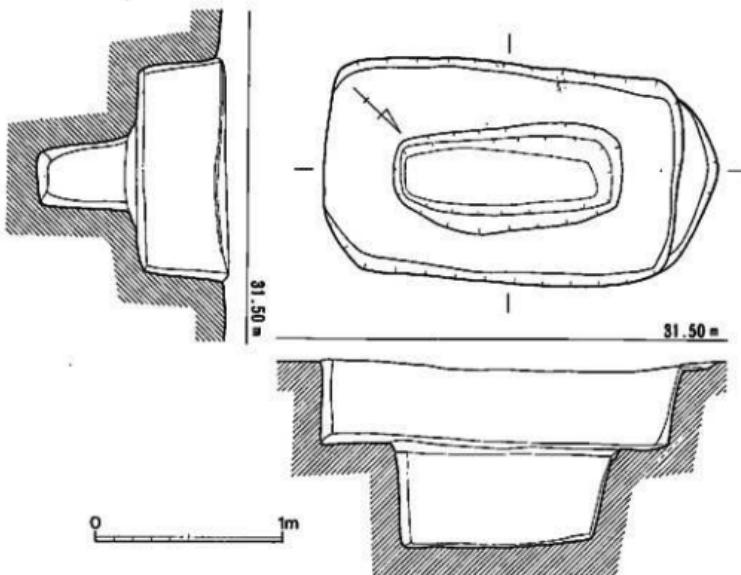
覆われ、これによると深さは40cm内外である。棺材の幅は6cm前後であろう。底板が存在したか否か不明である。遺物は何ら出土しなかったが、他の墓地の在り方などからして弥生時代後期に属する可能性が強い。

5. 土 坡 (墓)

1号土坡 (第74図、図版56-(1))

E-12区、52号塗棺の北側に位置する。土坡形態は、隅丸長方形を呈し、東側では2段掘りである。主軸方位はN36°Eを示す。土坡規模は長軸で1.6m、短軸で1.15m、床面長軸で1.10m、短軸で0.65m、深さ0.75mである。

土坡の機能は明らかでなく、遺物も出土していない。



第75図 2号土坡実測図(1/30)

2号土坡 (第75図、図版55-(1))

D-12区の中央付近にある墓塚の残りがよい土坡墓。墓塚は隅丸長方形で、長さ1.9m、最大幅1.17m、深さ0.43mの大きさである。墓塚の中央に人体を葬むる土塙が埋められているので、二段式の土坡墓といえるものである。墓塚の壁は垂直に近く、また残りのよい遺構ともい

える。土塙の上面は、長さ2.22m、北側幅0.45m、南側幅0.35m、中央幅0.55mの開丸長方形のプランが検出されているが、これは蓋受けなどの施設の段落ではなく、土塙の上面の角が崩壊して現状のようになったものと思われる。したがって土塙のプランは、開丸長方形で長さ1.15m、北側幅0.38m、南側0.3m、中央幅0.47mの大きさとなる。床面の大きさは、長さ1.02m、最大幅0.3m南側が少し広くなっている。深さは0.56mと深いものであるところから、南側を頭位にして、屈葬にすれば成人の埋葬も可能であるから成人用土塙墓と考える。また、墓室内の埋土より下の土塙内の埋土の方がやわらかったところから土塙には木蓋があったものと思われる。時期は副葬品がないので確定的な年代は出せないが、形態から弥生時代中期のものと考える。

3号土塙（第76図、図版56—

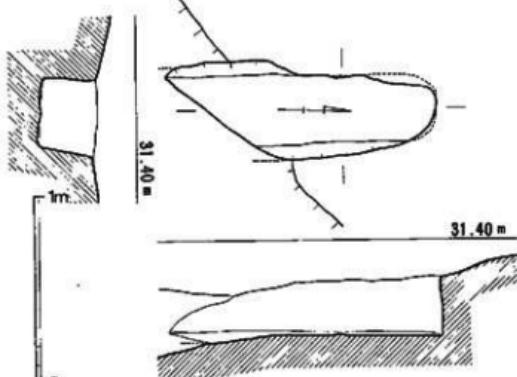
(2)

D-12区K、43号壺棺墓の西側に検出された土塙で、南側は合地の削平により不明である。幅に比べて長さのあるもので、現状では長さ1.45m、幅0.54mを測る。底面は中央部で若干高くなり深さ30cm、主軸はN1°Wとほぼ南北をさす。遺物は出土しなかった。

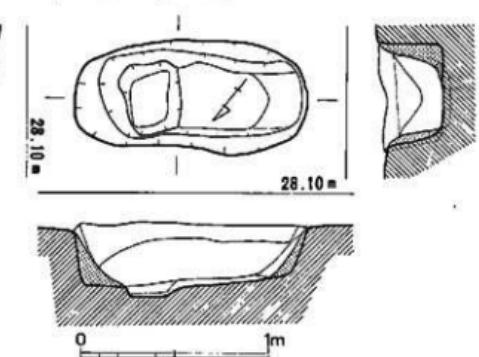
4号土塙（第77図、図版57—

(1)

C-10区、南台地の北側斜面に位置する土塙である。土塙の平面形態は楕円形を呈する。長軸壁、短軸壁とも灰白色の粘土を運らしているかの様であるが、土塙の周辺が灰白色粘土の地山であり、壁の崩壊も考えられ



第76図 3号土塙実測図(1/30)



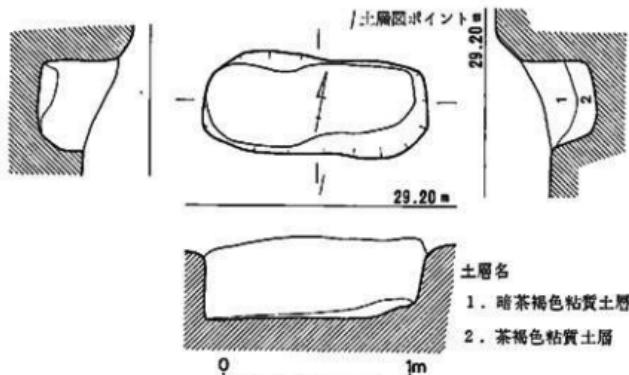
第77図 4号土塙実測図(1/30)

る。主軸方位はN 53° Eを示す。土塙規模は、長軸で1.25m、短軸で0.57m、深さ0.35mを測る。土塙の東北隅には、0.3m×0.4m、深さ0.05mの方形のピットが掘られている。この土塙は他の墓地の在り方から墓と判断するには困難である。出土遺物なし。

7号土塙(第78図、図版57-(2))

31号壺棺墓

の西側に位置し、長さ1.2mと小さな隅丸長方形を呈す素掘りの土塙で、現状では幅0.53m、深さ0.43mを測るが、上面は削平を受けている。塙底面は東から西へ傾斜し、10cm強の差がある。



第78図 7号土塙実測図(1/30)

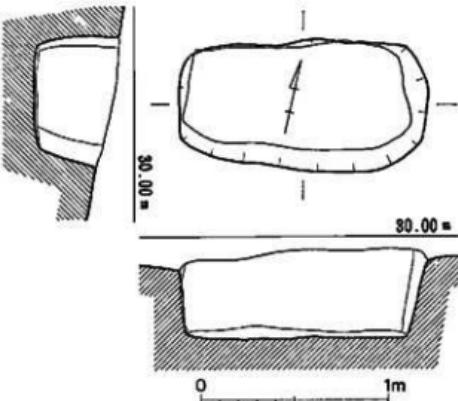
主軸方位はN 81° Eにとり8号に近い。塙内には2枚の土層が観察され1層は暗茶褐色粘質土層、2層は固くしまった茶褐色粘質土層である。遺構内からは何ら出土しなかった。

8号土塙(第79図、図版58-(1))

主軸方位をN 79° Eにとる素掘りの土塙で、D-13区、30号壺棺墓の南に位置する。長辺1.33mの隅丸長方形を呈す。短辺は東側が0.7m、西側0.57mと東側に広い。塙底面はほぼ水平で深さは中心部で0.47mを測る。遺物は何ら出土していない。

9号土塙(第80図、図版58-(2))

D-13区で検出された土塙で20号壺棺の北側に位置する。各地の南側を巡る29, 30mのコン



第79図 8号土塙実測図(1/30)

タに平行して作られる。上部は削平されているが二段掘りであることが判る。長辺 $2.05m$ 、短辺 $0.6m$ 、深さは中央部で $18cm$ と浅い。上段部南側は $8cm$ ほどしか平坦部が残らないが、北側は広いところで $30cm$ 内外ある。本来は南側に

もきちんとテラスを有していたのであろう。内法は長さ $2m$ 、幅 $0.33m$ 主軸方位は $N85^{\circ}E$ で、東側は木の根で擾乱されている。土塙の上部より壺形土器の底部が出土した。

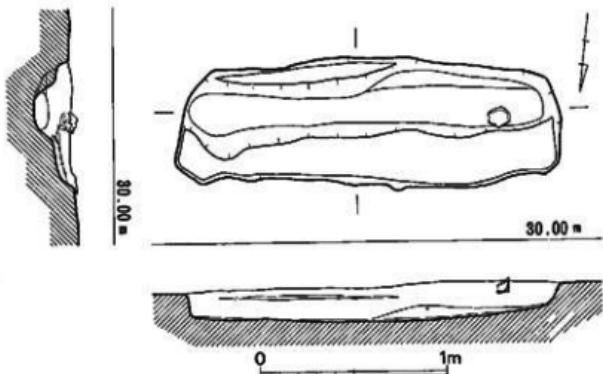
6. 石蓋土塙墓 (第81図、図版59-①・②)

C、D-12区に位置し、4号・5号石棺、木棺墓とほぼ主軸が一致する。墓塙形態は、洞丸長方形、主体部は長辺円形を呈し、二段掘りである。蓋石は5枚使用しており、すべて花崗岩である。蓋石は東側に比較すると西側に大き目の石材を使用、東側にのみ小口石を使用している。小口石は長軸 $30cm$ 、短軸 $12cm$ 、深さ $7cm$ の掘方を掘り、突刺している。墓塙規模は、一段目の墓塙は長辺 $2.4m$ 、短辺 $1.5m$ 。主体部の長軸 $2.2m$ 、短軸 $0.7m$ 、深さ $0.3m$ を測る。蓋石下には5ヶ所にわたって砂混りの白色粘土を若干使用している。主軸方位は $N80^{\circ}W$ を示す。主体部の構成、石材の使用方法から頃位は西側であろう。

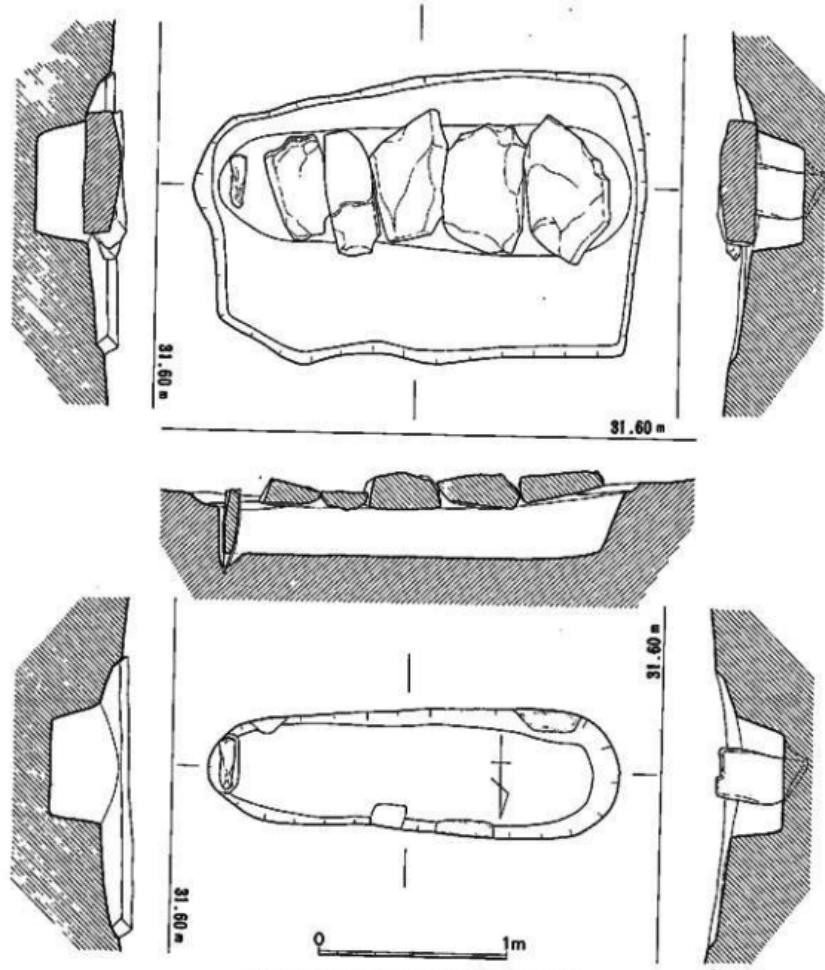
出土遺物、人骨等は検出されなかった。

7. 箱式石棺墓

門田の南台地からは5基確認されたが、全て破壊されていた。5基は2群に分かれ。1群はF-12区の舌状台地の先端の斜面にあり、もう1群はD-12区の尾根線上にある。F-12区の一群は3基で、主軸を略北側に向かって東西に並ぶもので、西側が削平されているので3基以上の可能性がある。D-12区の1群は石棺は2基であるが、同グループとしてあげられる石蓋土塙1基がある。この3基は尾根線上に平行に並び、F-12区の1群と異なる。



第9図 9号土塙実測図(1/30)

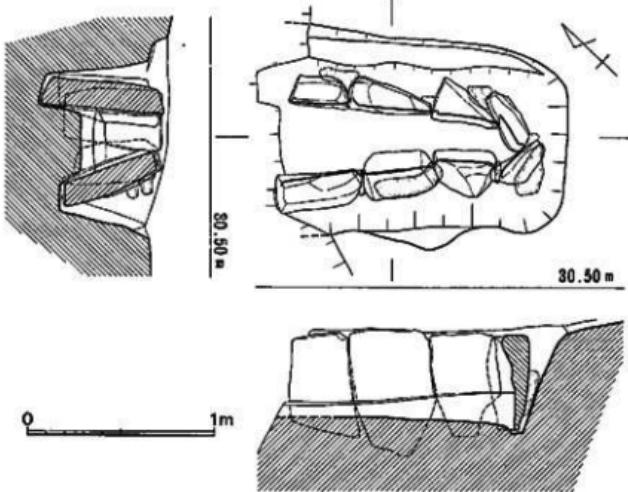


第81図 石蓋土塚墓実測図 (1/30)

1号箱式石棺墓（第82図、図版60-（1）・（2））

F-12区の3基のうち最も西側にある。蓋石と北側半分を除去された箱式石棺墓。墓塙は蓋石を除去されるほど地山を削平されているため、北東側の長辺に一部残っているだけで、直接石材組立てのための掘方となっている。広い墓塙はなかったらしく、北東側に残っている段落が対照的にあったとすれば、幅約1.3mの墓塙であったことになる。石棺組立てのための掘方は、現状で長さ1.64m、幅0.95mが残っており、石棺の幅の広い頭部を失なっている。

石棺の主軸はN43°Wで石材として花崗岩が使用され、南東側の小口は2つの石で合掌的に組まれ、北東壁に3個、南西壁に3個残っている。石材を組立てるためには床面より深く掘り下げる側れるのを防いでおり、そのためには石材を後約することなく縦に使用している。石棺の内面には赤色顔料が塗られ、石材の空間には外側から青色粘土で目貼りされ、さらに側壁と蓋石との間に粘土があったらしい。床面は地山面からさらに7cmから17cmの床土を置いており、この上に赤色顔料が3cmから5cmの厚さで残っていた。床面のプランは、南東側幅22cm、現状最大幅43cm、長さ1.25mの広さである。床面の深さは壁面上端から30cm～40cmとなっている。



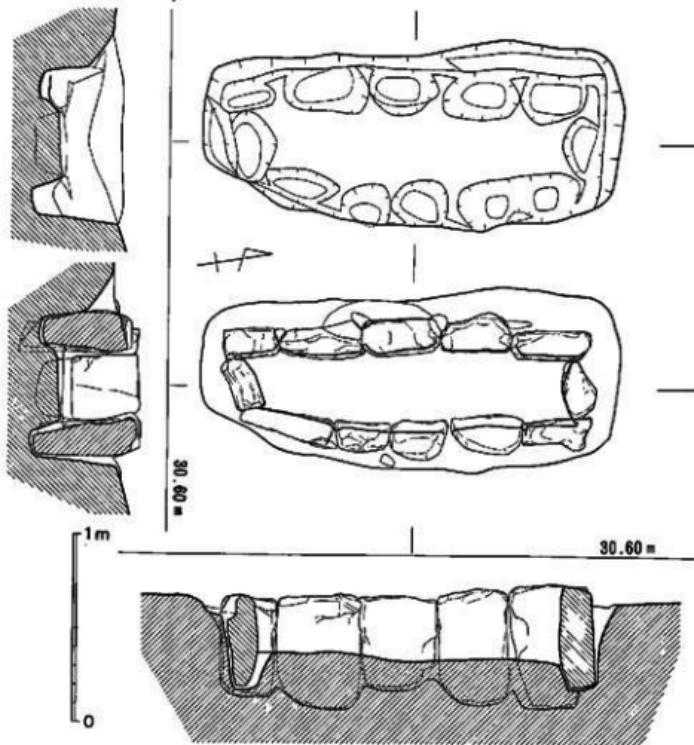
第82図 1号箱式石棺墓実測図(1/30)

2号箱式石棺墓（第83図、図版61-（1））

F-12区の1号箱式石棺墓の東側にあり、蓋石の全部を失なった箱式石棺墓。墓塙は、やはり広いものではなかったらしく、石材組立ての掘方の周囲に一部残っているだけである。現状で

のプランは、不整隅丸長方形、長さ2.24m、北側幅6.86m、南側幅0.6m、最大幅1.0mの大きさである。石棺の主軸はN9.5°Eで、石材は総て花崗岩である。石棺は、両小口に各1個、東西壁に各5個の石材で組立てられているが、やはり1号と同様に床面より深く掘られ中に石材を縦に使用している。壁面には赤色顔料が残り、床面にも荒されていたが、厚いところは5cm程度残っていた。粘土目貼りも同様であるが、西側の掘方内上面で水平な面として粘土が検出されたので、この面まで掘方内が埋めもどされた後、人体の安置など内部作業が行なわれたようだ。

床面プランは、長さ1.62m、北側幅0.38m、南側幅0.3mの大きさであるが、中心部幅が最も広く0.45mとなっている。北側が頭部と思われる。床面の深さは約30cmであろう。椁外西側の北から1個目と2個目の石材の縫目で不明鉄器片が発見された。石棺上面から19cm下であるから、棺内作業の時は完全に埋戻されていたことになる。



第83図 2号指式石棺基実測図(1/30)

出土遺物

鉄 器（第84図、図版61—(2), 80—(3)）

一方が欠損しているので、何の部分か不明である。現存長5.9cm, 破口の幅0.85cm, 厚さ0.3cm, 戻幅0.65cm, 厚さ0.25cmのもので、第84図のように錯でふくらみ別個体が接着したようになっている。形状から考えると她的刀先の方の半分以上を欠損したものとせざるをえないがそうすると古墳時代のものとなる。刀子の茎とするには幅に比較して長すぎるようだ。

3号箱式石棺墓（第85図、図版60—(1)）

F-12区の2号石棺墓の東側にあり、完全に石材を抜き取られた箱式石棺墓。蓋板は、石材が抜き取られたわりには完全に残っていた。棺内を最初に荒らし、内側から石材を抜いたものと思われる。

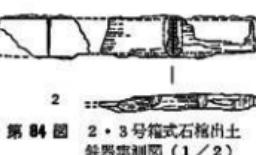
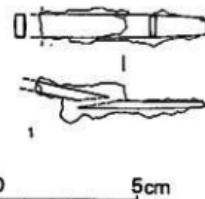
蓋板のプランは、北西側の短辺は丸く、南東側の短辺は隅丸となって、石棺ぎりぎりの掘方だけとなっている。形状からいっても、石棺を組立てるに十分な広さの蓋板は、蓋石のレベルまで後世の削平がおよんだと同時に消滅したものと思われる。現在の掘方は長さ2.24m、北西側幅1.0m、南東側幅0.75m、床面までの深さ0.44mの規模である。掘方内の掘乱がよんでもない周囲には、現床面から30cmおよび40mのところに粘土帯が残っており、これは2号石棺墓のように側壁外部の上面近くにある目貼り粘土と思われる所以壁面の高さが予想できる。掘方の床面には石材の抜き跡が残っているので、床面プランと石材の組合せが予測できる。これによると北西側小口は1個、南東側小口は1号石棺墓のように2個による合掌式組合せ、北東側壁は4個以上、南西側壁は5個の石材を組合せ主軸をN 0° Wに向かた石棺であったようだ。北東側壁も痕跡のない部分が広いので2個分と考えると南西側壁と同様に5個となる。石材は花崗岩であったらしく、北東側壁に小石が残っていた。床面の大きさは、長さ1.68m以上、北西側幅0.29m以上、南東側幅0.23m以上となり、中央部が広くなる可能性が強い。

床面は赤色顔料も残らないほど荒らされていたので副葬品の存在は不明であるが、荒らされていない南西側棺外の南東側小口近くに粘土上面のレベルで刀子らしき鉄器1個が発見された。全体の形態から脚部と思われる方である。

出土遺物

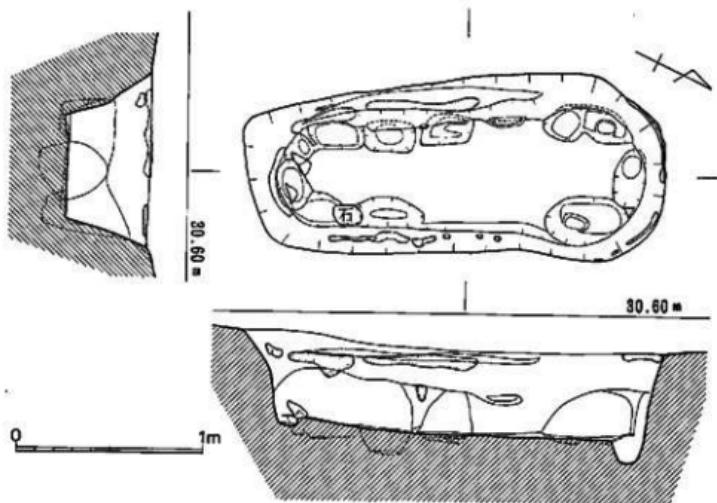
鉄 器（第84図、図版80—(3)）

非常に薄い作りであるため、発掘時に欠損したので全長は不明。茎は現存長5.5cm、幅1.2cm、厚さ0.15cmあるところから、全長は10cm以上のものであったろう。現存刃部は幅1.4cm、厚さ



第84図 2・3号箱式石棺出土
鉄器実測図 (1/2)

0.1cm 強となっている。茎部には木質が残り、木目が平行に通るが、これに直交して一部にサクラ港状の痕跡もある。



第85図 3号箱式石棺墓実測図(1/30)

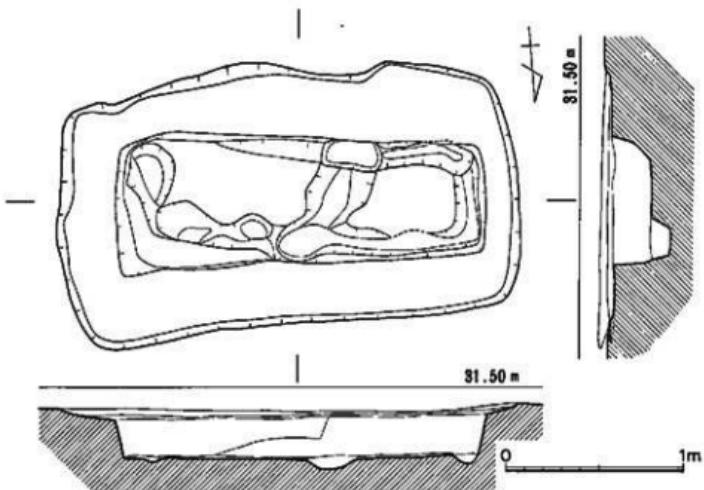
4号箱式石棺墓(第86図、図版55—(1))

D-12区の東側にあり、完全石材を抜き取られた箱式石棺。墓塚は、浅いながらも旧状をうかがえるものが残っていた。墓塚は隅丸長方形で、主軸長2.45m、東側幅1.22m、中央幅1.38m、西側幅1.32m、深さ7cmの大きさである。墓塚の中央には石棺があったと思われる擾乱された土塗が先に検出されていた。掘り上げると床面には不完全ながら、石材の抜き跡と思われるものがいた。擾乱された掘方は長方形で、長さ1.98m、西側幅0.73m、東側幅0.58m、深さ0.22mの大きさで、床面の周囲には石材の抜き跡がある。

石棺の詳細な組合せは不明であるが、主軸をN86°Wに向け小口に1個、側壁に5個程の石材が使用されていたらしいが、粘土や赤色顔料や副葬品は残っていなかった。床面の広さは、長さ約1.51m、幅約0.35mであるが、頭部の位置は不明。

5号箱式石棺墓(第87図、図版55—(1))

D-12区の東側で、4号石棺墓の北側に接し完全に石材を抜き取られた箱式石棺墓。墓塚は、浅いが隅丸長方形の広いもので、長さ3.18m、西幅1.9m、中央幅1.85m、東幅1.43m、深さ6cmの大きさである。墓塚の中央には、石棺の抜き跡が先に検出されていたが、主軸が



第88図 4号箱式石棺墓実測図(1/30)

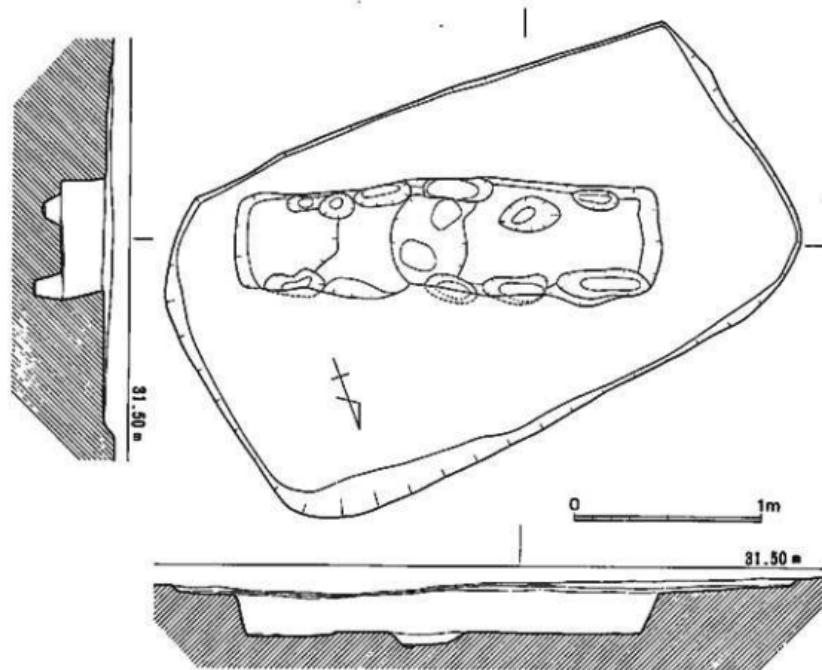
N8°Wの方向で、墓壇の対角線方向となっているので、当初は別の道標と思われていた。掘方は長方形で、主軸長2.27m、西側幅0.5m、東側幅0.58m、深さ0.23mの大きさである。床面の抜き跡によると、両小口は不明であるが、南側壁によると5個の石材が使用され、東側小口石が側壁の内側にはいるものであったことがわかる。床面の推定の広さは、長さ約1.9m、西側幅約0.33m、東側幅約0.32mであるが、頭部の位置は不明である。赤色顔料や副葬品は発見されなかった。

まとめ

以上のことから2群の石棺群が、立地や方向性あるいは副葬品や赤色顔料などの質的な面において性格の違ったグループということがいえる。残念ながら全部の石棺が荒らされていたので、立証が困難である。

方向性の問題で、石蓋土塙墓がD-12区のグループに含まれることは先に述べたが、この理論からすれば、D-12区の中央部にあり、4号石棺墓の主軸上にある木棺墓はどうであろうか。年代のきめてのない双方であるが、八女市龟ノ甲遺跡や鞍手郡若宮町沙井掛遺跡のように弥生時代後期から古墳時代初頭にも木棺墓があるところから可能性が強い。方向性からすると2号土塙墓・3号土塙は可能性が少ないとになる。

最後に問題になるのは年代であるが、決定的なものはないが、鉄器と3号箱式石棺の搅乱部



第57図 5号 石室式石棺墓実測図 (1/30)

分に混入していた、弥生終末の高杯片がある。高杯片は門田2号墳墳丘内で発見された高杯脚部と同一個体と思われるもので、西新式と報告されているものである。この南台地には弥生終末期と思われる石棺群以外ではなく、他に土器片も発見されていないく、最も可能性の強いものである。方向性の問題から2群の間に年代差がある可能性はあるが、不明とせざるをえない。

註1 八女市教育委員会「鳥ノ甲遺跡・福岡県八女市室間の弥生遺跡調査概報」1964

2 福岡県教育委員会「くらてのむかし」第3集, 1976

3 福岡県教育委員会「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第1集, 1976

III 出土人骨と貝輪について

1. 人 骨

概 摘 所 見

保存状態：福岡平野の標高30m附近の他の集団墓棺窓人骨にくらべて全般に不良である。

埋葬姿勢：全般に保存不良があるので、確言を控るが、部分骨の出土位置などを参考にすると、ほとんどが仰臥屈葬であると思われる。

風習的抜歯の証跡：これも保存状態に災されて確実な例を見出しえなかつた。少くとも上下の齒列から判断して痕跡を認められないものは「無」と記載し、他は不明なものが多いが、全般的にはほとんどこの風習は消滅していたと考えて大過ないであろう。

攝 図 説 明

7号人骨（第89図）男性、成年の頭骨。門田人骨中で保存状態最良のもの。鼻骨、右頬骨弓及び右下顎骨の欠失部を補修してある。

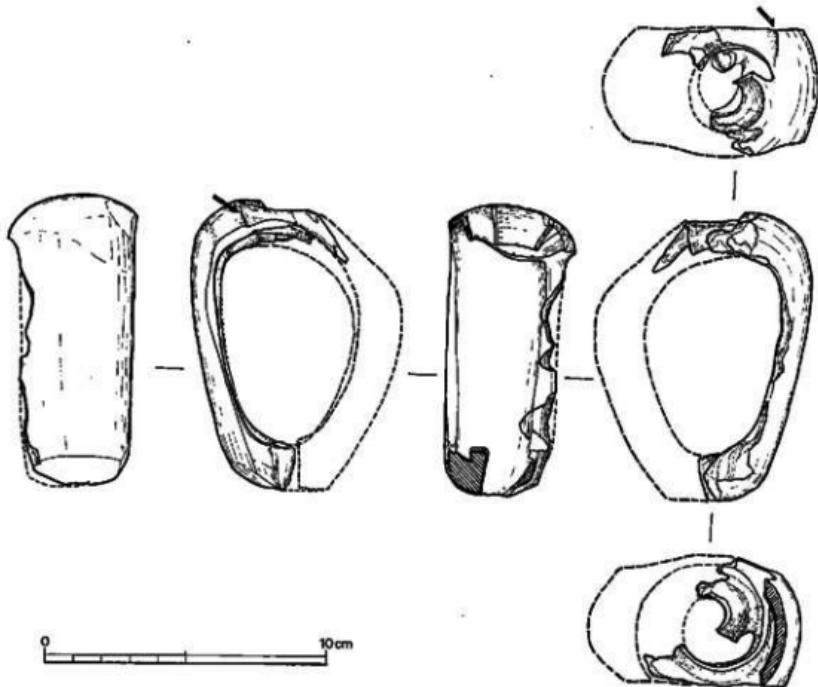
69号人骨（第90図）女性、老年の左側面前腕骨骨幹部骨折。少くとも受傷後3ヶ月以上経過した変形治癒状態を示し、典型的な側方転位と短縮転位を見る。

2. 貝 輪

（1）K59人骨（男性・成年）着装貝輪片（第88・91図）

出土状態：K59人骨は仰臥屈葬され、上肢は左右とも肘で屈して前腕を胸にのせた姿勢で出土した。貝輪はその右前腕の中央部附近に、橈・尺両骨を東ねる恰好であったから着装されていたことは確かであろう。ただ尺骨において肘を曲げた、すなわち上下端が逆の状態で図内の軸位が見られ、貝輪自体も本来の装法から期待される「向き」から大きく180度も回転して出土した。遺体の腐敗とともに自然に沈下したのであれば、a辺（文献1第152図参照）が低位にも辺が高位に出土すべきであるが、実際は逆であった。発見時に人為的に転位させられたのではないかと始め疑ったが、貝輪自体の腐食の状況を見るとa及びb辺に著しく、b辺を高位に出土したことは間違いない。おそらく遺体軟部が腐敗して行くある時点で、急激な肋骨の倒伏が起り、そのハズミで貝輪が回転したものであろうと解している。

形態：輪のほぼ半周を消失している。欠失部は前記の図でa・b辺とc辺の一部とである。外長径102mm、内幅径は消失のため不明であるが、その輪廓から推して72mmを下らないであろう。d辺で測った辺縁高（厚み）は高く40mmを測る。



第4図 門田K・59号人骨着装貝輪(1/2)

この貝輪が、弥生時代に北部九州で特に濃密に流布している。南海産の巻貝「ゴホウラ」を利用したものであることは、競そのものの重厚さ、全体の輪廓、螺旋の巻き方などからほぼ確実とみてよい。ただ決定的な証拠の提示を求められても、風化と加工が著しく表層の斑紋などを証明出来ない現状では困難である。

原材における利用部は、体唇部は競軸を含み殻口面に平行に厚く残したものである。このような利用の角度は、体唇と次体唇との間の縫合線の最後の流れが競頂に向って急に90度ほど向

きを変えた部分（実測図矢印）が、幸い残っていることからそのように判断しうる。次に、どれほどの大さの原材を使用したかというと、手持の沖永良部島皆岬産の標本と比較して、殻長（殻頂から殻軸の前溝端までの直線距離）14.5cm、殻のみの重量720gほどの材料と思われる。同鳥産のものでは中型の部類に属する。

卷貝製縦型貝輪としての型：この貝輪と類似した既知の例は、近くでは諸岡73（文献2）、遠くでは奄美ヤーヤ洞窟（文献3）に出土例がある。ただ、この两者とも半欠で、この門田山土例とは貝輪辺縁の対側が残存していて、一見したところでは形態的類似を見落し易い。また、この門田例ではC-d辺移行部に丸味を持たせている点も前二者と相違している。

弥生時代前末期における北部九州出土の卷貝製縦型貝輪には、土井ヶ浜（文献4）や金隈（文献5）に見られる如く辺縁高が高く、一全体の所持個数が1乃至2個で少ないという傾向が見られる。これに対し弥生中期の諸岡74・53（文献2）型は全輪脚が丸味を帯び、しかも一連多数個が着用されている。従ってこの門田例は上記両者の中間型的な形態をとるといえよう。

（2）K85人骨（性別不明、幼年）伴出貝輪片（第92図）

出土状態：2片あり、そのうちの小片は、歯その他人骨小片の出土状況から見て、その遺体の胸部に相当する處から、棺底より浮いて出土していることが写真でも判る。他のやや大きい1片は棺外で、しかも発掘接合部の下から出た。

これらの両片は共に同程度の著しい風化を受けて居り、表面の性状、貝輪としての相当部位から推して同一貝輪の破片である可能性が大きい。小片は前記参考図のa-b辺移行部にあたり大片はdに相当する。この両者を併せて一個の貝輪を想定した場合、その大きさは外長径65mm、同幅径45mm程度であろうと推察され、幼小児としてふさわしい大きさである。辺縁高は小片で28mm以上、大片17mm以上と見られる。型としては、辺縁高が高くK59人骨着表のものと同様の型としてよいであろう。

このような小型の幼小児用のものは、すでに金隈K146人骨（文献6）及び伯玄K85人骨に副葬された例があり、弥生中期の福岡平野においては幼小児も貴重な貝輪を所持あるいは副葬されることのあったことを物語り興味深い。

ただ、気になるのは、大片が棺外から出土したことであるが、何か呪術的な意味でもあって故意に破壊して棺外に副葬したものか否か、今後も注意すべきことと思う。しかし、棺外副葬の場合、棺内より保存条件は不良と考えられるので、検出はかなり困難であろう。

附 文獻

- 立岩遺跡調査委員会編「立岩遺跡」、河出書房新社、1977
- 福岡市教育委員会編「板付周辺遺跡調査報告書（2）」、1975
- 永井昌文・三島格「奄美大島土浜ヤーヤ洞窟遺跡調査報告」考古学雑誌 50-2、1964

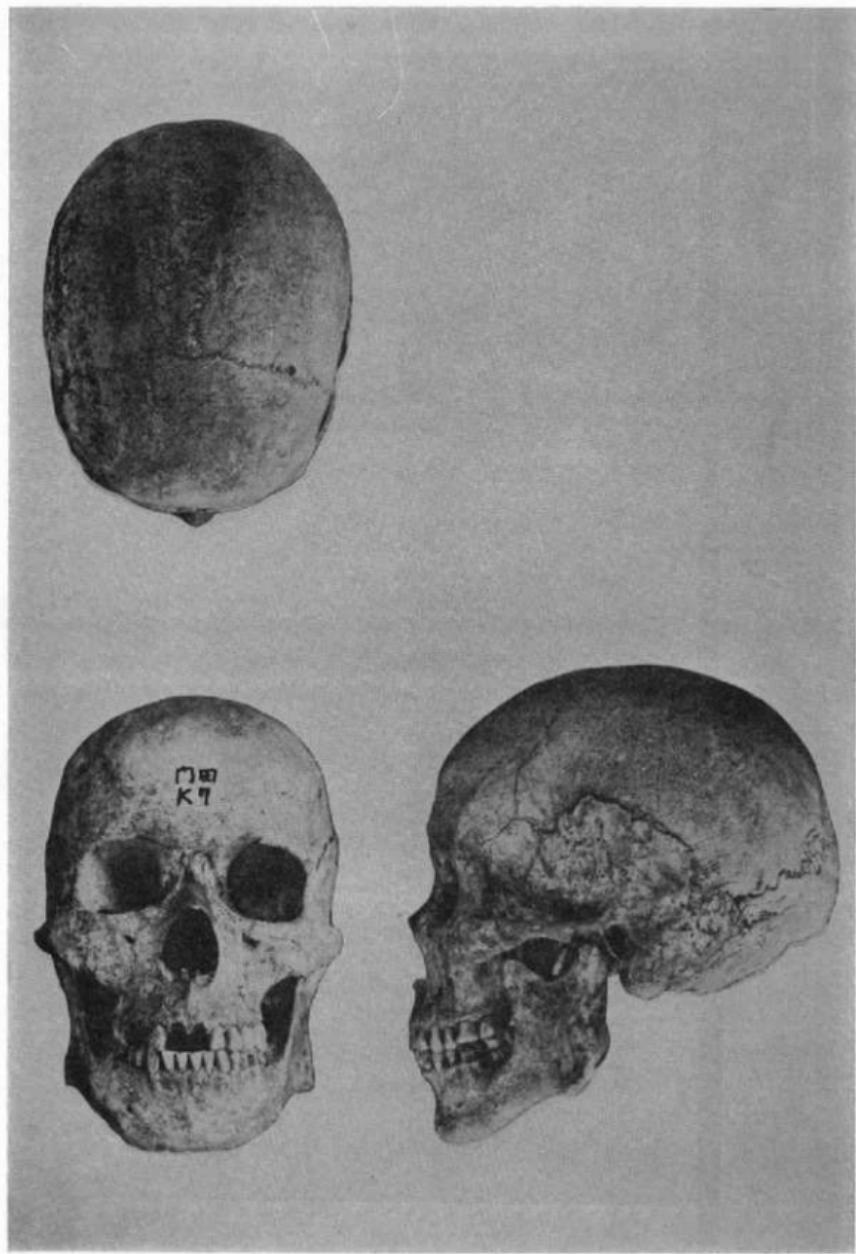
4 日本考古学協会編「日本農耕文化の生成」東京堂 1961

5 福岡市教育委員会編「福岡市金屋遺跡第二次調査報告」1971

6 橋口達也・折尾学「小児骨に伴ったゴホウラ製貝槍」九州考古学 47, 1973

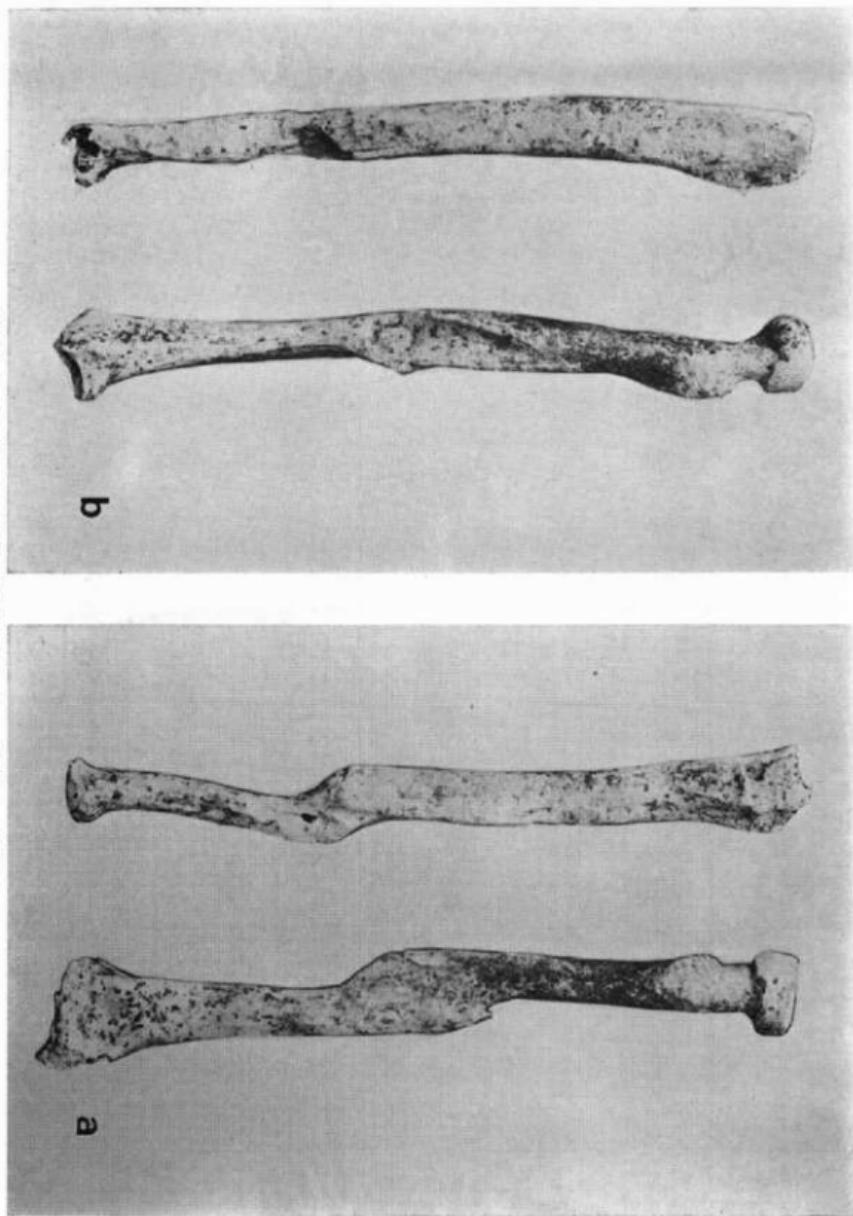
第3表 出土人骨一覧表

番号	性	年令	保存状態	身長 cm	頭頂示数	拔歯	備考
K 3	♀	熟年	○	—	80.7	—	凡例: ♀: 性別不明
K 7	合	成年	○	164.0	77.8	無	成人……20才以上なるもの、成年・熟年・老年の区分不明
K 17	♀	成人	○	—	—	—	○ 最良
K 18	♀	若年	○	—	—	—	○ 良好
K 19	♀	成年	○	—	(77.8)	無	△ 不良
K 21	♀	成人	○	—	—	—	保育状態
K 24	♀	熟年	△	—	—	無	○ 部分的残存
K 25	合	熟年	○	—	—	—	() で囲める数値はやや不確実
K 33	♀	熟年	○	—	—	—	— は不明
K 41	合	熟年	△	160.8	—	—	—
K 47	♀	熟年	○	—	82.9	無	2才程度
K 52	♀	幼年	○	—	—	無	5才程度
K 53	♀	幼年	○	—	—	—	—
K 54	合	成人	○	—	—	—	4才程度
K 58	♀	幼年	○	—	—	—	頭片赤色染料附着
K 59	合	成年	○	≥158.5	—	無	右前腕に貝縫石装
K 60	合	熟年	○	158.0	77.7	無	—
K 62	合	成年	○	≥157.8	—	—	—
K 65	♀	幼年	○	—	—	—	5才程度、貝縫片2ヶ伴出
K 66	合	成年	○	≥161.0	—	—	成年とする根拠薄弱
K 68	♀	幼年	○	—	—	—	4才程度
K 69	♀	老年	○	148.8	77.8	無	左側面の腕骨々折

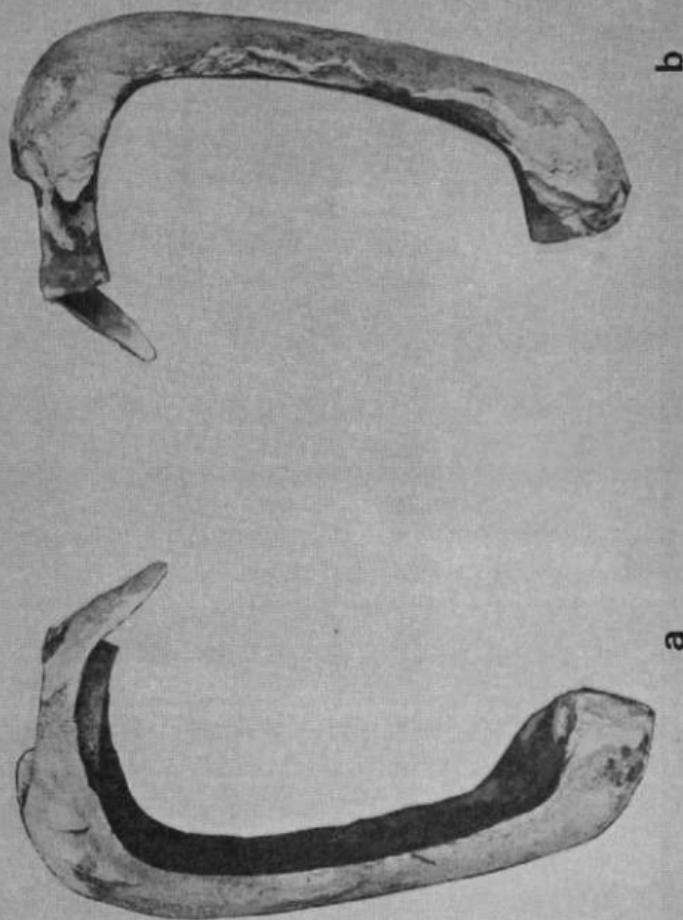


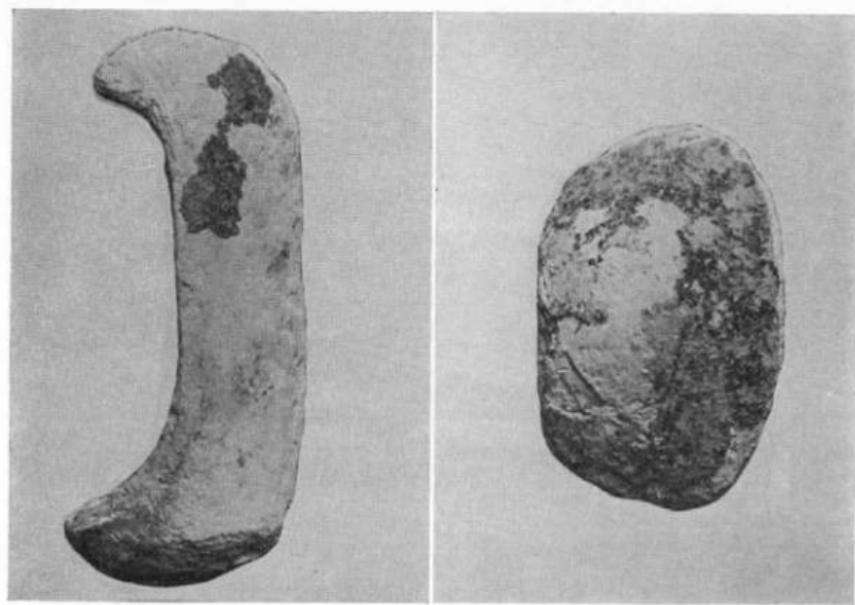
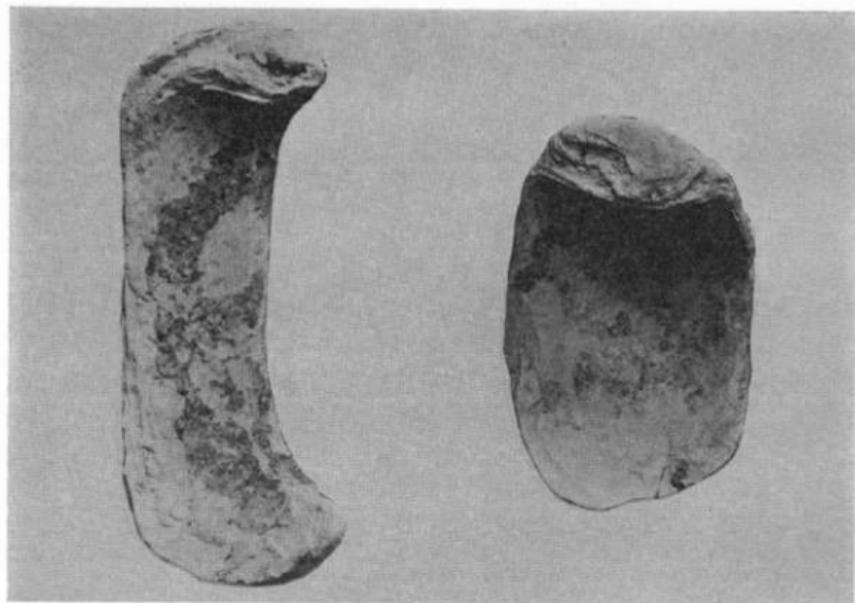
第88図 7号墓棺墓出土の頭骨

第66図 6号墳前室出土の左側面前腕骨骨幹部骨植 (a 前面观 b 内侧面)



第1圖 59号遺物出土の貝輪 (a 手側面) b 手首側面





第 82 図 65 号 墓出土の貝輪片

IV 結語

門田南台地の弥生時代の墓地群は、22号袋状竖穴内から検出された48号甕棺墓を除けば、主に弥生時代中期前葉から埋葬行為が開始され、箱式石棺墓の出現する弥生時代後期末に終焉を見る。

甕棺墓の総数は69基を数えるが、1号甕棺墓は台地削平の際に転倒したと思われ、遺構として捉えられたのは68基である。その内、弥生時代前期末1基、中期前葉34基、中期中葉14基、中期後葉から後期初頭17基、不明3基である。

その他の墓地としては、木棺墓1基（後期の可能性がある）、石蓋土塚墓1基、土塚墓（土塚番号2、他の土塚は墓か否かは不明）、箱式石棺墓5基（その内、天井石が抜かれたもの2基、全て抜かれたもの3基である）等が甕棺墓より後出する。これらは、本遺跡の主体を占める甕棺墓に比較して総数は少ない。

弥生時代における当台地の使用は一応終焉し、後に古墳時代後期と中世、近世へと断片的に墓域として使用されており、集落跡としては台地東側に若干見受けられるのみである。また袋状竖穴跡として短時期に使用されたこともある。このことから南台地は、墓域としての用途が主流を占めていたのである。

次に甕棺墓と周辺甕棺墓群について視れば、馬辺甕棺墓群、例えば原遺跡、門田北台地（19-27地点）、宗石遺跡、一の谷遺跡等は、一部断続的に甕棺墓が當まれてはいるが、比較的短時期で墓地としての機能を失う。しかしながら本遺跡は、弥生時代前期末の甕棺墓1基は例外としても、弥生時代中期前葉から後期終末まで途切れることなく承続的に墓域として機能している。このことは、弥生時代中期前葉の一集団墓として当該地の使用が開始され、中期中葉、中期後葉、後期初頭、終末と一連の埋葬形態を消化しその変遷を示すものである。この事象については、墓地の在り方の所で若干述べるが、本遺跡の甕棺墓は、台地南斜面に沿って二列に埋葬されており、この二列埋葬の規則性が基本的には中期前葉から中期中葉頃まで失っていない。さらに、中期後葉から後期に當まれた甕棺墓も、他の先行する甕棺墓を切っておらず、二列埋葬の規則性は失うが、あらかじめ甕棺墓の存在を察知していたかのような埋葬方法を探用していることから明らかである。

このように、本遺跡での墓地は一巡の関係にあり、弥生時代中期前葉から定住した一集落の墓地として機能していたのである。

次に甕棺墓の時期及びその在り方と変遷について若干述べたい。

22号袋状竖穴内に埋葬された48号甕棺墓（弥生時代前期末）を除き、甕棺墓を主に中期の時期に限って観ると、南台地では森貞次郎氏編年表の汲田式から始まり、それに後出する甕棺墓（

ほぼ永岡遺跡の壺棺墓と並行）が主体を占め、全体の約55%である。中期中葉になると約20%，中期後葉から後期の時期は全体の約25%を占める。

その中で從来汲田式と呼称されていたものは54号・68号壺棺墓が相当すると思われる。これらの壺棺は、口縁部が内傾または水平を呈し、最大径が副部上半にある。頸部は内傾し、胴上半部及び中央部には一条の断面三角凸帯を貼り付けている。底部は上げ底を呈する。これに後出する壺棺が本遺跡では主体を占め、一つの土器形式と称されつつある「永岡式」に相当する。次に続く壺棺としては、37号壺棺墓が指摘できる。下壺は大形化し、頸部に一条、胴部に二条の断面三角凸帯を貼り付けている。次に位置づけられる壺棺としては、41号・49号・50号・67号等が相当すると思われる。しかしながら、67号壺棺墓は、下壺の時期は中期後半に位置づけられるが、上壺は後期の所産と思われ、從来から指摘されているように上壺が新しいことが理解できる。この場合、後期の範囲に入れるべきであろう。後期に位置づけられる壺棺は、30号・46号（小児棺）が挙げられるが数としては少ない。

さらに墓地の在り方とその変遷を観ると、前述したように台地南斜面の西側から埋葬が開始され、東側に移行するに従って時期的に新しくなる傾向がある。墓域西側では、47号の成人用壺棺墓と他の小児用壺棺墓を除けば全て埋葬主軸方位を同一にしており、台地南斜面に平行して二列埋葬の形態をとる。このことは、列間を墓道と解することが可能であろう。

このような事例は、筑紫野市大字永岡所在の永岡遺跡・筑紫郡那珂川町大字今光字宗石所在の宗石遺跡、朝倉郡夜須町所在の吹田遺跡の壺棺墓群に見受けられるが、永岡・宗石両遺跡とも壺棺墓の上層時期は門田南台地の壺棺墓群とほぼ同時期であるが、短時期（中期前葉）で墓地としての機能を失なっている。

門田の場合、壺棺の二列埋葬形態は東端の24号壺棺墓（中期前葉）・37号壺棺墓（中期中葉）とも一応保持しており、中期中葉まではこの傾向が強い。このことは、血縁的な相互の絆による墓域の堅持および他からの規制とは無関係に墓地の拡大が遂行されたことによる。

しかしながら、中期中葉を境に二列埋葬の規則性は失われる。この傾向は、D-13区以東が顕著になる。さらには、一集落内で弥生時代中期前葉から頗る堅持されてきた埋葬形態の意識が時世と共に薄れ、中期中葉で終焉を迎えることとなる。

さらに、西側（中期前葉）での小児棺墓は、規則性から逸脱し成人用壺棺墓の墓域内がそれに接する形で埋葬され、宗石・永岡両遺跡と類似する。成人と幼児とが血縁相互の関係にあった結果であろう。この傾向は、台地の東側に移行するに従って薄れ、血縁関係を基本とする埋葬形態は失なわれつつある。血縁関係を重視しなくなった埋葬意識の変革に起因するものであろう。中期後葉から後期に至ると、この傾向は確認できなくなる。

以上の事象から、門田遺跡南台地での墓地は、E-13区以西と以東、台地平坦面の墓地群、西側の箱式石棺群のグループに大別できる。

次に埋葬方法について観ると、壺棺墓内の人骨の遺存状態は不良で、22個体のうち回示可能な人骨は、7号・24号・41号・47号・59号・60号・69号の7個体のみである。これらは全て成人骨で、その内7号・41号・59号・60号が男性他は女性であった。

耕作により削平された成人棺・小児棺を除くと、殆んどが永岡遺跡同様墓塗に横穴を掘り込み、壺棺を水平または下窓を若干高位にして埋葬している。二列埋葬形態の規則性の中で横穴方位・頭位が通例と逆行するのが7号・26号・66号・68号のみである。規則性に合致する壺棺墓は、殆んどが下窓を横穴に挿入した後、下窓を頭位とし上窓を埋置している。しかし、41号壺棺墓（中期後葉）の時期になると頭位が逆になり埋葬姿勢が変る。⁴¹以後この傾向が通例となるようである。

埋葬姿勢は、殆んどが仰臥屈葬であり、60号壺棺墓の人骨脚部は腐乱の際に開脚したものと思われる。腕は両肘を曲げ、胸部に手を置く姿勢が通例で、僅かに7号壺棺墓の人骨が左肘を曲げ、右腕は下腹部に置く姿勢をとる。

さらに、永岡遺跡からは供飲用の土器を埋置した清状遺跡=祭祀遺跡の存在が確められ、同時期の本遺跡からは検出されてない。葬送儀礼の有無についてもその要因が今後の課題である。

本遺跡の59号・65号壺棺墓からはゴホウラ製の貝輪が検出されたが、59号壺棺墓は、被葬者の右肘を曲げた前腕に着装し、65号壺棺墓は、棺内および棺外から貝輪片が出土した。65号の場合は副葬品として認識し得るものである。この壺棺の被葬者は、5才程度の幼年であり、59号壺棺墓の被葬者と併に世襲的な傾向を強化する「選ばれた人」と理解されよう。

次に、門田遺跡では成人用壺棺と小児用壺棺の出土比率が、中期前葉・中葉・後葉以降とでは異なる。この結果を踏めて、周辺の壺棺墓遺跡群が門田南台地と同一傾向にあるのか、本遺跡のみが例外であるのかと言う問題点と仮に例外でないとすれば、何に起因するのか若干述べてみたい。

この作業を遂行するにあたり弥生時代前期および後期の壺棺墓は、当時の埋葬様式の中核ではなく、前者が発展段階、後者が衰退段階にあり、さらには他の埋葬様式との並存関係とが相俟って把握するには問題があるため、前期の場合は木棺墓と土塙墓とを数に加えた。このため若干の数字の変動は免れないが、大過ないものと考える。

弥生時代を前期・中期前葉・中葉・後葉から後期（後葉が主流を占める）の時期と遺跡・地点別とに区分し壺棺出土比率の傾向を観ると（第5表参照），前期では木棺墓・土塙墓等の並存埋葬墓を加算すれば、中寺尾⁴²・金隈西⁴³遺跡では成人墓が幼児墓を大きく上回り、成人の死亡率が高い。

中期に至ると並存の埋葬様式はほぼ姿を消し壺棺墓が主体を占め、中期前葉に位置づけられる永岡遺跡・宗石遺跡・門田遺跡（南台地）・板付G 5 a 地点、金隈遺跡では、前期の死亡比⁴⁴

第4表 弥生時代の壺棺墓における成人棺・小児棺の出土比率一覧表

遺跡名	出土総数	成人棺	小児棺	比率(%)	時期	備考
中寺尾	45	31	14	成69 小31	前期末	壺棺墓の他土坑墓・木棺墓 含む
金隈	35	28	7	成80 小20	"	"
永岡	52	48	52	成48 小52	中期前葉	
東石	60	24	36	成46 小54	"	新原正典・木下修氏教示
門田(南)	37	17	20	成46 小54	"	
金隈	31	13	18	成42 小58	"	
板付G5a地点	39	1	38	成2 小98	"	
吹田	28	16	12	成57 小43	"	完備していないため比率は逆転する可能性がある。
門田(南)	14	6	8	成43 小57	中期中葉	
宝合	6	3	3	成50 小50	"	
金隈	71	30	41	成42 小58	"	
諸岡	25	17	8	成68 小32	"	
蒲田A・D地点	13	10	3	成77 小23	"	
門田(南)	17	11	6	成65 小35	中期後葉 以降	
一の谷	29	22	7	成76 小24	"	
蒲田A・D地点	8	5	3	成62 小38	"	
宝溝尾	6	6	0	成100 小0	"	
一の谷A地点	169	94	75	成56 小44	"	丸山康晴氏教示
道場山	101	68	33	成67 小33	"	九州鐵道自動車道関係埋葬文化財 調査報告書XXIV
金隈	10	4	6	成40 小60	"	
諸岡	21	11	10	成52 小48	"	

率に対して逆転傾向を示し、小児棺が成人棺を上回るようになる。さらには板付G5a地点を除けば、4遺跡ともほぼ同比率を示す。この傾向は若干の変動はあるが、中期中葉のある時点（門田南・宝合遺跡・金隈遺跡）まで続く。

しかしながら、弥生時代中期中葉（諸岡遺跡・蒲田A・D地点）を境に後葉以降になると前葉から続いた傾向が再度逆転し成人の死亡率が高くなる。しかも中期中葉頃までの比率差が少ないに対しその差は著しい。北部九州では、中期中葉から後葉にかけては壺棺の埋葬風習の最盛期であり、埋葬形態としては時代の趨勢で成人と幼児との埋葬様式が異なる可能性も実証

されておらず、
幼児の埋葬を
軽視すること
も考えられな
い。

とすれば、
弥生時代中期
前葉から中葉
頃までは当時
の弥生社会が
人口増加を必
要とし、しか
も要求が満た
れ得る社会状
況が確立して
おり、規制を

受けることなしに広範囲に墓域が設定され、二列埋葬の意識が確立する。当時としては幼年期を生き延びれば、成人に達する反証となろう。人口増加は、中期前葉頃まで分村活動が活発であり、谷水田等を利用した丘陵上に占地する集落が頻発化することに関連する。人口の増加に対する当時の農耕水準=農耕具の鉄器化とが相俟って北部九州では、中期中葉以降集落立地が丘陵から低地=より機能的な場として選定されることになる。

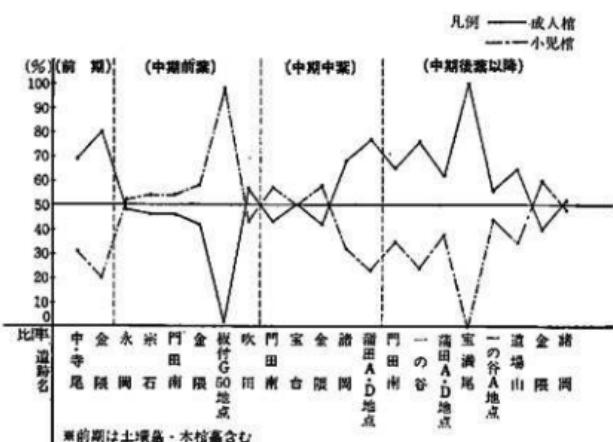
この様な激動社会の状況を経た後、蠶塚墓から出土する副葬品の集中化、ひいては厚葬につながる特定個人の出現へと社会状況は流動する。とりわけ中期後葉以降、銅器・石器による武器製作から鐵製武器に普遍化することにより、種々な要因による戦闘激化の社会状況が考えられる。

この過程と符合するかのように、中期後葉以降にかけての成人層の死亡増加と小児の死亡減少の状況がみられる。当時の激動過程での所産であり、戦闘による成人層の死亡も十分考えられる。ひいては出生率にも関連する可能性を見出しえるのである。

後に、住居跡群の周辺部に大規模な環濠を廻らした集落、例えば春日市大字小倉所在の大南遺跡・佐賀県三瀬基郡基山所在の千塔山遺跡の出現を見るのである。

門田遺跡南台地では、今回の報告が最後になり、過去何度かにわたって報告し、門田地区の古文書の歴史が明らかにされ多大の成果を得た。しかしながら、遺跡は現代人の欲望の波に押され消滅してしまった。この発掘の成果が研究の一資料となり助けることを願ってやまない。

第5表 蜜漬墓における成人棺・小児棺出土比率表



- 註1 福岡県教育委員会「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」一第2集一 1976
- 2 福岡県教育委員会「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」昭和50年度一
- 3 註2と同じ
- 4 「京石遺跡」、担当者の新原・木下両氏の教示
- 5 春日町教育委員会「一の谷跡」一春日町文化財調査報告第2集一 1969
- 6 福岡県教育委員会「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」一第5集一 1977
- 7 註6と同じ
- 8 福岡県立朝倉高等学校史学部「埋もれていた朝倉文化」一昭和44年
- 9 高倉洋彰「埴塚からみた弥生時代社会の発展過程」一考古学研究第20逸第2号
- 10 註6と同じ
- 11 2号、37号（中別中葉）から頭位が逆になると思われるが人骨が遺存しておらず明らかでない。
- 12 大野城市教育委員会「中・寺尾遺跡」大野城市文化財調査報告第1集 1977
- 13 福岡市教育委員会「福岡市金隈遺跡第一次・二次調査概報」1970~71
- 14 福岡市教育委員会「板付馬込遺跡調査報告書」（3）1976
- 15 日本住宅公団「宝台遺跡」1970
- 16 福岡市教育委員会「板付馬込遺跡調査報告」（2）1975
- 17 福岡市教育委員会「蒲田遺跡」1975
- 18 註6と同じ
- 19 春日市教育委員会「大南遺跡」1976
- 20 千塔山遺跡調査団「千塔山遺跡」1977

図 版



1 伐採後の門田遺跡航空写真（西から）1973.9



2 伐採後の門田遺跡航空写真（北西から）1973.6



図版 2
磐田追跡調査地区全景航空写真(南から)



1 昭和47年度門田地区予備調査航空写真（東から）



2 昭和47年度門田地区墓地群予備調査



1 昭和49年度門田遺跡全景航空写真（西から）



2 昭和49年度門田遺跡全景航空写真（南から）



1 門田地区航空写真（東から）



2 門田地区航空写真（南から）



1 門田地区航空写真（西から）



2 門田地区航空写真（北から）



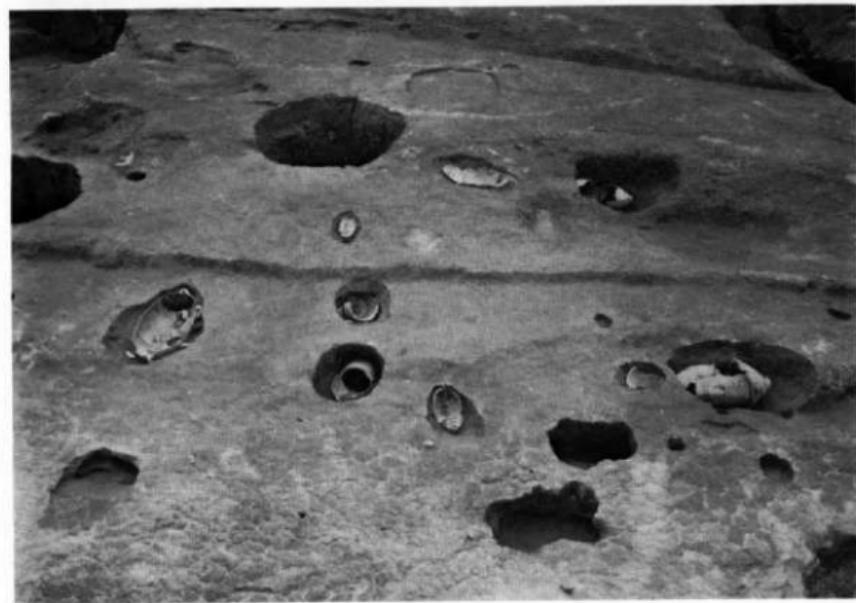
1 瓢棺墓群全景（東から）



2 瓢棺墓群西側近景（東から）



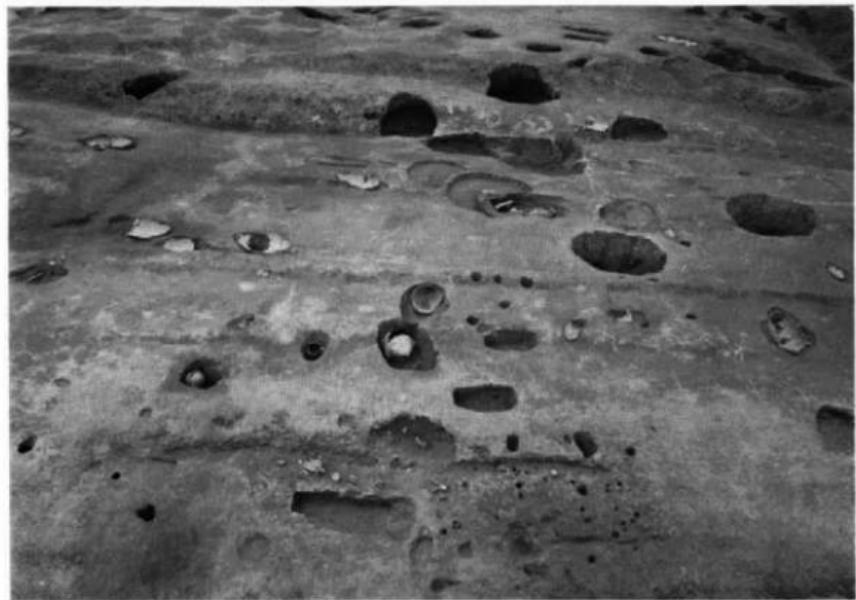
1 龜棺墓群西側近景（西から）



2 龜棺墓群東側近景（南から）



1 豊棺墓、箱式石棺墓遠景（南から）



2 豊棺墓群東側（南から）



1 銀棺墓群・箱式石棺蓋、石蓋土塚墓群近景（東から）



2 12号・13号・55号・57号銀棺蓋の切り合い状態（北から）



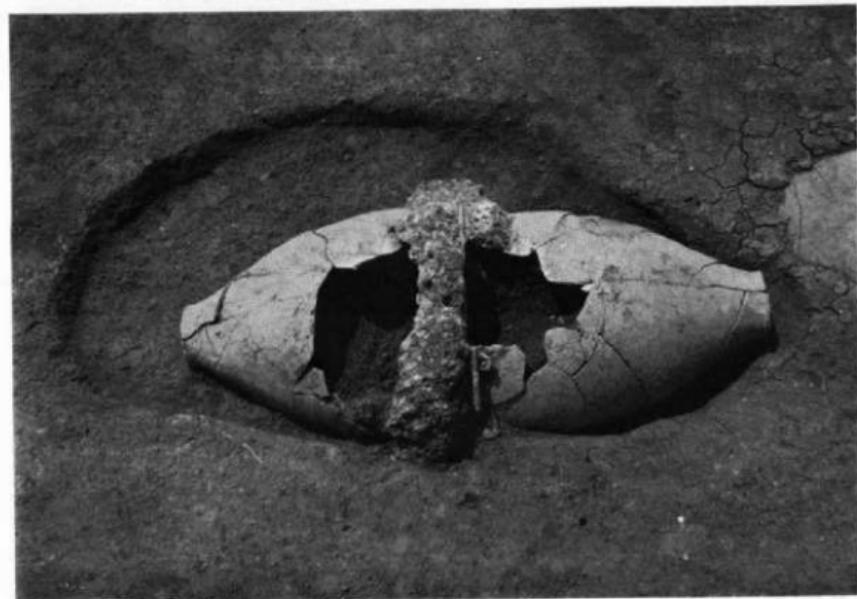
1 2号 瓦棺蓋



2 3号 瓦棺蓋



1 47号甕棺墓址内の4号小兒甕棺墓



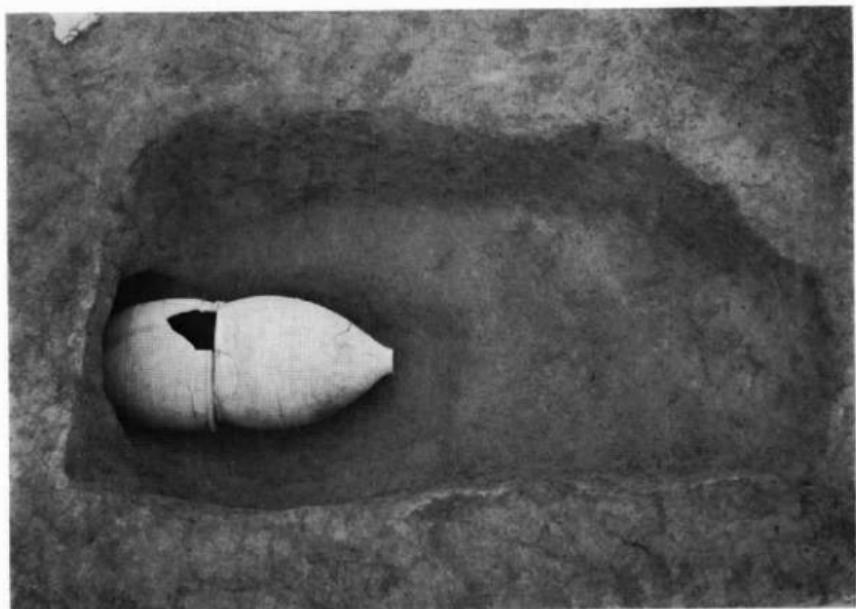
2 4号甕棺墓



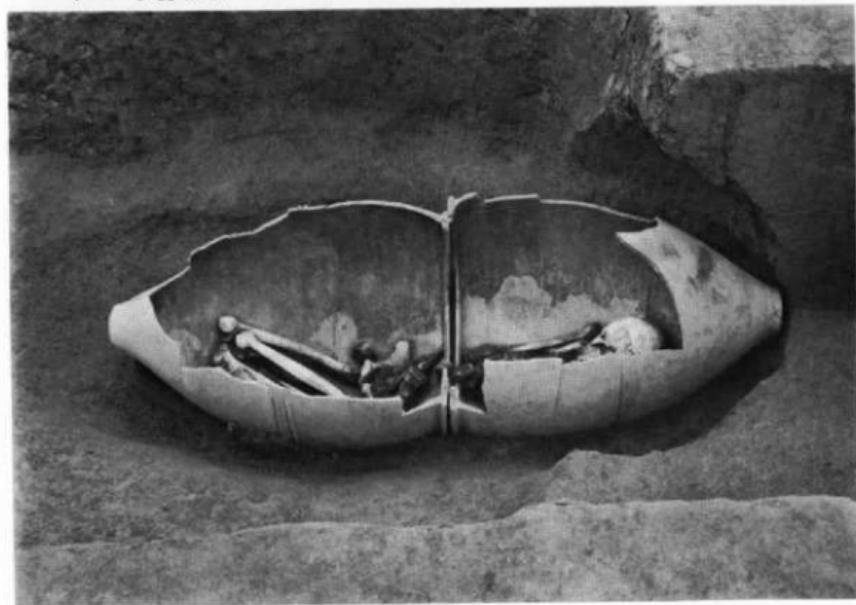
1 5号壺棺墓



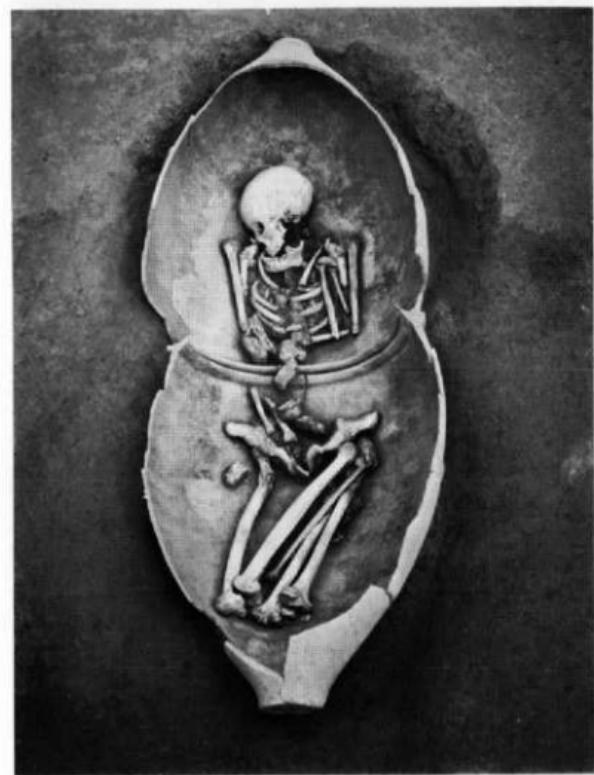
2 6号壺棺墓



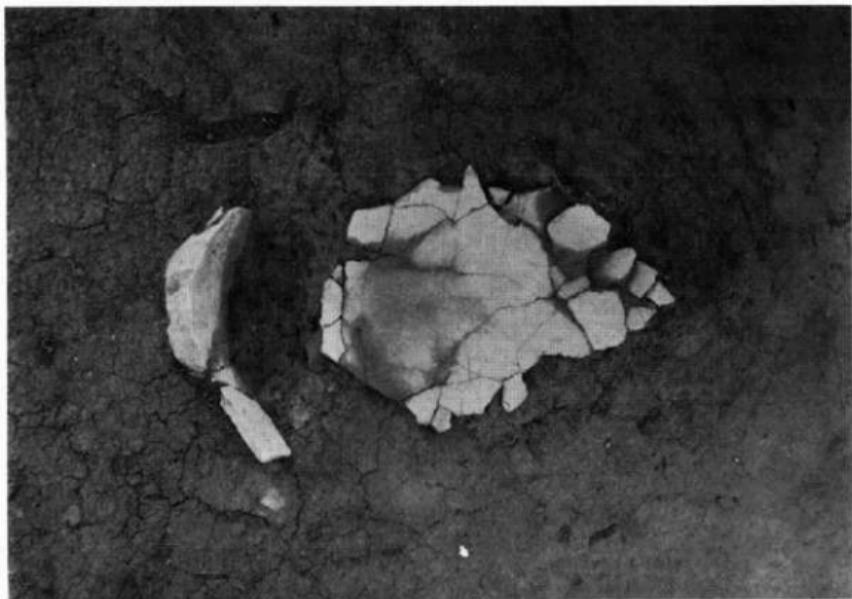
1 7号甕棺墓



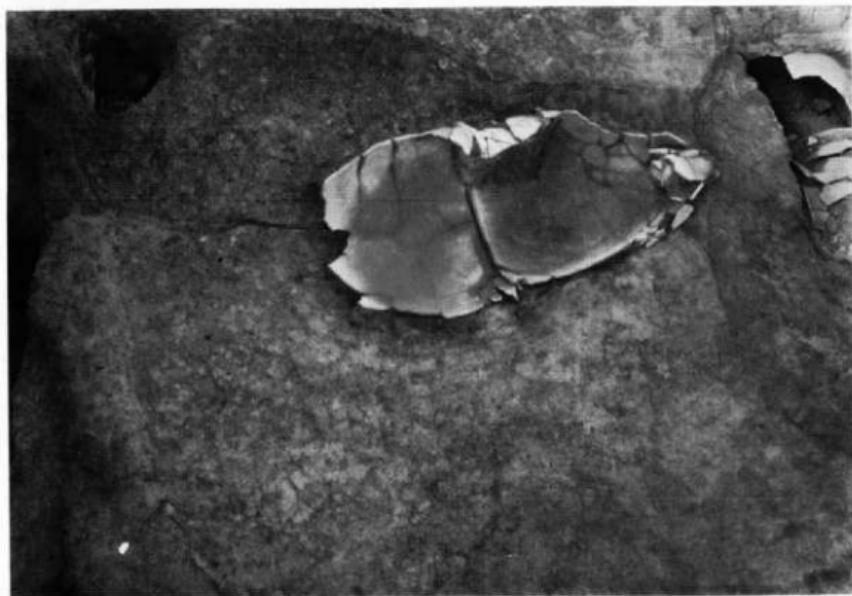
2 7号甕棺墓



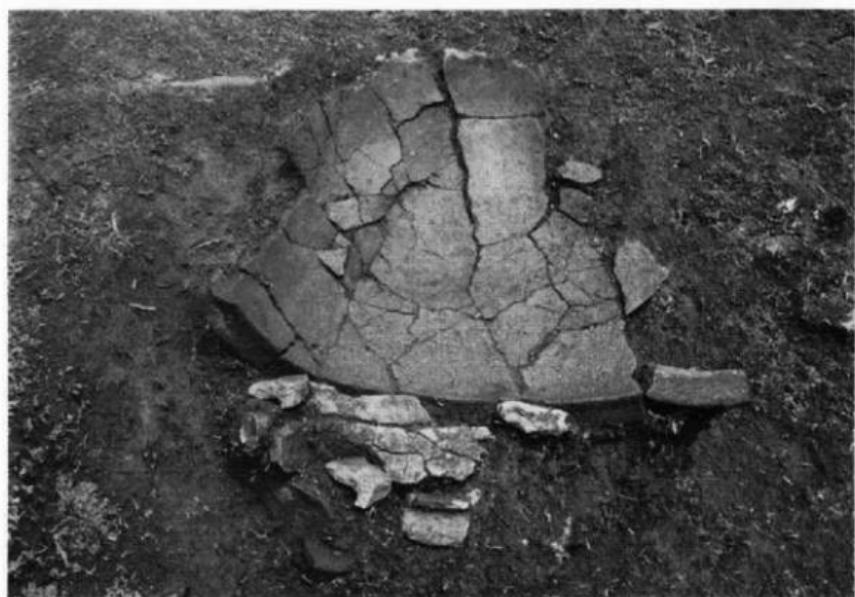
7号雙棺墓人骨出土狀態圖



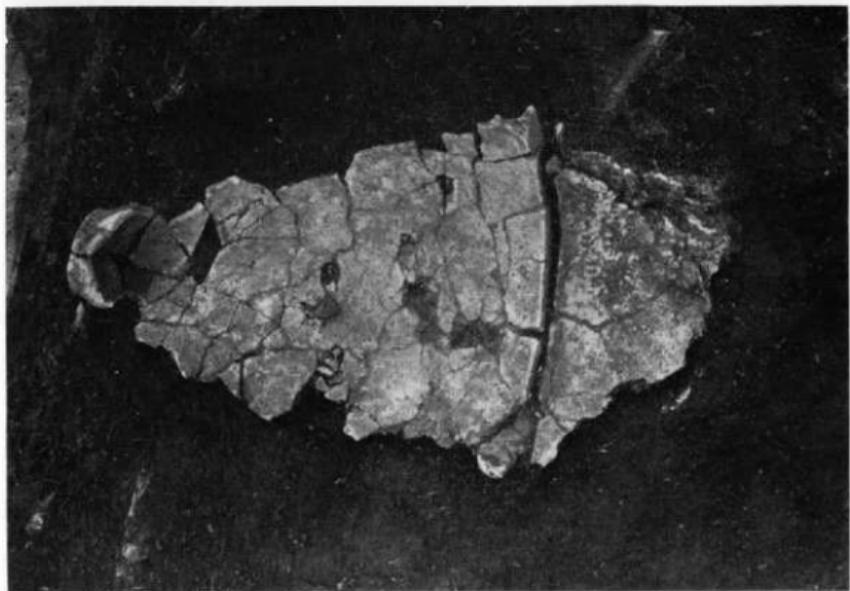
1 8号壺棺墓



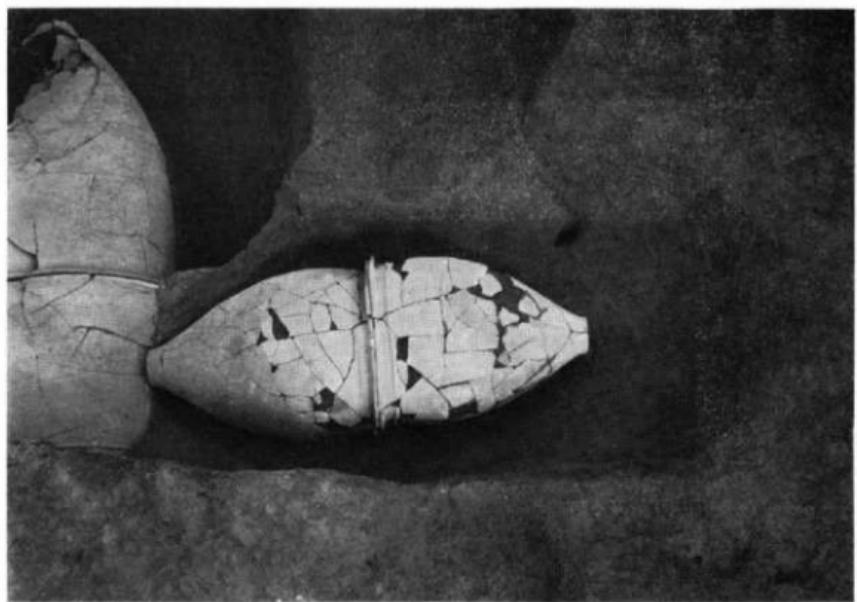
2 9号壺棺墓



1 10号 龙棺墓



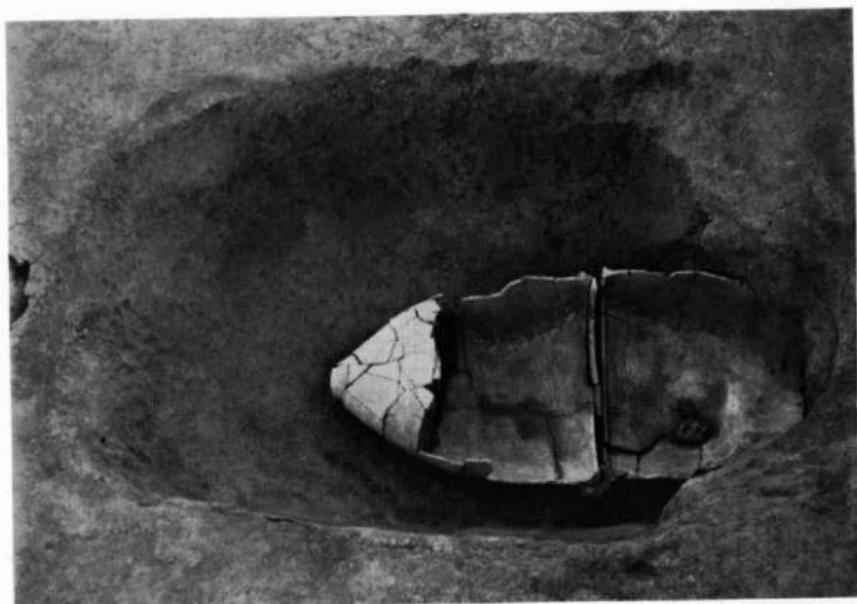
2 11号 龙棺墓



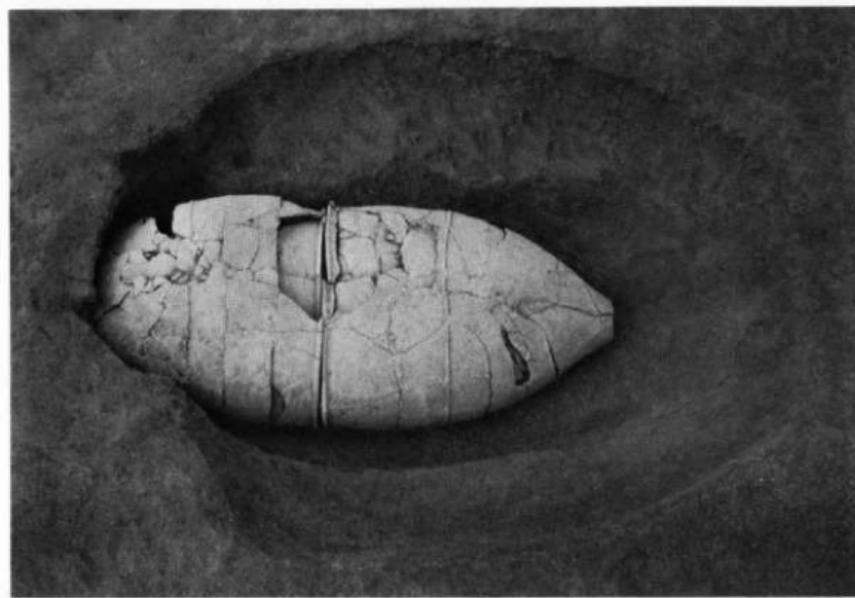
1 12号壺棺蓋



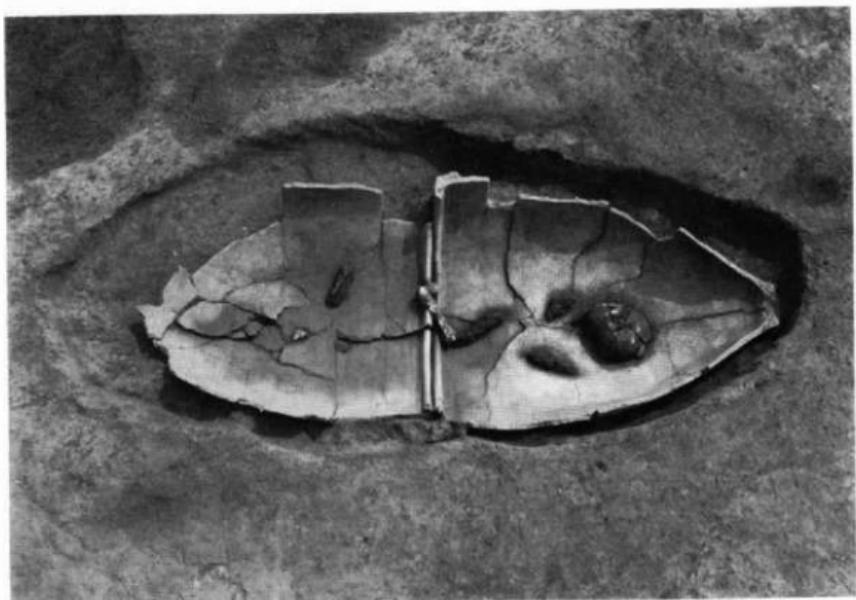
2 13号壺棺蓋



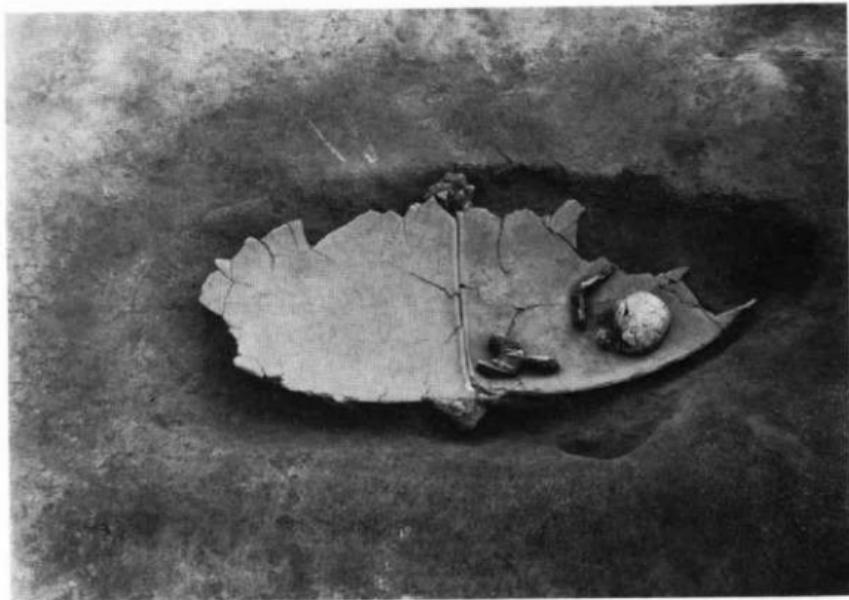
1 15号 龟 棺 墓



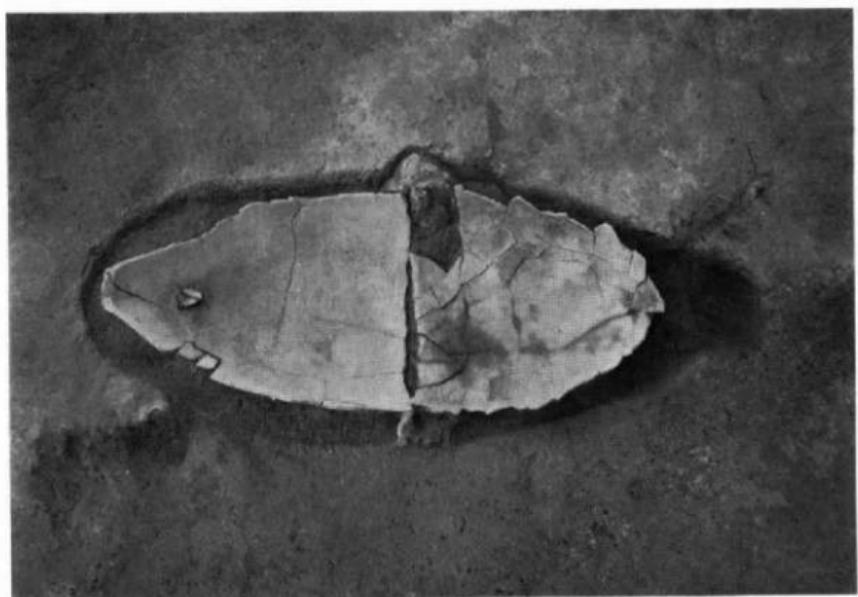
2 17号 龟 棺 墓



1 18号墓人骨出土状态



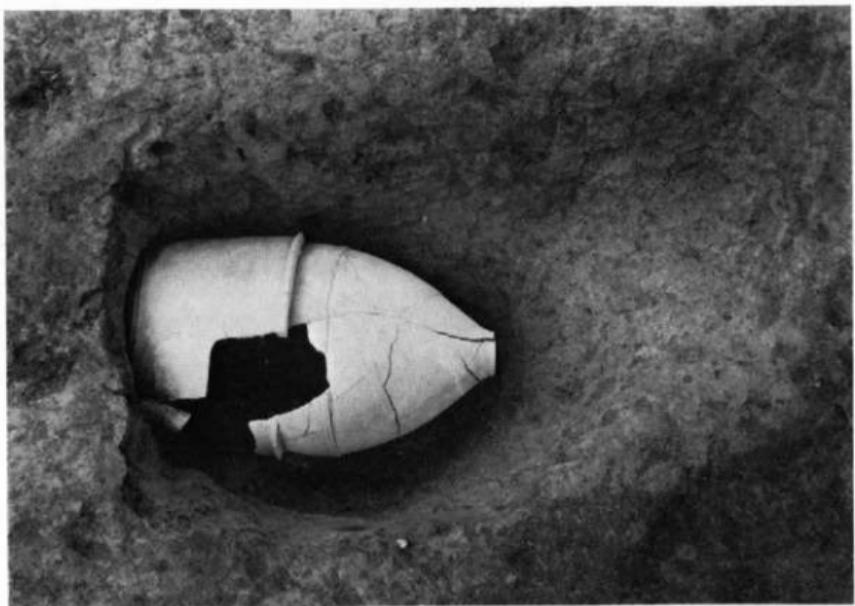
2 19号墓人骨出土状态



1 20号櫛棺墓



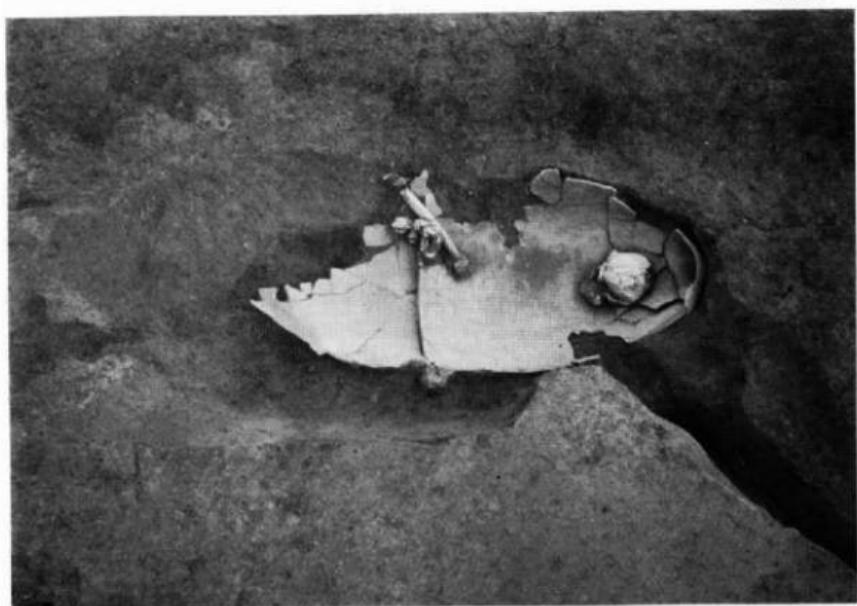
2 21号櫛棺墓



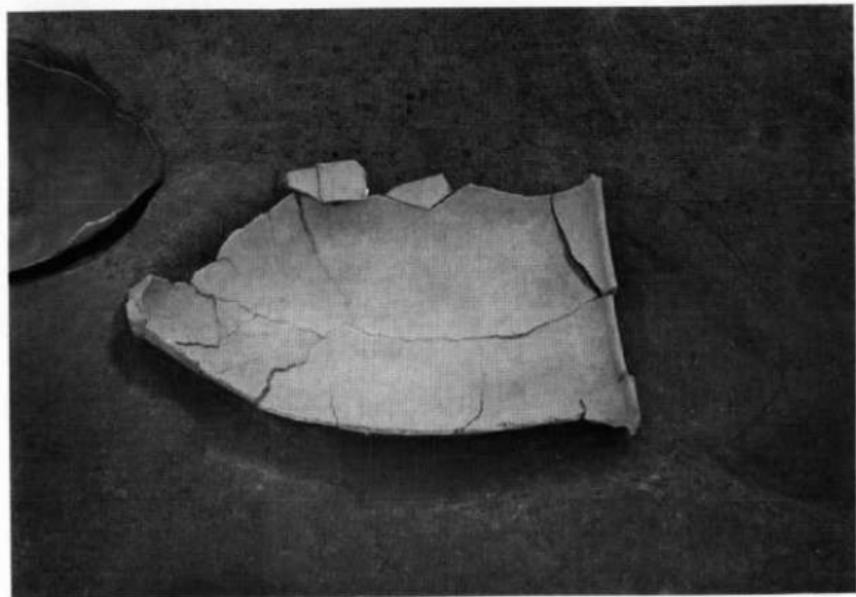
1 24号甕棺墓



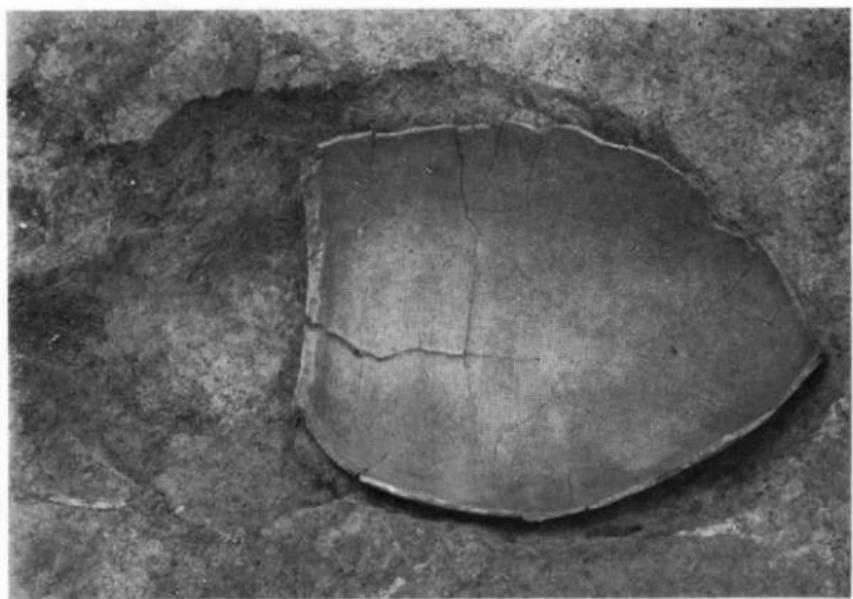
2 24号甕棺墓人骨出土状態



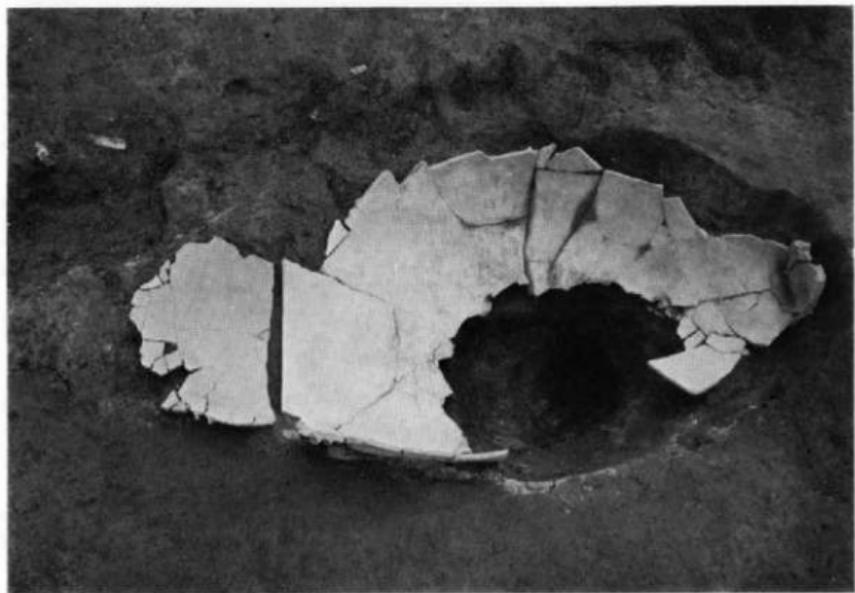
1 25号 瓷棺墓



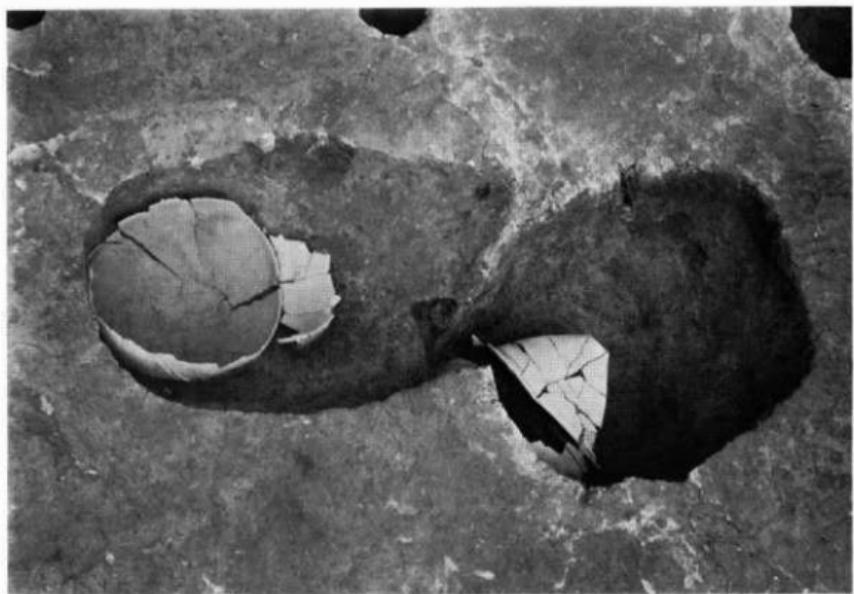
2 26号 瓷棺墓



1 27号甕棺墓



2 28号甕棺墓



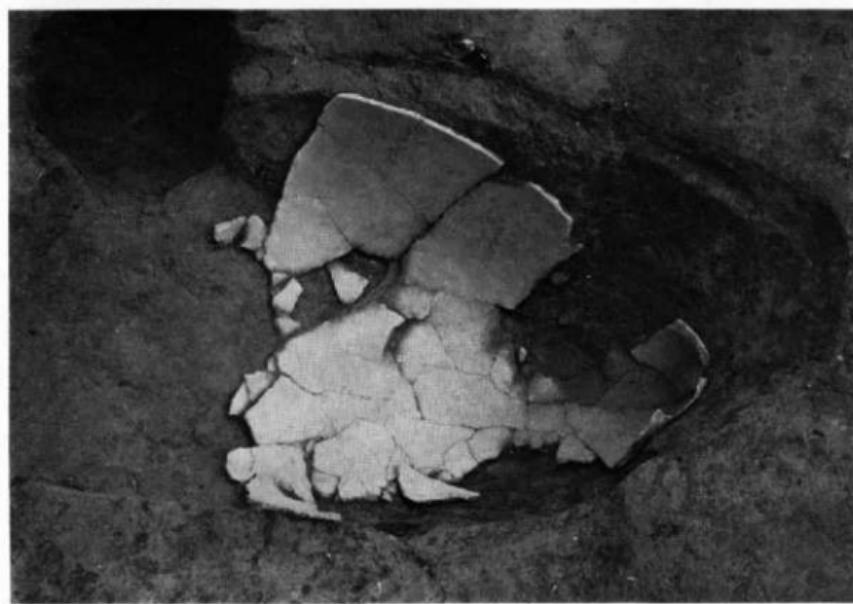
1 30号·41号甕棺墓



2 30号甕棺墓



1 31号甕棺墓



2 32号甕棺墓



1 33号甕棺墓人骨出土状态



2 34号甕棺墓



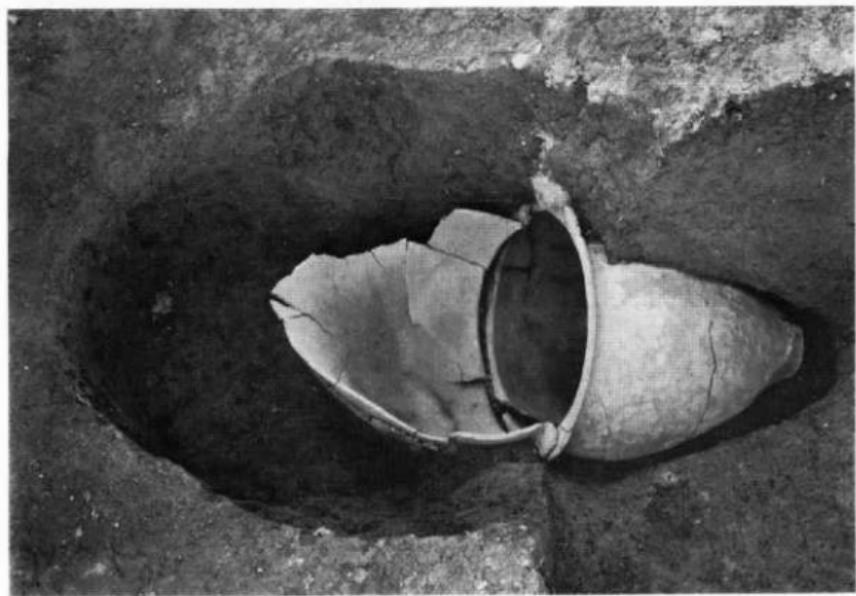
1 37号墓棺盖



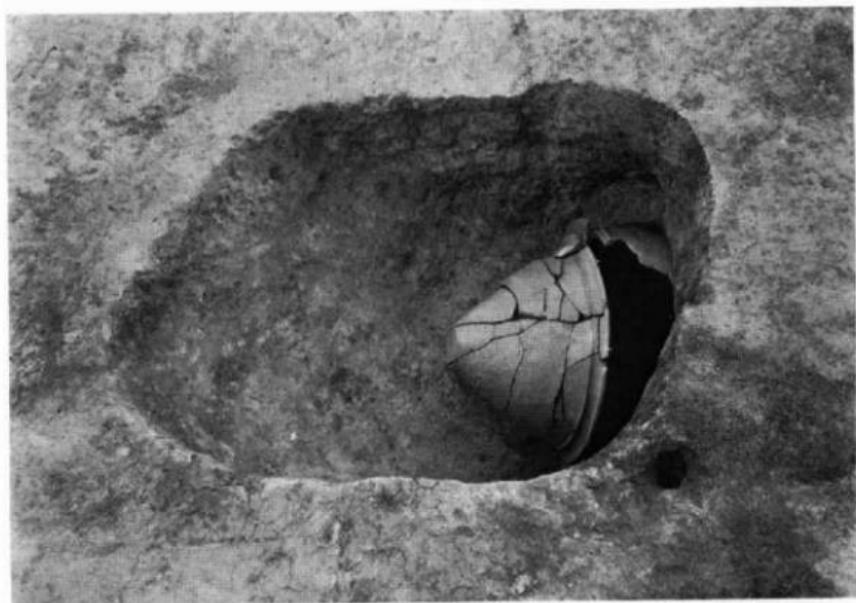
2 39号墓棺盖



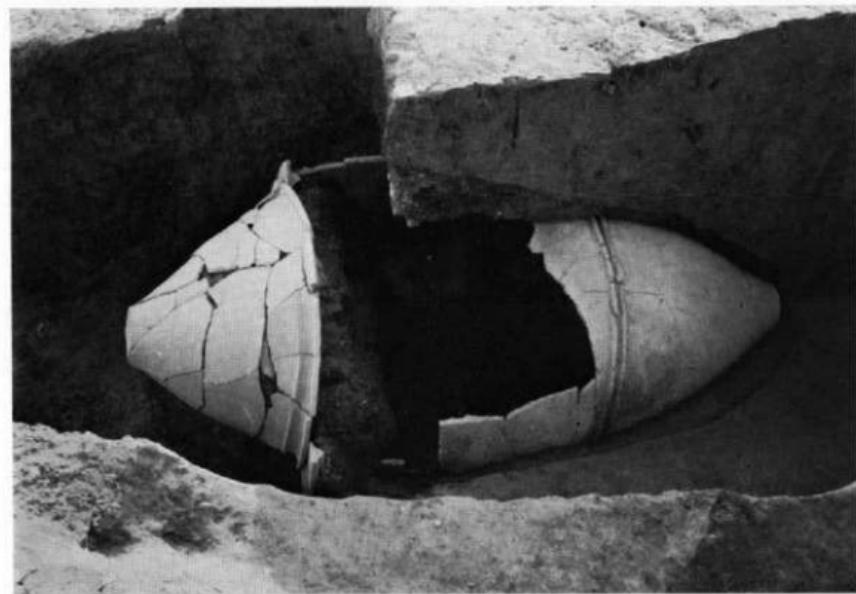
1 40号甕棺蓋



2 40号甕棺蓋甕棺挿入状態



1 41号甕棺墓



2 41号甕棺墓甕挿入状態



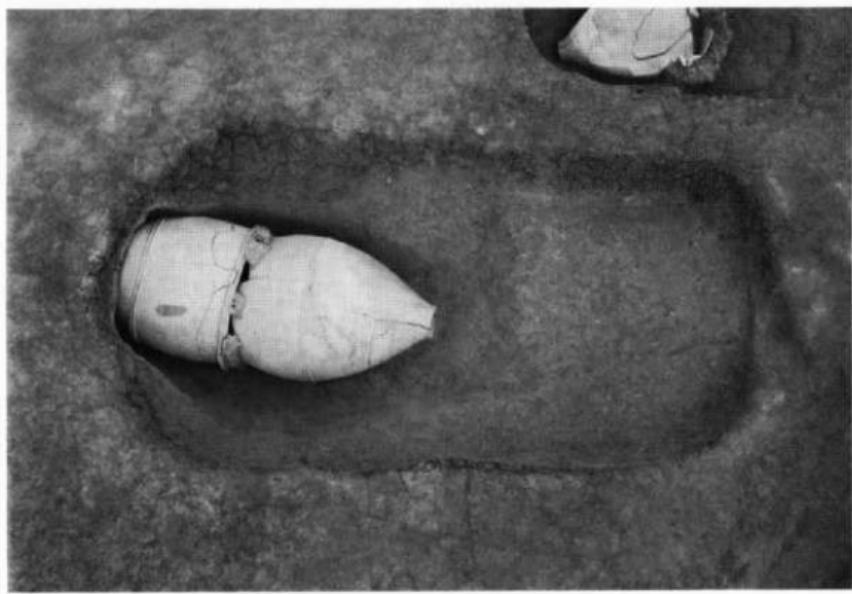
1 41号櫛棺蓋人骨出土状態



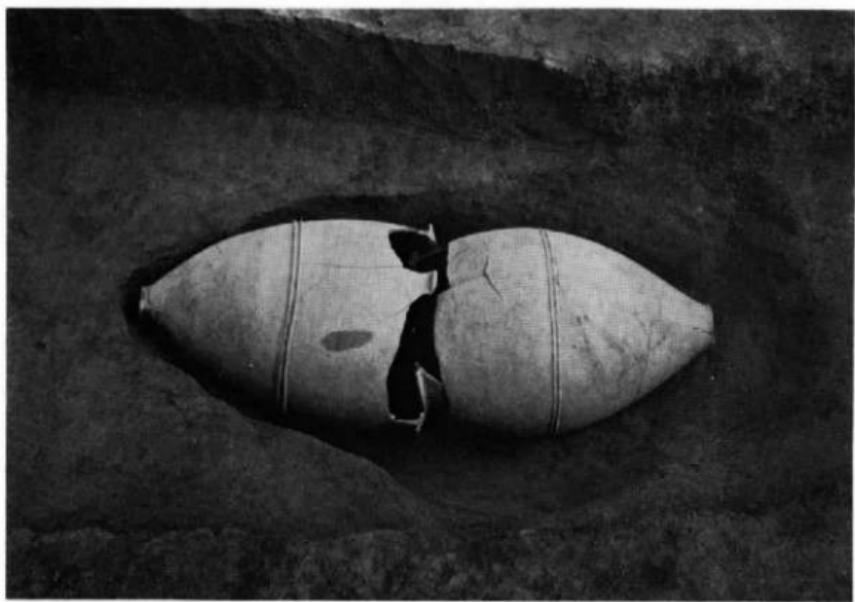
2 近世墓と切り合った45号櫛棺墓



1 46号斐格墓



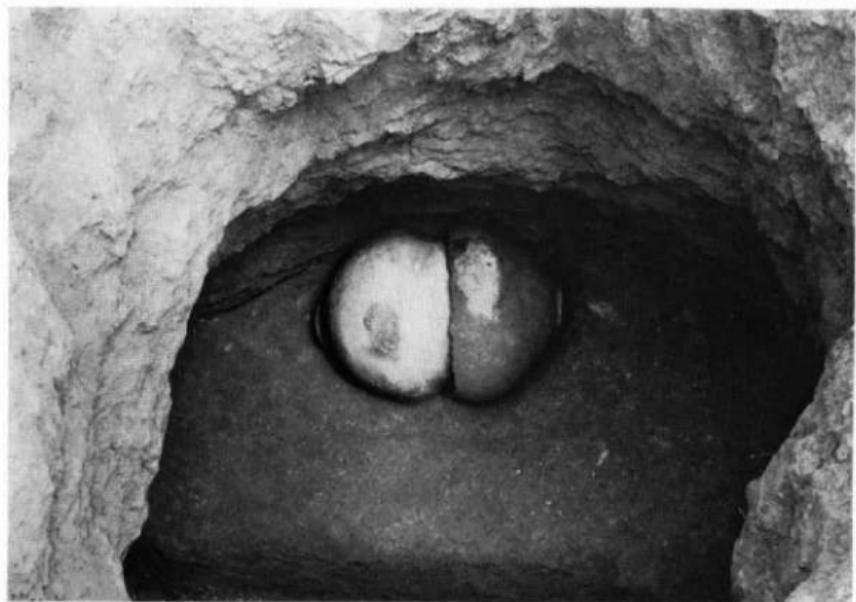
2 47号斐格墓



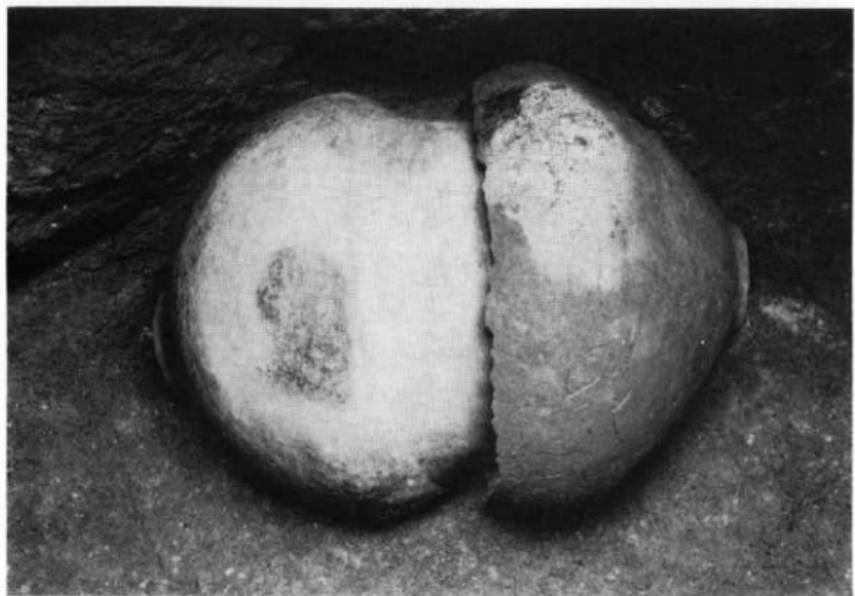
1 47号腰棺墓



2 47号腰棺墓人骨出土状态



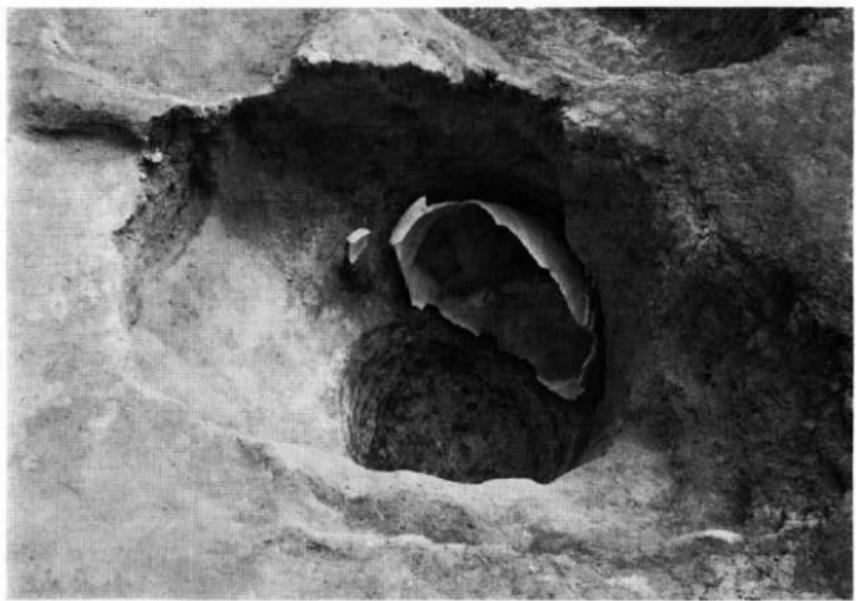
1 22号袋状堅穴内の48号漆棺蓋



2 48号漆棺蓋



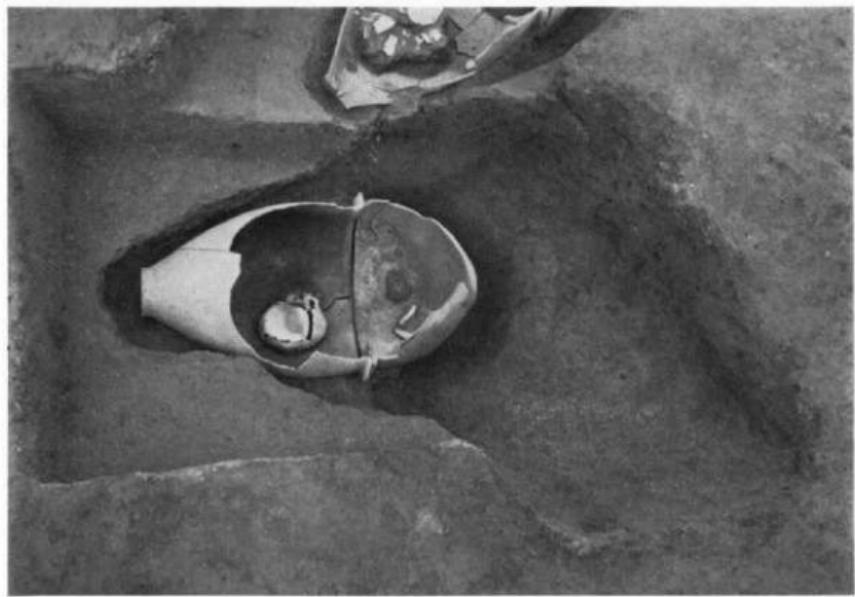
1 49号甕棺墓



2 50号甕棺墓



1 52号魏墓
1 52号魏墓



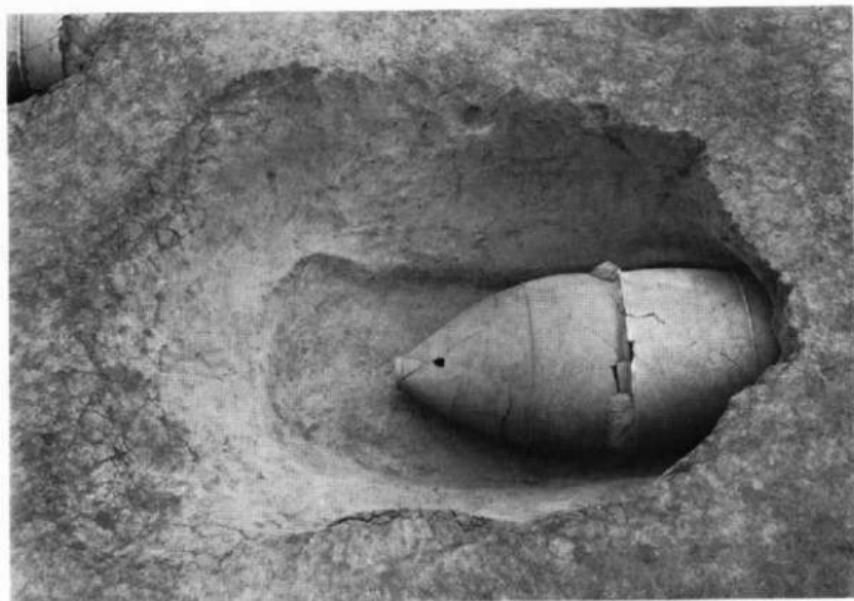
2 52号魏墓人骨出土状态
2 52号魏墓人骨出土状态



1 53号墓 棺



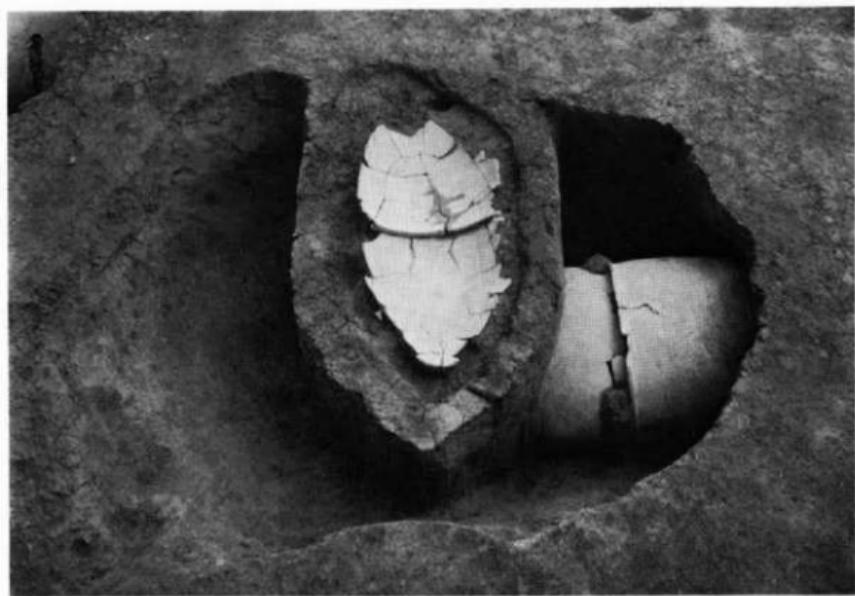
2 53号墓 墓人骨出土状态



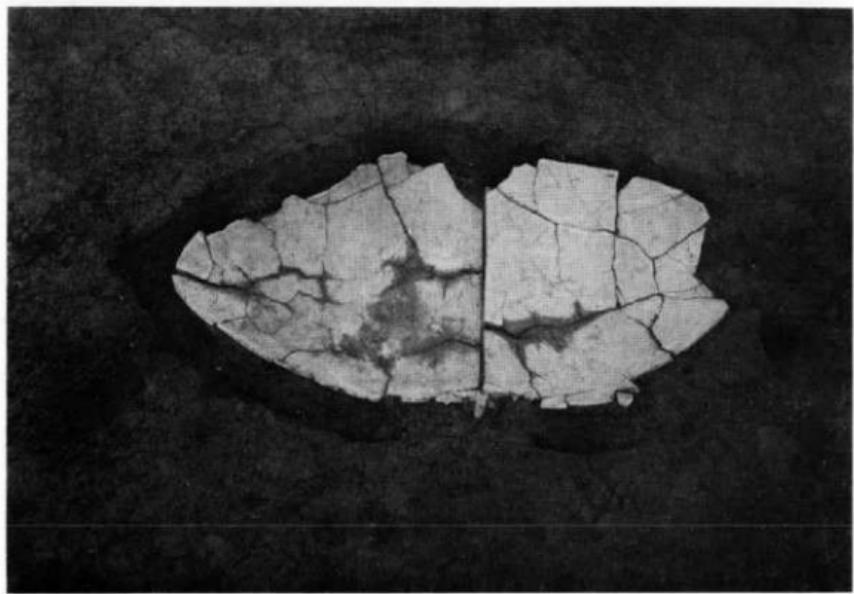
1 54号壺棺墓



2 54号壺棺墓人骨出土状態



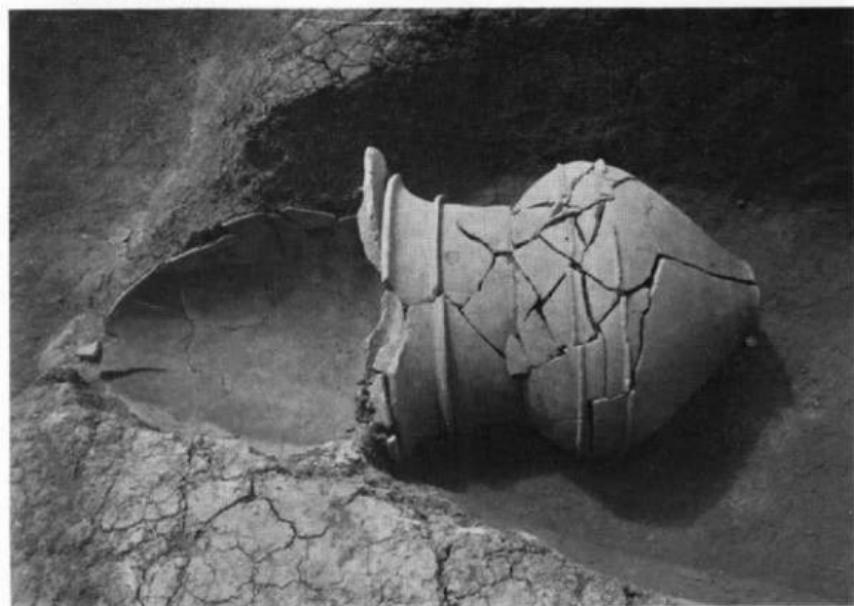
1 54号・55号(小兒棺) 鏊棺墓



2 55号 鏊棺墓



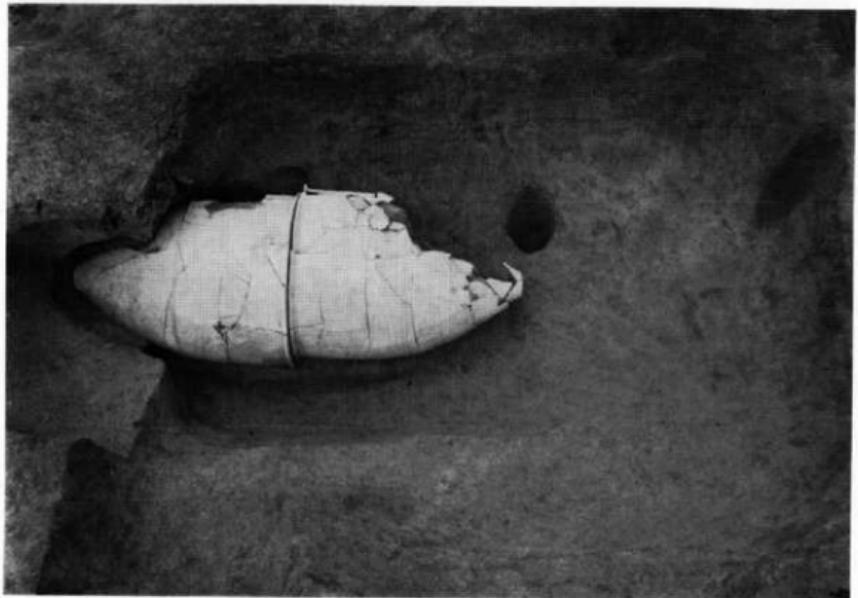
1 56号甕棺墓



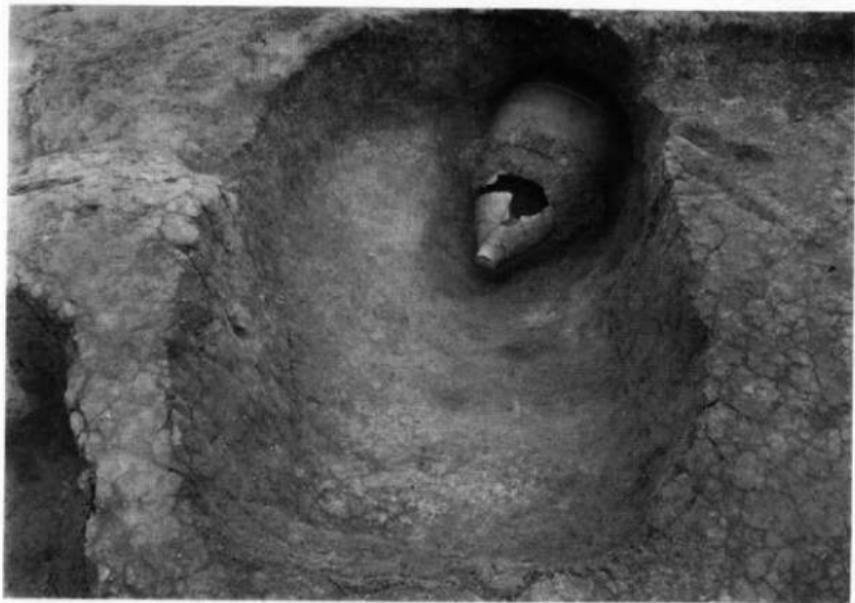
2 56号甕棺墓



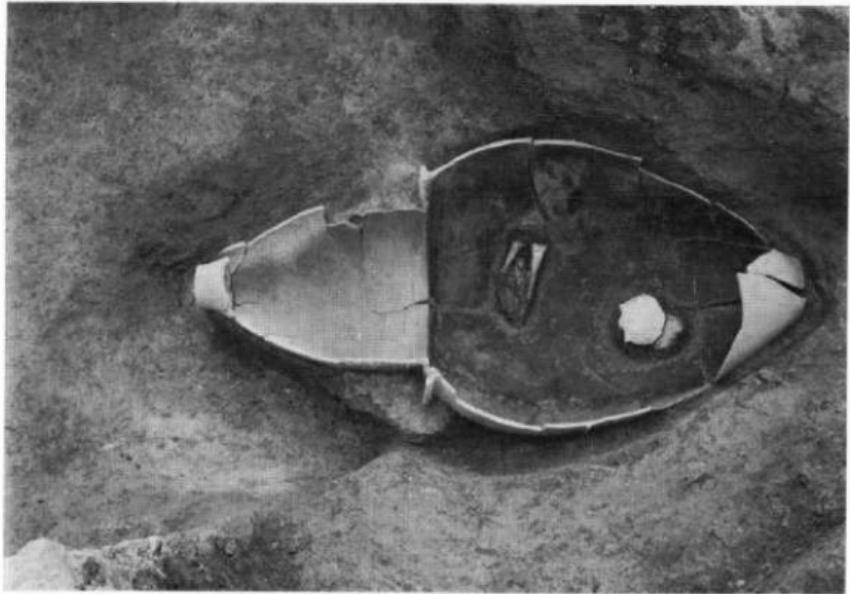
1 57号 鹰棺墓



2 57号 鹰棺墓鹰棺掉入状态



1 58号甕棺墓



2 58号甕棺墓人骨出土状态



1 59号甕棺墓



2 59号甕棺塞人骨出土状態

1

59號魏棺墓且輪出土狀態



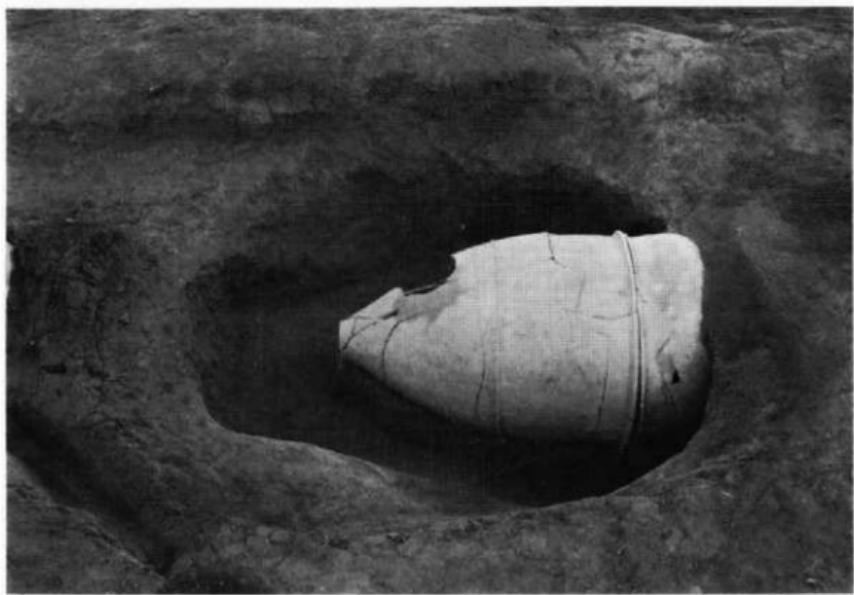
2

59號魏棺墓且輪出土狀態

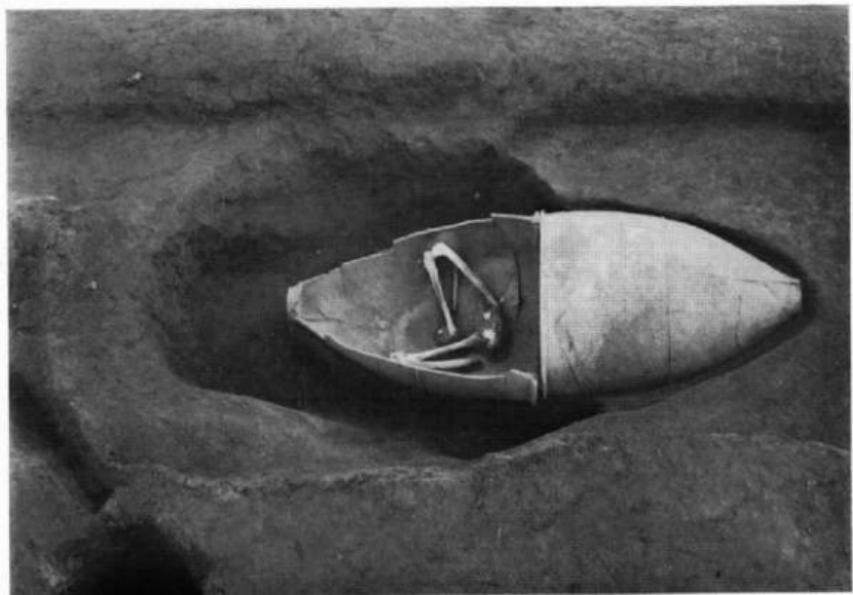




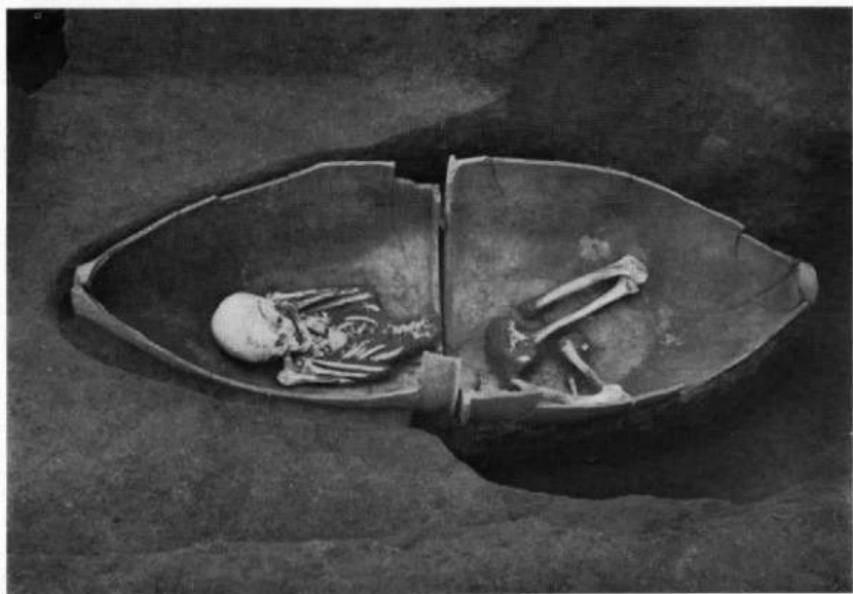
1 60号甕棺墓



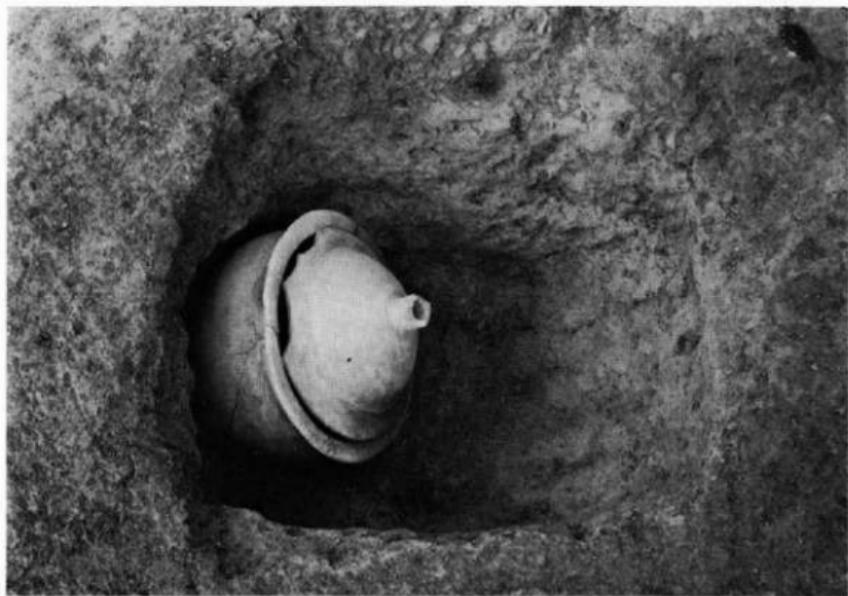
2 60号甕棺墓目貼り粘土除去後



1 60号櫛棺墓



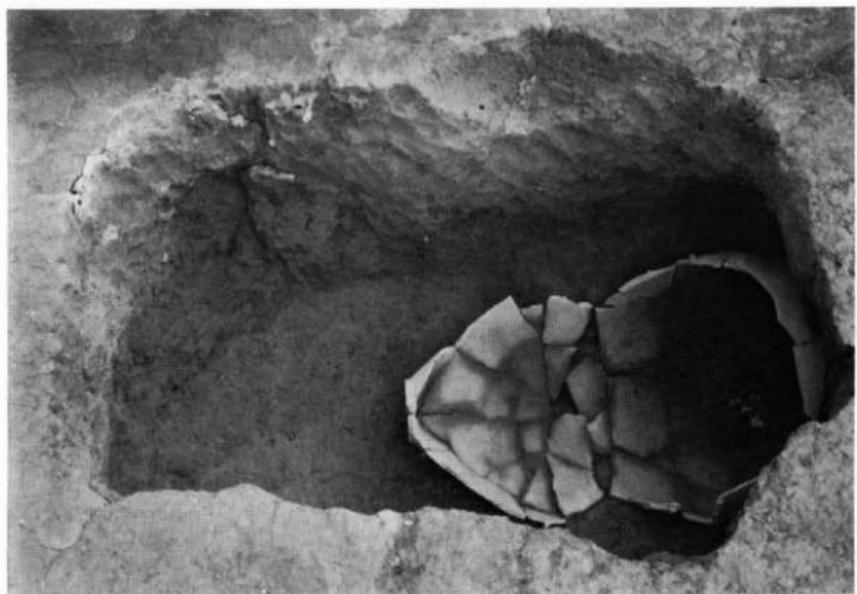
2 60号櫛棺墓人骨出土状態



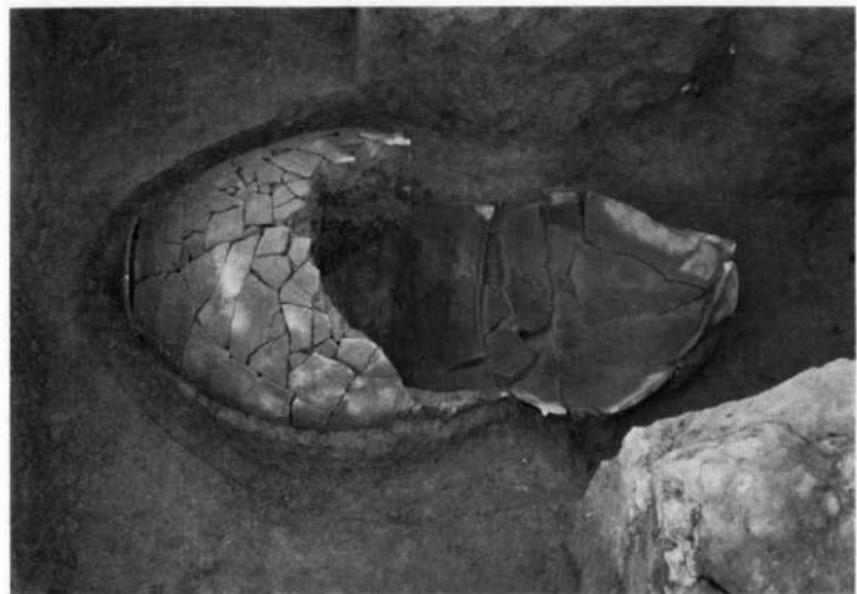
1 61号瑟棺盖



2 61号瑟棺瑟棺插入状态



1 63号 龜棺墓



2 63号 龜棺墓



1 63号漆棺蓋の接合部



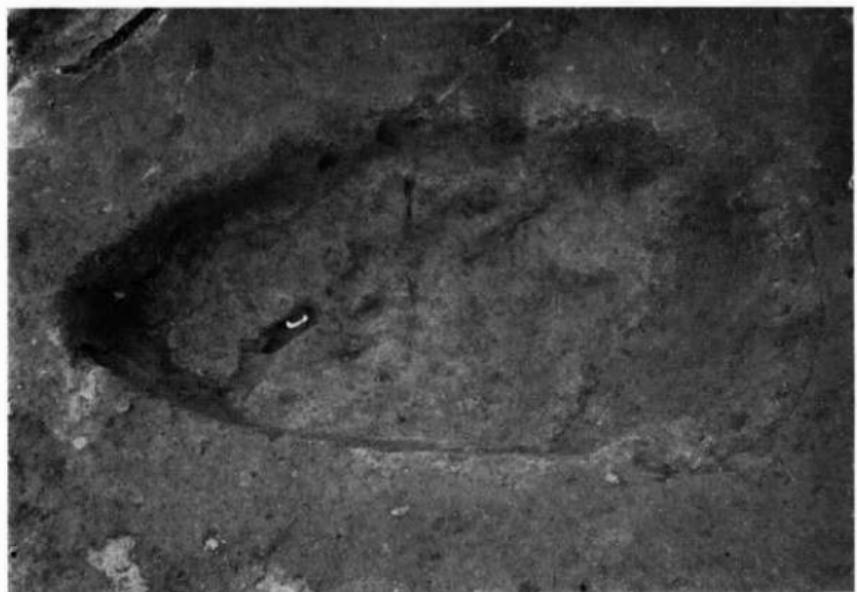
2 37号（成人棺）・64号漆棺蓋



1 65号甕棺墓



2 65号甕棺墓内人骨・貝箱出土状態



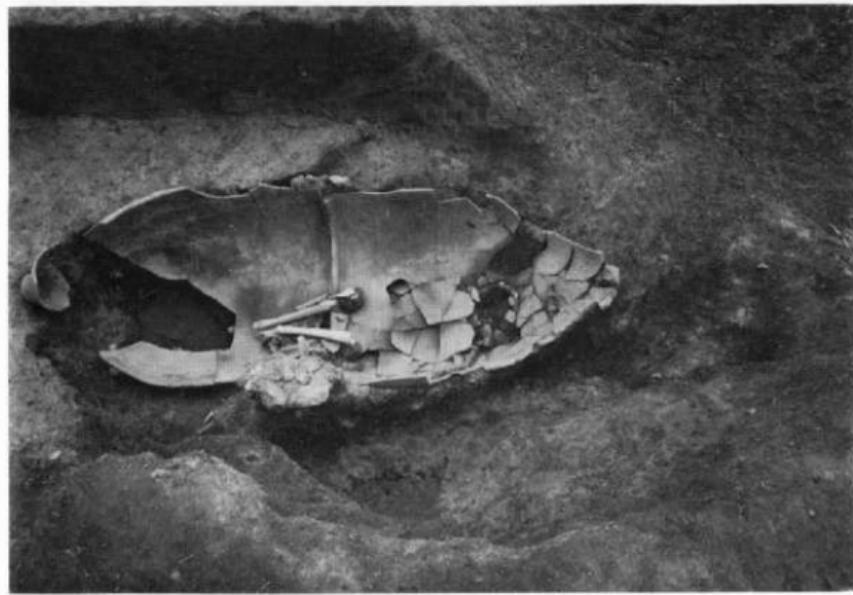
1 65号墓墓外具輸出土状態



2 65号墓墓外具輸出土状態



1 66号壺棺墓



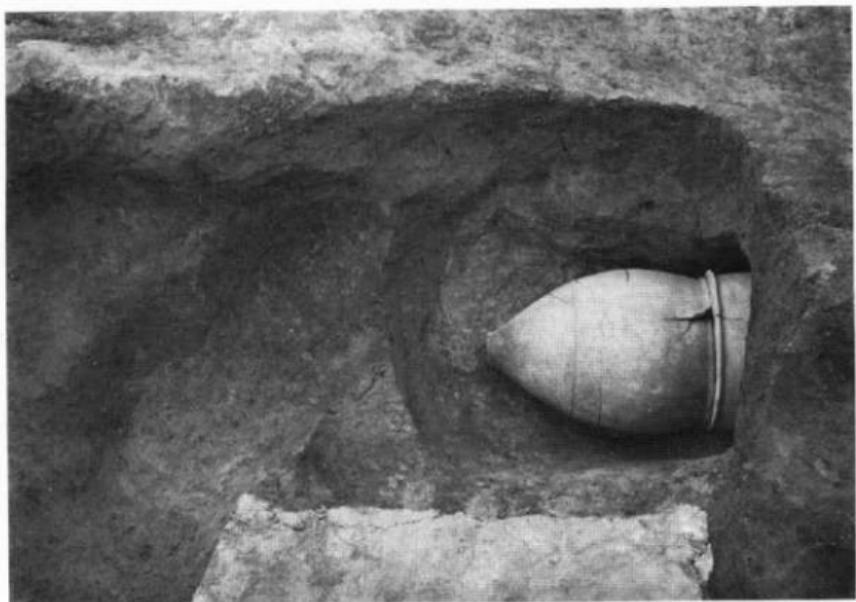
2 66号壺棺墓人骨出土状態



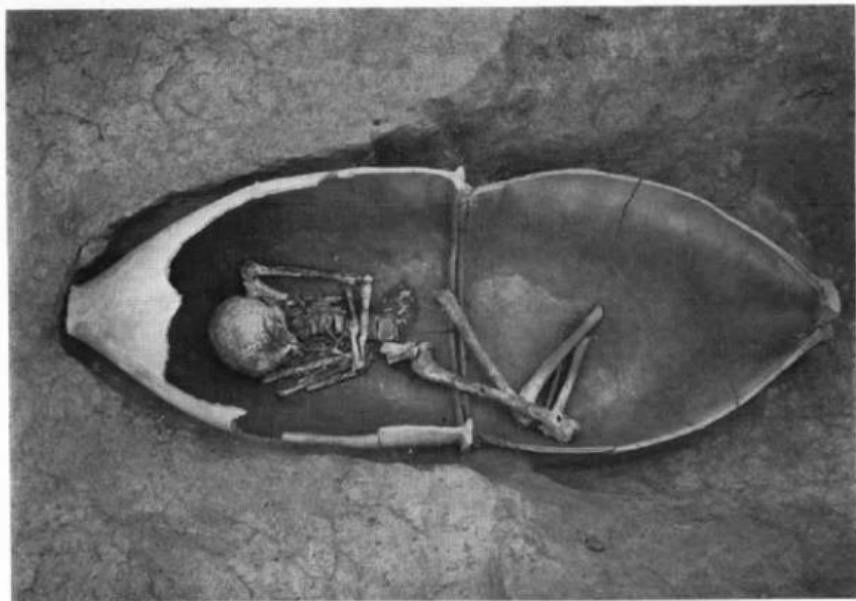
1 67号墳 棺裏



2 68号墳 棺裏



1 69号甕棺墓



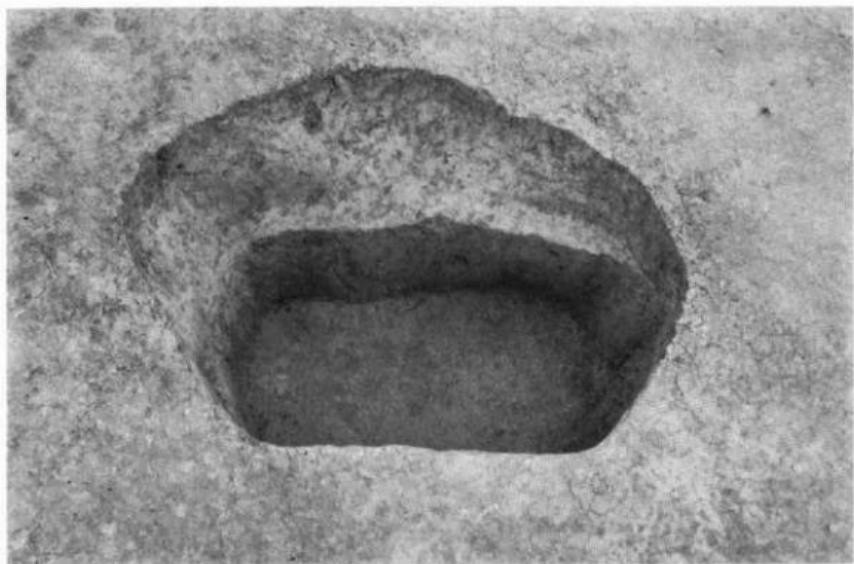
2 69号甕棺墓人骨出土状態



1 2号土塚蓋・4号・5号石棺蓋（抜き跡）・石蓋土塚群



2 木棺室



1 1 号 土 塚



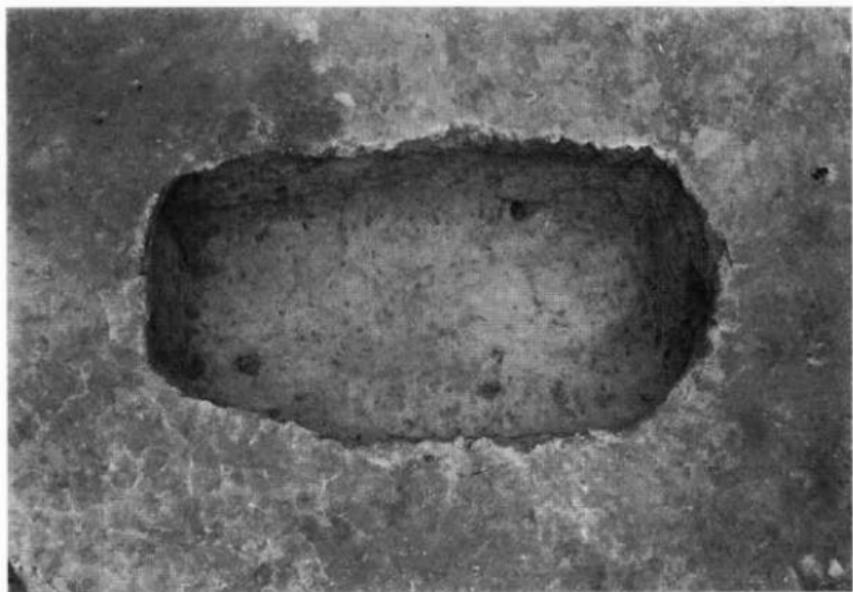
2 3 号 土 塚



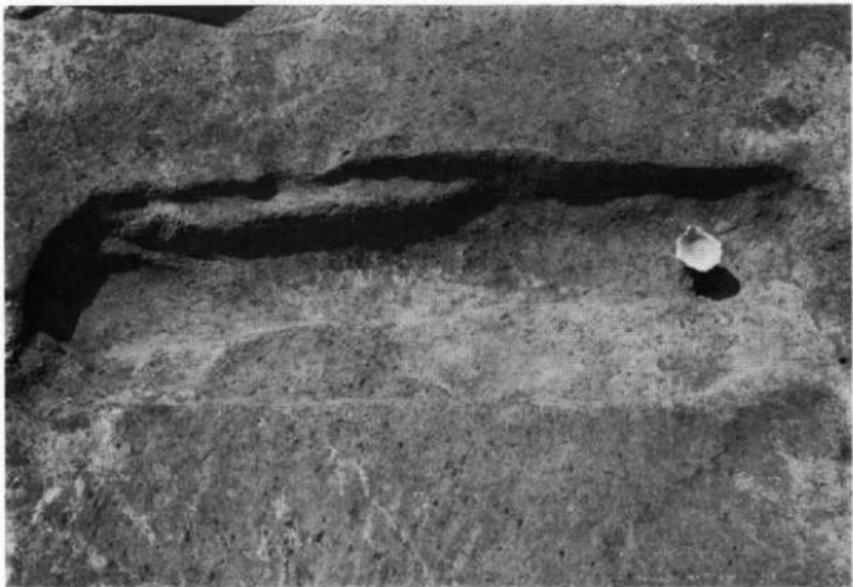
14号土塚



27号土塚



18号土城



29号土城



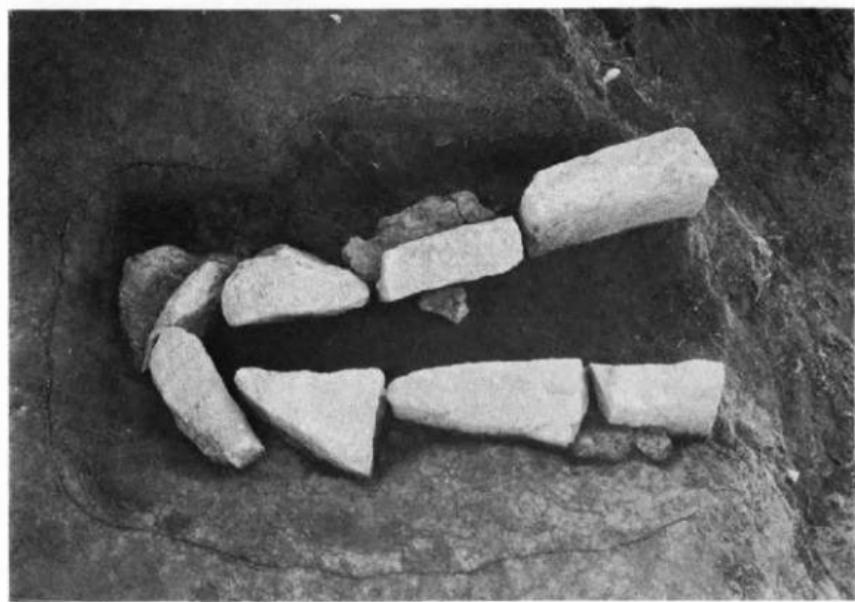
1 石蓋土塚墓



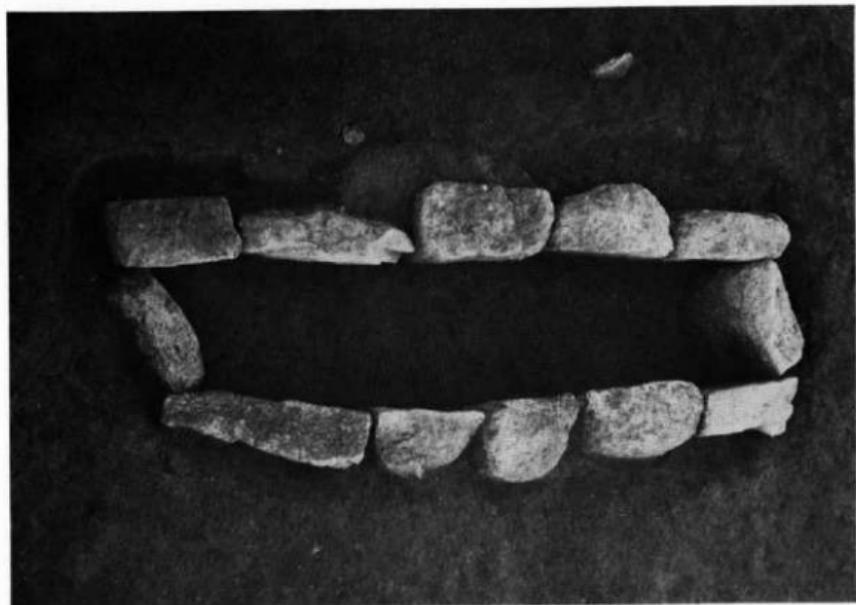
2 石蓋土塚墓天井石除去後



1 1号・2号・3号箱式石棺墓



2 1号箱式石棺墓



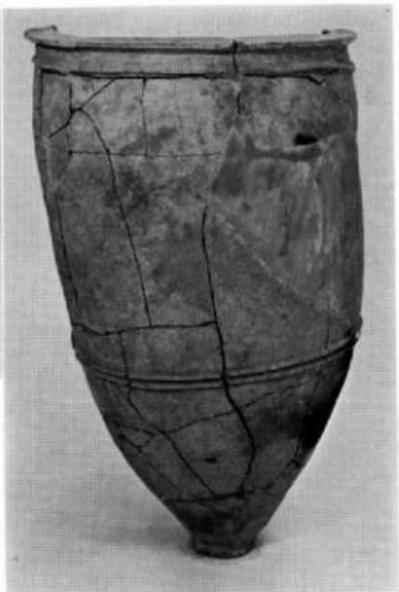
1 2 号箱式石棺蓋



2 2号箱式石棺蓋外刀子出土狀態



1 2号甕棺上甕



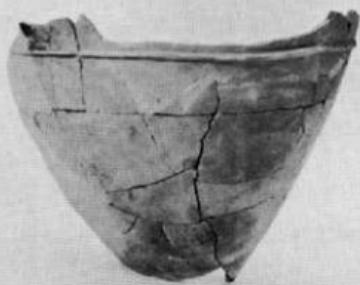
2 2号甕棺下甕



3 4号甕棺上甕



4 4号甕棺下甕



1 3号墓棺上甕



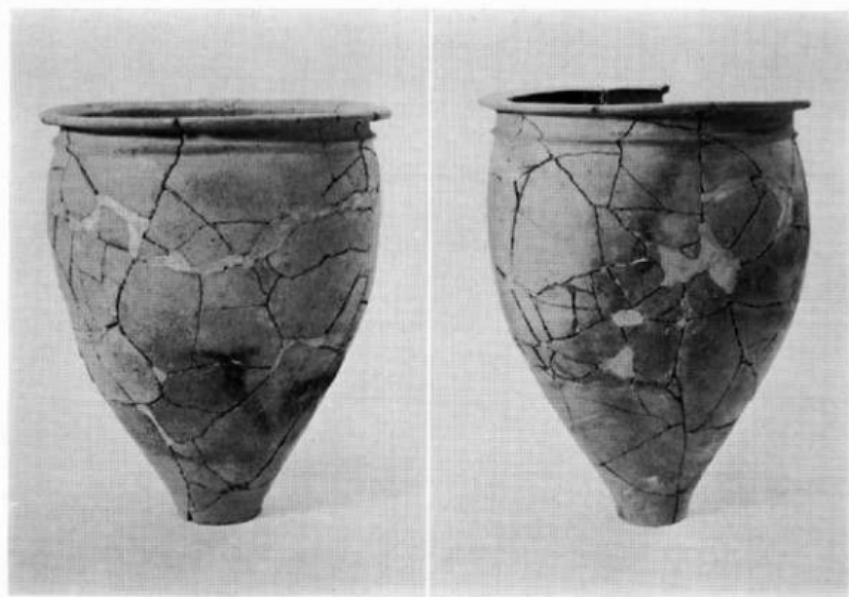
2 5号墓棺下甕



3 7号墓棺上甕

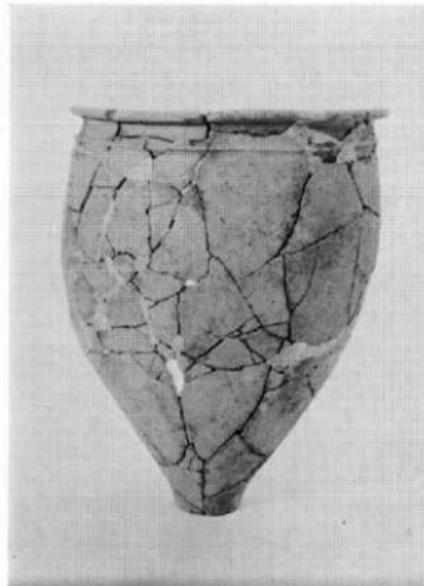


4 7号墓棺下甕

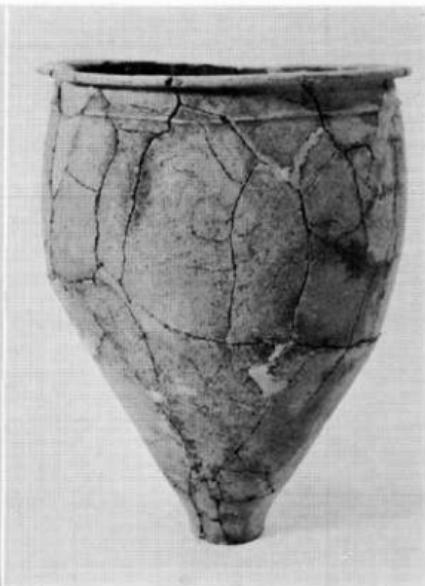


1 12号甕棺上甕

2 12号甕棺下甕



3 13号甕棺上甕

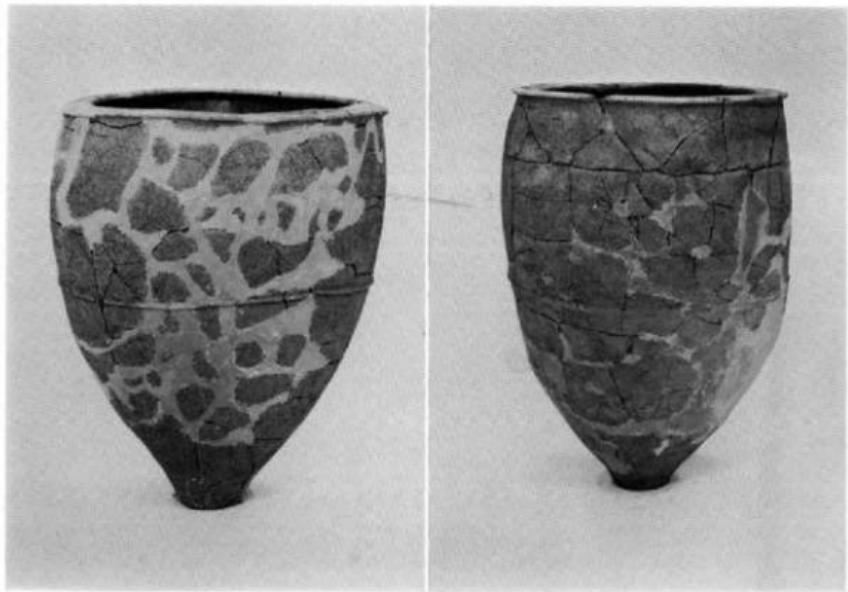


4 13号甕棺下甕



1 15号甕棺下甕

2 20号甕棺下甕



3 17号甕棺上甕

4 17号甕棺下甕



1 21号墓棺上甕



2 21号墓棺下甕



3 24号墓棺上甕



4 24号墓棺下甕



1 25号甕棺下甕

2 30号甕棺下甕



3 33号甕棺上甕

4 33号甕棺下甕



1 34号甕棺下瓶



2 35号甕棺下瓶



3 36号甕棺下瓶



4 39号甕棺下瓶



1 37号甌棺上部



2 37号甌棺下部



3 40号甌棺上部



4 46号甌棺（单甌）



1 41号甕棺上甕



2 41号甕棺下甕



3 47号甕棺上甕



4 47号甕棺下甕



1 49号壺棺上壺



2 49号壺棺下壺



3 50号壺棺下壺



4 51号壺棺下壺



1 52号墓棺上甕



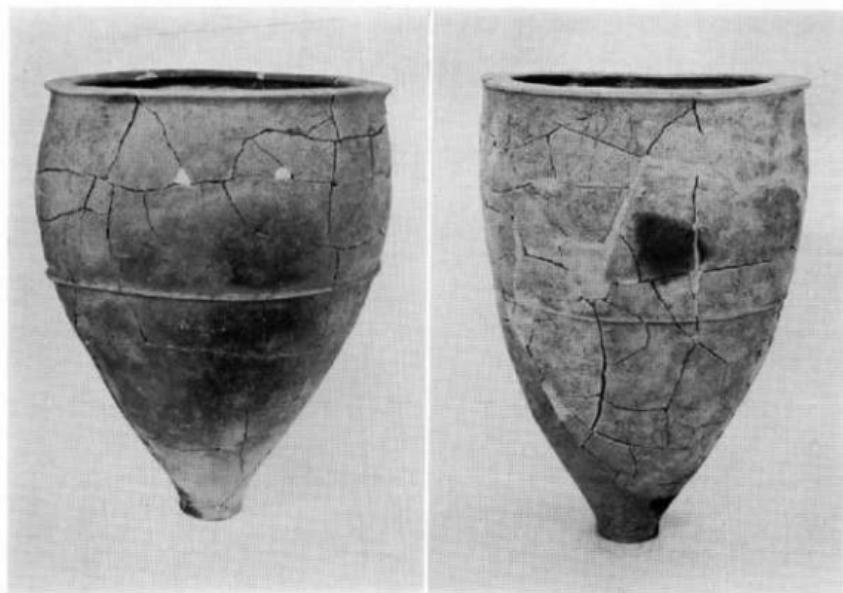
2 52号墓棺下甕



3 53号墓棺上甕



4 53号墓棺下甕



1 54号墓棺上甕

2 54号墓棺下甕



3 56号墓棺上甕

4 56号墓棺下甕



1 57号甕棺上腹



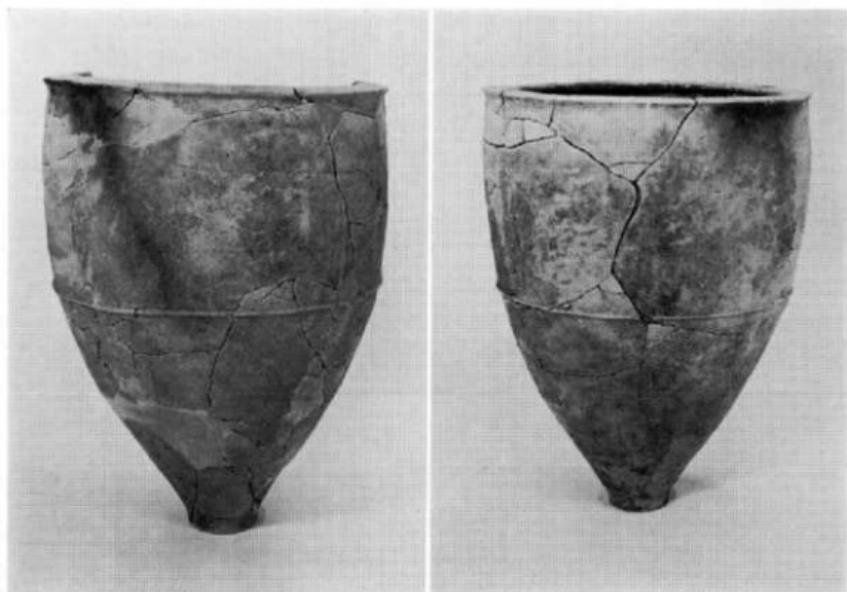
2 57号甕棺下腹



3 58号甕棺上腹

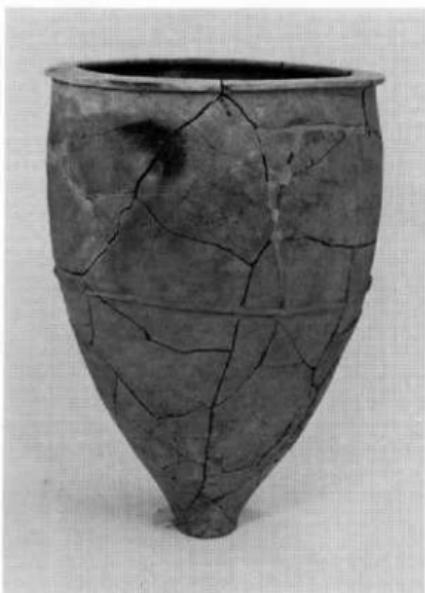


4 58号甕棺下腹



1 59号甕棺上甕

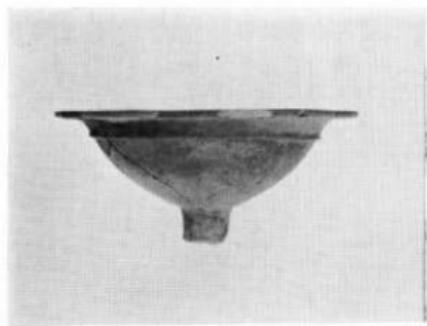
2 59号甕棺下甕



3 60号甕棺上甕



4 60号甕棺下甕



1 61号甕棺上甕



2 61号甕棺下甕



3 62号甕棺上甕



4 62号甕棺下甕



1 63号甕棺上甕・下蓋



2 63号甕棺下甕



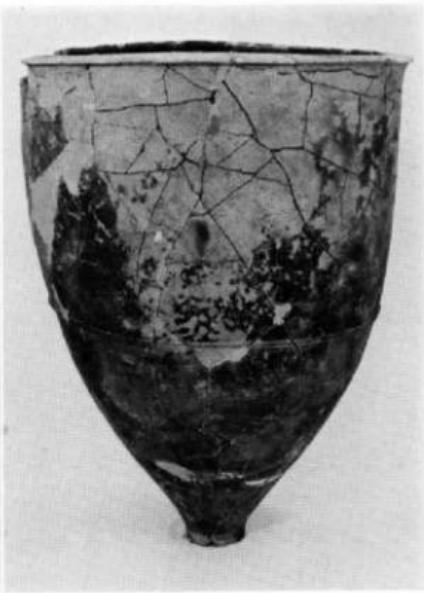
3 65号甕棺上甕



4 65号甕棺下甕



1 66号甕棺上甕



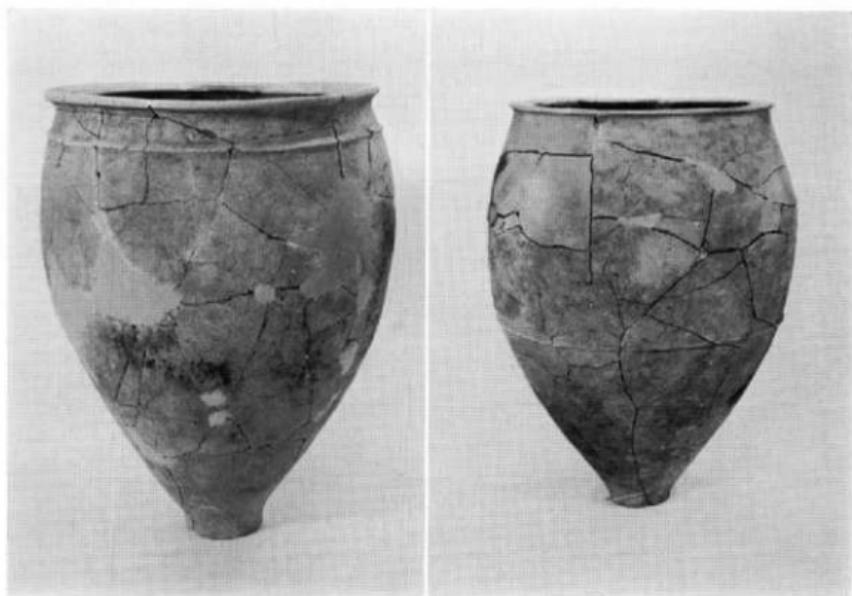
2 66号甕棺下甕



3 67号甕棺上甕

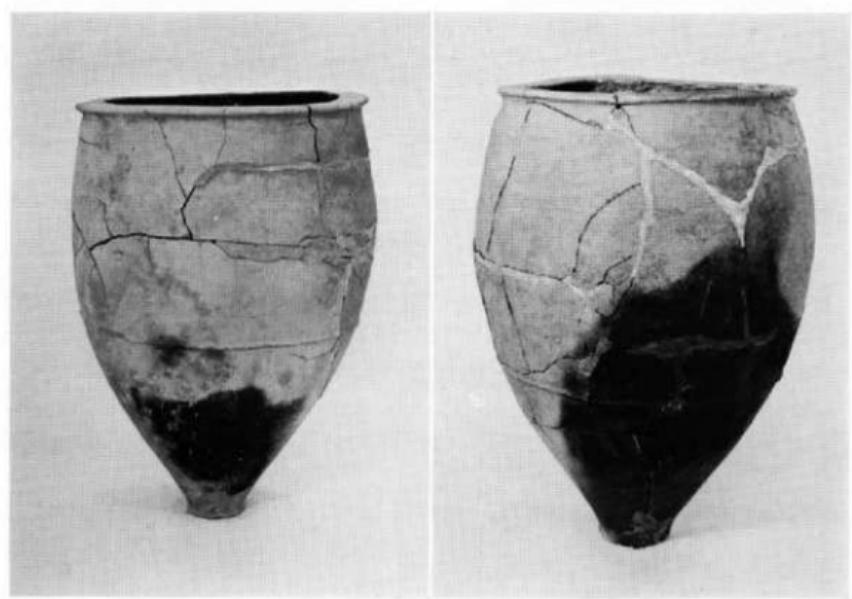


4 67号甕棺下甕



1 68号窑棺上甕

2 68号窑棺下甕



3 69号窑棺上甕

4 69号窑棺下甕



1 48号墓棺上甕



2 48号墓棺下甕

昭和 52 年度

山陽新幹線関係
埋蔵文化財調査報告
第 6 集

昭和 53 年 3 月 31 日

発 行 福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲 6-29

印 刷 株式会社 川島弘文社
福岡市東区箱崎ふ頭 6 丁目 4-4